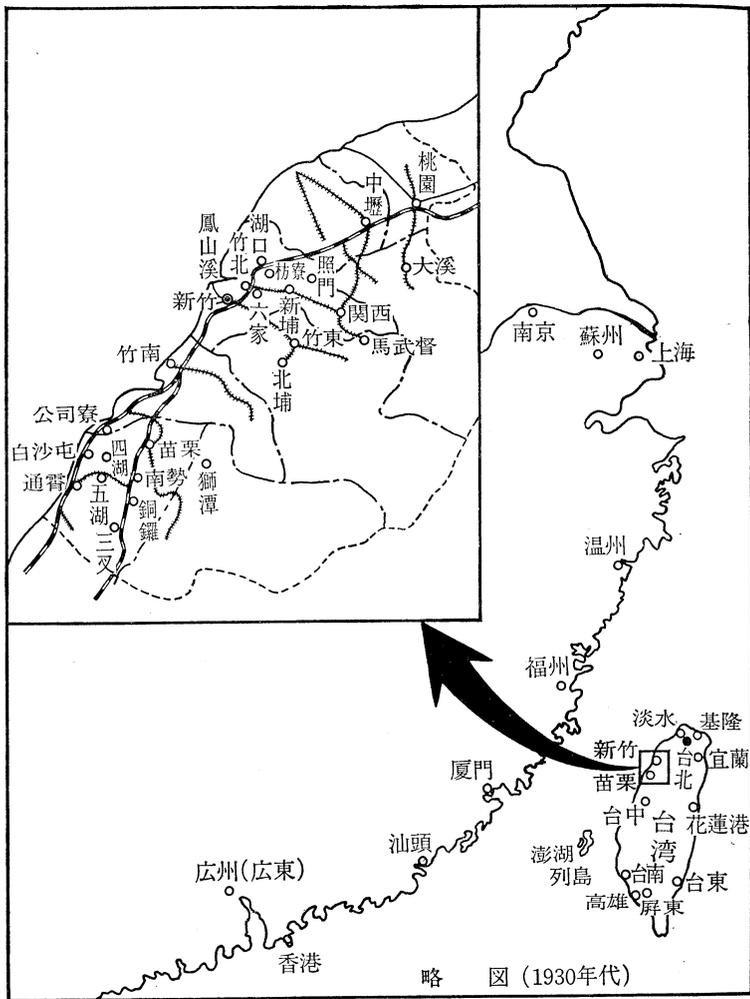


無花果

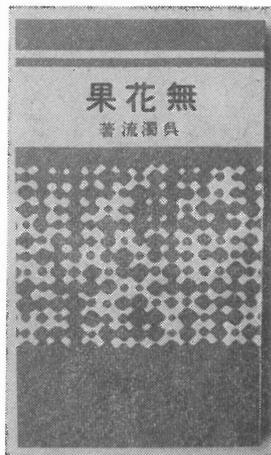
- 一 祖父から抗日の物語を聞く 11
- 二 「獅子狗」と呼ばれた公学校時代 27
- 三 村からだだ一人師範学校に入学 40
- 四 故郷の分教場で人生問題に悩む 55
- 五 日本人と台湾人の対立する教育界で 65
- 六 平凡にしておだやかな日々 75
- 七 郡視学になぐられて教員を辞職 86
- 八 南京で日本語新聞の記者となる 102
- 九 食糧もとぼしく八・一五を迎える 130
- 十 「光復」の歓呼のかげに痛みを思ふ 148
- 十一 接収に來た外省人との抗争 164
- 十二 変革への期待と失望と 183
- 十三 二・二八事件とその前後 199

夜明け前の台湾 227

- 注 略年譜 289
解説 尾崎秀樹 303
付記 320



無
花
果



ある日、彼が庭先へ出て物思いにふけっていると、ふと無花果いちじくのなっているのが目についた。それは大きな葉かげに隠れて、ちょっとみただけでは見えないが、いくつもいくつもゆたかな実を結んでいた。彼はその一つをもぎとると、中を割ってみた。まっかに熟れた実が、そこにぎっしりつまっている。それを見つめているうちに、彼は言いようのない感動にうたれた。およそ、ものにはふたつの生き方があるのだった。仏桑花ぶつそうけのように、きれいに咲いて実を結ばずに散ってゆく花。そして無花果のように、目立つことはないが、人知れぬところでごっそりと結実するもの。それは、いまの大明ダイメイ（小説の主人公）にとって意味深い示唆をふくんでいるように思われた。彼は無花果の生き方になんとなく胸をうたれるのだった。

——『アジアの孤児』の一節から——

一 祖父から抗日の物語を聞く

「光陰矢のごとし」

この言葉はだれが言ったか分からないが、年をとるにしたがっていよいよ痛切に感ずるようになった。いつのまにか、私はもう七十歳に近い老人になってしまった。過去を振り返ってみればみるほど、自分の歩いて来た人生コースがいかに失敗の多かったものか気がついて、いまさながらびびくりした。これでは回顧録に似たものは書けない。書けば自己の醜い姿がそれにはさまれて現われてくるから嫌である。

もう一つ書きたくない理由は、私の生活態度がいいかげんで学究的でないため、あらゆるものに対して表面的な観察しかなく、真相をつかんでいるかどうか自信がないからである。その上、二十年もたった今日、記憶が遠くなって、書いても役に立つかどうかは疑わしい。書く以上、せめていくぶんなりとも役に立つよう努力したい。それには根気と気力とが必要である。しかし、もう七十近い年になってそれぐらいの気力があるかどうか疑わしいので、私は書くか書くまいか、ほんとうに躊躇してしまった。それでも書かないよりは書いた方がよいと思ひ、筆をとることにした。

かえりみて私の歩いて来た人生コースは平凡ではあるが、それでもいくつつかの歴史的な大事件に

逢っている。第一次大戦、台湾中部大震災、第二次大戦、台湾光復、二・二八事件などがある。前の四つの事件はたくさんの文献と記録があるので、私としては考える必要はなかるう。しかし、そのうち二・二八事件に関しては一応考えなければならぬ。

最近痛切に感じたことだが、当時の新聞記者は年とともに減ってきた。たとえ生きていても職業が隠居か、ほとんどが筆をとっていない連中ばかりである。比較的視野の広い第一線の新聞記者が書かなければ、将来この事件の真相はもっと歪められていっそう分からなくなるであろう。

さて二・二八事件、もう二十年もたった今日、忘れ去られたものも多いが、そのうちどうしても忘れられないのがなお私の記憶に残っている。それを追憶しながら、私の見聞した二・二八事件の真相を大胆率直に描いて見るつもりである。当時、私は『民報』の記者であった。その前は『台湾新生報』の記者であったから、事件発生前後の関係を知るに便利な立場にあった。

しかし、この事件の真相を知るにはどうしてもその遠因をさぐる必要がある。この遠因を知らなければ事件の真底をつかむことはむづかしい。この真底を知るには、どうしても日本治下における台湾の境遇について検討する必要がある。いったい台湾人とは何者か？ ここでくわしく論ずる必要はない。ややこしいからこれは人類学者や歴史家にまかせて、結論を言えば、台湾人の大部分は漢民族の後裔で大陸から移住して来たものである。

台湾は、日清戦争のとき清国が日本に敗けたため、その賠償として日本に割譲されたが、そのとき、台湾人の意志を少しも考慮せず、勝手に日本にやってしまった。日本は強盗式に接收してしまった。ところが、台湾は台湾人が開拓したもので、清国の力を借りてはいない。ちょうどア

メリカ開拓と同様である、加うるに台湾人のなかには明が亡びた時、ここに亡命して来た人の子孫もいる。その後、清国の政治に堪えかねて逃げて来た者もいる。また大陸に志を得ずして新しい天地を求めると移住してきた者もいる。これらの台湾人は自分の力で台湾を開拓した。それゆえ台湾人は清国を祖国と思っていない。であるから清国政府の言うことをきかず、幾多の反乱を起こして抵抗したので、清国ではもてあまし、治外の民と思っていた。しかし台湾人の頭の中には自分の国がある。それがすなわち明であって、漢民族の国、これが台湾人の祖国である。清国が台湾を日本に渡すことに同意しても台湾人は承知しない。

台湾人は自分たちの力で開拓した台湾を、清国が勝手に日本に割譲するとは何事か、と憤慨し、民衆は立ち上がっていっせいに抵抗した。部落は部落で抵抗し、それが破られたら野山で抵抗した。この各地での戦いは、決して清軍が戦ったのではない。もちろん、清国軍人のなかにも何人かは戦いに加わって、屈しなかったものもあつたであろう。決して後の歴史家が書いているように、組織的に民主国をつくって抵抗したのではない。この抵抗のありさまは、組織的ではなく、系統的でもなかった。この点、二・二八事件にも共通したところがあるから、とくに注意しておく必要がある。しかし、いわゆる民主国というものは、発足してからわずか八日であつたはしく消えてしまったが、当時の台湾としてこのような民主主義的運動ははじめてなので、この点は一進歩といわなければならぬ。

ここで私は、私が子供のころ聞いた、日本軍が来た時の話を紹介しよう。それがいかに、無許画な抵抗であつたかが分かるであろう。

私の家の隣(上屋)——隣といっても田舎であるから五、六十メートルは離れている——の文進伯というおじいさんは、日本軍がきたというので、田のあぜを切る農具をかついで、村の壮丁といっしょに涼傘頂にはせ参じた。ところが、日本軍の打った弾丸が、彼の頭の上をかすめて通った時、彼はおどろいて、ほうほうの態で逃げ帰ったという。これが村の笑い話の一つとして残っている。

ところが、私の知っている文進伯じいさんは、どうみてもかつて日本軍に抵抗した英雄には見えない。おとなしいおじいさんで、じつにまじめな百姓である。あんなおとなしいおじいさんが、むかし日本軍に手向かったのかと想像もできない。色メガネをつけた今日の歴史家はいろいろと解釈するだろう。漢魂とか民族意識とか言うだろう。私はそうは思わない。ちょうど、自分の村に強盗がはいって来たのとおなじで、だれでも共同防衛する責任があるから、いざ強盗が来たといえ、甲も乙も村を守るために、総出で追いかけて、みんなの力で捕えるのとおなじ現象である。

もっとおもしろい話をもう一つ紹介しよう。村の唄公(神様の使い)が赤い鉢巻きをして手に牛角を持ち、赤い旗をかがけて奇怪な姿で涼傘頂に参戦した。日本軍が山の上からその赤い旗に向かって集中射撃をしたら、唄公は旗をすてて逃げた。日本軍は旗が倒れるのを見て総退却と思いい、いっせいに突撃した。ところが、山の中腹に竹の柵のあることを知らず、待ち伏せた民軍がこれを見るや、いっせいに射撃したので日本軍は将棋倒しに倒れたという。

最後にもう一つ比較的秩序のあった抗日民軍のことについて紹介しよう。

私の隣の村、安平鎮に胡という一族が住んでいた。彼の家は二重の刺竹林をめぐらし、小銃の弾丸さえも通らないほど完璧であった。その上、後方には険阻な崖があり、前方には大きな池が二つあって、そのあいだには通路が一本しかなかった。村の壮丁は胡家に集まって、ここで戦った。日本軍は前方より攻める以外に方法がなく、いくら攻めても撃退されるばかりであった。当時、胡家の主婦がなかなかの豪傑だった。彼女は銃火をものとせず、大きな笹を抱えて、抗戦軍の一人一人に握り飯をくばって歩いた。この主婦はかつて、大陸で土匪にかこまれた時、三日三晩戦って屈しなかったほどの女丈夫だった。この話をしては若い衆をばげましていた。

ところが五日目の朝、日本軍は乳孤山に大砲を据えて攻撃し始めた。砲声は殷々轟々、山々にこだましてものすごかった。

しかし、初めはなかなか当たらない。後方の崖に落ちたり、前方の池や竹やぶに落ちたりして無効だったが、昼すぎになって、大きな砲弾が勝手の前の井戸に落ちて炸裂した。ために、井戸が埋まって水が出なくなり、よぎなく退却せざるをえなくなった。その間、日本軍は何回となく肉迫して来たが、みな必死になって撃退した。たそがれのころになり、胡家の主婦は何を思ったのか、一同に命じて迫撃砲を中庭に運び出させ、ありったけの弾薬をつめさせて、門樓の扉をあけた。日本軍は、それを見るやいなや、いっせいに突進して来た。主婦は近よってくる敵をかつとにらみつけ、ほどよい距離を見はからって、みずから導火線に火をつけた。ズドンと一発、日本軍は将棋倒しにばたばたと倒れた。それから闇に乗じて脱出した。

もう一つの話はこうである。河南兵(唐景崧の兵隊)が、新埔まで南下して来た。初めに来た兵

士は地方の悪党に二十七人も殺されてしまった。唐景崧は、台湾を脱出する時、兵隊の視線をそらすために宝庫を開け、それを兵隊の自由にさせて、その隙に乗じて本國に逃げ帰った。それで、どの兵隊も金や宝を持っていたために、悪党に殺されたのである。その後また六人の河南兵が新埔に流れて来た。地方の有力者は、これを保護するために、私の家につれて来た。それというのも、当時、私の家は地方の有力者で、かつ一族のなかに台湾拳頭師が五人もいて、村の覇者であったからである。そのうちの二人の伯父は、清朝時代にかつて台湾拳頭の道場を開いて、みずからその教師になったことがあるので、どんな悪党でも私の家へやってくる勇氣はなかった。河南兵を私の家にあずかったが、しかしいつまで私の家に置いても用をなさないもので、相談した結果、比較的抗戦の中心になっている北埔の姜という家へつれていくことにきめた。ところが道という道は日本軍がいるので、どうしても山路を通っていくよりはかはなかった。この山路を知っているものは、私の父以外に村ではだれもない。父は漢方医で、同時に葉や人參の行商をしたことがあるからである。それで村の壮者五人および私の父が、六人の河南兵を連れて北埔の姜家（俗称姜頭家）へ送った。

晩年の父は當時を述懐しては、自慢話の一つにしていた。姜頭家は金持で、蕃地開拓のため雇兵がいて、当時客家抗日団体では一番大きかったのであった。姜頭家の子姜紹祖は客家軍を引きつれて、新竹の十八尖山において激しく戦ったが、破れて捕虜の身となり、獄中で阿片を呑んで自殺した。年わずかに二十歳であった。

以上の話を総合して見て、つぎのような結論が出てくるだろう。当時の抗日戦は自発的であって、組織的、系統的でないこと、横の連絡もなければ、縦にも系統がない。また人の宣伝や煽動によって蜂起したのではない。二・二八事件の起りもこの点が似ている。

台湾人は無意識のうちに、台湾は自分たちの祖先が開拓したものであって、われら子孫は、それを守る義務がある。われわれの祖先が幾多の艱難辛苦と努力によって建設してきた村には、一寸の土地に一寸の汗と血と涙が流れている。村を守るために、瘴癘や「蕃」人や外敵と闘って犠牲になったものも少なくない。いま義民廟に祭ってある魂はみな村のために戦った英雄である。この英雄の魂を義民爺と称して、自分の父とおなじ尊称で呼んでいる。これらの魂を祭るために、台湾人は毎年莫大な金をかけて大きな祭典を行なっている。この義民爺の精神が知らず知らずのうちに台湾人の血のなかに流れている。いつのまにか自分の村を守るのが自分の義務であるという觀念が、無意識のうちに血のなかに混じっている。この精神があるから外敵がくれば、それが自然に発露する。

それで日本軍が来たというだけで抗日感情が湧き、抗日思想が生まれ、抗日行動となって、みずから進んで抗日戦線にはせ参じて戦ったのである。ゆえに命令する必要がある。また、勝つか敗れるかは考えない。ただ自分の義務を遂行しなければ祖先に対してすまないと思ひ、一死をも辞さない。ぐずぐずしたら村は日本軍に取られてしまう。取られたら最後だから、その前に戦わなければならない。それで台湾人はこの感情に支配されて、いつせいに立ち上がり、村々でそれぞれ勇敢に戦った。

我が子供のころに聞き覚えた当時の抗日の話では、安平鎮は胡家为中心で、涼傘頂はだれが中

心かは分からないが、私の伯父の一人もこれに参加したため、その後日本当局に知られ、土匪に扱われて、何回となく日本軍が逮捕にきたが、そのたびに逃げたため、私の家はついに焼かれてしまった。大家は林家、北埔は姜家を中心であったという。

台湾人はこのような熾烈な郷土愛を持っていると同時に、祖国愛もまた持っている。祖国を思慕し、恋々として祖国を愛する気持はだれも持っている。しかし、台湾人の祖国愛は決して清朝を愛しているのではない。清朝は満州人の国であって、漢人の国ではない。日清戦争は満州人が日本と戦って敗けたのであって、漢人が敗けたのではない。台湾が一時日本に領有されてもいつかは取り戻せるのだ、漢民族はかならず復興して自分の国を建設する。老人達は夢のなかでも、いつかは漢軍がきて解放してくれるのだと堅く信じていた。台湾人の心の底には漢という美しい立派な祖国が存在していたのである。ゆえに台湾人は幾多の反乱を起こして日本に抵抗したが、その結果はつねに惨敗であった。この武力闘争は、第一次世界大戦までつづいた。

第一次世界大戦後、台湾人はもう武力ではとうてい日本に対抗することができないことを悟り、形を変えて文化運動によって民族意識を高めた。その上、清が亡びて民国が興ったので、台湾人はいっそう祖国を思慕するようになった。この祖国愛は抽象的観念的感情であるから、言葉では説明ができない。具体的な例として私の生い立ちを説明しよう。私は明治三十三年、すなわち日本に領有されてから五年目に生まれたので、もっぱら日本教育を受けて大きくなったのである。祖国の文化に接していないから祖国の観念があるはずがないようではあるが、ことはそう簡単に理屈だけでは解釈できない。

この目に見えざる祖国愛はもちろん観念であるが、しかしなかなか微妙なもので、つねに私の心を引力のごとくひいていた。ちょうど、親に別れた孤児のように知りもしない親を慕う気持で、その親がどういう親であるかは穿鑿^{せんさく}しない。ただ恋しい、懐しい気持で慕い、とにかく親の膝下におりさえすれば温く暮らせるものと一方的に心のなかできめていた。一種の本能に似た感情で祖国を愛し、祖国を慕うのであった。この感情は知るものぞ知るであって、おそらく異民族に統治された、植民地の人民でなければ分らないのだろう。

こういう気持はかつて清朝治下の民であったものなら当然であるが、それが私のように日本領台（台湾領有）後に生まれたものに、この気持があるのはじつにふしぎである。非常に不遇な境遇におかれているものならいざ知らず、私のように中ぶらりんで、別に大した苦境にも立っていない、それにもかかわらず日本人のすることに對してとにかく反発的である。これがすなわち民族意識だろう。さてこの民族意識が外からはいつてきたのか、あるいはもとから内的に存在していたのか、もしくは植民地のために自然に発生したのか、私には分からない。

しかし、植民地にいる台湾人は抵抗すれば自滅することを知っている。反抗的気持を起しても、どうにもならないことも知っている。それを知りつつあえてこの気持を持つのは愚の骨頂^{ちやうぼう}で、おそらく聡明な人の目から見ればじつに幼稚の至りである。それを知りつつ要領よくやれない自分の性格は持って生まれたもので、なんともいたしかたがない。そうかといつて思い切つて敢然として戦う勇気があるかといえ、それもなし。どこまでも中ぶらりんで、どちらにもつかない灰色に隠されて、不平不満が絶えず、愚痴的感情から一歩も出られない。このような気持

は私自身でさえ、それが嫌である。これがいわゆる植民地的性格だろう。すなわち私がこの中間の性格の持ち主であって、日本人のやることはよかれあしかれ、心よく思わないで反発的である。この反発心がどうしてできたか、私はそれを検討してみたくなった。それでは、私の生い立ちと環境を語ろう。

私が母から離れて祖父といっしょになったのは数え年四つのことと思う。その年に妹が生まれたからである。祖父は男やもめで、祖母は父が三つのときに、夫婦げんかのために、阿片アヘンを呑んで死んだのだそうだ。名家の娘で美人だったと言ひ伝えられている。祖父の若い時は俗にいう「唐山性」で、じつに気の荒い人だったようだが、私の知っているのは祖父の晩年で、気のやさしい、どんなことでも怒らない、よいおじいさんだった。私とおなじ庚子こうしの生れで、干支えと一まわり違っているから六十歳も年上だった。父母は正庁の側の部屋に住み、祖父は離れた横屋の端に住んで、二人の兄もいっしょだった。食事だけはみんないっしょであつたが、そのほかは各自の仕事があるので、私は母に近よれなかった。母は家の仕事、畑の仕事、三度のご飯炊き、豚や鶏を飼うほかに、弟や妹を世話することで精一杯であつた。それで私を祖父に任せていた。つまり私は物心ついてからは、祖父一人の愛を受け、目に入れても痛くないまでかわいがられていた。ゆえに母といっしょに暮らしたことは忘れても、祖父といっしょに暮らしたことは忘れられないのであつた。

祖父は古い読書人で、大家の末子だった。大金持の曾祖父は、二人の秀才を家庭教師に雇つて、彼と彼の兄を教育したのである。彼は二十四歳、兄は三十二歳まで勉強させられていた。祖父は気前のよい人で、若い時は広東、香港まで遊歴したことがある。一時丸薬商になつて、方々歩いてしたが、ある日、宜蘭で大ばくちをして大きく敗けて財産をなくしてしまつた。財産がなくなつても、その気前のよさは残つていた。ゆえに祖父の部屋にはつねに客が絶えなかつた。とくに、隣(注四)(五、六十メートル離れたところ)の書房の教師はほとんど毎晩来ていた。来ると、

「又食蚊飯」〔遅い晩御飯の意〕

としゃれ言葉で、私の家の晩餐はいつも遅いとひやかしていた。ときどき私の頭をなでて、君の故郷はどこかと聞くのであつた。私は祖父が教えてくれたとおり、

「広東省鎮平県興福郷盧阿山口排仔上」

と即座に答えたら、書房の先生は、非常に喜んで大変ほめてくれた。ときどき私のわからぬ言葉で、

「否極泰来、総有一日、復中興」〔中国も衰え尽きれば必ず復興するの意〕

と低い声で、祖父にささやいては嘆くのであつた。いつのまにか私もこの言葉を覚えてしまつた。

私は子供のころ健康でなかつた。五つの時、臀部に大きな腫れ物ができて坐ることができないので、いつも長い腰かけに横になっていた。ある日、いままでも家に来たことのない鬚のはえたじいさんが、私のそばに近より、そつと腫れ物に小刀をさしこんだので、私はあつと泣き出した。瞬間血膿が泉の湧くように流れ出た。むかし、私の地方には西洋医がなく、この老人は漢方の外科医だった。それからいろいろの薬草を貼りつけて、その膿を吸いとつた。私が大きくな

った時、祖父からこの話を何回となく聞かされた。

それから私が六つの時、水牛につかれたことがある。私は一番上の兄につれられて、祖先の墓の芝の上で遊んでいた。兄は私より十一歳も年上だった。彼はほかの子供たちとなにかして遊んでいた。私は一人、水牛が一心に芝の草を食べているのを見ておもしろがっていた。それがなんとなくおもしろかったので牛に親しみを感じ、近づいてその二つの角つらに両手をかけた。そのとたん、水牛はびっくりして首を傾けて、角を私の横腹につきこんだ。私は宙返りをして、地面にひっくり返った。さっと一陣の冷風を身に感じただけで、あとはもうなにも分らない。そして兄に背負われて家に帰った。父は漢方医なので、すぐ人参の汁をたくさんのおまかせてくれた。そしてつかれた傷口にも人参のつぶしたものを貼った。私がふと目をさました時、母は泣いていた。祖父の手は私の額の上にあった。

父は大きな声でみんなに、

「もう大丈夫だ」

と叫んだ。

父は祖父の隠居後、男々おおしく旧家を背負って財産の挽回に努めていた。漢方医、人参行商、土籠間（穀すり業）、みかんの栽培というように、いろいろの仕事に手をつけ金もうけに一生懸命だった。時たま家に帰ってきて、祖父に挨拶をしただけで、またそそくさと出て行くのであった。祖父は祖父で仕事がないから、いつも私の相手をして遊んで暮らした。

私が六つか七つの時、祖父につれられて彼の母の里の枋寮にある義民廟の祭りに見に行ったことがある。私はいままで家を離れて、あんな遠いところへいったことがない。新埔の町にさえ出たことがないので、なんともいられない気持であった。

義民廟の祭りは例年どおり旧暦七月二十日で、私はその前日の早朝、祖父といっしょに家を出た。当時の道はいまと違って、うねりくねりとして道幅が狭く、田圃を通ったり、山の麓を通ったり、川岸を通ったりしていった。枋寮までいまは九キロぐらいであるが、むかしはもっと遠く、十五、六キロもあった。祖父は歩きながら私にいろいろの話をしてくれた。

消里溪の前に出ると、祖父はうしろの方を振り返り、指でわが家のある方を指し、

「家の裏山は鯉に似ているだろう。あれは下って出て行く姿勢で、地理師の話では『下灘鯉』とあって、ここに家を建てれば金持にはなれるが、うんと偉い人になるにはどうしても外へ出て行かなければならないということだ。志宏、どうだ、おまえは大きくなったら外へ出て行く元気があるか」

と語り、さらに言葉をついで、向い側の山の下は、下林排といって、わしの祖父が最初にこの地方に来た時に住んだところだと言った。祖父の祖父は、妻子をつれて広東から台湾に渡り、大稲埕たいとうで三カ月、新荘で四カ年、その後下林排に移住したのである。下林排では畑を開墾し、甘藷かんじょうを作ったり、豚やあひるを飼ったりして金をもうけ、いまの大茅埔を買ったのだった。当時、大茅埔全体がたった八十元、小茅埔は三十元で蕃人から買えるのであったが、だれもほしがらなかつた。その後、公坡のところ泉が発見され、土地の値がうんと上がってしまった。

祖父の祖父は仕方なく、大茅埔の四分の一を五百元で買った。そして、彼は土地のしめっぼい

ところを見つけて、貯水池を三つ作ったが、案の定、泉が出て水がよくたまつた。そして土地を開墾して田を作り、家の基礎を固めた。

当時の大茅埔は文字どおり鬼茅がぼうぼうと茂っていて、毒蛇がうようよしていた。幾多の苦心と心血を注いではじめて開拓できたという。第二代目、すなわち祖父の父が一番偉かった。土地の経営はもちろん、油車工場（搾油工場）を営んで大いにもうけた。親子二代で大茅埔の土地をほとんど手に入れてしまった。全盛の時は村のはしの土地公の祠を基点に北へ約十キロの田圃があり、徒歩で半日はかかるのであった。村の後にある、うねりくねりとした十数里にわたる山もみな彼のものではあった。しかし、彼が台湾に来た時は着のみのままで、その時、祖父の父は九つであったが、はくパンツがなく長い裕（あわせ）一枚きたきりであった。親子が必死になって働き、血のにじむような奮闘をしてこの地方でも一番大きい金持になった。しかし、祖父の代になって家運が傾き始めた。祖父はばくちが好きで若いころ大きい賭をして敗けたため、大茅埔の二辺にある土地を全部売ってしまった。さいわい、志宏の父がばくちをしないで一生懸命に働いて、祖父の売った土地をほとんど買い戻した。そう説明してから、祖父は、

「志宏が大きくなったらばくちだけはしないことだよ。そして学業にはげみ、家名を挙げなければならぬ。しかし、日本の天年〔日本の天下の意〕になってしまったからおしまいだ。挙人や進士にはなれないからな」

と言い聞かせ、それから、私の手をひいて川を渡った。二人は、いつのまにか「閻王溜」についてた。それから道は上り坂で、祖父は休むために、ちょっと木の下の石に腰をおろし、タバコを出して一服しはじめた。

谷間から吹いてくる風は涼しかった。祖父は煙草を吸ってから、また言葉をついで、
「ここは『閻王溜』といって、むかしここで一步すべったら閻魔王に逢うのだった。この谷の奥には生蕃が住んでいて、時々ここまで出没して来ては、人を殺して首を獲って行く。わしの子供の時でも、ここを通る時は、かけ足をして通った。いまではそんなことはなくなったから安心だ」

と、むかしをしのんで語った。それから祖父は腰をあげて坂を上り始めた。道は獅頭山の麓を横ぎり、それから下り坂になって田圃のあいだを通り抜け、四座屋から大屋場をへて新埔の町に出た。新埔に着くともう昼になってしまった。そこで、もちを買って昼御飯の代りにした。その午後、二人が気も軽く枋寮にたどりついたのはもう日が暮れかかるころだった。曾祖父の里の家も大きかった。分房（分家）がいくつか分らないほどであった。祖父はいちいち訪ねて挨拶した。

つぎの日、私は祖父につれられて廟のお祭りを見にいった。じつに大きな祭典で犠牲豚や羊が数えきれないほど並べた。台湾芝居も七、八台演じられていた。一等賞をもらった豚のまわりには蟻が砂糖にたかるように人が集まって押しあっていた。一番おもしろい場面は、砂糖のおかゆ（糖粥）を食べるところである。なにしろ十四庄の人はみな義民爺の子孫であるから、だれが食べても無償で、その混雑といった実にすごかった。おかゆをすくっているうちに上からかけられてけんかをやるものもあれば、せっかくすくったものを食べようとして、人につき当たってこぼしてしまうものもいた。種々雑多、ちょうど一群の餓鬼が集まって食べ物争って食べ

るのおなじありさまだった。

私は義民爺にはどうしてこんなに子孫が多いのかと感心した。ひょっとしたら自分も義民爺の子孫かも分らないと思った。これを祖父にきいたらそれはもちろん、この十四庄に住んでいるものはみな義民爺の子孫で、ここに祭ってある義民爺は十四庄を守るために外敵と戦って、犠牲になった魂である。ここに移住して来て以来幾多の戦いがあった。初めは生蕃と戦わなければならなかった。それにもたくさんの犠牲が出た。祖父の祖父がまだ台湾に来ない前には、部落境界の争いで十四庄のものが新竹のものと闘ったのが一番大きな争闘であった。いまの六家の林家の先祖が中心となって闘い、二十何人かがその時の争いで犠牲になって殺された。

その犠牲者の死体を湖口へ運ぶつもりで、ここまでくると日が暮れて、牛車はこの峠を上ろうとしたが、どうしても上れないので、やむなくここに一泊した。翌日、起きて四方を見渡すと、後方には延々と低い山脈が横たわり、前方には広々とした田圃が開いて、はるかに中央山脈の支脈がかすかに見える。そこで、みなが協議の結果、湖口へは行かずここへ犠牲者を埋めて祭った。その後、日本軍と戦って倒れた者も、やはりこここの廟へいっしょに祭った。

それから、祖父がまだ赤ん坊の時、家に何十人かの強盗が襲いかかって来たことがあったが、さいわい祖父の父は油車の工場におったからよかったものの、もしも本宅におたら殺されていたかも分からない。祖父の二人の兄はまだ子供だったのにかかわらず、ひどく打たれて負傷した。祖父はまだ赤子だったのでなにも分からなかった。

祖父の父はこれを知ると、本宅に帰らず、すぐ下の村の曾家に応援を求めた。曾家からたくさ

んの壮丁が応援に来てくれた時には、強盗は豚をかついで逃げてしまったあとだった。

「今日、十四庄の人民が平和に暮らし、どの村の田圃にも水が流れて稲が実り、山には茶やみかんがたくさんでできるようになったのも、みな義民爺のおかげで、もしも義民爺がいなかったら、こんなに幸福に暮らすことはできなかっただろう」

祖父はそう語った後、「志宏」と呼びかけ、

「われわれはみな義民爺のように勇敢でなければならぬ。どんな大敵が来てもかまわない。勇敢に戦うのだ。いったん村に敵がはいって来たら、みんなが力を合わせて命がけで闘うのだ。これが義民爺の精神だよ」

と教えてくれた。

二 「獅子狗」と呼ばれた公学校時代

私が物心のついたころ、本家（公庁）の焼かれた跡には台湾瓦がたくさん散らばっていた。黒く焼かれた丸柱や折れた石柱がころがっていて、門楼は壁だけが雨にたたかれながら残っていた。私はこの廢墟のなかでいろいろな遊びをした。

台湾瓦を拾ってままごとをしたり、それを丸くこしらえて一厘銭の形にしたりしていたことを、いまでもはつきりおぼえている。大人の話では本家は日本軍が焼いたという。しかし、日本

軍がなぜ私の家の本家を焼いたかは、ずっとあとになって初めてその理由が分かった。

ある年の正月、私の家に各房の顔役が集まって来て、本家再建の会議を祖父の部屋で開いた。もちろん、私もそこにて会議の様子を見ていた。この会議の席上で、第二房の伯父の責任が問われて、本家の焼かれた原因がこの伯父にあることを私は初めて聞き知った。つまり第二房の伯父が涼傘頂の抗日戦に参加したことが平定後日本軍に分かり、日本当局は伯父を土匪として扱ひ、何回も逮捕に来たがそのたびに逃げられたので、最後には何百人もの兵隊を狩り出して家を包囲した。さいわいその日伯父は野宿して家に帰らず難をのがれることはできたが、その代り日本軍は火を放ってついに本家を焼き払ってしまった。

会議の結果、私の父が本家の再建委員長に推された。その理由は祖父が族長でみんなから信頼されていたからである。祖父はかつて第二房の伯父のために身代りになったことがある。日本軍は土匪として扱った伯父を逮捕しようとしたが、目的を達せず、最後に古家一族に対し、本人が自首しなければ代りに同族からだれでもよい、一人出頭せよと命令された。伯父はもちろん逃げかくれて現れない。

一族の者が非常に困って相談した結果、公租（祭祀公業）から毎年穀二千斤を支出して、出頭者に提供することに決めた。万一殺されたらこれを祭祀費用としてその子孫に与え、生還すれば養老費として死ぬまで与える約束をしたが、それでも希望者がなかった。

祖父はやむをえず、いわゆる「身を殺して仁を成す」、一族のために出頭した。祖父は読書人で漢学の教養が高く、さきに述べたように、若いころには広東、香港などに遊歴したこともあ

り、見るからに善人であった。日本軍当局者はこの善人の祖父といろいろと筆談した結果、これを殺すにしのびず、ついにゆるして家に帰した。

このような苦い経験をもっていた祖父であるから、日本の政治に対して心よく思うはずがない。そうかといってあえて反抗もしなかった。むしろ陶淵明に私淑して余生を楽しんだ。私の教育に対してもはなはだ消極的であった。どうせ日本の世の中では大官にはなれないし、日常生活なら実用文字さえおぼえればよい、実用文字なら二、三年あれば足りるから、十二、三歳になって教育しても遅くはないという意見だった。

おかげで私は書房へはいることができなかった。八つの時、隣の従兄や上の二人の兄が勉強しているのを見て非常に勉強したかったが、気の弱い私はただ思うだけで祖父に打ち明ける勇気がなかった。そのわけは書房の教師がこわくて、万一勉強ができなかったら打たれることを心配したからである。祖父は祖父で私を溺愛のあまり、いつまでも手元に置きたかったのである。

しかし、十一歳の時、村の書房は閉鎖され、二人の兄は二年前に公学校にはいり、二つちがい（注五）の従兄も公学校へは行ってしまった。私も公学校へ行きたいことを申し出たが、運悪くそのころ足の裏に腫れ物ができたため、歩くことができず、とうとう一カ月遅れてそれでも入学できた。

私は公学校の一年生になって非常にうれしかった。おなじ組の級長は九カ年、副級長は十一カ年、家の従兄は四カ年というように、みな書房で勉強した連中で、なかには子供を持っている生徒もいた。私はこれらの人々に伍して一生懸命に勉強した。祖父の話では私がときどき寝言でアイエオと言うのを聞いたそうで、受持の林先生は非常に私をかわいがってくれた。二年生の時

の成績は三番であった。その後は少し落ちて卒業の時は五番だった。

がんらい私は弱虫で、髪がいつもふさふさしていたので「獅子狗」とあだなされていた。つまり獅子舞の獅子のように髪がいつも乱れていたからである。性質は懦弱で、たとえ理由なくして人に打たれても抵抗する勇気がない。公学校へ行く前、隣の家に遊びに行つて自分より二つも年下の子供に襲われて打たれ、鼻血が出て一言も抗議せず、悲鳴もあげず、ただ黙って鼻を抑えて家に帰った。家に帰っても相手の悪口も言わない。私の長兄は十一歳、次兄は六歳も私より年上だったが、この二人の兄はなにか気にくわぬことのある時、よく私の頭を打つくせがあったが、打たれても別に不平もいわず、親にも訴えない。黙って泣き寝入りするだけだった。時にはなんのために打たれているのか、その理由さえ分からぬこともあったが、兄の不当に対し、反発心を起こしたこともなかった。ただ母がそれを見るたびに兄たちをひどく叱るのだった。要するに、私は男性的ではなく、むしろ女性的だった。つねに顔色のよくないのも、おそろくかつて牛に突かれたせいであろうと言われていた。

一年生の時のあるお祭りの晩、先生に選ばれて二十四孝、「郭巨、児を埋め、天、金を賜う」の郭巨の妻に仮装して行列したことがある。このように客観的にも女性的に見られるが、いざという場合には私の心は決して女性的ではない。

これも一年生の時だった。旧正月十五日の夜、従兄といっしょに新埔で花灯を見た。花灯を見た後、従兄は約束を破って私といっしょに帰らない。私は生まれてからいままで人の家に泊ったことがないので、どうしても帰るとがんばった。寄宿舎の先生が好意的に私をひきとめるために、帰る途中にお化けが出るといっていろいろおどかした。しかし、私はどうしても言うことを聞かないで一人で帰った。

さいわい月夜だった。が、家まで四キロ、途中暗いところや墓場の前を通らなければならないところもある。おまけに運が悪ければ毒蛇に逢うことも予想されるのである。私は従兄が約束を破ったことに対して別にとがめる気持もなく、みんなと別れて一人淋しく帰途についた。途中墓場の前を通る時だけはちょっと目に涙が浮かんだ。万一なにかに遭っても最悪の場合には死ぬだけだと覚悟し、闘うとか逃げるとかは考えていない。ところが途中何事もなく無事に帰ってきて祖父をびっくりさせた。

もとより懦弱であるから人とけんかすることはない。友だちに対してはどの人ともおなじようにつき合っている。人の善悪に対して、少しも考慮せず無差別である。この無差別観は現在に至るまでほとんど変りなくつづいていて、どの人も善人と思うくせがある。ゆえに人を識る明がなくて、まちがって人を信じたためごまかされたことが多い。この無差別的善人観は祖父から受けついでたものである。

祖父はこの無差別的善人観のために、曾祖父からもらった莫大な財産をほとんどごまかされてなくしてしまった。ばくちの失敗もおそろくベテソ師にかかったのであろう。晩年の祖父は口ぐせのように、子供には少し金を与えて使わせないと金の価値が分からない、大きくなって親のあとを継ぎ、急にたくさんの金を自由に使える身分になると、知らないまに金を使い果たしてしまふと言っていた。これはおそろく祖父の経験から得た実感であって、しかも祖父はそれを実行し

ているからおもしろい。祖父の室の棚の上にはいつも小さい箱が一つおいてある。そのなかに一厘銭、一銭銅貨および五銭白銅貨、十銭銀貨がいつもはいつていた。一厘銭や一銭銅貨は自由に取って使ってよい。ただし、十銭や五銭を使った時には、使ったあとでかならず祖父に報告しなければならぬと教えられていた。

しかし、私の子供のころは金を使うところがほとんどない。当時、日本文明がまだ田舎へはいつて来ないから、新しい菓子もなければ子供の玩具もない。一キロ半離れたところに村の小店が一軒あるが、懦弱な私は一人では行かれない。ただ家の前の福德正神（地蔵）を祀つてある祠のそばに甘蔗さとうきびを売っている店があるだけである。私は時たま祖父のお金を二厘取って甘蔗を買って食べることがあったが、一銭銅貨を取って使ったことはない。甘蔗一尺五寸ぐらいがただの一厘銭二つで買える時代で、一銭銅貨は一厘銭十六個にも換えられた。祖父は金については自由にさせてくれたけれども、事実、子供にとって五銭とか十銭とかを使うところがない。私はいつも祖父の室にいて、姉と妹とほとんどいっしょにならない。二人の兄が学校へ行ったあとは一人淋しく過ごしていた。

私はこのような環境に育ち、一面素直で自由であるが、そうかといつてその反面にひねくれたところがないでもない。一年生の時の受持林先生に対しては心の底から尊敬していたが、林先生が去ったあとはどの先生に対しても心服できない。林先生は国語（注六）学校の出身で、かつ書家であるから、昼の休み時間にはいつも字を書いていた。そのような時、私は先生のそばで先生のために墨をすったり、紙を引く役目をしたりしていた。それでとくにかわいがられたわけである。先生

は一年間私たちを教えてくれただけで翌年故郷へ帰ってしまった。先生と別れる時は私ばかりでなく、同級生はみな教室のなかでしくしく泣いた。先生も生徒の情に感じてもらい泣きをした。その場面は五十年を過ぎ去った現在でもなお、私の心の底にあざやかに残っている。

私の学校の成績は悪くはなかったが、行儀はよくなかった。第一、私はきちんと坐って先生の話を聞くことができない。内向的ではなく外向的で、一時間じつとしていられない性分で、授業時間でもなんとなく動きたい。じつとしていると居眠りをしてしまう。この癖は大きくなるにしたがってはなはだしくなった。ことに師範時代、修身の時間にはかならず居眠りする。注意すればするほど眠くなるので、ときどき自分の股をつねって眠気をさませようとしたが、それでもだめだった。そのため級主任に呼ばれて何回となく注意され、かつ訓戒されたことがあった。

話が少し離れ過ぎたので、もとに戻つて公学校時代のことを語ろう。

祖父は私が公学校へはいると同時にソロバンを教えてくれた。おかげで私は十一歳でソロバンの加減乗除ができ、日常生活なら少しも困らない程度になっていた。その上「含口算」（暗算法の一種）、「斤求両」、「作大両算法」、そのほか日常生活上、ソロバンを持たなくてもすべて暗算によつて計算できる方法を教えてくれた。また、いろいろの謎を出して私の思考力を練つた。祖父はときどき私の勉強を見に学校へくることもあった。そして私に対してたいそう寛大であった。

二年生の時、祖父の言いつけで阿片アヘンを買に行つたが、途中で落としてしまった。阿片は禁止品であつて、吸飲者には一定の量しか許可していない。一度に二日分買つたら、あと二日待たなければ買えない。その二日分を私は落としてしまった。祖父は阿片の癮いんに悩みながらも一つも小

言を言わず、途中どこかに落ちているかも分からないから戻って探してきなさい、といった。私はすぐ戻って一生懸命探したが見つからなかった。それでも祖父は相変らず笑いながら、かえってご苦労といってくれた。その後も私を信頼してくれ、兄には言いつけないで、もと通り私に阿片を買わせていた。

このような祖父はまた私を友だちのように扱うこともあった。夜中に私を呼び起こしてほうき星(懸星)を見せ、近くきつと革命が起こる、清仏戦争(清七)の時はこれよりも大きいものが出た。フランスがたぐさんの兵隊を基隆(キールン)に上陸させたが、みな台湾の民軍阿九旦に殺されてしまったと言っ、なにかを期待しているらしかった。

ところが私が三年生の時のある日、祖父は突然に腹痛を起こした。父は医者としてあらゆる手当をしたが、効果がなかった。父はときどき、

「食菓頭、反菓尾」(菓の力ではもうどうにもならないの意)

とひとりごとを言っは頭をふっっていた。父はいよいよむつかしいと見るや、すぐ檜の棺桶を買ってきてそのカンナクズを持ち帰り、祖父に見せた。この消息が伝わるや、古家一族はもちろん、遠近の親戚や友人がいろいろな物をさげに見舞いに来てくれた。祖父はその一人一人に竜銀(銀貨)を一個ずつ記念に与え、そして、

「添福寿」

とていねいに一々お札を言って帰らせた。六日目の夜、容体が急に悪化し、腹痛がはなはだしく、そばで見ていられないありさまだった。父はさっそく祖父の床を正庁の側の部屋に移し、万

一に備えて、二人の兄に看護させた。母はちょうどそのおりお産で、父は急変を心配して祖父のそばを離れることができない。致し方なく、父は私に起死回生の期待をかけて二キロ離れた隣村の薬屋まで薬を買いに走らせた。途中道が狭くてへんびなところを通らなければならぬので、日中でも歩きにくいところであったが、すでに十三歳になっていた私は、祖父の病気を心配し、夜道のこわさも忘れて一生懸命走って薬屋に行き、薬を求めると、帰り道もおなじように走って帰った。汗びっしょりだった。

祖父はその薬をのんでいくぶん心地よくなったようだが、どうしても好転の兆候が見られないので、父は万一を予想して紙の馬や紙の車を買っておいたのを祖父の枕元におき、祖父をこれに乗せて天国へ行かせる考えだった。

翌々日の夕方、祖父はとうとう天国へ行っってしまった。このような祖父をなくして、私はじつにつらかった。ただし、祖父の思想、なかんずく陶淵明のような行ない、現実を超越しようとする態度、金を重く見ない点、中庸的処世法などは、いまでもなお私になにかを示唆しているように感ずるのである。

祖父の逝去後、家のなかは一時暗かったが、その年の冬、村全体に一大恐慌が起きて、山の木を全部伐っってしまうようなことが起こった。おかげで私の本家のうしろにある山の木、樹齡千年になる樟樹(くすのき)、赤柯(かし)、楮仔(たぶ)など伐っってしまった。これは当時、苗栗庁三叉における民有の山を、時の庁長によって、官有地として三井に払い下げたためであった。それで新竹庁下にある私どもの村にまで影響してきたのである。父は伐り倒した大木を製材して板にし、池のなかに浸

水させておき、後日それを使うのに残しておいた。私はこの神秘的な大木を伐ってしまったことに對し、なんとなく淋しい気持ちで、ふたたび赤柯や椿仔樹の実を拾って遊ぶことのできなくなることが残念であった。

学校のことを書けばきりがながい、そのうちおもなものを拾って書いてみよう。

四年の時、暗誦試験で、私は一年から四年までの漢文読本を全部暗誦できたので、賞品をもらったことがある。漢文は一週二時間しかないが、清朝時代の秀才が受け持っていた。この秀才はじつに厳しく、できない生徒に對してはかならず鞭でたたいたのであった。後日私が、いくぶん漢字を識って漢詩を綴れるその基礎はこれからきていると思う。惜しいかな、この先生は四年まで教えてから休んでしまった。後任の先生はじつにいいかげんで、いつもつまらない昔話ばかりして、一つも身に入るものがなかった。

五年生の受持は日本人で、浜野先生という代用教員であった。ある日、私どもを連れて枋寮へ遠足に行った。帰り道裏町を通りかかると、みんなが「阿送」の家が近づいたとさわぎ始めた。

当時、浮売の「阿送」と浜野先生との怪しい関係が学校まで評判になっていた。そのうち二、三人の生徒が小さい声で

「先生、おくりの家へ行きませんか」とささやいていた。私が

「もっと大きい声で言わないと先生に聞こえないじゃないか」と言ったら、そのなかの一人が

「君自身どうして言わないのか」と詰めよつたので、私はなんの考えもなく、思わず先生に聞こえるぐらい大きい声で、

「先生、おくりの家へ行きませんか」とどなった。先生はすぐ振り返って、だれかと叫び、同時にそれを調べ始めた。私は列外にひき出されて一時間も叱りとばされた。しかし、私はおわびもせず黙って叱るままに任せていた。このような衝動性行為は私の性格的欠陥の一つであって、事を処するにあたり、深く思慮しないでよく失敗する。これは性急なるがゆえであって、この性急的焦慮のためにその後も何回となくおなじような失敗を繰り返していた。

この「阿送」の一件で、六年生に上る時の成績は四番から七番に落とされてしまった。もっとも成績に對してはつねに不服で、慣れてはいたが、さすがに七番まで下げられるとしゃくにさわった。自分としては級長だけには一目置いていたが、そのほかの者はほとんど眼中になかった。私の最大欠点は要領よくやれないところであって、おべっかは大きらいであった。自分が正しいと思つたらどこまでも屈しなかった。そして先生の言うことであるうが、だれの言うことであるうが、そんなことはおかまいなしであった。

この五年生の時にもう一つ重要なことがあった。「獅子狗」とあだなされていた私は、髪を切って丸坊主になった。これは私ばかりでなく、生徒全体が断髪してしまつた。おかげで私のあだなは解消されたが、服装には相変らず無頓着だった。そして私はかわいいと思われる少年ではなく、祖父と一年生の時の受持林先生のほかは、だれもかわいがってくれなかった。

いよいよ六年生になった。受持は校長先生で、体操は五年生の受持亀井先生が担任していた。ところが、ある日の体操の時間に胡君の直立不動の姿勢が悪いといって、亀井先生にひどく打たれた。胡君は日ごろから身体が弱かったので、すぐその場でめまいを起こして倒れてしまった。同級生一同はこれを見て胡君に同情してストライキを決行した。ただちに書物を包んで裏山に上って相談した結果、みな退学することを決議し、万歳を三唱して帰った。

その日校長先生は出張中で不在だった。胡君は漢方医の子で、彼の父は名望家の一人であった。つぎの日校長先生はわれわれを呼び出しているいろいろ調べた結果、体操を亀井先生に受け持たせないことにして事を納めた。その後、まもなく亀井先生は他校へ転出した。

いままでの実績によると、私の学校は上級学校への合格率がいたって悪い。医学校は皆無、国語学校師範部は一年に一人ずつ、在学生はたった二人しかいない。農事試験場にだけは比較的多くはいっていた。学校はこの不名誉を挽回するために、毎日暗くなるまで受験のための補習教育をほどこしていた。私はもちろん、一、二期前の卒業生もやはりこれに参加して補習を受けていた。私は数学が得意でいくぶんか自信があった。

いよいよ試験が近づき、校長先生は私に医学校の試験を受けて見よとすすめてくれたが、自費のため父が許してくれなかった。そのかわり官費の国語学校師範部なら受けてもよいと言われた。この試験を受けるには公立医院の身体検査の証明書が必要だった。それで私は同級生の余君といっしょに公立医院のある新竹へと出かけた。

竹北まで台車(准八)で行き、それから汽車に乗ればよいのに、余君が徒歩にしようと言い出したので、新埔から新竹まで十六キロ、私の家から二十キロもある道を、二人でとぼとぼと歩きながら、途中、渡し舟に乗ったり、高い橋を通ったりして、ついに新竹まで行き着いた。帰りも同様に歩いて帰った。いまでも思い出されるのは新竹北門あたりの旌表(せいひょう)〔人を顕彰するアーチ状の門〕がもっとも印象的だったことである。しかし、あの時いっしょに行った余君は二、三年前にもう鬼籍の人となった。いまさらながら、人生のはかなさを感じずにはいられない。

国語学校の受験者は私の学校から前二期の卒業生と合わせて総数二十八人、そのうち国語部(自費)四人、残り二十四人はみな師範部だった。この試験のあと、私はもしもこの試験に落第したらどうしよう、二人の兄のように家でぶらぶらしていなければならないと思っただけで心配になった。

そのうちに試験の発表があった。新埔から師範部へ二十四人受験した者のうち、合格したのは私一人だけだった。級長、副級長ともに合格しなかった。国語部は四人のうち、陳という私の一期先輩が、これも一人だけ合格した。その年は関西でも六家でも湖口でも師範部への合格者がなかった。四街庄合わせて私一人だけだった。

得意の私は今度こそ、卒業成績は少なくとも三番以内になることを期待していた。ところが開けてくやしき玉手箱、成績は五番で、私のうぬぼれを満足させてくれなかった。けれども国語学校へはいれたので不平をいう必要もなかった。

三 村からただ一人師範学校に入学

苦棟きんたけの花薫る春四月、十七歳になった私は台湾総督府国語学校師範部に入学した。師範部は寝食一切官給で、その上毎月一円五十銭の手当をもらえるのであった。ここを卒業すれば五カ年公学校の教員になる義務がある。当時の国語学校は台湾では最高学府で、教員は大学と同じく教授、助教授という名義になっていた。したがって、その俸給も大学並みであるから優秀な教員が集まった。しかし、教科書の内容はいたって程度が低く、日本内地の正式の中学よりも低級であった。教科書がやさしいため、優秀な学生は教科書以外の書物を自由に読みあさった。したがってこの卒業生は多士多才で、いろいろな人材が輩出して、日本統治下における台湾の中堅となっていた。それは、この学校の優秀な教授連が教科書以外のことをたくさん教えてくれたおかげである。

教授のなかには進歩的分子もあり、時には変り種もあった。一例をあげれば、私が四年の時、同級の藍君が中国大陸に留学したいと思った。しかし、卒業すれば五カ年の義務に縛られる。強いて留学すれば政府への賠償費に約五百円は要る。当時の五百円は大金で藍君にはそれだけの余裕がないので、思案の末これを教育学担当の矢田先生に打ち開けて相談してみた。矢田先生は君が退校処分を受ければ賠償する必要があるから、まず怒りっぽい宇井先生とけんかをすればよいと暗示した。矢田先生は東大哲学科の出身で、独身の若い先生であった。

藍君はつぎの日すぐそれを実行した。

国語（日本語）を教える宇井先生は、教室にはいるとすぐ出席簿を出して名前をつけ始めた。

そのうち藍某と呼んだら、藍君は、

「ウムウム」

と変な声でうなった。事情を知らない同級生がくすくすと笑った。同時に宇井先生の顔がまっかになり、首がコブラのようにふくれ、そして、

「バカヤロウ、出て行け」

とどなった。藍君も負けずに出よというなら出て行くさと口答えをして、さっさと本を抱え肩をそびやかせながら出て行った。宇井先生はさっそくこのことを教官会議に提出した結果、衆議一決で藍君に退学命令を出した。喜んだのは藍君で、これ幸いと悠々中国大陸に渡っていった。彼は後には天津市の警察局長になっていた。

矢田先生のように非常に進歩的な教師もおれば、その反面、実につまらない先生もいた。我利我利で、出世をあせり、教育的愛情が少しもなく、生徒を罪人のように扱い、ちょっとでも欠点を見つけたらすぐ教官会議にかけて処分させる先生もいた。私の同期生劉君は入学してまだ一カ月もたたないある日、宿舎の寢室の窓を跳び越えるところを舎監頭の至宝田先生に見つけられて退学させられた。

この至宝田先生は高等師範で落第したことがあるともっぱらのうわさだった。頭が悪いかわり

に学校警察の手腕は大したもので、毎年新入生が来たらさきに写真と名前を見おぼえておいて、途中で生徒に出会ったら、突然〇〇と呼んでびっくりさせるのだった。日夜そればかり研究しているので、全校六百何十人の生徒のほとんどをおぼえていた。事実、たとえば三分の一あるいは半分だけ知っていたとしても、生徒側から見ればどの人も知っているように臆測できた。

至宝田先生のもう一面は、色メガネで人を見て、貧乏人の子弟はいじめるが、有力者や御用紳士の子弟に対してはかえって面倒を見るのであった。また成功した卒業生に対してはオベッカさえ使っていた。校長や自分より上の人に対しては媚態をつくし、同僚に対してはむしろ見下げていた。結果としては、彼の高等師範落第のうわさは、やはり彼の同僚からもれたものであった。私たち生徒はかげで彼をオカマと呼んでいた。

おなじ一年生の時、至宝田先生により、大量の生徒を退学処分にした事件があった。この事件の顛末はこうである。

ある日、国語学校の学生四、五人が万華新起町の古本屋で本を探していた。学生の一人がちよつとした不注意で本棚につき当たり、棚の上に並べてあった何冊かの本がバタバタと落ちて来た。それを見た本屋の若衆が、

「チャンコロ」

とどなった。それを聞いた連れの学生たちはその失言に対し抗議をした。日本の若衆はあやまらないばかりか、かえって言葉きたなく、「チャンコロ」を連発した。そこへ通りかかった十数人の国語学校の学生も参加して抗議し始めた。相手はなかなかあやまらない。

そこで学生はどちらが正しいか、学校の先生の前で話し合おうと提議した。若衆の商人は、先生はどうせ日本人仲間であるからと気軽に応じて学校に来た。舎監の先生がいろいろ調べた結果「チャンコロ」と罵倒したことに對しては一言もとがめず、かえって学生が本を落とした原因についてひどく学生をせめて、学生が悪いと決めた。舎監室は食堂の前にあり、時はちょうど夕食後、学生たちは舎監室をとりまいてその成行きを見ていた。

そこへ商人が得意然として出て来て、皆のいる前でまた大きな声で、

「チャンコロ、どうじゃ」

と言った。そこに居合わせた学生は、たちまちその商人をかこんだ。うしろの方でだれか大きな声で、「なぐれ」とどなった。それにつづいて、四方八方から「なぐれ」が連発された。気の早いものは走って行ってなぐった。同時にその近くにいた者はみんな群衆心理にかられて、だれかれなしに商人をなぐった。商人は脱兎のごとく舎監室の南廊下から抜け出し、専売局の方へほうの態で逃げ出した。うしろからは数百人の学生が追いかけた。ある者はスリッパ、ある者は草履をふりあげてなぐった。

商人が至宝田先生の宿舎近くまで逃げたその時、至宝田先生はこの次第は分からないが、とにかく大きな声で、

「だれだっ」

とどなった。その声をきいて学生たちはクモの子を散らすように逃げかくれてしまった。

事件はそれで終わったが、学校の処置は残酷だった。事件の中心人物はもちろん、いままで至

宝田先生ににらまれていたものはことごとく退学処分にされてしまった。何人かよくおぼえていないが、相当な数に上ったと記憶している。これら追われた学生たちは、その後抗日分子となって大陸へいったという。

さてちょっと前に戻って入学当初のことを少し書こう。上級学校の少ない当時において、鳳山溪沿岸の関西、新埔、六家、湖口の四街庄にまたがった区域から私一人だけが国語学校師範部に入学できたので、自慢好きな父の鼻をますます高くした。方々から来るお祝いの客が絶えない。田舎では清朝時代の秀才合格のように考える人さえあった。私自身はまったくの田舎者で台北にさえ出たことがなかった。

入学の前日、私は国語部の陳君といっしょに故郷を出て台北にきた。その晩は大瀛館という宿に泊った。大瀛館は台北では客家人の経営としては唯一の旅館で、福建語のできない私にとっては何都合だった。その夜、国語学校在学の先輩、張君や邱君、蔡君が来て市内を案内して見せてくれた。翌日、私と陳君はあちこちと迷いながらも学校を探しあてて入学式に参加した。私の席は第二組に属し、同級生四十三人中、客家人十人、その他はみな福建人だった。他の組にくらべて客家人の一番多い組だった。台湾の客家人は漢族系住民の少数部族に属し、田舎者で人と容易に妥協せず、うぬぼれはとくに強い。しかし、いざという場合にはいつでも団結ができる。少数部族の心理はおもしろいもので、ただ「私は客家人でどこそこから来たものです」と言えば、すぐおたがいに信頼感が生まれる。この感情は本能的に自然に発生するもので理由はない。私はこの狭い世界観にとじこもりたくないと思いつつも、やはりこの感情から抜けきれない。しか

し、私はこの感情を持ちながら一度も福建人とけんかをしたことがない。

私の入学した大正五年四月は、ちょうど領台始政二十周年に当たり、記念行事として勸業共進会が開かれていた。いろいろの催しがあつて内外の観光客が台北に集中して、じつににぎやかであった。学校は毎晩特別外出を許して、それらの催し物を見学させた。各「蕃」社からたくさんの人を動員して来て、タイヤル族踊り、アミ族踊り、ブヌン族踊りなどというように、いろいろの演芸もあった。私は台湾におりながらまだ一度も蕃人を見たことがなかったので、たいへんめずらしかった。とくに蕃人が人の首狩りに行くさいに「出草の歌」を唱いながら踊る剽悍な姿は、いま思い出してもぞっとするほどのすごいものだった。

この勸業共進会の会場は台湾総督府の新庁舎で、領台以来こんな大きな大きい展覧会を開催したことがないので、日本内地からは皇族や頭官がぞくぞく観光にきた。そのつど各中等学校以上の学生は停車場までお出迎えに行かなければならなかった。

たしか北白川宮妃殿下が台臨された時とおぼえている。その歓迎ぶりは大したものであった。基隆からお召列車が台北に着くと、まず歓迎砲が轟々と響き、軍楽隊を先頭に、つづいて綺羅燦然とした陸海軍の将星が馬にまたがって威風堂々と過ぎ、つぎに武装した陸軍の兵士が颯爽と通る。それにつづいて陸軍大将である台湾総督が乗馬で、二頭立ての馬車に召された殿下の先導をする。馬蹄軽く得々とした馬車が通ると、私どもはうやうやしくそれに向かって最敬礼をした。そのうしろには金筋五本入りの帽子をかぶった警視総長、三本入りの勅任官、二本入りの高等官がつづいて通って行く。そのうしろに民間の有力者が人力車に乗って通る。

そのなかに車輪のゴム輪が目立って大きく、車夫が前に一人、後にも一人の人力車に乗っている紳士が通りかかった。私の後に並んでいる上級生がその紳士を見るやシューシューとしきりに反発的な声をたてた。それについて「大国民」「辜狗^{コウコウ}」というものもいた。私は新入生なのでどういうことなのかさっぱり分からないが、とにかく悪口であることは第六感で判るのであった。あとで同郷の先輩に聞いたら、つぎのように説明してくれた。

「大国民」とは当時公学校の唱歌に「大国民の歌」というのがあって、この歌の趣旨は早く日本人になれということであった。それが転じて隠語となり、御用とか走狗という場合に使われていた。「辜狗^{コウコウ}」とは、領台当時辜^{コウ}という者が進んで日本軍を迎え、みずから案内して台北に入城させた。日本はその功勞に対して、たくさん官有地を与え、かつ食塩の専売をさせた。一ルンペンが一躍して大紳士となったのは、まったく走狗をつとめたおかげであるという。

勸業共進会の開催中は学校もいかげんでろくに授業もしなかった。やっと共進会が終わって初めて本格的に授業を開始した。学科は大したことはなかったが、ただ日本語の発音矯正時間には少なからず私は参ってしまった。国語（日本語）の時間になると、各自携帯して来た小さな鏡で自分の口形を見ながら五十音の発音練習をするのだった。私はラ行とタ行の発音が悪く、自分では先生の発音どおりに発音したつもりなのが、先生は違うという。私はそれを聞き分けることができないので毎時間おなじまちがいを繰り返して、そのつど先生に指摘されて何回も言い直さなければならぬので実にいやな気持ちであった。このために私の天狗の鼻が折れて自信がなくなり、ひょっとしたら落第するのではないかと心配になった。しかし、発音が悪くても参観人があり、ひょっとしたら落第するのではないかと心配になった。しかし、発音が悪くても参観人があ

れば先生はいつも私にいろいろの意見を發表させた。

発音矯正は第一学期だけで、第二学期からは教科書によって勉強したので別に問題がなかった。元来、国語学校は理数科の成績がよければ落第の心配はなかった。このことは順調に二年生に進級してから初めて分かったことで、ここでいままでの憂鬱が解消された。人間はおもしろいもので、いよいよ落第の心配がなくなると心構えが変わる。そこで私が考えたのは、「どうせ、この学校を卒業すればいやでも教員にならなければならない。卒業成績が良くても悪くてもおなじ「訓導^{クンドウ}」で、俸給もおなじ十七円、教科書にかじりついて点取虫になる必要はない。それゆえ私は落第しない程度に勉強して、あとは別なことをすればよい」ということであった。

それからの私は図書館に通って、教科書以外の本を読みあさるようになった。別に目的がないので手当たり次第に読みふけた。つまりおもしろさのために読むので、系統的、研究的ではない。このような興味中心主義の読書ぶりが、一生私に損をさせ、私を学問の世界へ向かわせなかったのである。

二年生はいたって平凡に過ぎた。この間、二、三記しておきたいのは、私の一番小さい弟が六歳でなくなったことである。その知らせを受けた私は、すぐ帰省したいと舎監の先生にお願いした。ところが、先生は出身学校長の証明がなければだめだという。そんな手続きをとったら葬式はすんでしまつて帰つても意味がないからと、どこまでもがんばって、ついに先生と議論してしまった。私はこの知らせはいつわりでないこと、また死をいつわるバカ者はない、と主張した。学校はなぜ一片の規則によって私の兄弟の情を断ち切るのか、非人情極まりないと非難したが、

かえって先生に怒られてしまった。そこで私は言葉をやわらげてお願いしてみたが、やはりだめだった。しまいには、悲しくなってきた、しくしく泣きながら頼んでみたが無効だった。その晩、私は一睡もせず枕をぬらした。

おなじ二年生のある日、とくに親しかった章君といっしょに農園から帰る途中、章君が滑ってころんで脱臼だつぐわうしてしまった。それを台北病院で接骨したが、四、五日たっても指先が少しも動かないのを見て私はびっくりした。私の家は祖先代々接骨をしていたので、小さい時からそれを見聞きしていた。それで多少の知識はあったので、正しくものとおり継いであれば、早いものは一日、遅くとも三、四日で指先が少し動くはずと思った。それを章君に説明して納得させ、私の家へ連れて行って治してやった。それからはいっそう親密になり、のちに大陸へ行く原因ともなった。私が四十二歳の年に大陸へ渡ったのは、まったく彼が当時南京におったがためである。

おなじこの二年の夏休みは郷里で過ごした。国武という駐在の受持巡査がよく訪ねて来て、ついに友だちのように親しくなった。その年の冬休みにも、国武巡査は私が帰ったことを知ると、すぐやって来た。私は旧知のごとく迎えて、いろいろと世間話をした。そのうち当時流行していた流行性感冒について同窓の先輩から聞いた話を披瀝した。流行性感冒はなんでも世界大戦のために殺されたたくさんの方の死体を埋めてないから、その臭気が風となってシベリアから吹いて来るためであると、聞いたそのままを国武巡査に話した。

すると休みがあけて学校に帰ったある日の授業時間中、先生から、
「台北警務課へ出頭せよ」

と伝えられた。私はどういふことかさっぱり分からないが、警務課へ出頭した。すぐ刑事室に連れて行かれ、取調べを受けた。

刑事室の一段高いところに警部が一人坐っていて、私に対し姓名住所を尋ねたのち、おまえは故郷へ帰って流行性感冒に対しデマをとばしたと、おまえの故郷の警察から高等報告が来ている、それは事実かと聞かれた。そういう話は故郷の国武巡査に世間話として話しただけで、そのほかのだれにも言っていないと私は答えた。それはおまえのつくったデマだろうと重ねて問われたが、私はとっさにうそをついて、このうわさは外出した時、大稲塚おほいなづかで聞いたと言った。警部はすぐどこで聞いたかというので、私は大稲塚をぶらぶらしていた時、前を行く二人の会話を偶然に聞いただけだという、警部はそんなばかなことはないと、大きな声で私をどなりつけた。私はここで折れてはたいへんと思ひ、たとえ打たれてもかまわない、うそを堅持しなければと覚悟した。しまいに警部はさじを投げて、私を刑事室の前の廊下に立たせた。

この間、私はいろいろと考えてみた。あくまでもこのうそを事実とがんばらなければ、事は何ともつれて、先輩まで迷惑する、責任上道義上、これを打ちあけるわけにはいかないと深く決心した。それから一時間ほどたって刑事室に呼び戻された。警部は、

「電話で照会したら、おまえが国武巡査に話したことは事実だ。もう帰ってよろしい。これから気をつけなさい」

とやさしくさとされた。私は初めて警察のおそろしさを知った。これも軽く人を信頼し、どの人もおなじように善人と見る私の性格の一大欠点であって、この欠点は祖父とおなじである。それ

を知りながら七十歳近い今日になっても持って生まれたこの癖は直らない。

いよいよ三年生になった。心理学、教育学が増えて、少しむつかしくなった。ことにこれを受け持つ八沼先生は東大の出身、若い哲学士で、なかなか良心的で教育愛に燃え、すこぶる熱心であった。どんなむつかしいことを筆記させ、学生がそれを了解しているや否やをよく検討するのであった。先生の質問に対し、できない時はつねに叱責された。また、勉強して死ぬことは先生の歓迎するところと口癖のように言って、われわれをばばましてくれた。おかげで私は図書館にしばしば通い、参考書を読むようになった。

一方、第一次世界大戦後、民族解放、民族自決というような新しい思潮が澎湃として流れて来た。学生たちはこの言葉に魅せられて、なんとなしに血潮が高鳴るのであった。しかし、真にこの新思潮に共鳴し、徹底的にこれを追求する熱意は薄い。ただ漫然とこれを受売りするだけで、いわゆる一種の流行性感冒にかかったようなものだった。これもおそらく台湾は植民地であるがゆえに、より以上の矛盾が存在していたためであろう。私自身は三年生で学科のいそがしさのため、この問題に向かって心をはせる余裕がなかった。

第二学期、私は流行性感冒にかかって二週間ほど家に帰って療養した。この流感はじつに猛烈で、台湾全島にわたっての大流行だった。当時私の父は漢方医だったので、貧しい人のために三カ月間無料で診察して、みんなに感謝された。病気が治って学校に帰れば第三学期にはいり、あつというまに第三学年は過ぎ去ってしまった。

いよいよ四年生になった。私は二年生の室長となった。室長にならない級友はいろいろな係に分けられ、役員となっていた。これら役員たちはみないっしょに役員室にいた。役員たちはひまがありすぎて、下級生にいろいろ干渉したり、いじめたりするならわしがあった。ある日私の室員の一人を呼んで共同制裁を加えていた。こんな場合、室長がもらって帰らなければ、いつまでもいじめられるのであった。それで私は室の代表として役員室へ行き、まだとなりつづけている役員に抗議した。おとなしくもらって帰ればよいのに、私は、

「君らが全体の力を借りて人をいじめるのは野蠻だ、かつ人権蹂躪である。いやしくも私たち教育者のやるべき行いではない」

と言ったら、みんなが私にくっついてかかってきたので、大いに議論したが、一人対多勢でとてもかわない。三十六計逃げるにしかず、室員をひっぱってさっさと逃げて帰った。義憤を感じて人のためにすることはいいとして、適当な策を用いず、深くものを考えないで行動に移すので失敗する、これも私の性格的欠陥の一つである。

この四年生の時の比較的大きいことがらを二つ記録してみたい。一つは日本修学旅行、一つは昇格運動であった。

第二学期、私どもは日本内地へ十八日間の修学旅行にかけた。船で往復六日、あますところは正味十二日しか見学できなかったが、ただこの十二日間で私のいままで知らなかった幾多のこととがらをめずらしく感じた。京都は二日、ここでとくに感じたことは日本女性の美しさとやさしさであった。台湾における日本女性とちがって、優越感が少しもない。人種的差別観もなく、まして「リアー」「おまえ」の意で軽蔑感をふくんでいる」と呼ぶような不遜な女性もない。若い女

静かな環境にあり、故郷の学校とあまり変わっていないかった。店仔街は砂糖の景気のよい時には、ここに農場があって、かなりにぎやかなところだった。ところが、第一次世界大戦後の不景気のため、店仔街はもとどおりの淋しいところに戻ってしまった。米屋もなければソバ屋もない。慣れない土地で独身生活の私は、すぐ途方にくれてしまった。まず、ご飯をたく米がないのには閉口した。苗粟まで小使を出して買わせても、一日はかかる。さいわい、その晩は私のための歓迎会があったので、愉快地飲んで食べて餓えをまぬかれた。さて、つぎの朝はどうしようかといういろいろ考えたすえ、とにかく、バナナでがまんしようと思悟をきめた。宴果てたのち、五湖分教場の教員二人が私の宿舎に泊った。その晩、私は二人に明日からの生活について相談をした。

翌朝、彼らは私を学生寄宿舎に案内して、寄宿生にご飯をたかせて、彼らといっしょに食べた。昼もそこで食べた。夜は同僚張君のごちそうにあずかり、二湖で一杯飲んでから、田舎の夜道を半時間もブラブラと歩いて、一人さびしく宿舎へ帰った。

つぎの朝からは自炊生活を始めた。自炊は公学校時代に六カ年の経験があったので、別に苦にはならなかった。それよりも、こんな辺鄙な田舎に来て語る友もなければ遊ぶ場所もないので、いきおい一人ぼっちでいることになり、いろいろと考えざるをえなかった。ことに政治の不平等に対しては、心の底からむらむらと不平が燃え上がってくる。さいわい四湖は新しい文化に遅れているため、政治に対して、かれこれぐちをこぼす人が少ない。不平があっても心の奥にかくして表面に現わさない。したがって、刺激がいたってない。その上、毎日天真爛漫な児童を相手にしているのです、そのいそがしさにまぎれて心の重圧をいくぶん軽くすることができた。それです時には堪えきれないさびしさを感じ、また心の奥底で、日本の植民地政策に対して憤慨することもあった。その時の自分の心境を「緑鸚鵡」に託して、つぎの詩を作った。

性慧多機振緑衣

性慧しゅゑしく機き(機知)多くして緑衣を振るう、

能言讖主羽禽稀

能く言い、主を識ること、羽禽に稀なり。

拳頭宮闕重重鎮

頭を拳ぐるに宮闕(官界生活をさす)は重々に鎖さされ、

回首隴山事事非

首を回らずに隴山(鄉村生活をさす)は事事非なり。

旧侶飄零難独舞

旧侶(ひようれ)、飄零して、独り舞い難く、

翠襟損尽欲孤飛

翠襟すゐきん損じ尽して、孤り飛ばんと欲す。

時来幸有開籠日

時来たつて幸いに籠かごを開くの日有るも、

莫作尋常青鳥帰

尋常の青鳥のごとくに帰るを作なす莫なからん。

(莫作……多くの人々は、一度立ち去った所でも、その条件が良くなったら、平気で戻って来るが、自分はそうしたくないの意)

このような気持の日々がつづくのと、どういう結果になるかは明らかである。この時、故郷の学校で勉強した老荘哲学が、私をしてその線からいくぶんか離してくれるのに役立った。そうしているうちに、政治的不平よりも人生の根本問題に対して、新しい悩みを持つようになった。それ

からは毎日宿舎にとじこもって、老荘哲学の再検討をし、進んで西洋哲学を研究してみたが、かえって人生に対しての疑問が続出して、頭のなかは混乱するばかりで、整理のしようもなくなってしまった。

ちょうどそのころの六月のある日、同期生の研究教授批評会に私が出席したさい、日本人教員と大いに論争し、ひどく相手をやったため、銅鑼の鶴田校長をおこらせたことがあった。

ことの起りはこうである。私の師範時代の同級生呉君が、雞隆公学校で地理の研究教授をした。私はその教授法に対して、啓発主義的教授法の見地から、彼の羅列的教授法は古いと批評した。教授者本人は別段異議もなかったが、そのかわり、となりの銅鑼公学校の日本人教員山下が立って、私の批評に対し批評を加えた。私も黙っていられず、すぐ反駁した。そこで、甲論乙駁というようになり、いつまでもけりがつかなかった。山下の理論が押えられきみになると、ほかの日本人教員が横から出て来て加勢した。それでも私は屈せず、一々鋭く反駁を繰り返した。しまいには銅鑼の鶴田校長が立って、私を相手に議論を始めた。この時、私は校長であろうがだれであろうが、遠慮なく自己主張をまげずに議論したため、おたがいの議論はいっそう白熱化した。ついに激した鶴田校長が、机をたたいて自説を押し通そうとした。そこで私は、真理はどこまでも真理であって、地動説を唱えたガリレオが法廷を出ながら、やはり地は動いている、と言ったように、私も同様自説をまげませんと言って、議論をうち切った。

学校に帰った翌々日、私の学校長が私を呼んで、

「第二学期、本校で郡主催の地理研究会があるから君が担任してください。」

と命令された。職務に忠実な私は、事の次第を知りつつ、そのまま引き受けた。そして自分の主張した理論にもとづいて研究し、かつ生徒をその線にそって訓練した。いよいよ研究会の開かれる日、以前私と議論した日本人教員はもちろん、各学校からたくさんの方々が来て参観してくれた。授業は生徒がよくできたので、大した馬脚も現わさず無事に終わった。

この内地（日本）と台湾の対立する教育界にあって、私はこの空気がいやであったが、ざりとあつさりやめることもできなかった。やめたら自分に適当な働く場所がないからである。商売をする能力はなし、百姓になり下る決心もつかない。したがって、ずるずると成行きにまかせるほかはなかった。

四湖はいたって辺鄙なところであって、広い学校区域内に日本人はたった三家族しかいなかった。学校の校長と主席、あとの一人は派出所の警官である。

校長は学歴を持たない高等小学出身で、たいへんおとなしい検定上りの教員であった。主席は中学校出身、二人とも師範出身ではない。主席は日本色が相当強いが、要領のいい人で、私に対しては、そのような態度は見せなかった。よそに出ないで、四湖にいるかぎり、私は割合に落ちついて、教育に従事することができた。それでも私は、日本人に対しては反発的であった。

ある日、おとなしい校長が私の書いた統計書に対し、出席率の計算がちがっていると指摘した。私は書類を取り戻して、さらにソロバンで検算したが一つもまちがっていない。そこで校長に対し、

「絶対にまちがっていません」

と言って、荒々しい態度でつき返した。校長は少しも気かけず、ゆっくりと私の書類をさらに何回も複算したが、私の計算とは合わなかった。校長はついにソロバンを持って来て、

「何回もはじいて見たが、やはり合わない。どこがちがったのか、ちょっと教えてくれないか」と私に言った。

はっとわれにかえった私は、自分の修養の足りなさに気がついて、はずかしい思いをした。私は今度はいいねいにゆっくりと計算の九九を唱えながらはじいて見せると、校長は、「なるほど、桁がちがっていたのか、どうもありがとう」

とていねいに礼を言った。このように温和な校長なので、二カ年いっしょだったが、ほとんどいざこざがなかった。私は職業上、割合に落ちついているつもりでも、精神状態はなんとなく落ちつかなかった。若さのためか、つねにある物足りなさを感じて悩ましかった。

四湖に來たその翌年だった。このわびしい生活のなかへ、ある日、ひょっこり女の人から一通の手紙が来た。私の胸はどきどきした。開けて見れば、二年前私に手紙をくれた女学生からだ。彼女はすでに卒業して女教員になっていた。時候見舞いやら、彼女の近況やら、内容は男の友だちとおなじ程度のおさざりしたものだった。私はうれしくなって、すぐ返事を書いて出した。これを機会に二人の文通が始まった。文通といっても、現代のラブレターとはちがって、おたがいにいたってまじめな手紙だった。それでも、私はその手紙をよむことで、一人暮しのさびしさを慰められた。時には、彼女の返事を待ち遠しく思った。が、私は彼女と結婚する気持はなかった。

結婚について、私は官吏ならば官にふさわしい妻を、百姓なら田舎娘がよい、と考えていた。自分のような性格では長く日本人のもとで働くことはむづかしい。早晚教育界から去らなければならぬだろう。退職すればいやでも家にも帰らなければならぬ。とすると、彼女のような弱々しい女では到底だめだ。私の家は二十七、八人もの大家族で、これらの人に食べさせる蔬菜はみんな女の手で栽培しなければならぬ。毎日の食事も輪番で、ご飯たきから豚の飼育、時には甘藷掘りに出て働くこともある。よほど健康でしっかりした娘でない、この仕事に堪えられない。こういう家庭事情があるので、彼女との結婚はとても望めるものではないと考えていた。このような矛盾があるにもかかわらず、やはり文通をつづけていた。いまから考えると、彼女に對してすまなかつたと思う。

第二学期、私は選ばれて、三カ月間の訓導講習会に参加した。ここを出れば、丙種訓導から乙種訓導に昇格できるのであった。なぜか私にも分らないが、講習期間中の住所を彼女に知らせなかった。そのために、彼女との文通は自然にとぎれてしまった。

その時の休みを利用して、故郷の家に帰った。さっそく、父が私の嫁さんの候補者を見つけたと、しきりに結婚をすすめた。そして、むりやり私を連れてその娘を見に隣村へ行った。媒人の取計いで私たちの十メートル先をゆっくり歩いてる美人を、ちらと一目見ただけだった。どういふ娘やら見当がつかない。したがって意見もない。

ところが父は、私の意見の有無を問わず、ひそかに交渉をすすめていた。私が冬休みに帰ったら、すぐ正式に見合いをせよという。しかも見合いの期日まで決めてしまつてあつた。こう事が

運ばれてしまった以上、父の立場も、相手側の面子も考慮しなければならぬ。それに、その娘の評判はいたってよいので、親戚や友だちもしきりに勧めた。ことに、私の従姉はその娘の近くに住み、その上、従姉の娘と学校で同窓だったので、その娘をたいへん賞めそやすので、とにかく一応正式に見合いをすることに腹を決めた。

当時、正式の見合いはほとんど定婚の習わしで、特別のことが起こらないかぎり不成立に終わることがなかった。そういうしきたりのあることを知りながら、私は見合いに行つた。このように、私には主張があるようで実はないようなもので、かつて百姓になるなら百姓の妻にふさわしい人をもらうことを考えたことがあるのに、いざという場合、その点を少しも考慮に入れていなかった。

さて、見合いの当日、父をはじめ、母、二人の兄、姉および私と六人づれで娘の家に行つた。娘は媒酌人の介添えで、父から母、兄、姉という順でお茶を出してくれた。最後の私の前に来た時、いままで下ばかり見ていた娘が頭を上げて、眼をぱつと開いて私を見つめた。非常に純な清らかな眼だった。顔は卵型で色の白い中肉中背の娘だった。しばらくすると、娘がお茶を飲んだあとの茶碗を集めに来た。さらに煙草を一回出してくれた。都合三回見たわけで、その結果をすぐ決めなければならぬので、父はみんなを誘い、別室で協議した。父はもう大賛成で、賞める以外に言葉がない。母にはこれという意見もなく、二人の兄や姉もたいへん美しい人だと賞めて、「先生娘」（教師夫人）にふさわしいと言つて賛成、ご本人の私ははっきりにした意見もなく、皆の者にまかせるほかはなかった。

帰途、私はいままで文通していた女教員を思い出してみたが、あの人にくらべて今日の娘の方がきれいだと思つた。また、かつて兄嫁の紹介してくれた娘も思い出してみた。その娘は兄嫁といっしょに笑いながら道を歩いてしたが、その時、笑つた娘の口が特別大きく感じられて、いや気がしたので、その縁談はそれで終わってしまったのだつた。いろいろ考えてみたが、要するに、私は人生のいちばん大事な結婚でも、元来の主張を忘れて、すべて運を天にまかせた。これも私の煮えきらない、かくれた性格の弱さの一つであらう。

六 平凡にしておだやかな日々

講習会から帰つて翌年の四月、私は五湖分教場勤務となつた。理由はあとで分かつたが、要するに校長は内心私をころよく思つていなかったが、表面だけ一応おだやかによそおつていたので、二カ年いた四湖は新しい文化から隔離されたところなので、私の青春の血を湧かせる何者もなかった。ただ、例外として通霄から校医の羅先生が一学期に一回来て児童の身体検査をしたあと私の宿舎を訪ねて来て、政治や文化についていろいろと意見を交換したことが数回あった。羅校医は文化協会員であつて、文化運動に熱心だった。四湖に来るたびに私としゃべつては歸りを忘れ、轎夫から何回となく催促をうけてからやつと腰をあげ、別れを惜しみつつ、しぶしぶと歸つていく姿は、四十数年を過ぎたいまでもなおあざやかに思い出される。

五湖分教場は四湖の本校よりもいっそうのんきなところで、主任は本島人で温厚着実な人だった。その他の同僚もみな本島人で、気がねするものがないので、私は自由気ままに暮らすことができた。全校五学級で、授業が終われば通勤の教員はさっさと家に帰り、主任は好きな魚釣りに行き、あとは私一人で話をする相手もなかった。このような新しい文化からさらに離れた孤独のうちに、第一学期は終わり、夏休みにはいったので、私は父母の待つ故郷へ帰った。

帰った翌日、外出途中の町なかで、かつて文通をしていた女教員とばったり出会った。町のかなので彼女はものも言わず、かねてから用意してあったらしいものを、手早く私に渡して逃げるようにして立ち去っていった。

家に帰ってからこっそりと包みを開けてみたら、手紙と編物が二つはいつていた。手紙には、あなたがいよいよ結婚なさるそうでたいへんめでたいということや、編物はそのお祝いのために彼女自身が編んだものだということが、書いてあった。編物は時計入れのサックとハンコ入れだった。絹糸で編んだもので、つやつやとして美しく、ハイカラな英文字が入っていた。記念として大切にしまっておいたのだが、長い人生の行路に転々と三十回も引越しをしたため、ついそれをなくしてしまった。なんとなく惜しい気がする。

結婚前、ぜひ一度彼女と会ってゆっくり語り合ってみたかったが、気の弱い私はいろいろなことを心配しすぎて、積極的に訪問することはもちろん、会う約束の手紙さえ出せなかった。それほどばかりでなく、一方自分の許嫁に対しても古い習慣や伝統にこだわって、彼女の家を訪れてみる勇氣も持ち合わせなかった。もちろん、そのころ新しい学問をした人で、結婚前に、伝統を破って許嫁を訪れて親しく話をする人はいないわけでもなかった。それでも私は人のうわさを恐れて実行できなかった。現代の人から考えればまことに非人情的でおかしく思われるであろうが、当時としてはむしろそれが礼儀であった。このことから見ても、私はどちらかといえば保守的で、行動派ではなかった。

この年の夏休みに、珍しく南部から同窓の章君が遊びに来た。私は新埔まで出て彼を迎え、町や廟や学校を案内して見せた。学校では若い人たちがテニスをしていたので、私も二人もラケットを握って参加した。非常に暑い日だった。私は帽子もかぶらずに激しい太陽に照らされたため、翌日は発熱してしまった。南部に帰る章君を門前まで見送っただけで、あとはそのままどっど寝こんでしまった。熱は四十度近く、どんな薬を飲んでも一向にきかなかった。それが四十日もつづいた。一度は危機におちいったらしく、私がうとうとしてるそばで、長兄と次兄とのひそひそ話がかすかに聞こえてきた。

「今夜中もつかしらん」

私はこれ聞いていよいよ最後かなと思った。しかし、悲しくはなかった。ひょっこり、許嫁のこと、文通をした女教員のこと、が頭に浮かんだが、それもつかのまだった。ただ胸苦しく呼吸が困難だった。結婚後の妻の話では、当時、私の大病を聞いて見舞いに来たかったが、父母に自分の気持を打ちあけることができなかったという。彼女も私と同様、むかしの礼を守る古い女だった。

四十日もつづいた無名熱の死魔からやっと逃れて、病床から離れた時は、もう夏休みも終わっ

ていた。私は病弱の身体で、ふたたび学校にもどって教壇に立った。

遠く故郷を離れて病後の私の世話をする人がいないというので、両親が心配して、私の健康が十分回復していないにもかかわらず、九月三十日の吉日をえらんで結婚させられた。妻は私より六歳若かった。百姓の娘ではあるが、野良仕事にはまったく向かない女で、毎日家のなかで針仕事ばかりしていたので、色も白く手の指も細かった。この妻の様子からして、私のいままで考えていた百姓になる決心もぐらつてしまった。このように弱々しい女では、百姓どころか大家族のご飯さえ炊けないだろう。妻の話によっても、かつてある大金持の息子から求婚されたことがあったが、彼女には大家族のなかで働く自信がないため、その縁談は断ったという。私のいままで編んだ人生論の一角がくずれてしまったので、さらに考えなおす必要があるようになった。しかし、いくら考えても商売はできそうもないし、百姓もできないことになった現在では、いままでの教員生活をつづけていく以外道はないようだ。さいわい分教場には日本人教員は一人もないので、まじめに働けばだれにもはばかる必要がない。やっとなこまで考えて、自分の氣持をおちつかせた。

結婚後、ときたま静かな夜、眠れない夜などには、民族自決とか、デモクラシーとか、六三問題について考えないわけではなかった。が、いつも考えたすえの結論は決まっていた。日本の大きな力に対して個人の力なんて零に等しい、抵抗すればするほど破滅の道をたどるばかりである。生活能力のない妻、ただ夫について生きる道しか知らない妻、いまさらそれを見棄てることはできない。男としての責任がある。考えては打ち消し、打ち消してはまた考える繰返しのうち、一年はたち、二年もたちまち過ぎ去ってしまった。

この間、人生の夢もなければ理想もない、その日その日を追って暮らすだけで、独身時代のような悩ましいこともない、まことに平凡にしておだやかな毎日だった。日曜日になると、妻と女教員をつれて竜眼狩りや、蕃石榴狩りに楽しい一日を過ごしたこともあった。波瀾なき人生、欲のない人生、無為平凡ではあったが、いま思い出してもあの時が一番幸福であったように思われる。

ところがこのおだやかな生活は、いつまでもつづかなかった。たまたま州主催の教育研究会で発表した私の会話教授研究法が、新しく赴任して来た本校の校長に認められて、二カ年半いた分教場から、ふたたび本校に呼びもとされた。そのころ、本校では新しく本島人の師範卒が来て主席となっていたため、職員間でのごたごたが絶えなかつたので、その融和的政策として私を呼びもどしたのだった。

この校長は比較的穩健で、日本の色彩が少なく、その上早稲田大学で二年ほど勉強したこともあり、教養も深く、私とは話がよく合った。この校長も一年半いっしょだったが、その後榮転してしまった。私の家族とのつき合いもよかつた。よく私にいろいろなことを相談したものだ。た。

ある日、彼のひとり息子が病気になる高熱を出した。彼は私に相談した。私はいろいろ考えたすえ、西洋医のいない田舎では漢方薬を使うほかはない。それで犀角を飲ませたらと彼に勧めた。彼はさっそく犀角を買ってきて病人に飲ませた。熱は一時下がった。ところが翌日になる

と、また熱が上がってきた。その時、彼の妻君が私に向かって、犀角を飲んだのでかえって熱が上がったのではないかと聞いた。私はあつげにとられてものが言えなかった。

心のなかでいくら仲がよくても、蕃子（日本人のこと）はやはり蕃子であつて自分たちとはちがう。もしも本島人であつたら、犀角を飲んだために反対に熱が上がると疑うバカはいない。ここに民族と民族とのへだたりがあり、習慣と伝統がちがうために考え方もちがつてくる。これは一、二年のつき合いでは理解できるものではないと思つた。万一彼の息子の病状が悪くなつたらたいへんと思ひ、私は彼に息子を入院させるように勧めた。彼はすぐ息子を轎に乗せて苗栗まで運んで入院させたので、私の犀角を勧めた責任は一応解消できた。おかげでその後、私は日本人に対してそのような純真さをなくしてしまつた。

この校長の転出したあと、新任の校長は獅潭からきた。日本人が獅潭からくるとすればよほど当局にいらされたもので、日本人としては変り者であつた。

彼は甲種訓導でありながら、つぎからつぎへと左遷されて、ついに交通の一番不便な獅潭へと左遷されてきたのであつた。左遷の原因は要領よくやれないためであつた。たとえば当局から、本島人の子弟に対してとくに農業教育を重視せよと命じられても、彼は学則のとおりによればよいとがんばる。父兄側から入学準備教育をしてくれと頼まれても、彼はそれに応じない。それで当局からも地方民からも受けが悪かつた。

彼は赴任してくると早々に、地方民が校庭を大道のように使用しているのを見て、ただちに有刺鉄線を張りめぐらしてしまつた。夜間、よそから来た通行人がそれを知らずに通りかかると、大

けがをしてしまつた。地方民は非難してさわいだだが、彼は一向おかまいなしであつた。村の青年が憤激して、ある夜こっそりベンチで有刺鉄線をズタズタに切つてしまつた。彼はそれに屈せず、今度は竹の垣根をつくつた。青年たちも負けてはいず、今度は刀で垣根を切りたおしてしまつた。ついに青年たちは警察に捕えられ、処罰されたので、いよいよ地方民と校長は正面衝突してしまつた。ところが、竹の垣根がいつのまにか、一本引き抜かれ、二本引き抜かれて、ところどころに大きな穴ができてしまつた。彼はこれでひるむような男ではない。竹の垣根のかわりに、城壁のような土塀を作つて通行をくい止めた。教育的見地から見れば決して悪いことではないが、彼の蛮勇のために父兄や地方民とまったく対立してしまつて、児童教育に及ぼす弊が少なくなかつた。彼は孤立独行ではあるが、人間としてはある種の親しみがあつた。私の前でも平気で日本人の悪口を言う。彼は処世術が下手であつて、決して悪人ではない。この風変りな校長とは四年間いっしょだつた。

月日は移つて私が三十三歳の年、州衛生課で行なわれた教員身体検査の結果、私のからだから結核菌が発見されたので、休職しなければならなくなつた。そのころの私は、見たところ非常に健康で、自覚症状はなかつたので、自分でさえ信じられなかつた。

地方や父兄のあいだでは、当局が私をやめさせるための口実と見ていた。私はさつそく、本島人の何人かの医者に見てもらつたが、やはり誤診と見立てた。さらにわざわざ台北まで出て診察をうけた結果、赤十字社医院では無病と診断、台北医院では肺浸潤であつて執務にさしつかえないという証明書をもらつて歸つた。

初めは、それによって抵抗しようと思ったが、その後よくよく冷静に考えた結果、万一衛生課の診断がたしかとすれば、そのまま職についていては一生を台なしにする恐れがある。このさい、むしろ善意に解釈して、長いあいだ働いたので、ここでしばらく休むのも行く先の人生にとって有意義なこともかもしれないと考えなおし、休職することにした。いまから考えれば、せちがらい世のなかに、俸給の三分の一をもらって悠々と一年間遊んで暮らせる身分なのだから、不服を言うどころか、むしろありがたく思わなければならなかったのだ。それなのに、そのころの私はもちろん、地方民までが不服だった。

これも、あるいはゆがめられた植民地統治によって作りだされた民心のゆがみといえるかもしれない。日本人のすることなすこと、何事につけてもよく思わない。統治者と被統治者との心理は、つねに姑と嫁との関係のごとく正常ではなかった。

私は慎重に考えたすえ、本島人側の不平に耳をかさず、一言の抗議も発せず、おとなしく休職した。

休職中、悠々と遊んでいるうちに、子供を生まなかった妻が思いがけず男の子を生んで、みんなを喜ばせた。

つぎの年、ふたたび州衛生課で行なった身体検査の結果では結核菌が出なかったので、許されて五湖公学校に復職できた。

ここの校長は研究科出身だった。研究科を出れば中等教員になる資格をもっているので、校長の鼻息は荒かった。要領のよい校長で、いつも対外関係に留意し、権謀術策にたけ自己の出世に汲々としていた。教育者というよりむしろ政治家といった方が適当だった。

私は病後で健康がまだ十分回復していなかったにもかかわらず、もつとも忙しい五、六年の複式を担任させられた。同僚のなかには本島人の若い甲種指導が二人もいたのに、乙種指導である私に受け持たせる理由はない。その上、郡主催の研究授業もしなければならぬ学級である。しかし、負けずぎらいの私はこれを引き受けた。

五、六年の複式も郡主催の研究授業も別におどろかなかったが、この校長の教育方針には少なからず閉口した。全職員を動員して農業教育に従事させたのである。農業の担当は、私のかわりに教員心得を起用し、校長みずから先頭に立って全職員を農場にかり出して働かせた。農業偏重教育に対し不平を言う私も、いやいやながら毎日農場に出て作業をした。まるで、囚人作業に似た気持であった。

蔬菜栽培から養鶏、養豚はもちろん、堆肥舎まで児童および職員の手によって建てられた。児童の作った深葱は二尺もあって、品評会に出して一等賞をもらったこともあった。養豚の肥育率は月平均四十斤であった。これらの作業には五、六年の児童を使うので私としては非常に不満であったが、どうすることもできなかった。ときどき私が児童を集めて故意に課外の指導をしていると、老獪な校長はみずから教室に来て、

「もう課外ですから、どうぞ児童を貸してください」と言うので、私もどうすることもできなかった。

当時、日本の植民地政策として、工業は日本内地、農業は台湾の計画のもとに行なわれたの

で、この校長の迎合教育は大いに当たり、まもなく那視学に拔擢された。

幸か不幸か、がまんがまんを重ねた私の癩癩の起こらないうちのことだった。しかし、一度正面衝突をしようとしたことがあったが、彼はそれを軽く受け流してしまったので、大事に至らなかった。

ある日、職員朝会で彼は私の書いた学校日誌を見て、あざけるような口ぶりで、

「古君、こんな石があるか、石榴の石は木ヘンでなければならぬ」

と鬼の首でもとったように得意であった。

私はすぐ漢和辞典を出してひいて見た。木ヘンの柘は俗字と書いてあった。

私はその辞典を校長の前につき出して、

「よく見てください。このとおり、石榴の石は木ヘンのないのが正しいです」

彼は大胆に笑いながら言った、

「この辞典は安物なんですよ」

私はこれを聞いてムツとしたので、

「おそらく校長先生の勉強した研究科には辞典さえなかったのでしょうか」

と皮肉った後、おもむろに、

「校長先生、私一人を誤らせることは大したことではありません。ですが、私の背後にはたくさん生徒のおることを考えてみてください。こういうことは教育上はなほだよろしくないとはいえず」

と抗議をしたら、彼はさりげなく大口を開けてハッハッと笑いながら、

「さっきのは冗談だ、すまなかった。そんなに深刻に考えなくともよいでしょう」

と私に近づいて、軽く肩をたたきながらあやまった。

あとで静かに考えてみたが、彼は私より役者としてはるかに上だった。

この校長はうそでも平気でいえる男で、彼の有名な逸話は前々から聞かされていた。彼がかつて六年生を連れて南部旅行に行った時の話である。出発の前、生徒に向かって高雄の寿山に登れば鯨がうようよ見えると言った。ところが期待に胸をはずませて寿山に登った生徒たちにはなにも見えないので、不審に思っって校長に聞いたら、彼は今日は天候がよくないので出て来ないのだろうと、平気な顔で答えたという。

この校長の栄転したあとには、農業補習学校から日本人が来てその欠を補なった。その後、一学級ふえたため女学校を出たばかりの大和撫子が赴任してきた。日本人二人、台湾人四人のいたって小さな学校、私のほかの台湾人教員はみな通勤していた。私と校長とはほとんど往来がなかったが、そのかわり日本人教員はほとんど毎晩のように私の家にたずねて来た。彼女は文学好きで小説狂、来るたびに小説の話をした。若く美しい女性で、天真爛漫、なんでも素直に言うので、つい私もその文学熱に動かされて小説を読むようになった。

ある日、彼女との話のはずみで、小説は人の作ったもので、書こうと思えば私でも書けると言ったので、彼女は大いに私をからかって、書けるなら書いてみなさいとけしかけた。そこで負けずぎらいの私は、ここでペソをかいては男の活券にかかわると思ひ、ついに小説を書いてみよう

と原稿紙に筆をそめた。

二、三日たって「くらげ」という短篇を書き上げて、彼女に見せた。彼女はたいへん感心して、雑誌社に投稿しなさいとしきりに勧めるので、こころみに、それを『台湾新文学』^(注二二)に投稿したら、思いがけなくすぐ採用してくれた。それから、彼女のはげましによって、つぎつぎと書いては発表し、小説書きに熱中した。

彼女は本島人に対して好感を持っていたので、父兄のあいだでも評判がよかった。そのうち、ある本島人教員とのあいだに縁談ばなしが持ち上がったことがあった。彼女もその縁談には異存がなかった。ところが、たまたまこれを耳にした郡視学がまっかになって怒り出して、彼女をすぐ新竹海岸の学校に転動させて、その縁談をぶちこわしてしまった。おかげで私の文学熱も彼女が去るとともに気が抜けて、どこかへ消えてしまった。

「一視同仁、内台融和、内台共婚」とスローガンこそ立派ではあるが、中身を割ってみれば、為政者はかげでつねに内台融和を阻止していた。これは民族というせまい見解からきたもので、彼ら日本人為政者は、大和の血は漢民族よりもすぐれているとうぬぼれていたからである。

七 郡視学になぐられて教員を辞職

日本人女教員といっしょのあいだ、私は彼女の文学熱にあおられて、『台湾新文学』という雑誌の小説懸賞募集に応じて「どぶの鯉」を投稿し、第一席をかちえたことがあった。しかし、その時はすでに齡^{なり}三十七、おのを省みてまったく日暮れて道遠しという感じで、日本文をこなすにはさらに十年の勉強がいる。学生時代、数学や物理に対しては自信があったが、日本文の綴り方では「甲」をもらったおぼえはない。どう考えても文士にはなれそうもない。

要するに私の文学熱は受動的であって、小説作りは一時の出来心で、いたずらにすぎなかった。一方『台湾新文学』は発禁に発禁を重ねて財政が困難となり、ついに停刊になってしまった。発表する機関もなくなり、文学を志すことはいっそう困難になった。

その上、私は新竹郡でいちばん大きな関西公学校の主席となって転動したので、急に身辺は忙しくなり、文学どころのさわぎではなくなった。関西公学校は本校二十五学級のほか、分教場六学級、農業補習学校二学級があり、人事関係は複雑で、その上、内台教員の対立があり、そのための暗闘もはなはだしかった。ことに内台教員の人数がおなじで、また実力もほとんど差がない。

前例によれば、このような大きい学校の本島人主席は、日本人教員に向かって平身低頭で当たらなければ動まらないのだった。わがまま一ぱいに育ってきた私は、人に対して平身低頭、要領よくやれる性質ではない。

着任早々、四湖や五湖とちがって日本的色彩の濃いことに一驚した。校長室にはいれば、職員名札の順列に目をひかれた。日本人教員はことごとく優先的に上段にかけてあった。

これを見た瞬間、私の心中はおだやかでなかった。このような時、見かけによらず性格の弱い

中はわれわれ学生を相手に気軽に話しかける。

「張さんは台湾の美男子だわ。とてもかわいいわよ」

と言って、第一班の張君の桜色のほほを撫でてみる無邪気な女中さえいた。私の見た京都の女性
は美しく、その行動のゆかしさと言葉の上品さにはまったく感動した。彼女たちの優しさが二十
歳になったばかりの、うぶな私の気持を揺さぶるのだった。そして日本人に対する考えの一部を
改めなければならぬような気持になった。

東京では高砂寮に三日間滞在した。そこで台湾からの留学生たちの歓迎の招待を受けた。その
歓迎会の席上で、名は忘れたが、爵位を持っていた貴族の寮長がいた、彼がデモクラシーとい
う題目で堂々と講演したのにはびっくりした。日本人のなかにこんな人がいるのかと思っ
て感心した。その後、台湾の留學生が入れかわり立ちかわり、つぎつぎと演説した。悲憤慷慨、政治問
題、社会問題、私どものかつて聞いたことのない問題ばかりで、幼稚な私の頭はあまりび
っくりしたために、それがよいかわるいのか批評する力もなかった。もちろん、それに共鳴し左傾す
る気持は起こらなかったが、そのかわりどこかに一理があるように思っ
て大きなショックを受けた。この旅行ではそのほかいろいろの收穫があつたが、私の人生に大きな影響もないので省略す
る。

日本旅行から帰った我々は、急にデモクラシーという新思潮に対して、血潮がみなぎってき
た。私も図書館でそれに関する書籍をあさって読んだ。そのうちにだれとなく卒業後の待遇問題
についてささやくようになった。ある日、晩餐の席上でだれか忘れたが、おなじ師範学校を出
て、日本人なるがゆえに教諭となり、我々台湾人は訓導になるというのは不当で、この差別はデ
モクラシーの原則に反していると叫んだ。みなそれに対し、激烈な拍手を送った。そのあとをつ
いで、入れかわり立ちかわり演説者が続々と出た。私も出て話をしたが、なにを言ったやらいま
はおぼえていない。

それからは毎晩、四年生はおなじことを繰り返し、とうとう昇格運動を進めることに意見が一
致した。実行委員を選び、そして一方卒業生と呼応して運動しなければ目的を貫徹することはむ
つかしいので、冬休みの帰郷を利用して卒業生と連絡の上実行することに決めた。ところが、年
が明けるとともに当局の方で昇格法令を発表した。それによると訓導が昇格されて丙種教諭とな
り、日本人は甲種教諭となった。それでわれわれの運動目的もその必要がなくなり、そのまま流
れてしまった。これも時の校長太田秀穂先生のおかげで、この校長がいちばん台湾人に同情し、
理解してくれていたもので、どの学生も校長を尊敬していた。

ところが、私どもの卒業したその年、太田校長が内地出張で不在中、北師事件が起きた。事件
は師範学校の学生が左側通行のことで警察と衝突して、警察に石を投げ南署長を包囲したので、
署長が抜剣して学生を恐喝したというさわざであった。校長不在のため、たくさんの学生が検挙
されて投獄された。校長は日本から帰ってこのことを知り、非常に憤慨したがどうにもならな
い。そのかわり署長の抜剣の不当を指摘して、喧嘩両成敗、署長も校長も同時に引責辞職した。
この太田校長が台湾教育界から去ったことはじつに惜しいことであった。当時、「花は相思樹、
人は警察官」という流行語があつたが、それは「花は桜木、人は武士」をもじって、警察の横暴

ぶりを言いあらわしたものであった。

話はずもとに戻り、いよいよ三学期にはいった。陳とか劉とか名乗る姓の人はたくさんいるので、彼らは同姓会を組織していた。これにならって私の同姓の会もできた。これは民族自決という新しい思潮にもとづいて組織したのではない。同姓は同族と見なす幾千年来の習慣であって、同姓といえは兄弟姉妹のごとく感ずるのである。当時、若い男女はいっしょに歩いてはいけない時代にもかかわらず、同姓だけはそれを許されていた。異姓同士だったら、いっしょに一回歩いただけでその娘はきずものともみなされてしまう。学校のなかでたくさんの同姓会が組織されたが、これは漢民族の伝統から自然に生まれた団結である。

卒業式は大正九年三月二十五日、私は新しい希望に燃えて校門を出た。ふり返ってみれば四カ年は案外早く過ぎたように感じた。福建人の同級生何人かとは非常に親しかったが、やはり、同級の客家人十人、この人たちとは無条件に親しかった。この十人は一人残らず卒業できた。校門のわきの築山でとった記念写真はまだ私の手元に残っているが、その半数五人はすでに鬼籍にはいつてしまった。ああ早いな、卒業以来すでに四十六星霜をへた。希望に燃えて卒業した、当時の幾多青年の輝かしい顔つきさえおぼえているのに――

四 故郷の分教場で人生問題に悩む

私は卒業と同時に故郷の分教場（分校）に勤務した。分教場は五学年四学級で、四年と五年は複式で日本人の主任が担当し、私は一年生を受け持っていた。ほかに教員心得が二人、二人とも十七、八歳の青年で公学校を卒業したばかりだった。私の故郷は七「保」（村）あって人口約八千人、中等学校を卒業した者は私が初めてなので、みんなにめずらしがられていた。当時、日本は威服政策を用い、官吏の威厳を保つために、任官している者に対し金すじのはいった帽子をかぶらせていた。私もこの文官帽をかぶり、短剣を下げていたので、一挙手一投足すべてみんなの注意の的まじとなってしまうた。

その上、日本当局は台湾人の民族意識をなくすために、台湾人の古い習慣や伝統を打ち破るための政策をとっていた。それで台湾人の古い読書人は日本の政策に苦しみ、かつ日本語を知らなため、日本人との接触すらおそれていた。この間、自然私は重く見られ、ことあるたびに私を引き出して通訳させるのであった。しかし、私はただ日本語を知っているだけで、一介の書生に過ぎない。それにもかかわらず村の人からはよくいろいろの相談を受けた。

分教場の主任は、勉強家でまじめな教育者であった。私が赴任してから一カ月もたたないある日、主任は新竹へ行ってくると言ったきり帰って来ない。四日ほどたたって本校の校長から、主任

は病気で新竹の病院に入院したと言ってきた。どの病院にはいったとも言ってくれなかった。主任も主任でその後手紙もくれない。私も私でどうせ病気が直ったら帰ってくるものと思って、意にも介せずそのまま成行きに任せているうちに、私は主任の病気を忘れてしまって、見舞いにも行かなかった。いまから考えると実に非人情なことをしてしまった。当時、私は二十歳、文字通りの青二才だった。あえてこの非人情をしようとしたのではない。要するに世間知らずの無知であつたからである。

もう一つここに見逃してはならない大きな原因は、要するに日本人は日本人で、台湾人は台湾人というわけで、そこに大きな溝があつて、自然二つの社会が隔離されていた。主任の病気は主任の個人問題であつて公事ではないから、校長としては、主任代理の私に知らせる必要がないわけである。もしも私が日本人であつたらきつと連絡があつたにちがいない。それに分教場は本校と一里半も離れた交通不便なところにあつて、徒歩で往復するより方法はなかつた。であるから校長は主任の留守を私に任せたり一度も巡視に来なかつた。

私はほかの二人といっしょに一生懸命やり、教育のほかほかにも考えなかつた。毎日朝から夕方まで、補習教育や劣等児の特別指導もやり、一年生の授業のほかに、主任の受け持っていた四年、五年をも兼任した。このように私は学校経営に一心をささげていたので、つい主任の存在さえ忘れてしまつていた。補習教育に熱心のみならず、帰りが遅くなつて主任のいない独身宿舎に泊ることもあつた。主任の本棚には倫理、哲学に関する本がたくさんあつたので、この種の書物の好きな私は、これ幸いとちょっと拝借して、むさぼるように読んだ。そのうちに主任が中等教員

修身科の検定試験を受ける準備をしていることが分かり感心した。いよいよ夏休みにはいり、帰省の時、私は主任の書籍のうち倫理学、哲学に関する本を二十冊ほど家に持ち帰つて読みふけた。

ところが、八月のある日、学校の給仕があわてて私の家に飛んで来て、主任の近親者が学校に来て「主任が死んだ」と言つて荷物を取りに来たという。まったく寝耳に水だった。さっそく主任の書籍を返しに学校にかけつけたら、もう荷物を取りまとめ荷造りして帰る仕度をしていた。

私が主任の書籍を返すといつたら、そんなものはいらないからあなたにあげるといつて、さらに二、三冊を選んで私にくれた。

主任は肺結核で倒れたのだったが、単身で台湾に来たのでこれという身寄りもなく、当時、結核の薬が発達していなかつたので気の毒な最後であつた。私はいまでもそれを思い出すたびに心が痛む。学校は夏休みであつたとはいえ、主任の死に対してなんの通知もなかつた。私は主任の書籍をもらったものの、気持が悪いので何回も太陽にさらしてから、毎日むさぼり読んだ。そのために町でいちばん大きな祭りである「迎花灯」さえ見に行かなかつた。おかげでいくぶんか系統のある知識を得たわけで、その後も引きつづき、それに関する本を注文して読んだ。なかならず老荘哲学がいちばん好きだつた。

主任の死んだあと、第二学期が始まると湖口から教員心得が一人転勤してきてその欠を補い、私は主任となつて四年、五年の複式を受け持つことになつた。五年の生徒のうちには私より一歳年下で妻や子供を持っている者もいた。この五年生は四年生といっしょに入学したが、成績がよ

いため特別昇級した者たちで事実には四年しか勉強していなかった。私の故郷は七保人口八千人ぐらゐで区制になっていたが、交通不便のために公学校がなかった。この分教場は四年前に創立されたもので、私がこの分教場に赴任したその年に、行政改革のために区制は廃止され、「街」に併合されてしまった。

しかし、区制が廃止されても、村の習慣上やはり分教場を文化の中心にしていた。祝祭日ももちろん、なにか会があるたびに分教場を利用して、父兄や有志が集まるのであった。そのたびごとに私が中心になっていた。私は卒業したばかりで先輩もなく経験もない、したがって万事気をつけて自重しなければならぬ立場にあった。式の時にはオルガンを弾き、教育勅語も読まなければならず、一人二役、三役もした。そして、その年の秋には盛大な学芸会と大運動会を開催して村の人々を喜ばせた。運動会は村の青年と連合し、七保対抗リレー競走をさせて、父兄や有志の手に汗を握らせた。

一方第一次世界大戦後、民族自決、自由民主主義の思潮は澎湃としてこの孤島にも押し寄せ、本島人知識階級の血を躍らせた。東京で『台湾青年』という雑誌が発刊されて、それが私の分教場にも送られてきた。私はそれを読んで少なからず共鳴するところがあった。いわゆる六三問題の理不尽を意識し、差別待遇と不平等に対し、とくに意識するようになった。^(注一〇)(明治二十九年三月三十日、日本政府は、法律第六三号を公布し、台湾総督は、その管轄区域内で法律とおなじ効力を持つ「律令」を發布することができるとした。これがいわゆる六三法で、台湾の一切の悪法、たとえば匪徒刑罰令、阿片吸飲取締令、浮浪者取締令、保安規律、保甲連座法などは、いず

れもこれであった)

それと同時に私は『改造』という雑誌を愛読するようになり、自由平等を欲求する考えがますます熾烈になって来た。しかし、辺鄙な分教場では中等教育を受けたのは私だけで、ほかの人は公学校を卒業したばかりで、語る友もなかった。そのかわり、主任からもらった倫理、哲学書のほかに思想問題に関する書籍を集めて一生懸命に読んだ。

そうしているうちに、人生に対する煩悶が頭をもたげてきて、自由平等の要求よりも人生問題にいろいろな疑問を抱くようになってきた。そして逃避的思想と懐疑的思想がより以上に私を支配し、そのため当時台湾で結成された文化協会^(注一一)へは入らなかつた。しかし、まったく無関心ではなく、積極的に動けない私に、もしもだれかが誘ったらおそろく入っていたかもしれない。幸か不幸か、あまりに辺鄙なところで書籍以外の友がなかったため、思想的に一人ぼっちになってしまった。そこへ老荘の哲学思想がいつのまにか私の頭のなかにはいつてきて私の神経を麻痺させた。しかし、それによって安心立命ができたわけではなく、老荘哲学も一時の阿片に過ぎなかつた。神経が少し麻痺されても、私の若い血はつねにうごめこうとしていた。なにぶんの田舎住いで、これという刺激もなく、いつまでも表面に躍り出す機会もないまま、意識のなかにだけはいつも潜伏していた。それで、もっぱら教育に力を入れてしばらくはわれを忘れることができた。

翌年、分教場が独立して公学校となった。校長は日本人で、さらに准訓導が一人増えた。私は五、六年の複式を担当していた。六学年五学級の学校なので、専任の校長は別に大した仕事もなく毎日ぶらぶらしていた。なまけ者でルーズ、多少陰険な感じであった。

当時、林猷堂や蔣渭水を中心に結成された文化協会が活発に動き始めた。それが田舎に波及する前に日本当局は奸策を用い、村の知識分子を籠絡するために、新埔では本島人中等学校卒業生および公学校教員を集めて青葉会なるものを組織させ、新埔分室主任および公学校長が顧問となつてそれをあやつつていた。私の学校の本島人教員五人もそれに加入していた。新埔では学校の教員はもちろん、町における中等学校卒業生全部が加入していたが、全部で十数人しかいなかった。月に二回座談会を開催していろいろの問題を討議した。そのたびごとに私は積極的いろいろな意見を述べて穩健分子の肝をひやひやさせた。そういうことが原因で、青葉会から私を除外するため、その後は規則を改め、区域を縮小して新埔街だけのものにして、もとの区にある分教場の教員は全部除外されてしまったので、私はふたたび思想的に孤立してしまった。それから

ちよどその年、新竹州教育課主催で教育論文を募集した。私は「学校と自治」という題で論文を書いて投稿したが、論旨が過激であるといつて送り返して来た。原稿は遠いむかしになくしてしまつたが、なかの一小節はいまでもはっきりおぼえている。

「連隊長がある朝、なにかで奥様と口げんかをしてしまつた。むしゃむしゃした気分が出勤したので、理由もなく大隊長を叱つた。理由もなく叱られた大隊長は、しゃくにさわつて中隊長を叱つた。中隊長は小隊長、小隊長は伍長、伍長は一等兵、一等兵は二等兵を叱つた。やり場のない二等兵は馬をなぐつた、という話がある。それとおなじように、視学やそのほかの監督者が学校に来て、わずか一時間か二時間参観しただけで、やかましく小言を言つたり、訓辞したりする

が、それがやがて無垢な児童に影響することは理の帰するところであつて、自由教育の立場から言つてはなほだよくない。」

この一小節が私の教員生活中一生のたたりになつたとはだれが想像できよう。その後、警察の手がまわり、私の出勤中の留守をねらつて書齋にはいり、事情を知らない私の父から『台湾青年』および『改造』を借りて行つた。もちろん、その雑誌は二、三日後に返してくれたが、おそらく高等報告の材料にしたのであろう。しかし、うかつな私は当時、日本官憲の動きを少しも知らなかつた。

私が田舎に引っこんでほとんど外界と接触がなくなるとも、台湾人の文化運動の波はやはり漂ってくるのであつた。

その年の夏休み、私の出身公学校で同窓会が開催された。知識分子はそれを利用してデモクラシーを高唱し、各自の見解を披瀝した。直情径行の私ももちろん、その演壇に立って一席の演説をした。どんなことを言つたかいまではおぼえていないが、おそらく自由を叫んだのであろう。

このような同窓会を利用することは私の出身校ばかりでなく、台湾全島にわたつてのことで、毎年、公学校同窓会ではかならずいろいろな問題が醸しだされ、当局の目を光らせるところとなつた。これも文化協会の運動から影響された波と見てよからう。

文化協会には入らなかつたが、青年らしい熱血を持っていた私は、明治初年の民権運動の書物をあさつて読んだ。なかならず偉人伝が好きで、民権運動の壮士、板垣退助が刺客に襲われた時「板垣死すとも自由は死せず」と叫んだ声が私の胸を打ち、熱血とともに高鳴るのをおぼえた。

しかし、田舎において外界との連絡がないため、この思想を進展させる機会をもたなかった。これも私の弱い性格の現れであって、すべて成行きにまかせて、みずから積極的に動かないためである。

同窓会でしゃべった、いいかげんな演説の結果は意外な方向へもって行かれた。四、五日たって、私は町へ出る途中で二、三人の女学生に出会った。当時、北部の台湾人の女学校といえれば三高女しかない時代で、一街庄に女学生はわずか数人しかいなかった。そのうちの一番上級生のCという女学生が私に軽くおじぎをして一通の手紙をくれた。このとっさの行動にあって、私はものも言えず、じっと彼女を見つめただけであった。彼女は頭を垂れて口のなかでなにかごそごそ言ったようだが、私にはそれを聞きとることはできなかった。そして、彼女は逃げるようにすぐにその場から立ち去っていった。手紙を受け取ったまま私はどうしてよいか分からなかった。連れの女学生は不審そうに彼女の後姿と私とを交互に見つめていた。私の顔はだんだん赤くなつて来て、その場にいたたまれず、挨拶もせず、逃げるように町の方へ歩き出した。そのうち私の胸は早鐘のごとく、全身はふるえてきて、どうすることもできなかった。

手紙はラブレターであった。私はこっそりなんべんも繰り返し読んでみた。当時、男が女を想えばすぐ結婚と結びつく時代思想で、男女の交際は公然とできず、対等に話もできなかった。劇場での男女の席は別々で、若い夫婦さえ芝居を見る時は同席できない習わしであった。恋愛という言葉さえない。「相思」という言葉はあったが、それは恋愛にごく近いが、その内容は片思いであった。男と女がひそかに会って話をしたら、もう姦通とみなされてしまうような時代に生ま

れ合わせた私は、二十二歳にはなっていたが、まだ女のことを考えていなかった。

彼女が私にラブレターをくれた時は、自由思想が芽ばえて来て、その古いきずなを打破しようとする時であった。悲しいことには、私の頭はまだコンクリート同様で、古い時代思想に支配されて、彼女ほど思想が進歩していなかった。そうかといって、あっさり打ち切ることもできず、心の底ではやはり交際してみたい気持はあった。それで返事を書いてはみたが、どうしてこの手紙を彼女に渡そうかとひと苦労した。郵便で送れば、ばれる心配があるし、直接渡そうとすればなかなか機会がない。苦心惨憺してある日直接彼女に手渡すことができた。彼女は大胆にもすぐ返事を書いて郵便で送ってくれたが、私はふたたび手紙を出す勇気がなく、ぐずぐずしているうちに夏休みは終わって、彼女は学校へ帰ってしまった。

恋愛と結婚を二つに分離して考えることのできなかった私は、あくまで恋愛と結婚は一致しなければならぬと考えていた。恋愛と結婚を切りはなして考えれば、神聖な恋愛は人生の詩であり夢であるが、しかし私はどこまでも恋愛をしたら結婚しなければならぬ義務があるように考えていたので、この恋愛らしきものは結局発展しなかった。しかし、彼女の純真な気持を汲みとることはできた。ただ古い習慣にとらわれ、恋愛即結婚、結婚即恋愛という時代思想に支配されて、手も足も出なかった。性を離れ、結婚を離れて、男女の間にも友情、友愛のあるということを知らなかつたのも、農村に生まれ、幾千年来この農村社会に根ざしていた男女道徳観が自然私の性格を作りあげていたからであろう。この思想から割り出して、結婚しない神聖恋愛は不道德のように考えていた。彼女はまた女学生であるし、いつ結婚できるか分からないので、そのまま

彼女と交際することはなんとなく気がとがめてとてもできない、したがってそのあとでもできるだけそれを避けていた。

学校は第二学期にはいり、運動会、学芸会、国語演習会というように目まぐるしいそがしかなかった。私はいそがしさにまぎれて恋のことも、彼女のこととも忘れて、一生懸命に働いた。おかげで私の受持の六年の級長が国語演習会で郡の代表に選ばれた。郡下に十六の公学校があるが、私の学校が一番小さかった。また、全郡の六年生二十二学級を新竹公学校に集めて試験を行なった結果、その成績は私の受持の六年生が国語が一番、算術が三番であった。

第三学期、私は上級学校受験生のために一生懸命であったが、悲しいことに田舎では教育に理解がなく、受験生は女生徒ただ一人だけだった。さいわいにして第三高女に合格した。なにぶん当時の台湾では、台湾人のための女学校は北部にただ一つだけなので、その入学は決して生やさしいものではなかった。父兄間での私の評判はすこぶるよかったが、そのかわり日本当局では反対に劣等教員として扱っていた。学年が終わるとともに、新竹州下でももっとも交通不便なところへ左遷されてしまった。

三月三十一日付の新竹州公報に「四湖公学校勤務を命ず」と出ていた。さて、四湖とはどこか、同僚はもちろん、村の有識階級の者でさえ、だれも分らない。調べた結果、苗栗郡下でも交通のもっとも不便なところであって、当時、大溪郡八結と大湖郡獅潭とともに、新竹州下の三大左遷地とされていた。老莊哲学に心酔し、人生万事塞翁^{さいおう}の馬^{うま}と^{おも}っていた私には、大したおどろきでもなかった。

どういうわけで左遷されたのか、私にはさっぱり分からなかった。その後、いろいろなうわさにより分かった大体の真相は、かつて私の出した論文が過激であったこと、『台湾青年』や『改造』を読んでいること、校長や警察に対し少しも敬意を表さないことなどが、おもな原因だとい

う。どうせ、要領よくやりたくない私であるから、その真相が分かったからとて私の個性を改めることはできない。相変わらず平気の平左だった。ことに私は三男坊であるから家におっても外におってもおなじで、別に気にかかるなものもない。けれども、私の同僚は非常に別れを惜しんでくれた。いよいよ学校を立つ時、涙を流して見送ってくれた林君のゆがめられた顔が、いまでも私の記憶にあざやかに残っている。しかし、その林君もいまはなく、四年前に不帰の客となっていました。いまでも当時のことを考えると、ひとしお目がしらが熱くなる思いである。

五 日本人と台湾人の対立する教育界で

私は左遷に対して意に介しなかったが、なにぶんにも家から遠く離れた田舎で生活しなければならぬので、まず生活道具一式を持っていく必要がある。むかしはいまとちがって、なんでも自由に物の買える時代ではなかったのだ、それらの物の準備をするのに苦心した。仕方がないので、母がみずから蚊帳とフトンのカバーをこしらえてくれたが、そのために一週間以上もの日を

ついやした。その間、私は悠々と遊んでいた。それも私が文官服務規定に、発令以後五日以内に赴任しなければならぬという規定のあることを知らなかったためである。前年、私の学校の校長が発令になってから一カ月後に来た前例があるので、少々遅れてもかまわないだろうと、勝手にひとりぎめしていた。ところが、十日ほどたったある日、赴任先の校長が、心配のあまり電話で来るか来ないかを照会して来たので、私はこれはしまったと、あわてて準備を急ぎ、四月十四日に家を出て、新しい任地におもむいた。

私は公学校六年生の修学旅行の時、汽車から苗栗地方を一度見たことがあるだけで、そのほかのことはなにも知らない。さて四湖はどのへんだろう？ 人の話によれば、銅鑼駅で下りてから、製糖会社の台車に乗ればよいとのことだった。行李二個、夜具一式を携帯した私は、銅鑼の駅に下りた。すぐ台車に乗ろうと思ったが、そこには台車の発着所らしいものは見当たらない。駅員に聞いて見たが、四湖公学校がどこにあるやらだれも知らないという頼りない返事に、仕方なく派出所に聞いて見た。四湖公学校は、鴨母坑にあって、もとは鴨母坑公学校と称していたが、地方制度の改正で現在の名に改められたのだという。苗栗から歩いて行くのが普通であるが、南勢、公司寮、白沙屯からも行ける。どこから行っても二時間以上は歩かなければならない。一年前までは、銅鑼から甘蔗運搬用の台車に便乗できたが、現在は糖業界不景気のため、この線路は運転中止になっていた。事情が事情なので、製糖会社の駐在所に頼めば、あるいは世話してくれるかも分からないと、若い本島人（台湾人のこと）の警官が親切に教えてくれた。

私はまた逆戻りして、駅の近くの駐在所の人に頼んでみたら、心よく承知してくれたので、やれうれしやと思つたら、今度は台車押しの人夫が見つからない。苦心惨憺して交渉した結果、ついに素人の人夫を一人雇うことができた。長く運休していた線路を素人に押させるのは考えて見ると非常に危険ではあるが、これより方法がないので、運を天にまかせてそれに乗った。台車は錆びかかったレールの上をゆるゆると走り出した。線路は山の麓に出たり、田圃の間を通ったり、溪谷に沿って走ったり、一体どこへ行くやら見当がつかない。時たま人に逢うが、女の人はとくに色が黒かった。故郷とはちがった感じの部落が展開していく。最初のうちは移り変わるあたりの景色に気をとられていたが、やがて私の神経はゴゴゴとやけに響き渡る台車の騒音に堪えられなくなり、台車の上で絶えずいらしていた。

どのくらいかかったのだろう、やっと三湖の店仔街に着いた。やれやれと思つて台車の下り場の方を見れば、全校と思われる生徒が二列にきちんと並んで、私を迎えていてくれた。私は恐縮してあわてて車から下り、初対面の挨拶をした。

店仔街は文字どおり何軒かの店があつて、ちょっと見には町に見えるが、その大部分は住宅であつた。庄役場もそこにあつた。学校は町の裏にあり、校舎は田舎にしては比較的立派だった。ただ、うしろにある一間のわらぶきの仮教室はじつに見すばらしかった。山にかこまれた狭い谷間にある校舎の前には、小山があり、うしろは谷川にのぞんでいた。谷川の向うにはかなり大きな廟があつた。

学校は六学級、教員六人、校長と主席は日本人、ほかは本島人で、女教員は一人もいなかった。

私はすぐ感情を押えて、蘇東坡の「留侯論」を思い出し、論文のなかの「匹夫辱しめらるれば、劍を抜いて起ち、身を挺でて闘う。大丈夫は、小忿を忍んで、大謀を就さんとす」などの句に結びつけて自分自身を慰めていた。

この「留侯論」がすなわち、私の思想の矛盾の逃避所で、つねに阿片のごとき作用をしてくれた。とはいようなものの日本人校長一人だけの四湖では、校長が立派な宿舎に住んでいても、さほど悪い感情が起こらなかったが、この学校は日本人が半数もいて、みな立派な宿舎に住み、本島人の宿舎は廟か、民家から借りたあばら屋にすぎなかった。私の宿舎は町のなかにある古い劇場を臨時に改造したもので、日本人女教員の宿舎よりもずっと劣っていた。

ある晩、本島人の同僚が私の家に来て、このことに対して大いに不平を鳴らした。校長は口先では「内台融和」「一視同仁」などとうまいことを言って本島人に呼びかけているが、事實は反対、つねに日本人教員をかばって、本島人に対しては差別待遇をしている。日本人教員が着任すると、校長宿舎で日本人だけの歓迎をする。彼らは俸給を六割もよけいにもらって、宿舎までその六割的優越待遇であるのは法律上にない差別である。そう言って、同僚は、校長の不公平に対して大いに攻撃したのち、私の意見や感想を求めた。この要求に私はどう返事をしたらよいか困ってしまった。ことに宿舎の差別待遇は厳然たる事実であって否定するわけにはゆかない。

私は着任早々で学校の事情にも民情にもうといのに、事がらは私個人にも関係していて純粹な公的立場に立っていないから、もう少し様子を見てから校長と話し合ってみようと言って同僚を帰した。その晩、私はなかなか眠れなかった。いままでいた四湖の田舎では、内台問題について、ほとんど意識的に考える必要がなく、べつに刺激を受けるほどのこともなかった。周囲は本島人職員ばかりで、朝会がすめば用事以外校長に会う必要もなく、一日中ほとんど教室のなかで暮らしていたので、日本人の存在は気にならなかった。しかし、ここではそう太平無事ではおられない。教育問題のほかに、内台職員間の摩擦など、いろいろうるさい問題がある。いきおい私は自分の根本態度を決定する必要に迫られた。

いつのまにか私は、あと半年で恩給のつく年限になっていた。恩給がつけば、いまさら窓々として教職についている必要はない。むしろこの機会に退職して、あとは悠々と陶淵明のごとく詩を作り、酒間に人生を逃避すればよい。職に未練はない。とすればこのさい強く正しく正義のために敢然と立って闘う必要がある。なにもひるむことはない。日本人であろうが、本島人であろうが、どちらでもよい。ただ正しいか、正しくないかによって行動すればよい。そう思い、むりに気持を落ちつかせようとしたが、同時に植民地である台湾全体の問題が考えられるもなしに心のなかにこびりついて離れない。これは大きな問題で、私としてはまったく無知に等しく、いまさら考えてもわからない。そのわからない問題が気になりました。今日までただ差別とか、不平等とか軽く扱っていたが、その根本問題について深く考えたことがない。この問題は政治問題であり、かつ民族問題で、常識の範囲では判断がつかない。

師範卒業当時、民族自決とか六三問題とかの論述を『台湾青年』で見たことがあったが、その時の不平は不平のための不平で深く考えてみなかった。卒業後田舎に引っ込んでしまったので、自然なにも考えないようになっていた。たとえ考えることがあっても、私の心は過去における苗

(注三)
(注四)

栗革命や西來庵事件の失敗におびえていた。日本の強力な武力に対し、台湾人は小屋のなかの鶏と同様、どうすることもできない宿命的な立場にある。抵抗すれば自滅の道をたどるよりほかはない。それにもかかわらず、事ごとに心のなかは不平不満で、不愉快だった。この反発的感情は生まれつきのもので、無意味と知りつつ心の底から湧いてきた。要するに、私はこの矛盾を知りつつ生きてゆかなければならない自分を発見して慄然とした。

私が公学校四、五年の時であった。苗栗事件と西來庵事件が発生した。どちらもただの陰謀にすぎず、ことは未然に発覚してしまった。事件後、父老の話では、苗栗事件のためにとくに苗栗に臨時法院を設置した。裁判の結果はたくさん犠牲者を出した。西來庵事件ではその地方で十四歳以上の者はみな殺されたという。私はこれを聞いて子供心にも日本人は恐ろしいものと思った。

(注五)

昭和の初めには霧社事件がおきた。当時私は五湖にいた。土地の本島人巡査が動員されて鎮圧に加わった時の話によれば、討伐隊の第一線は高山族で、第二線が本島人、第三線が日本人であった。つまり単純な隣の社の高山族を煽動し、武器を与えて戦わせ、本島人を強制的に第二線に配置した。しかし、頭目モナルダウをはじめ一族の抵抗は実に勇敢で、女たちはみな先に殉死して男を励ました。討伐隊は初め焼夷弾を投げたが、なかなか屈しなかったので、ついに毒ガスを using して全滅させた。事件の前後を通じて、日本人の死傷も少なくなかった。

この事件の原因は相当複雑であるが、発端は花岡巡査の差別待遇からきたもので、これとおなじ境遇における本島人にとっては他山の石であった。私は、子供の時からつねに潜在的恐怖におび

やかされながら大きくなった。

日本は満州事変の謀略に成功し、夢はますます大きくなって、ついに世界を征服しようとした。そのため台湾人に対する態度はいっそう苛酷になってきた。台湾人の性格を人為的に破壊して一気に日本人に作り変えようとして、「皇民化運動」が推進された。

まず中国的色彩を全部撲滅しようとした。寺廟の廃止、台湾服着用禁止や、台湾語の箝口令などをしき、つまり台湾人の伝統を否定して、あらたに日本精神を植えつけようとした。

家々には「大麻」〔神社のお札〕を祀り、言葉は日本語で、「滅私報国」を掲げて勤勞奉仕をさせた。ことに青年を強制的に動員しはじめた。

蘆溝橋事件が勃発したのは、私が関西に赴任して三カ月目だった。やがて中日全面衝突となり、兩國は避けがたい戦雲に覆われた。この機に乗じて、台湾の為政者は「夷をもって夷を攘う」の政策をとり、台湾人を戦場にまでかり出した。一方、青少年に向かって中国に対する憎悪と敵愾心を起こさせるよう煽動し、公学校卒業生を全部区域区域によって青年団員に編成し、訓練を始めた。この訓練は日本人教員が主体となって、全青年団員を一大隊として、その下に三個中隊、中隊の下に三個小隊を編制した。大隊長および中隊長は日本人教員、本島人教員は小隊長となり、日本人教員の指揮、命令にしたがって行動した。

この訓練は一週一日、午前中は軍事教練を主として、講話は日本精神、国体明徴、大義名分などであり、午後は労働奉仕をさせた。訓練はまったく兵隊式で、毎日青年団員をなぐったり、どなったり、職員室はまるで刑事審問室と変わってしまった。ある者はただ意味のない憎悪感でいじ

めているようだった。これはやがて学校教育に影響し、その殺伐な風が純真な児童に対しても行なわれ、毎日体罰が絶えなかった。

私はこの間に処してじつに苦しい思いをした。いろいろ考えた結果、この風潮をくい止めるには一人の力ではどうしてもできない。本島人教員全体の結束が必要だ。私はひそかに本島人教員を集めて、団結を要請し、対策を協議した。いろいろ討議した結果、純教育的見地から理論闘争をすることに決めた。校長ならびに日本人教員が教育上不当な要求をした場合、および訓育上不適当と認める方法に対して、われわれ本島人教員は一致団結して理論的に排撃した。

そのために毎日の職員朝会では目ざましい論争が展開された。それでもなかなかくい止められなかった。打たれる者、教室の堅いコンクリートの上に膝まずかせられる者が絶えなかった。そのうちに、ある日本人教員が地元の有力者の子供をひどくなくって負傷させたため、告訴沙汰になり、はじめてその暴威をいくらかやわらげることができた。

ある日、私は青年団員を動員して道路の並木を植えさせた。その日は雨のしとしとと降るうとうしい日だった。私の受持区域は石ころの多い、じつに掘りにくいところだった。私は一小隊の青年団員をばげまして、あたりがうす暗くなるまで一生懸命に働かせてようやく植えつけを終えた。私はやれやれという気持ちで道具を集め、隊を整えて帰ろうとした時、隣りの組にいた烏木がやって来て、

「おい、君のところはもうすんだのか、手伝えよ」

と命ずるような態度で言った。この若い男は教員心得で、日本の色彩がもっとも強く、いつもは虎の威を仮るきつねで、台湾人をバカにしていた。私は少々しゃくにさわったので、

「この時こそ、日本精神を發揮すべきときだ」

とやり返して相手にしなかった。彼がかつとなつて私に向かって来ようとした時、私の小隊の青年団員五、六人がすばやく私の前に立ちふさがった。

烏木はいつも青年団員をなぐったり、けつたりしていたので、青年団員は私の急を見るや、無意識的にかげよってきたのであろうか、もしくは私がおなじ台湾人であったためであらうか、この心理はときがたい。

つぎの日、校長は私を校長室に呼んで、いきなり、

「古君、君は昨日、日本人教員を侮辱したのではないか」と詰問した。

「それは違う。私はただ、この時こそ、日本精神を發揮すべきだ、と言っただけです。それで日本人を侮辱したと解釈されるなら、校長先生が毎日の朝会で生徒に向かい、『日本精神を發揮せよ』と言つてることはいやになりませんか。これはばげましの言葉で、烏木さんがそれを侮辱とするなら、日本人でありながら日本語もろくに知っていないようすな」

と私は逆襲した。校長は不きげんな顔をして、ちょっと言葉に窮した様子でためらっていたが、しばらくして、

「そうか」

とうなるように言っただけで、黙ってしまった。

この時、私の反骨精神はふだん心のなかに積み重ねてあった鬱憤をはらさずにはいられない気持になり、心の底から燃え上がった不平をつい口に出してしまった。

「校長先生はいつも内台融和とか、一視同仁とかよくいっておられるが、事實はそうでもないようです。この職員名札の掛け方をごらんください。差別をつけてるではありませんか。なにも日本人だからといって上段にかける必要はないでしょう。青年訓練でも、大隊長や中隊長はみな日本人で、おなじ師範卒の本島人先輩が小隊長、後輩の日本人が中隊長とは実に矛盾もはなはだしいと言わなければならないでしょう」

と私は一気にき出すように言った。校長はいきなり大きな声を張りあげて、

「校長を攻撃するつもりか」

とどなった。私は言下に、

「文官服務規定の第二条に部下は上司に意見を述べることが得る、とあります」

と私は冷静な態度で応酬した。老獪な校長はにっこりと笑い、

「そうか」

と一言いっただけだった。

おかげで私は、とうとう第二学期には蕃界近くにある馬武督分教場へ左遷されてしまった。ここはマラリヤの猖獗するところであった。

教員生活二十年、田舎から田舎へと左遷されながら、せっかく、いままでより比較的交通のよい関西に出たが、これもわずか二年半、またへんびな片田舎に逆戻りしてしまった。かえりみれ

ば関西での二年半はじつに多難の時期であった。内台職員間の暗闘や、日本人教員の優越感などは、田舎の学校では味わえないものであった。この期間中、私にとって忘れることのできない事件があった。

新竹州主催の研究発表会が関西の学校で挙行された時のことだった。私は学校を代表して研究発表をした。内容は公学校教育と小学校教育を比較して無遠慮に批評し、しかも諷刺的に発表したため、臨席の州視学をまっかに怒らせたことがあった。これが私の舌禍事件の一つで、血の気の多い私は激情的になると、自分で自分の行動を制止しきれず衝動的になる。さいわい、この舌禍事件はその場で叱られただけで、大した問題にならずにすんだ。

さて、馬武督分教場は戦時下におけるもつともよい避難所であった。日本人は一人もいない。ただ、衛生状態がいたって悪い。マラリヤのほかに、ブトが非常に多く、私の小さい娘がブトにかまれて化膿し、なかなか治らないので、妻はとうとう子供をつれて本宅へ逃げ帰ってしまった。あとは一年生になる子供と二人きりでがんばって、一生懸命教育に従事した。

分教場は小学級、ほかに国語講習所が三学級、職員は九人みな本島人だった。ここは設立したばかりの学校で内外とも充実していなかった。そこで私はすぐ環境整理にとめることにした。父兄および有志を説きふせて寄附金を集め、児童文庫の設置、教具の購入、校門の建設、運動場の整理を始めた。保甲民を動員して運動場の周囲に石垣を造らせ、その上、校庭にさくらとつじをたくさん植えた。北側は防風林兼用としてかえでをたくさん植えて、春はさくらにつじ、秋はもみじの名所にする考えだった。ここはまだ卒業生が出ていないので、うるさい青年動員を

する必要もない。一意専心、学校の経営と教育に全力を注ぐことができた。

ところが「好事魔多し」というが、まったくそのとおりであった。その年の秋、郡主催の運動会が新埔で開かれ、郡下における各学校の生徒および職員がみな参加した。私ももちろん参加した。その日は秋晴れの上天気、天高く馬肥えるという絶好の運動日和だった。運動会はプログラムどおりにおもしろく進んだ。終りに近づいて、女教員たちの百メートル競争の種目に移り、郡視学が出てしきりに女教員たちを勧誘したが、彼女たちはぐずぐずしてなかなか競技場へ出て来ない。郡視学は笑いながら一人一人に勧めていた。私はそれを見るや大きな声で、

「笑いながら呼んでは出て来ないぜ——」

と冷やかしたら、みんながどっと笑った。なかには反射的に大きな声で、

「そうだ」

とあいづちを打つ者も何人かいた。

視学は憤然として、

「だれだ」

と言うが早いか、飛鳥のごとく観覧席に走ってきて、

「君だろ、君だろ」

と言いながら、そこに坐っていた教員の頭を一つ一つ叩いて歩いた。

打たれた者は、関西、照門、馬武督の本島人教員ばかりだった。もちろん私も被害者の一人だった。叩かれたというより侮辱されたといった方がよい。心の痛みは叩かれた痛さよりも数千倍

であった。大勢の前でこう侮辱されては、じつに堪えきれない気持であった。この原因はみな私の不用意から出たもので、その責任は私一人で負わなければならない。しかし、被害者は、同一運命と隠忍しているのか、だれ一人私を責めていない。私は自責にたえられなかった。

私はどうしてあの時手向かわなかったのか、どうして一言の反駁さえしなかったのか、なぜ、なすままに打たれたのか、それで男と言えるのかと、私は心中無念の涙をのんだ。その時、すぐ打ち返せば正当防衛で通るのに……。

これも、おそらく子供のころから、暴力に対していつもなすままの無抵抗主義がいつか私の習性となってしまうていたせいだろう。しかし、私はこのまま泣き寝入りすることはできないと、心のなかで叫びながら、喪家の犬のごとく馬武督へ帰った。

その晩は眠れなかった。どうしてよいやら分からぬ。涙が静かにほほに伝わってくるだけだった。友だちに相談する気もなく、天地が急に暗くなってどこにも歩く道がないと思った。打たれた時、けがでもしていたら法廷で争う道もあるが、考えれば考えるほど残念で、自分ながら情なく思った。自尊心がくずれてしまった。なんとか解決しなければ生きてゆけないような心境になり、決闘することも考えたがあまりに知恵のないこと、被害者全体の力で抗争することも考えたが、おのおの立場がちがいがい、不賛成の人もあるだろうし、職をやめればすぐその日の生活に困る者もあるだろうし、迷惑をかけることはできない。いろいろ考えたすえ、自分一人で曲直を争うのが一番有力である、と判断した。

人が死ぬ時に死ななければ、その恥辱は一生つきまとう。

その晩、一人で静かに坐つて考えているうちに、職を賄して闘えばきつと勝つという方法に気がついた。このさい、これを理由に辞職すべきだと、かたく心に決めて行動に移った。辞表には、打たれた時の状況をくわしく書いて、最後に教権を擁護するために職を辞すると、まるで告訴状に似た辞表を書いて、知事あてに書留で送った。同時に私は本島人の医者に、ことの次第を打ち明けて相談した。医者は私の頭髪を切つて一カ所に膏薬を貼り、もう一カ所にヨードチンキをつけてくれた。

私は鏡にうつる自分の頭を見て、これでよしと思つた。私はすぐ新竹州に出て直接知事に会い、事の顛末を報告し、郡視学の不都合なことを説明した。知事はすぐ文書課長を呼んで真相を調査するように命じた。その後、私は台湾人唯一の新聞、興南新聞社支局を訪れて事件の次第を説明して、同時に辞表の写しを渡した。また本島人の州会協議会員朱弁護士を訪れ、同様の説明をして、協力してくれるよう依頼した。朱協議員はすぐ私のために内務部長に会つてくれた。朱協議員の話によれば、部長は非常に怒つたという。つぎの日の『興南新聞』は、二段抜きの記事を出してくれた。新聞に出た翌日、長田州視学から校長を通じて、私に夜分視学の宿舎にくるようにとの電話があつたので、私は放課後新竹へ出た。これという友達もないので町をブラブラしたのち、視学の宿舎を訪れた。

視学は私の出した辞表を撤回するようにしきりに勧めた。私は郡視学がひとことわびを言つてくれればそれでよいのです、直接あやまらないかぎり私は辞表を撤回しません、とがんばつた。

長田視学はいろいろ手を尽して勧告したが、私は応じなかつた。最後に私の希望する学校へ転出してよいとの優遇条件を出したが、私はそれもけつた。ついに、長田視学はおだやかな態度で、郡視学が直接古君にわびると威信に関するから、教育者の大きな気持で彼を許すようにしてくれと頼んだ。そこで私もおなじ理由で郡視学が直接あやまらないかぎり教育者として面子を保てないから、教権を守るために私は喜んで犠牲者となつて教育界から去る、喧嘩両成敗、同時に郡視学もやめてもらいたい、どこまでもゆずらなかつたため、とうとう午前二時になつても結論は出なかつた。

私が帰る時、長田視学は玄関まで私を見送つて、最後に一言、

「古さん、あなたの考えは決してまちがつていないが、世のなかは複雑ですから、むしろ私の言う事を聞いた方があなたの将来のためになると思ひますが、帰つてからゆっくり考えてください」

と温情に満ちた口調で言つた。もう意地になつてゐる私は、好意としては受け取れず、その手へのるものかと思つた。

この事件はおたがいの面子問題となり、ひいては日本人対本島人の面子問題になつてしまつた。彼らはどこまでもわびなくてはむづかしく画策し、勧告し、有利な条件を出して誘つたが、私はどこまでもゆずらなかつた。

馬武督に帰つた翌々日、私の公学校時代の受持、杜先生と国語学校での一年先輩邱君が来て、私を誘い出して新竹第一公学校松尾校長の招待を受けた。

松尾校長は卒業当時の同僚だつた。彼は本校の主席、私は分教場の主任という関係だつた。彼

は私たちをカフェにつれて行き、一杯飲んでから、おもむろに、

「古さん、私の顔を立ててくれ。長田視学から頼まれたのです。まあ、ことは考えようで……」と多くを語らず、四人で飲みながら昔話に花をさかせ、時には唱ったりして、久しぶりで一夜を楽しく過ごした。

帰途、杜先生と邱君が自分たちの意見を披瀝した。これで面子が立ったから、これ以上がんばる必要のないこと、ことに戦時下でこれ以上さわぐとかえって損であること、このへんが潮時であることなどをあげて私に辞表を撤回するようにと勧めた。しかし、いったんやりだした以上、おめおめと自分でしりぞくわけにはゆかないと思つて、反対もしなければ賛成もしなかった。ただ、ゆっくり考えさせてもらいたいといつて別れた。

馬武督に帰り、事情が父兄に知れわたると、父兄会長をはじめ友人たちもぞくぞくと慰問に来てくれて、これくらいがんばればもう十分だからと、みんなから意見をされた。しかし、私は自分から辞表を撤回しないで、成り行きにまかせた。どう取り扱うかは彼らの勝手である。

一週間たつて本校の校長から、私に出でくるようにと電話があった。本校に出頭した私は校長といっしょに郡役所へ出頭した。郡守室で郡守をはじめ、庶務課長、校長および私の四人で会談ののち、郡守は非常に温厚な口ぶりで、私に、

「郡視学はたしかに郡守である私に向かって今回の不始末についてあやまりました。郡視学もあなたも私の部下です。郡視学が私にあやまったことをお伝えします。同席の庶務課長も校長も、たしかに郡視学が間接ではあるがあやまったことの証人になります」

ときっぱり言った。私は相変わらず自説をまげずに議論を繰り返したが、私一人に相手は三人、あの手この手で説きふせようと三時間も議論をしたのち、郡守はじつにずるいことを持ち出した。た。

「とにかく君の辞表は学校長経由でなければならぬ。直接知事あてはいけません」と言つて、校長に私の辞表を手渡し、しばらく預つておくように依頼して話を打ち切つた。郡守はにっこり笑つて、私に手を差し出し握手して座を立つた。

これで私の辞職はどうとうやむやに終わってしまった。人間はおもしろいもので初めは辞めるということを武器にして、相手にあやまらせるつもりであったが、事がいったんおさまると、意地のための意地のようになつてますます辞めたくなくなつてしまつた。考えれば考えるほどもうこれ以上教育界におつてもつまらない。ことに戦時下における教育は教育ではなく、まったくシェパードの訓練に似たようなものだった。ここにいると、苦しみがますますばかりで無意味だ。辞めれば恩給がもらえる。いままで用意した金ですでに南部には土地も買ってある。職を辞めて農園を経営しよう。しかし、時局はますます切迫してきて、労働力のない私には一人で農園経営などできるものでない。政府はまた本島人を動員して海外に派遣している。ぐずぐずしていたら召集される心配もある。いっそのこと大陸へ行ってみよう。それに気がつくつと、急にほがらになつた。

私はあらためて正式の辞表を書いて提出した。ところが一週間たつても二週間たつても音沙汰がない。戦時下の人事は凍結してしまつて、なかなか辞めさせてくれないのだった。そこで意地

でも辞めることに腹を決め、本島人の医者を知恵を借りて神経衰弱という診断書を出して、初めは一週間休み、次は三週間休んだが効果がなかった。仕方がないので、ついに三カ月間転地療養の診断書を出して、家に帰って悠々と遊んでいた。

さすがに当局も困って二カ月目に許可を出してくれた。教員生活二十一年、中間一カ年の休職をのぞいて満二十年働いたことになる。左遷から左遷へと、つたない運命をたどりながら、とうとう業界近くの分教場で終わりを告げた。じつに感慨無量である。時に四十一歳、まだ男ざかりである。このまま隠居するわけにはゆかない。

おりよくそのころ、私の同期生章君が南京で国民政府（汪精衛政権）の高級官吏を勤めていた。さっそく章君に手紙を出して大陸への呼び寄せ状を送ってもらい、政府に申請の手続きをはじめ、二週間で旅券を下付してくれた。私はうれしくなり、気もうきうきとさっそく大陸旅行の準備にとりかかった。解放感で一刻も早く飛んで行きたいような思いだった。

八 南京で日本語新聞の記者となる

大陸行きの旅券が思ったより早くおりた。旅券を手に入れるまでの本島人は纏足の婦人と同様だった。この旅券がなければ祖国に行けない。ふつうはいろいろの理由をつけて、なかなか許可してくれない。その旅券がおりたので、私の周囲の人々は大いに前途を祝福してくれた。とくに

苗栗社では盛大な詩会を催して送行してくれた。席上、私は三首の詩を賦して詩友の好意を謝した。

留別栗社同仁 栗社の同仁に留別す

（その一）

深謝友情宴 深く謝す、友情の宴

江亭離緒賒 江亭、離緒賒かなり。

牽衣頼贈語 衣を牽いて頼りに語を贈る、

句句為邦家 句々、邦家の為にという。

（その二）

栗里文明地、 栗里は文明の地、

難忘旧侶情 忘れ難し、旧侶の情。

身雖千里外 身は千里の外と雖も、

夢向故園生 夢は故園に向かいて生ぜん。

（その三）

家園拋別去 家園、抛って別れ去る、

為復旧山河 旧山河を復せんが為なり。

策乏匡時計 策、時を匡うの計に乏しく、

空余熱血多 空しく熱血を余すこと多し。

故郷では親戚、友人の招待をつぎつぎに受けた。いよいよ出発の当日にはたくさんの人が停車場まで見送ってくれ、別れを惜しんだ。妻と子供たちは台北まで私といっしょに出てきた。いざ別れのまぎわになると、妻は別離の涙を流して私の気持をしゅんとさせた。三人の子供もなんとなくのさびしい顔をして、私をじっと見つめていた。妻と結ばれて十八年、一度も遠く離れて暮らすようなことはなかった。

戦時下の台湾ではおおかたの物資は配給で、今後三人の子供をかかえて生活しなければならぬ妻にとつて、さぞつらいことだろう。こう考えて、自責に堪えられない気持になった。

しかし、植民地の桎梏しごくのもと、自由は奪われ、一生奴隷のごとき生活では、生きる望みがない。ここで小児的感情に左右されてはたいへんと、私は歯をくいしばって、崩れがちになる感情をむりにはげまして、「そうだ、無限に広い大陸には自由がある。いまその自由の天地に行くのだ、感傷的になってたまるか、私は男だ」と心のなかで叫びつつ、やさしく妻を慰めながら、「しばらくのしんぼうだ、あちらにいつて落ちついたら、すぐもどつてきて、お前たちを連れていくから……」

とくり返しくり返し言い聞かせて別れた。

基隆はめずらしく晴れていた。乗船してしまつと、もう家族のことはあまり気にならなくなつた。船客は上海行き日本人および本島人ばかりだった。「同席対面、五百世の縁」と仏法で説いているが、三等船客はまさにそのとおり、官吏、実業家、商人、さまざまな人が雑居して、おたがいになれなく世間話に花をさかせた。おかげで、私は少しもさびしく感じなかった。

翌朝起きて見ると、海の半分は黄いろく染まっていた。これが揚子江から流れてきた水であった。しかし、岸らしいものや山はまだ見えない。船は黄色の流れに向かって進んでいった。午後になって、左手にはじめて山が現われ、山にそつて船は走り、夕方になってようやく崇明島らしいものが見えて来た。もう船は揚子江に入った。揚子江は川というよりも海に近かった。翌日も船はあいかわらず黄いろい流れのなかをつき進んでいった。昼近くなって、だれからとなく上海はもうすぐだすぐだと言ひ出して、みな甲板に出てあたりの景色に見とれていた。やがて呉淞砲台が見え出し、戦禍の跡を物語っていた。大煙突のまんなかは、大砲の弾でぶちぬかれていた。私は胸が痛くなり、感慨無量だった。

過呉淞砲台

呉淞砲台に過りて

百戦英雄跡尚留

百戦の英雄、跡尚留め、

吳淞烽火幾経秋

吳淞、烽火ほうやんで幾たびか秋を経たる。

滔滔不尽長江水

滔々として尽きず、長江の水、

今日猶疑帶血流

今日猶疑なほう、血を帯びて流るるか。

これがすなわち上海に対する私の第一印象だった。さて上海に上陸したが、言葉は少しも聞きとれない。自分の祖国でありながら、まったく外国という感じだった。友だちの鄭君が迎えにきてくれた。もしだれも迎えに出てくれなかったら、おそらく私は途方にくれただろう。その

夜は鄭君の家に泊まった。さて上海は想像していたほど天国ではないようだ。鄭君も故郷で噂されているほどに成功していない。彼は仕事がなくブラブラしていた。

この様子を見て、私はなんとなくある不安を感じた。夜、陳君が来て私のために案内役を申し出てくれた。陳君は私の同郷人で、私とは初対面であるがじつに親切な人で、しかも上海通だった。陳君は活発な青年で、朝から夜遅くまで私をつれて方々案内してくれた。彼の知っているところはくまなく見学させてくれ、わずか三、四日ではあるが、おそらくふうの人なら二、三年上海に住んでいても、このようにたくさんは見られないであろう。

イギリス租界、フランス租界、滙豊公園、フランス公園、酒家、広東菜館、百貨店、娯楽場、裏町、六国飯店、ロシア料理店、ドイツカフェ、阿片吸飲所など、彼の徹底した案内ぶりには、私も舌をまいてしまった。そのうち、もともとおそろしく感じたのは「野鷄」(淫売)の洪水と乞食の群だった。

戦争直後のみじめな上海の姿をまのあたりに見て、私は「国破れて乞食あり」という感想をもった。かれらの姿は日本人および西洋人の優越的な態度と対比的で、「国破れて山河あり」とうたった杜甫の心境よりもみじめだった。「来て見ればさほどでもなし富士の山」とあるが、まったくそのとおりである。このような上海を一巡してから、私は目的地南京へ向かった。

南京行きの汽車は、じつに混んでいた。乗客は長蛇の列をなしてうるさい検査を受けていた。私は日本籍であるから、別の検査口で旅券を見せただけで、荷物はそのまま通してくれた。上海停車場は爆撃を受けて、その跡に簡単なバラックが建ててあった。鉄道は広軌で車両は台湾の汽

車よりも大きく、乗客はみなたくさんの荷物を持っていた。荷物を持たない乗客はむしろめづらしいくらいだった。沿道の停車場という停車場もみなバラックで、当時の激戦を物語っており、上海の繁華にくらべて荒涼たるものだった。上海はさすがに列強搾取の中枢地であって、銀行、会社などの大厦高樓が多く、建物のすばらしさにびっくりした。そして、租界に住む外国人の尊大で傍若無人なさまに、私は憤慨せずにいられなかった。

私はわずか三、四日見聞したばかりで、中国人のみじめさをしみじみと味わった。洪水のごとき野鷄の群や乞食の奔流は生きんとするもののおわれな姿であった。その反対に、外国人は暴君にひとしい横暴ぶりで、まさに支配者であった。

ああ、わが祖国は、どうしてこんなに落ちぶれたのだろう。かつてわが祖国には広袤四百余州の土地があり、そこには無限の自由があると思った。しかし、この土地はもう日本の支配下にある。台湾と五十歩百歩だ。

ああ、わが祖国、なんとあわれな姿だろう、私は心中無念の涙にくれた。

私は今後の去就に迷ったが、ここまで来た以上もう少し様子を見てからよく考えるほかはない。それよりも、上海でいろいろな言葉を聞いたが、どれも私には聞きとれない。これは重大問題である。その上、人情、風俗、習慣などもちがっている。祖国と思いがから来て見れば、まるで外国だ。これからどうしようかと、あれこれ考えているうちに汽車は蘇州にさしかかった。下車して寒山寺を見たかったが、すでに南京の友に電報を打ってあるので、ぐあいが悪いと思っ

つぎの機会にゆずり、つぎの詩一首を作った。

赴南京過蘇州

南京に赴かんとして蘇州を過ぐ

快車破曉向西征

快車、暁を破り西に向かつて征く、

滿眼烽煙十里程

眼に滿つ、烽煙、十里の程。

借問楓橋何処是

借問す、楓橋は何れの処か是なる、

姑蘇城外獨留情

姑蘇城外、独り情を留む。

(借問……唐の張継の詩「楓橋夜泊」について自問自答しているのである)

蘇州を出た汽車はいいかわらず荒涼たる平原を走りつづけた。

大蛇のごとくうねって紫金山の麓を巻いている南京の城壁が見え出した。南京の城壁を見た瞬間、いままでジレンマに落ちていたことをすっかり忘れてしまった。子供のころ見た、中国革命軍が砲火をくぐって入城する勇ましい壁画を思い浮かべ、あの大城門を一刻も早く目の前に見たいと思った。汽車は城壁に沿って走り、やがて下関という駅に着いた。

プラットホームには、酒井君が迎えに来てくれた。酒井君は領事警察の台湾係だった。彼の細君は私の同郷人で、酒井君としては私を監視に来たのではなく、歓迎に来たのである。プラットホームを出ると同期生の章君が待っていてくれた。十数年ぶりで会った章君はめっきりふとってしまった。在学中はわずか十一貫足らずだったのに今は堂々たる恰幅かっぴくになっていた。道で出会ったらおそらくわからないだろう。章君は学生時代のように気軽に私の荷物かっぴくを運んでくれた。

三人はタクシーを拾って、南京城に向かって出発した。

挹江門にさしかかると、酒井君は車から降りて、日本兵に挨拶してくれたので、荷物の検査を受けずにすんだ。ふと見ると、門のわきにある小山の斜面に「忠孝仁愛信義和平」と大きな字で書かれた標語が見えた。そのそばにトーチカがあり、戦禍の跡を歴然と物語っていた。

タクシーは挹江門から金陵大学のわきを通り抜けて、町の裏通りを廻り、さらに太平路をへて馬府街の章君の家にたどり着いた。これは酒井君の宿舎に寄るコースで、ふつうはここを通らない。

南京へ着いてすぐ目に映ったものは走る自動車の窓から見た光景で、野菜畑、桑畑、墓地およびゴミゴミした路地ばかり、それに一平方メートルぐらいの文字で書かれた「和平反共建国」、「建設東亜新秩序」、「擁護汪主席」などの壁書がとくに目立った。この幼稚な標語がなんの役に立つのやら、私にはその真意がはつきりわからない。ただ異常に感じただけだった。

章君と私は昔を偲びつつ、学生時代の話、友だちのうわさ話に一夜を語りあかした。そのおり、章君は私に台湾人という身分を隠すようにと注意した。ことに彼は国民政府の官吏で、彼自身も身分を明らかにしたくない。おたがいに広東の梅県出身にしておこうといった。上海の友人も同じようなことを言っていた。

大陸では台湾人の代名詞に「蕃薯仔」(台湾島の形がサツマイモに似ているから)という隠語を用いている。要するに台湾人といえは、よかれあしかれ日本のスパイと見られ、重慶側からも南京側からもきざらわれている、実にかなし存在であった。その理由の大半は日本が戦前、台湾の鱸鰻ハシラ

(やくざもの)を廈門^{アモイ}に放ち、彼らにバクチ場、阿片^{アヘン}吸飲所などを経営させ、治外法権のもとに保護して日本のために働かせていたからで、いきおい祖国の人々は台湾人をきらい、黒白を分かつず一様にスパイと思っていた。これも日本の離間政策の一つであった。

ところが戦争に突入すると、日本人も台湾人を信頼しない、ただ利用するだけである。台湾人のなかには幾多の抗戦分子がいて、祖国のために働き、つねに日本官憲のために監視されていた。大陸に来て、台湾人が複雑な立場におかれていることをはっきりと知った。しかし、このような大問題は個人がいくらあせっても解決しない。それよりも、私にとっては、言葉こそ目前の大問題であった。言葉の問題が解決しないかぎりにもできない。

言葉を自由自在にあやつるには、二、三カ月ではたりない。半年、一年勉強しなければならぬ。私は暗然として、いままでの渡華の志がぐらついてきた。その上、章君の周囲には彼をたよって故郷から来た人が何人も失業していた。彼らは言葉ができるにもかかわらず、なかなか就職できない。私と同様、章君の食客である傅君は九州帝大の卒業生で、中国語はもちろん、中国文もなかなか達者であるのに、職業を求めるのに苦しんでいた。さりとて私はいまさらおめおめ台湾に帰るわけにはいかない。大陸に来た以上、一応がんばるより道はない。

いろいろ考えた末、まず中国語の勉強を始めることにして、同宿の傅君に北京語の教師を世話してもらった。かつて電報局に勤めたことのある周という年のころ二十ばかりの女性だった。一日一時間という約束であったが、時には二時間も教えてくれた。北京語の教師の帰ったあとは、じつに無聊でたまらなかつた。時にはこの無聊を慰めるために同郷人をたずねたりしていた。

ある一日、財政部の彭さんを訪問した。彭さんは同文書院の教授で、汪政權成立と同時に財政部の参議になっていた。彭さんの夫人は公学校の女教員出身で、私の五湖時代の友だちだった。彭さんの話によれば、南京で仕事をするには北京語ばかりでなく中国事情にも通じていなければならぬ。北京語も中国文もろくにできない台湾人を使うくらいならば、むしろ日本人を使ったほうがまだだという意見が多いとのことだった。私はこれを聞いて、ますます暗い気持になった。

いくらあせっても、どうにもならない。むしろ実際問題にもどって考えなければならぬ。まず先決問題は言葉の克服だと思つて、午前中は女教師について、午後は余君の家に行つて北京語を習い始めた。

余君は私の五湖時代の生徒で、その細君は満州人で女子師範を出ているので好都合だった。約一カ月勉強したところにはいくらか話が聞き取れるようになったが、自分からしゃべることはなかなかむずかしく、まだ遠いさきのことだった。この時ふとあることを思いついた。いままでの考えを切り替えて、言葉の十分でないあいだ、まず日本の機関にはいつて働きなから中国語の勉強をし、自信がついてからいかに進退するかを決めることにした。このように考えついた私は、さつそく縁故をたどつて日本側への就職運動を開始した。

おりよくそのころ、南京の日本商工会議所で『南京』という本を発刊するために、中国文を日本文に翻訳する人を求めていた。私が申し込むとすぐ採用してくれた。月給は日本円で三百円、実によい待遇だった。この待遇は南京に来て失業している同郷人から羨望の目で見られた。

私の仕事は南京の風俗、習慣を日本文に訳すことだった。翻訳部の主任は牧といって、同文書院の卒業生で中国語も達者だった。しかし、翻訳となると彼が一枚訳すあいだに私は三枚はできた。これでやっと南京に腰を落ちつけることができると思うと、重荷をおろしたような気持ちだった。それから毎日、会議所に通勤して、いままでの憂鬱を晴らすことができた。これから本格的に北京語も勉強しようと思つて張り切ったが、人間の運命ほどわからないものはない。

商工会議所にはいつて七日目に、私の教え子余君が私を訪ねてきた。余君は、満州に長らく住んでいて、汪政権成立とともに南京で軍隊にはいり、いまでは大佐になっていた。軍服を着た凛々しい姿であった。私は貴賓として会議所でいちばんきれいな部屋、会議所に案内した。

ところが、しばらくして会議所の日本人女子事務員が来て、この部屋にはいつてはいけませんといったので、私はむつとして、思わず来客の前で失礼ではないかとどなった。彼女は、書記頭市来の命令だと言う。私は申しわけないが余君に帰ってもらい、さっそく、市来のところへ飛んでいつて、市来の机をたいて詰問した。

「君はどうして、来客の前で私を侮辱するようなことを言われたのか。会議室にどうしてはいつてはいけないのか。もしはいつていけないならば、入社と同時に私に注意すべきだ。たとえそれを言い忘れたとしても、さっきのような時には、私を呼び出してから注意すればよいではないか。また紙に書いてこっそり私に知らせてもよい。それを来客の前でとがめるとは無作法にもほどがある。いつたい、君は日本人か、君のような人間のクズが大陸に来て大東亜を建設するなんて——」

と、私は腹を切つたように一気に吐き出した。市来はどきまぎして、

「会議室にはいつたらたいへんです」

と言つたきり、しばらく言葉もなかつたが、やがて、

「すまなかつた」

と一言私にわびた。牧さんがこの様子を見て走つて来て、

「市来さんがわびたのだから——」

と言つて、私をむりやり引っぱつて連れ出した。私は歩きながらも、

「君のような人間のクズといつしよにいたくはない」

と言いつ放つた。

牧さんは私を別室に落ち着かせて、いまあなたが辞めると一番困るのが私で、ことに南京風俗は訳しにくいからぜひいまままでおやり手伝つてほしいと、拝むように私の辞職を引き止めた。私はシブシブそれならこの仕事の終わるまではいますと、そのまま翻訳の仕事をつづけていた。しかし、私の腹の虫はなかなかおさまらない。とにかく牧さんのために一生懸命、南京風俗を訳して、訳し終わると同時にあっさり辞めてしまった。就職してわずか十日だった。市来は私に百円の金を包んでくれた。当時の物価で百円の金額は独身者なら、二、三カ月はらくに暮らせる額だった。

牧さんはわがことのように心配して、親切に何回となく引きとめてくれた。また、牧さんが南京風俗を終わるまで訳すようにすすめたのは、私の感情をやわらげるための策であつたらうと推

察できた。しかし、牧さんの気持は十分わかっていながら、その好意を素直に受けることができなかった。辞めなければ一生の名折れになると思った。これは、自尊心を傷つけられた私の衝動的な性格からきたもので、持って生まれた私の欠点である。

会議所をやめて太平路をブラブラ歩いていると、いくらか後悔に似た気持が起こってきた。あれくらいのことでもなにもやめなくともいいのに……どうして自分は短気なのかと、われながらあきれてしまった。とにかく、過ぎ去ったことをよくよ思ってもしょうがない。さて、またつぎの職探しをしなければならぬ、こんな不景気の世の中で……と思うと、なんとも心細かった。

最悪の場合、台湾へ帰ればいいと思って、重い足を引きずりながら、章君の家の前の広場にさしかかった時、二、三人の女の子が「満場飛」を歌いながら遊んでいた。急に妻子を思い出して、たまたまなく恋しくなり、なんとなく台湾へ帰りたくなった。

世の中には、捨てる神もあれば拾う神もあるというが、事実そのとおりになった。失業して五日目、思いがけなく南京の『大陸新報』から記者になってみないかと言ってきた。ちょうどそのころ、孫という台湾人記者が辞めるについて、適当な後任を探していた。そこへ私と市来のけんかざたが枝葉をつけて大陸新報社へ伝わった。このニュースの早く伝わった理由は、書記頭の市来は元来新聞記者出身で、会議所の同僚、大野業務部長も新聞記者出身で、この二人は平素大猿の間柄だった。大野部長はさっそく市来と私のニュースを大陸新報社に流した。しかも、私を奇人か英雄のごとく宣伝したので、上野編集部長がおもしろく感じたのだろう。私に記者になれといってきた。

私は上野部長を一目見ただけで、すきになってしまった。爾後、肝胆相照らして語る友となった。入社して落ち着くと、私は章君の家から大陸新報社の二階に移った。社には食堂があり、独身者としては、月二十一円の食費で三度の食事をまかなってくれるのは好都合だった。

私は約二カ月世話になった章君の家を出る時、食費だけは受け取ってもらった。大陸新報社の月給は二百五十円、市来とけんかしたため差し引き五十円の損になったが、それでもなかなかよい待遇であった。同僚の日本人でも、私より若い人は二百円ぐらいだった。差別待遇がないので気持がよかった。

西島社長は漢学の教養が深く、上野部長はもちろん、整理部長の亀井さんも、若い高橋君、中沢君、野田君も人物がよくできていた。ことに亀井部長はドイツ文学、高橋君はフランス文学というように、専門的教養があり、見識も高く、世界観がしっかりしていて、民族的偏見がなかった。

私ははじめて日本人のなかにこんな立派な知識人のいることを発見した。台湾の公学校教員とは雲泥の差である。

新聞記者生活は私にとってまったく新しい世界で、すべて一年生から習わなければならない。毎日仕事に追われ、北京語の勉強も欠かせず、いそがしいながら張り切っていた。仕事がすめば、毎晩遅くまで気ばらしにあちこちと飲まわり、日曜日になると、上野さんといっしょに玄武湖へ遊びに行ったり、雨花台や中華門の戦跡をとむらったりした。

たしか八月の初めごろだったと思う。上野さんと私の二人はブラブラと鷄鳴寺の豁蒙楼に上っ

て、よもやまの話にふけた。おもに時局の話であったが、彼は従軍記者として体験した、蘇州入城から南京攻略の殺戮を回顧して語った後、日本の大陸侵略の誤りを論じ、激昂して日本は天誅を受けると極言した。戦時下、このような言論がばれたら断頭台上らなければならぬことを意識しつつ、台湾人の私に打ち明ける勇気があるとは、これを聞かされた私の方が肝をひやした。

そのおり、つぎの詩三首を作った。

(その一)

嬉嬉共上豁蒙楼

嬉々として共に上る豁蒙楼、

玄武湖辺一望秋

玄武湖辺、一望の秋。

残柳懶將枝葉舞

残柳は懶く枝葉を將つて舞い、

長江難洗古今愁

長江、洗い難し、古今の愁。

山衝薄日容將瘦

山は薄日を衝んで、容瘦せんとし、

塔繞紅雲色欲流

塔に紅雲繞つて色流れんと欲す。

翹首碧迷烟外樹

首を碧迷(青空)に翹ぐ、烟外の樹、

蕭条人影上橋頭

蕭条として、人影橋頭に上る。

(その二)

遙望台城樹欲黃

遙かに台城を望むに、樹、黄ならんと欲し、

荷花激瀾襯紅粧

荷花(蓮の花) 激瀾として紅粧を襯す。

知君抱策蘇民困

知る、君、策を抱いて民困を蘇うを、

何ぞ青山話夕陽

何ぞ青山に対し、夕陽を話らん。

(荷花……蓮の花がささなみの上に美しい姿を見せている)

(その三)

紫金山色紫金罍

紫金山色、紫金罍り、

荒塚堆堆傍夕暉

荒塚堆々として夕暉傍う。

吳越当年爭霸地

吳越、当年、覇を争うの地、

而今惟有白雲飛

而今惟有白雲の飛ぶ有るのみ。

初めは仕事のいそがしさにまぎれて、なにも考えなかった私も、少し慣れてくるといろいろのことが気になってきた。

ある夜のことだった。編集室のそばのはしご段から人のころがってくるような音がしたので、私がかけて見ると、洋車夫がはしご段の下であおむけになってもがいていた。理由をきくと、なんでも社の者が彼の車に乗って夫子廟からここまで来たが、金を払わずに奥へ逃げたので、あとを追って来て打たれたのだという。私がかだれであるか調べたら、工務局長だった。上野さんに事のいきさつを話したら、上野さんは気の毒に思っ、車夫に金を払いなんべんもわびて帰らせた。またある夜は、従軍記者が酒に酔ったいきおいで、中国憲兵(汪政権の憲兵)を柔道の手で投げとばしたと自慢していた。

記者が道ばたで立小便をしていると、中国憲兵がやってきてとめたので、彼は癪にさわって投げとばしたのだ。じつに人を食った話である。

私は、大陸の人は台湾人よりも気の毒であると思った。いまや、どこにいても日本人の天下で、南京で苦勞するのがばからしくなった。

翌日、私は編集室で昨日のことをくり返し思い出しは考えこんでいた。その時、上野さんが来て、日本へ帰って家族を連れてくるといったので、私も刺激されて急に台湾の家族のことが気がかりになって来た。二合三勺の配給米での生活はなんとも暮らしにくいだろう。私はにわかには帰りたいくなってきたので、上野さんに相談を持ちかけたら、上野さんは、君も家族を大陸に連れて来た方がいいとしきりに勧めてくれた。私もその気になり、さっそく旅装を整えて八月の末に故郷の台湾へ帰った。

突然帰って来た私を見て、妻をはじめみな喜んでくれた。しかし、基隆に上陸すると同時に、高等刑事らしい者が私のあとをつけてきた。なんとなく不気味に感じた。それから外出のたびに、私服の刑事がついてきて、台湾ではますます暮らしにくくなった。

初めはふたたび単身でもどる考えだったが、妻の話によれば、私の手紙がくるたびに刑事が来て、口では丁寧に見せてくれと言うが、事實は強制と同様である。また、時々来てはなんとかかんとか言って根掘り葉掘り私の動静を訊き出していた。それはたしかに刑事の職務行為ではあるが、しかし、拒絶すればほかのことでいじめられるであろう。一方、物資の欠乏ははなはだしく、一カ月の配給米ではわずか二十日間しかもたず、あとの十日分はヤミで買うよりほかは

ない。ことに豚肉、魚などすべて配給で、それだけの量では生きていけない状態だった。女一人で毎日三度の食事の世話をしなければならぬのはたいへんな苦勞である。南京も日本治下に等しいが、まだ衣食住の自由はある。私は考慮をかさねた結果、一応避難のつもりで全家族を連れて行くことに決心した。

家族の旅券がおりると、私は一家を引き連れて南京にもどった。南京にもどったからとて境遇が急によくなくなるわけでもないが、そうかといって家族を台湾に残しておくのはなんとなく不安でならなかった。

妻は学問もない田舎娘のまま結婚したので、いままでどおり夫をたよって生活する以外に能力がない。私は言うに言われぬ憐憫の情を感じていた。結婚して十八年、南京での八カ月以外に妻と離れたことがない。現代人の恋愛感情ではなく、夫婦一体の責任感からきた同情らしい。妻は中国語がまったくできない上に、南京のこともさっぱり知らない。仕方がないので、日本人経営の鼓楼アパートを一間借りて家族を住ませた。子供は日本人小学校に入学させた。形の上では落ち着いたように見えるが、事實は困難だらけで、生活の重荷は私の肩にかかってくるばかりだった。

私の生徒余君が時々来てよく世話をしてくれた。妻にとっては唯一の親しい人であり、ひまがあるごとにさみしがる妻を案内して、同郷人や友だちを訪問して歩いてくれた。余君の家にも、何回となく招待されてごちそうになった。

ある日、妻といっしょに余君の家を訪れた時、妻は余君の家の入口ですべてころび、背骨を

強く打った。がまん強い妻は痛さをこらえて家へ帰ったが、万金油を塗ったくらいでは治らない。翌日は起き上がれなくなった。さあたいへん、打ったところは表面から見たところ腫れてもいないようだが、とにかく、医者に見てもらわなくてはと思い、同仁病院に連れて行って見てもらった。結果は骨が折れたとのこと、それからは毎日電気治療のために医院通いしなければならぬ。私は生まれて初めてといっても過言でないほどの困難にあって、身体が二つあっても足りない思いをした。

新聞社の仕事、子供の世話、妻を連れての電気治療と、目のまわるいそがしさだった。妻は絶対安静が必要だし、やとった阿媽（女中）はなまけ者で、物を盗む以外にほとんど能がなく、いちいち指図をしなければ働かない。私は十八年間、家事一切は家内にまかせっきり、ご飯も妻がよそってくれる。子供さえほとんど抱いたことがない亭主閑白で、家庭内での苦勞は経験がなかった。

教員時代から学校の仕事をするだけで、俸給をもらった袋のまま妻に渡して、家のことを考えたことがない。ところが、妻に寝込まれてはじめて、家庭内にもこんなにたくさん仕事があのかと知った。さいわいにして、妻は二週間でもどのように回復した。

妻も初めて「家に在れば千日も好く、門を出れば半朝も難し」を味わった。妻にとってもこの二週間は実にさみしい毎日、私以外にたよる姉妹も親戚もない。比較的親しくして時々家に来てくれる人は余君と彭という私の同窓だけだった。妻も私と同様に子供の時からこれほどの苦勞をしたことがなかった。二人とも世間知らずだった。この世間知らずの二人は、南京に来て、

生活に追われ、他のことを考える余裕もない苦しさを、しみじみ味わった。

妻も全快したので、ある一日、余君は私を誘い出して撫湖へ遊びに行った。

余君のほかに軍資署長および中国軍人二人と私の一行だった。余君は軍服をつけていたが、ほかの三人は私服だった。中華門外の駅から汽車に乗る時、私は日本籍であるから検査の必要がなく、別の改札口からプラットホームに出た。ふと彼らの方を見ると、余君のつれの一人が改札口で日本憲兵になぐられていた。私はびっくりして駆けよろうとしたら、余君が私の袖を引いて戦地であるから先生が出たらかえって具合が悪い、私が行って話をつけて来ますといって、憲兵に二人の身分を話し、事をおさめた。日本憲兵は私服をつけた中国軍人を平民と思ったのだ。

せっかくうさばらしに出かけて来たのに、またもや氣持を暗くしてしまった。

汽車は平野を走りつづけた。窓から見ると途中の山々は、台湾では見られない、なだらかな曲線をえがいていて、なんとも言えない柔らかな絵画のようだった。余君とほかの三人は、先刻の不愉快を忘れたのか、話に興じていたが、私一人は深く考えこんでいた。

日本は南京を占領しているが、城外に出れば別天地で彼らの勢力は及ばない。ただ、点と線の占領で汪政権を擁護して「夷をもって夷を攘う」の政策を用いているが、国内では物資の欠乏が目に見えて来ている。このままだければジリ貧におちて経済的にまいつてしまうだろう。

日本は領台当時、せまい台湾の島を三年目には放棄しようとしたことがある。南京に来ている日本人の横暴ぶりでは民心を得ずして失敗するであろう。しかし、自分はただ傍観していいだろうか。たとえ抵抗しようと思っても、自分一人の力ではどうにもならない。逃げて重慶に行

こうと思っても、家族がついていてはどうにもならない。台湾へ帰ってもここにいても、どうせ日本人の天下である。五十歩百歩、自由と平等は望まれない。ついに考え疲れてうとうとしていた。ふと気がつくとき、もう撫湖に着いていた。

撫湖は古い都で、物産の集散地としてにぎやかだった。私も一行は地方の有力者の招待で、第一流の酒家でもてなしを受け、ほどよく酒のまわったところには停車場での不愉快な事件もすっかり忘れ、女給とたわむれてわれを忘れた。

席上、女の子がおしほりを持って来たが、薄ぎたなくて使う気になれなかったのでことわったら、女の子は、

「馬々虎々」

と、さうしてさうに勧めた。「馬々虎々」とはどうでもよい、そんなに気にしなくてもよい、いいかげんにすればよいという意味である。大陸は、すべて「馬々虎々」で過ごせば、じつに愉快なところである。いまここで酒を飲んでいる人々はみな「馬々虎々」にできるのに、自分だけができない。ちょっとしたことにも、心を痛めたり苦しんだりしている。

そもそも人生とはなにも考えないでいいかげんにその日その日を楽しく暮らせばよいのか、なにも天下国家を考える必要がないのか、自分の力でどうにもならないことを考えるのがまちがいか、ここにいる人々は余君もそうであるが、金さえもうければ愉快に楽しく遊べる。あるいはそれがほんとうの人生かもしれないが、自分にはできない。自分にはつねにいらざること考えながら、それに向かって邁進しようともしない。このような矛盾を抱いて生きて来

た。これが自分の悩みであり、この燃え切れない不徹底な中間的性格が自分を苦しめているのだ。ただ理想にあこがれているだけで、その理想に向かって突進する勇気がない。つねに躊躇、逡巡、不平不満を抱いた、あわれな存在である。子供のころから自分より小さな子にゆえなく打たれても、反撃どころか抗議さえしなかった。兄にいじめられても同様だった。このような性格では、どこへ行っても決して楽土を見出すことはできないであろう。

南京の灰色は台湾より暗かった。これからも、これに堪えていかなければならない。どうしようか。むしろ台湾に帰って百姓になろうか。しかし、戦時下の台湾は労働力不足で、自力では農業もできない。あれこれ考え迷った結果はいつもとおなじ、これという策もないまま、成り行きにまかせるよりほかはなかった。

南京での生活は不便ながら、妻もいくらか慣れて来た。一方、日本の対米政策はしだいに硬化して来た。

来栖大使と米國務卿との会談が行なわれていた十二月八日、日本の海軍は突然真珠湾を攻撃して、おどろくべき戦果をあげた。子供っぽい日本人はよろこんだが、私はひそかにある望みをかけるようになった。

中国はいよいよ米英陣営にはいつてしまった。孤立ではない。たとえ負けても米英と共倒れだ。中国の抗戦はこれからが有望だと思つて、私は血が湧き肉の躍る思いだった。しかし、これはだれにも言えない。自分一人で悦に入っていた。

社内は議論百出、日本人はみな興奮していた。大多数は一時の戦果にまどわされてよろこんで

いた。

人々は毎日の大本営発表に酔っていた。ある日財政部の彭参事の奥さんが私のところに来て、ひそかに相談した。彼女の夫は重慶のスパイという疑いによって、上海で逮捕された。日本の特務機関だったらしいへんだったが、あとで、中国の機関につかまったということがわかった。私は奥さんに、中国の機関なら李士群の管轄で、李士群は周仏海の部下です、あなたは周仏海の奥さんの楊太太ヤンタイトに相談して助けてもらおうようにしなさい。あなたはかつて、楊太太といっしょに日本観光をしたことのある仲ですから、きっと助けてもらえるでしょう、と元気づけて帰した。

彼女の努力で彭参事は一カ月後無事に帰って来た。

彭参事と私が竹林寺へ遊びにいった時のことだった。辺鄙な田舎道を二人はブラブラ歩きながら、久しぶりにのんびりとした気持ちで語り合った。彼の見るところ日本は敗けだと言い、最後にこんなことを私に打ち明けた。僕はいまや「三不怕」(三つのこわいものなし)、「すなわち重慶では少将、汪政権では参事、日本側では日本籍で通っている。僕の胸にはほくろが一つある、これは「胸前一粒の痣、兵権万里」とじまんにしていた。私は、まあ、よく気をつけなさい、事がばれたら首が危いから、とねんごろに注意した。ところが、この「三不怕」の彭参事が、上海でその年の十一月三日の明治節の祝賀会に、日本側により毒殺されてしまった。この時、私はすでに台湾に帰って来ていたので、くわしい事情ははっきりわからない。

妻は日本人の奥さんたちとおなじように、へたな日本語まじりの中国語でなんとか南京での生活に慣れて来た。そのころ、私の小さな娘が百日咳にかかり、つぎに上の子に感染してしまった。台湾に帰ろうと思っても船はない。

当時南京にいる日本人はみな局部の戦勝に気をよくしていたが、私は各方面の状況を研究し、かつ自分の理知で判断して、ある結論を得た。この時期に帰らなければ敗戦の色こくなるころには、もう帰れなくなるだろう。ことに台湾人は日本人として見られる。いざ日本が敗けたとなったら、その報復がこわい。尼港事件や通州事件〔前者は一九二〇年沿海州のニコライエフスクで、後者は一九三七年北京の東にある通州で、ともに多数の日本人が殺された〕が起これらないともかぎらない。これに気がつくのと、私は着々と旅装をととのえて、台湾に帰る準備を始めた。ところがなかなか船がない。上野さんに頼んで上海の本社あて、台湾がよいの船がありしたい、ただちに連絡してくれるよう手配してもらった。

待望の船は二カ月後、おりしもシンガポール陥落の翌々日にはいつて来た。私たち一家はひそかにその船に乗り、無事台湾に帰りついたのは、昭和十七年三月二十一日であった。海上での二日間は、一時間が半日のように長く感じられた。万一アメリカの潜水水雷艇にやられたら親子五人全滅だ。家長としての責任を、はじめてしみじみと感じた。

万一のことがあったら祖先に対してすまない気持ちで、やせるほどの思いをして、やっと基隆の山を見出した時の私のよろこびは一生忘れられない。基隆に着いてからなにも知らない妻に海上の不安だったことを話して聞かせたら、妻は驚きの目で私を見つめたまま、涙をポロポロ落とした。

た。

基隆では上陸後、税関でいろいろと調べられ、四、五冊の本を取り上げられた。税関を出るともう私服刑事らしい者が尾行してきた。私たちはひとまず台北の弟の家に落ち着いて、南京の事情を語って聞かせた。翌日は家族づれで草山くさざんに行き、温泉にはいつて旅塵を洗い落とした。久しぶりで故郷の山河に接し、万感こもこも、生きて台湾に帰れたよろこびを知った。

私は不惑の年になつてもつねに迷いに迷う自分の人生観について、ふたたび検討を始めた。もう、がらにもないことを考えず、このさい、むしろ莊子の言うように、泥水に尾をひきずる亀「死して骨をとどむる」より「生きて尾を泥中に曳く」たとえ、秋水篇に見える」でよろしい。無花果いむかきのように、人の見えないうちで花を咲かせよう。平凡に生きる人生なら食べられさえすれば結構、そうあせる必要もないだろう。世捨人の心境になって、前進しすぎた私の思想を逆もどりさせるように努力した。台北で三日間遊んでから故郷の家に帰った。

竹北の駅に着くや、すぐ派出所の警官が近づいて来て、私を派出所に同行して、いろいろと事情を聞いた。だした。

新埔に着くと、分室に呼び出された。竹北でも新埔でもいろいろの質問を受けたが、別にこれという悪印象を彼らからは受けなかった。

家に帰り着いた翌日には、故郷の照門派出所から二人の受持巡査が私の家にやって来たので、居合させた友だちもまじえて、昼食をとみにした。そのおり、二人は私に向かってこれから外出の時はあらかじめ派出所に知らせてくれといつて帰った。その後も三、四日ごとに巡査が遊びに

来たが、私からなにかを聞き出そうとしているようすが見えた。

帰つて落ち着くと、私はまず章君のことで万轢ばんりくの林君をたずねることにした。林君も私の同窓だった。私は旅行する前に分室に行き、ちょっと南部旅行をしてくると報告した。

私は夜行に乗つて南下し、翌日屏東に下車、潮州行きの汽車に乗り替えようとして、駅に降りた時、旅券申請の時に見覚えのある新竹郡の刑事が私をつけているように思った。しかし、潮州駅に降りて注意して見たが、それらしい者は見当たらなかった。潮州から万轢へ行くバスにはきつと乗っているだろうと注意したが、やはり刑事はいなかった。バスは混んでいた。いよいよ万轢に着いてみると、刑事は私のあとをつけて来た。なるほど、あいつはバスの発車まぎわに飛び乗ったのだなど、気がついた。

しかし、刑事は私がどこの家を訪問するかわからないはずだ。私は急に立ち止まつてうしろをふり向いて、あなたはどこへ行きますかと聞いた。刑事は私のとっさの問いに答えられなくて、どぎまぎしていたので、私はにっこり笑いながら、私は同窓生の林君のところへ行くのです、いっしょに行きませんかと誘った。刑事は私といっしょに林君の門前まで来て、門札を見た上、立ち去つて行った。

林君に途中の出来事を話したところ、林君は、それでは二人で派出所に挨拶に行った方がよいと言うので、さっそく派出所に行つて見たが、あいにく巡査は不在だったので名刺をおいてきた。

南台湾の四月はたいへん暖かく、熱いぐらいだった。夕食後、二人が章君の近況やら南京の話

やらしていたところへ、ゆかたを着た男がなれなれしく、今晚はと言ってはいってきた。私は林君の友だちだと思い、別に意に介せず、林君の持つてきたビールの栓を抜いて、三人でいっしょに飲んだ。酒が始まると、三人はうちとけておもしろくしゃべり出した。ほどよい酔心地になったころ、林君は突然とがめるような口ぶりで、

「小林さん、僕の家に来る客はみんな立派な紳士ですよ。あなたがたに面倒をかけるような人は一人もいないはずだ。安心して飲め飲め」

と酒をすすめながら、皮肉をあびせた。私ははっと気がつき、これが警官か、じつに社交なれた紳士だと思った。小林巡査は少しもあわてず、正直に要視察人についてくわしく説明して聞かせてくれたあとで、むしろ保護の意味も多分に含まれていると言った。三人はまた改めて飲み食い唱って、私も愉快になった。

あとで、日本の高等刑事はたしかによく訓練してあると舌を巻いた。しかし、一方、大陸から帰って来た不逞青年は続々とあげられていった。

帰りは苗栗に立ち寄り、私の若い時にかわいがってくれた五湖時代の古い本島人巡査を訪れた。かつて私が五湖に赴任した時、宿舎がないので派出所の一間を借りて住んでいたことがあった。私は独身だったので、江という巡査の奥さんがよく世話をしてくれた。江巡査はかつて高等刑事を八年もやった経験があるので、私は彼の教えを求めるために立ち寄った。江巡査はいろいろと親切に教えてくれたあげく、要するに彼らは私の行動を知りたいので、むしろこちらから進んで高等刑事に接近して、親しくつき合ったらよい。彼らと友だちになれば決して嫌疑をうける

ことはない、という意見だった。その後も外出のたびにあいかわらず刑事が尾行してきたが、私は少しも苦にせず友だちのようにつき合った。おかげでいつものまにか尾行の数は少なくなった。

大陸から帰って来てすぐは方々から友だちが遊びに来てあわただしいうちに一カ月ほど過ぎ去った。二カ月目ごろからは自分の方から出向いて友だちをたずねまわった。ところが、田舎では百姓が多くて遊んでいる人はいない。

学校、役場以外にはこれという友だちがない。学校も役場も一週一回ぐらいはじゃましてもよいが、それ以上になるといやがられる。とうとう三カ月たったころには行くところがなくなった。

遊びにも堪能したので、私はとうとう就職運動を始めた。あちこちの友だちや縁故をたよって職を探した結果、おりよく米穀納入協会に仕事があり、苗栗出張所の主任となった。出張所は米穀局の外郭団体で、局の威光を借りて仕事しており、おもに米穀の予備検査の仕事をして金もうけていた。出張所での職員は庶務、業務合わせて十五、六人だった。私が苗栗を選んだ理由は、かつて四湖、五湖に十五、六年もいたことのある関係で、たとえどんな事態が起こっても便利で、かつ米でも肉でも顔がきいているので容易にヤミで買えると考えたからである。そして戦争のすむまで腰を落ち着けるつもりで、故郷の家からたくさんの家具を運んできて、日常生活に不便のないようにした。

ところが、思いがけなく、わずか一年で新竹へ転動しなければならなくなった。つまり桃園と中壢出張所の併合による人事移動であった。新竹は飛行基地であぶないので、私は家族を竹北に

住まわせてそこから新竹までかよった。

その年の十月、連合軍の飛行機が新竹基地を襲撃した。突然の来襲で被害は甚大だった。私は新竹に近い竹北もあぶないと思って、家族をすぐ故郷の新埔へ疎開させた。

私も新竹でやられては犬死と同様だ、なんとかして逃れたい。いろいろ考えた末、職を変えることに腹を決めた。いままで台北はあぶないと思っていたが、新竹よりはたしかに安全だろう。台北でなら職を求められる見込みがある。

九 食糧もとほしく八・一五を迎える

大東亜戦争はいよいよ苛酷熾烈となった。日本としては乾坤一擲の戦いで全国力を傾けていたが、国内の物資の欠乏ははなはだしく、国民はことごとく困窮に追いつめられ、栄養不良のための餓相は目に見えてきた。戦局の不利にもなって台湾人の協力がいっそう必要となり、皇民化運動はますます白熱化してきた。私はこの時局に処して、保身の術を講ずる以外に考えることがなかった。

米機の新竹飛行基地襲撃後、私は直覚的に新竹は台北よりも危険であることがわかった。そこで、私は職を台北に求めるための運動を始めた。

私は南京から帰って一年あまり、「南京雑感」を書いて『台湾芸術』という雑誌に連載した関係で、おなじ雑誌の和歌欄を編集している『台湾日日新報』の主筆と知り合っていたので、さっそく主筆に依頼して、『台日』に入社できるよう交渉してもらった。そこで、いろいろの試験の結果、特別採用というかたちで採用に決まった。私は昭和十九年の年が明けるとともに『台湾日日新報』に入社して、ふたたび新聞記者生活にはいった。

入社後の私は、戦争に関係のない記事ばかり書いて、その日その日をごまかしていた。土曜日になると、かならず新埔の家に帰って休み、月曜日には社にもどってできるだけ台北にいる時間を少なくして、空襲の危険を避けていた。

物資は極端に欠乏し、それにとまって企業整備が始まった。本島人の会社までもその手は伸びてきて、本島人の会社には、日本人の重役を一人以上置かなければならないようになった。これに乗じてインチキ日本人で本島人の利益を壟断しようとするものがふえて来た。その手は、ついに新聞社にまで伸びてきた。国策という美名のもとに、全島の六新聞社を一社に統一して『台湾新報』と改名し、つぎには『大阪毎日新聞』が乗り出してきて、これを略奪してしまった。

おかげで、台湾人経営としては唯一の興南新聞も併合されてしまった。『興南新聞』の全財産を拠出して、副社長、経済部長、文化部長という三つの空椅子を得ただけで、その他はみな平社員になってしまった。そして、『興南新聞』系の最高給部部長の俸給百四十五円に対し、『大阪毎日』の平社員の若手編集員は百九十五円という高給だった。私は『台日』系に属し、文化部の記者となったが、俸給はもちろんもとのままの百十円であった。

文化部はたった二人、部長は林猷堂氏の令息林雲竜氏だった。林雲竜氏はやめるつもりだった

が、情報部の圧力でいやいやながら席を置いて、出勤したりしなかったりだった。残りの一人が

私で、この二人だけで文化欄は発足した。(注六)私は台北帝大の教授のなかの反戦論者および厭戦者を利用してさかんに書かせた。金関教授は、物資と物資との対抗戦を分析した論文のなかで、アメリカの大学教授の俸給は日本の大学教授の七倍である事実を引例し、したがってアメリカの物資は少なくとも日本の七倍ないし十倍であるとみなければならないと論じて、現実をばくろした。また、農学部の中村教授は、「ゆで卵」と題する文章を書いて、子供が卵を見たことがないのはいくら説明してもわからない、とのべた。それは、当時の統制経済に対する皮肉であり、諷刺であった。

私は毎日帝大のなかを歩いて、似たような記事ばかりあさって歩いた。もう一つは、これらの教授たちはラジオで外国のニュースをよくキャッチしていて、新聞社よりも新しいニュースをよく知っているからであった。マニラが米軍の手に陥落した時、教授たちはさかんに米軍のつぎの上陸地点を憶測していた。

ある日、私が正宗教授の研究室をのぞいたら、君、これから米軍はどこへ来ると思うか、ときかれた。私は、まあ香港、台湾、琉球、このいずれかであろうが、私は香港だと思おうと答えた。すると教授が、それはどうしてかと言うので、私は、台湾は高山大河があって抗戦しやすい、また琉球は海軍基地で簡単に上陸できない、香港は取りやすい上に宣伝効果が大きく、しかも重慶と握手ができると言った。すると、教授は、いくらアメリカといえども太平洋はやはり広く、補給は困難である、日本上陸にはもっと準備ができないとだめだ、おそらく石油を取ってからくる

だろう、そうなれば先にボルネオへ行くと見るべきだ、と言った。ところが、その判断がいちばん正確だった。それで私は、帝大を足場として記事を取りつつ、空襲の避難所のつもりで、ほとんど毎日のようにそこに通っていた。

この大学の教授たちには、いろいろの派閥があった。総督府の政治に肩入れして、得々として皇民奉公会の顧問になっている者もあれば、それを軽蔑している者もいた。また進んで戦争に協力して軍部の手先になっている者、超然として学問の扉を守っている者もいた。

戦局の危機にともなって台湾の皇民化運動はいっそう熾烈となり、御用紳士を登用して動員部長にしたり、大学教授を顧問に招聘したりして、強化の度をくわえていった。大学総長は台湾語廃止の意見を新聞に発表し、これにつづけて、御用学者が台湾の風俗、習慣を一掃して日本化しなければならぬという理論をさかんに発表していた。そこである日私は、皇民奉公会顧問中井、中村両教授に会った時、これはよい機会だと思って、両教授に向かつて、

「そもそも風俗、習慣というものは幾千年来の歴史と環境によって発達したものです。もちろんそのなかに因習がないとは言えない。しかし、本島人の風俗、習慣がごとごとく悪く、それを全部なくしてしまわなければならない理由が、私にはわからない。また日本人の風俗、習慣がごとごとく善で少しも矛盾がないとはいえない。いま皇民奉公会で台湾人の風俗、習慣が問題になっていますが、あなたがたお二人とも皇民奉公会の顧問ですから、ひとつその理由と、なにを根拠にして論じているかを書いてください」

とたのんだ。中井教授は怒った口ぶりで、

「書かん、書かん」

を連発していた。中村教授は温和な主張を出した。一人が悪いところを書き、一人が良い方面を書いて、保留すべき点をあげればよいという意見だった。しかし、実際にあたって、だれも書いてくれなかった。一カ月後のある日、工藤教授の研究室でこの二人の教授と出会った。あいかわらず話題は時局のことやら世間話であった。その時、中井教授は、私に向かつて言った、

「台湾の新聞記者には、徳富蘇峰のような見識をもっている者は一人もいない」

この矢はもちろん私に向かつて放ったもので、私は、前日のかたきをここでとる考えだなど思つて、負けずに、

「そうですね。新聞記者は元来猿で、木の上にはじめていろいろの芸を演ずることができ、木の下ではどうにもならない。いまや台湾の新聞記者はことごとく木の上から落ちてしまつた。そればかりでなく、飼われているからじつにあわれむべき状態で、自分の意識ではなにもできず、無能に見えるのがあたりまえです。ところが、いまや新聞記者ばかりではなく、自由な身であるはずの学者でさえ飼いならされている者がいますよ」

と言つた。中井教授は一言も発せず、みるみるうちに顔色をかえて、ひじょうに怒っているように見えた。

そこで工藤教授が気をきかして話題を切り換えたが、それでもこのぐあいの悪い対立をやわらげることができないまま、中井教授は研究室から出て行つた。私はすこしやり過ぎたなと思つた。

日本は最後のあがきとして、十八万の関東軍を移動して台湾駐在軍に加え、台湾の要塞化をはかった。そして、台湾の所要所にトーチカを作り、海岸に柵をめぐらした。私の故郷の山々にも地下壕を作つて、万一アメリカ軍が上陸して来たら、ここでゲリラ戦をやるうとした。一方、物資はますます欠乏し、動員も最大限に行なわれた。六十歳以下の台湾人を動員してトーチカ、地下壕、飛行場の作業に奉仕させた。女性も動員されて、砂利採取作業や特種看護婦として働かせた。日本人も、大学生はもちろん、若い教授も召集されて、大学はがらあきになつてしまつた。^(注五)ついに国民学校の児童まで動員して、いろいろの奉仕作業を課した。

銃後では、物的資源はかりでなく、人的資源も欠乏してきた。したがつて新聞社も、日本人記者が召集されると、かわりに台湾人を起用しなければどうにもならない状態になつて来た。そこで、その補填策として本島人の青年を募集して試験を行ない、一度に十四人を採用した。このなかに女性が一人いた。当時日本でさえ、女記者のほとんどいない時代で、これを見てもいかに人的資源が欠乏していたかがわかる。

おかげで、文化部にも王という日本留学中の休学生が一人ふえた。王君は内部、私は外部、部長はあいかわらずほとんど仕事がない。前部長林雲竜氏は辞任して、そのあとにはマニラから帰つて来た葉栄鐘^(注一七)氏が引きついだ。

新聞も物資欠乏のため、十頁から八頁、八頁から六頁、六頁から四頁とへつてしまつた。したがつて文化部のスペースもたいへんせまくなつて、ほとんど仕事という仕事がない状態になつた。

そのころには台湾要塞化の叫びはますます熾烈となつてきて、世間では米軍の上陸を危惧する声がかましかつた。ある日、私が出社すると、文化部長がひそかに私を呼んで、米軍が台湾に上陸するか否かの意見を求めた。私は即座に上陸しないと答えた。部長はすぐ私の論拠を求めたので、私は答えた。台湾は高山や大川があつて米軍の機械化部隊には不利で、日本側にとっては地理的に有利な上に、住民の大方は台湾人である。米軍がいったん上陸すれば日本軍は山奥に撤退してゲリラ戦を展開するであらう。その時、台湾人が第一線に立っては、米軍として作戦上ひじょうに不便である。ゲリラ戦となれば、少なくとも半年か一年ぐらいは持ちこたえられるであらう。現在の台湾は予備役を合わせて三十五万の兵力を持っている。そうなれば、アメリカは少なくとも五十万の兵力を持って来なければならぬ。この五十万の兵隊を台湾にしばらくつけることは日本側の希望するところだが、おそらくアメリカはこんなへたな作戦をしないであらう。私の見解では、米軍はこのさい一挙に日本本土に上陸して決戦をいどむとみるのが至当ではないであらうかとのべた。葉部長は一言、

「そうか」

と言つたきり、深く考えこんでしまつた。

当時、米軍の上陸地点について関心を持っていたのは、本島人の知識階級だった。いったん米軍が台湾に上陸したら、日本の軍部が台湾の知識人をどう扱うかが、彼らの議論の的になつていた。いろいろのデマや憶測があつた。そのなかでも、米軍が上陸することになると、目星をつけられていた本島人の不逞分子をその前に処分してしまうか、または敵前に狩り出してアメリカの

手で整理させるという説が、もっとも知識階級をおびやかしていた。なんでもブラック・リストに載つたものは五、六百人もあり、米軍がいったん上陸したらいつせいに殺してしまうといううわさをもつぱらであつた。各地の特高がそれぞれに受持をあてがわれているということであつた。

戦局の逼迫に反し、文士や知識人はなすべき仕事がなく、かえつてひまだった。しかし、時局を批判する自由さえないので、おたがいひじょうに慎重な態度でつきあつていた。いきおい、話は無難な文学にすることが多かつた。

文学座談会や文学講演会の会合もふえて来た。私は文化部記者として会によく出入りし、工藤教授の文学講演などは毎度出席して傍聴した。

工藤教授はまた、文士や知識人を自宅に集めて毎月十五日に文学座談会を開いていた。その顔ぶれは、文士では張君、竜君、呂君、詩人の王君、記者の張君、王君、医者何君、それに、中村教授、立石画伯および私だったように覚えてゐる。話はおもに文学についてであるが、時には時局の話も出てきた。

ある日の会合の席上、私はかねてから本島人作家のなかに御用文学の作品を書いている者がいるので、この機会を利用してなんとか問題にしたいと思つた。しかし、そのことをあからさまに言えどおりあげてもらえない。正面から攻撃しないで遠まわしに言つて、彼らの反省をうながすつもりであつた。

「ほんとうに文学をやるにはどうしてもディレクタントでなければならぬ。専門になればかえ

って道にはずれて文学の真髓に達することができない」

と、私は話題を提供して、工藤教授と議論になってしまった。あらかじめ腹に一物のある私は、工藤教授の説に賛成しないで、あくまでも自説をまげなかった。ついに私は例をあげて説明した。

「魚釣りを見てください。竿、ビク、ウキ、テグスなど、いちいち吟味してじつに真剣なものである。ところが魚の専門家になると、魚が目的でほかはどうでもよい。文学も同様、専門家は作品が目的で、ほかのことはなにも考えない」

と言ってさらに理論を飛躍させ、

「ゆえに文学もおなじ理由でディレタントでなければならん」と主張した。敵は本能寺にあり、私はあくまでその主張を取り消そうとしなかった。

工藤教授はさすがに文学者であるから、あとでなにか気がついたらしい。つぎの会合の席上で、古さんはディレタントではなくて、しろうとである。だから、古さんの文学にはしろうとのよさがあり、かえって真实性があつてよい、とほめるのかけなすのかどちらともつかないことを言った。

私は私で、このさい保身の術を講ずるのが第一で、小説を作っても発表しないことにした。書きためておいて発表の時期を待つべきであると、心に決めた。私の見方では、歴史の転回は必然的であり、疑う余地はないと思つた。このさい、うんと書きためておこう。いままで書いてきた『アジアの孤児』をぜひ完成しなければならぬ、という衝動にかられた。しかし、空襲のなか

で、待避したり、防空壕にはいつたり出たりしてはなかなか仕事はかどらない。それでも毎日何枚か書いていた。その第一篇ができた時、工藤教授が目を通して大いにほめてくれたが、私はそれを信じなかった。私は私で日本人にちやほやされたくなかつた。しかし、工藤教授とだんだん親しくなるにつれ、初めて彼はほかの日本人とはちがっていることがわかつた。

ある日、私が教授の研究室で世間話をしていると、教授は私に『アジアの孤児』をぜひ終わるまで書くようにとすすめ、同時に時局に対して赤裸々に批判し、暗にあることを私にさとらせようとした。話の終わりに、古さん話をやめよう、これ以上しゃべったら……、とだまって考えこんでしまった。しばらくして言葉をつぎ、近く家族をつれて日本に帰るつもりだ、と私に打ち明けた。

そのころの内台航路はもうひじょうに危険であつたので、私は極力反対したが、どうしても帰ると言う。そこで私は、自分が南京から引き揚げたのと同じ理由からではないかと想像した。おそらく教授の内心では、いざという時、尼港事件や通州事件のような報復を予想しているのではないかと。しかし、私は口にくそ出せないが、そのような時には私の故郷、あるいは関西へ疎開すれば、絶対安全であることをいろいろと説明したが、それでも彼の帰心をひるがえさせることはできなかつた。後日、日本敗戦の結果、台湾の接収は悲劇でなく喜劇に終わったが、決して報復の危険が予想されなかつたわけではなかつた。幸か不幸か、日本の敗戦とともに重慶軍が同時に接収に来なかつたためではなからうか。とにかく満州のようにならなかつたのは、なんとしつてもめでたいことだつた。

工藤教授は、私の呼びかけもむなしく、危険をおかして日本へ帰っていった。私は応梅といっしょに基隆まで見送った。工藤教授は、海岸を歩きながら言った、

「古さん、安全率は五分五分だよ」

私はそれを聞いたとたん、内心はと思った。私には、その可能性は百中の一もないものと思われた。だが、教授の不安をまぎらすために、わざと平静をよそおって、にぎやかにしゃべろうとした。そして、三首の詩を吟じて教授へのはなむけとした。

(その一)

沿道郊原一望平 沿道の郊原、一望平らかなり、

山光水色共澄清 山光水色、共に澄清。

先生此去三千里 先生此より去り、三千里、

難話深愁対月明 話し難く、深く愁いて、月明に対す。

(その二)

山色青青柳色新 山色青青、柳色新たなり、

駅頭離話転相親 駅頭、離れんとして語り、転た相い親しむ。

十分秋色团円夜 十分の秋色、团円の夜、

新店溪頭憶故人 新店溪頭、故人を憶う。

(その三)

基津一望水天明 基津(基隆港)一たび望むに水天明らかなり、

白日金風喜快晴 白日金風、快晴を喜ぶ。

人為多情長感慨 人、情多きが為に感慨を長うし、

心随明月壮君行 心、明月に随って君の行を壮んにせん。

工藤教授の乗った船が出帆してから、私は三日間各方面のニュースを集めてみたが、別に撃沈された電報もはいつていないのでようやく安心した。

工藤教授は家族を日本に落ちつかせると、単身飛行機に乗ってふたたび台湾にもどって来た。教授の話によれば、日本国内の食糧事情はひじょうに逼迫してきて、人々はみな餓相を呈しており、日本の知識人はできるだけ戦争の現実を国民に知らせるようにつとめている、という。工藤教授はふたたび着々と帰国の準備を始めた。蔵書をはじめ、持って帰れないものはみな売りはらった。帰国の準備ができると、文学同人を集めて一夜をおもしろく過ごし、各自が別れをつげ、帰る時には一人一人にそれぞれ記念品を分けてくれた。私のもらったのは陶器製の虎だった。私はその虎にちなんで、つぎの詩を作って礼をのべた。

謝工藤教授臨別贈虎 工藤教授の別れに臨んで虎を贈らるるに謝す

臨別贈一虎 別れに臨み一虎を贈る、

貌古色亦古 貌古く色も亦古し。

屈踞似猫兒 屈踞して猫兒に似たり、

長嘯待何時 長嘯、何れの時を以待たん。

飾在書齋裏

飾って書齋の裏に在り、

伴我縁数奇

我に伴って、縁数奇なり。

電目眈眈視

電目、眈々として視、

雷威凜凜施

雷威、凜々として施ぶ。

汝本山中物

汝本山中の物、

身移性不移

身移って性は移らず。

英雄時勢造

英雄は時勢造り、

不遇独遲疑

不遇にして独り遲疑す。

一怒千山震

一たび怒るときは千山震らん、

慷慨似男兒

慷慨、男兒に似る。

莫負編鬚勇

負く莫れ、編鬚の勇、

損軀可留皮

軀を損じて皮を留む可し。

(最後の二句は、強そうな口ひげにふさわしく、いつかは活躍してみせて欲しいものだ、の意)

いよいよ帰国の前日になって、教授は私を彼の妹の家に招待してくれた。私は苦心の結果得た酒を二本さげていった。教授は、どこで手に入れたか、山羊の肉をすき焼にしてごちそうしてくれた。二人で飲み食いして、酒がたけなわになったころ、彼は以前私とディレッタントのことで議論になったことを何回となくわびた。話は時局に移り、彼の推測では、戦局はそう長くない、

ドイツは早晩降服するだろう、欧州が一応落ちつけば、アメリカはさらに三カ月を費して戦備を整え、本格的に日本本土に迫ってくる、おそらく来年のいまごろは台湾も日本も別天地になってしまうであろう、と言った。そして、私に何回となくぜひ『アジアの孤児』を完成するようにと激励してくれた。すでに書き上げてあった三篇は教授に見せていたが、あとの二篇はまだできていなかった。私は彼の誠意に動かされて、かならず完成することを心に誓った。

大学教授は飛行機に乗れる特権があるので、海上の心配はいらない。翌日、彼は飛行機で日本へ帰っていった。私はなんとなく心ざびしくなり、これが永久の別れになるような気持であった。

工藤教授と交際を始めたころは、彼を怒らせるようなこともあったが、交際の深くなるにつれ、おたがい無二の親友になった。思い出せば、ひところの文学同人の会合では、時のたつのも忘れて話に興じ、気がついた時はすでに午前も三時過ぎということもあった。戦争でいっさいの乗物は動いていない。私は双連、張君は大正町、竜君は宮前町に帰らなければならぬ。幸い月夜でまんまるい月が頭上に輝いていたので、三人は川べりに出てブラブラ歩いた。初めは実に愉快な気持であったが、しだいに疲れが出てきて歩きながらとうとうと始めた。いくら歩いてもなかなか家につかない。どうにかこうにか家にとどりついた時は、もう夜明け前だった。

工藤教授の帰国後、私は一心に『アジアの孤児』の完成に力を入れた。しかし、第四、第五篇を書くにはよほど注意しないと危険である。万一発見されたら最後、このいかんを問わず、反戦者として処刑されてしまう。私はこの危険をさけるために、二、三枚書いては炭籠に隠し、そ

れがたまると故郷の田舎へ疎開させた。それでも心配だった。私の宿舎の前は北署の高等刑事の宿舎で、そのなかには顔見知りの刑事も二、三人いた。毎日ビクビクしながらも終戦の六カ月前に書き終わった。その間おかげで私はほかのことを考えず小説に専心できた。

戦局は一日一日と逼迫してきた。米軍が琉球に上陸する前日、私は故郷に帰って医者の病氣診断書を社に送ったきり欠勤した。これはもちろん仮病で、空襲をさけるためであった。私は家に引っこんでほとんど外へ出ないのに、いつのまにか村の知識階級に感づかれ、彼らはひそかに私をたずねてきた。話は時局のことばかりだった。六、七十歳の老読書人はみな劉伯温「元末明初の学者」の予言や定数論などの迷信に似た謎を信じ、日本の台湾占領は五十年しかつづかないと断定していた。それを私にわざわざ言いよかせるのだったが、私は大いに言葉をつつしんだ。

米軍が琉球に上陸した以上、日本の敗戦はもう必然と見るべきで、かれこれ言う必要もなかった。それよりも、私はいかにしてこの時局を無難に過ごせるかを心配した。米の不足ばかりでなく、野菜さえも手にはいらなくなってきた。軍隊がたくさんはいつてきて、池という池を占領して勝手に魚を取っていった。野菜は各保、各甲、各戸が分担して毎日供出しなければならぬ。そのほか軍の徴用物資はじつに多く、米、豚、牛、家鴨、鶏、卵、馬草、相思樹の皮、塞麻頭の皮、月桃、供仔樹の実など、食用にするものしないもの、実に二十数種もあった。これらの供出物のなかには国策会社が軍の力を利用して徴収しているものもあった。住民はこれらの供出物を集めるために朝から晩まで働いた。

私はこの対策として、小作人から田と畑を少しばかり返してもらい、野菜を栽培した。幸い到家内は農家出身だったので、このような時には私よりけなげによく働いてくれた。家内は野菜の栽培から鶏、豚の飼育まで百姓のおかみさんのようによく働いた。私も手伝ったが、防空壕を掘っただけで手の裏が鱗血し、それが腫れて化膿して、じつに痛い目があった。そういうわけで、家の仕事は家内にまかせ、私は当局に分担させられた物資を集めることや米や野菜のヤミ買いばかりしていた。ことに米穀は肥料不足のためひどい減収だったが、それでも供出量はすこしも減らず、強制的に出させられたので全村が米不足になった。どこの農家も飢餓線上に追いつめられ、豆やそのほか食べられる野生植物で補っていた。農家のなかには当局の要求する野菜の供出量が不足のため、夜間三里も離れた新社へ行って買い集めてくる者もいた。それというのも、供出不足のために郡役所警察課へ呼び出されるのがこわいためだった。

私の家もたいへんだった。食糧不足のためいろいろの病気が発生した。一番小さい息子がビタミンAの欠乏で目が急に見えなくなり、盲になりかけた。私は毎日新埔まで出て、鶏の肝臓を買ってきて食べさせたので、一カ月ぐらいでもとの通りになった。ついで三女の臀部に大きなできものができて急に歩けない状態になり、元気がひじょうにおとろえてきた。仕方がないので、一斤足らずの鶏を殺して栄養の補給をしてやった。とにかくもう一年戦争がつづいたら、食糧不足のために私の家族は何人か倒れただろう。

苗栗へ行けば米ぐらいは分けてくれる友だちもいるが、そこへ行くには汽車に乗らなければならない。汽車に乗るには駅の関所を通らなければならない。そこには経済警察がいつも目を光らせている。見つけれたら自分はともかく友だちに迷惑をかけることになる。そう考えると、行く

気にもなれない。そこで、私は毎日足を捧のようにして親戚や友だちをたずねまわったが、ヤミでもなかなか買えない。農家でも当局の要求する供出米に困って、大家族は分家して各自奮闘しなければ生きて行かない状態になった。この供出米制度と配給米制度のために、親子、兄弟、親戚間の情愛にヒビがはいるほどであった。それに大人一人の配給量、二合三勺では、一カ月の配給量で二十日持ちこたえるのが限度だった。加うるにその他いっさいの副食物が市場から消えてしまつて、まったく飢饉にひとしいありさまだった。

いよいよ稲の穂のさがるころになつて、気の早い連中は父老の言い伝えによつて、まだ十分に熟さない稲を刈つて、それをまずゆでてから搗り臼にかけて米にする者もいた。そのころになつて、私の兄が米を五升ゆずつてくれた。もう稲刈りも近づいて来たのでいくらか安心できるようになった。そこへ、むかし私が照門で教えたことのある范という子の父兄が、私の困っていることを聞いて、わざわざ米を一斗さげて見舞いに来てくれた。その喜びは地獄で仏にあった思いだった。彼の好意には、いま思い出しても目がしらが熱くなつてくる。

月日はあわただしく過ぎ去り、仮病はいつのまにか三カ月たつてしまつた。三カ月も出勤してないので、おそらく社の方で月給はくれないうら。さりとていままさら出勤して万一空襲に会つたら犬死になつてしまう。しかし物価は天井知らずになる。やめてしまつとほかに収入の道がない。どうしようか、いわゆる「朝寝はしたし、飯は食いたし」の状態で、躊躇逡巡していた。その上、五月の大空襲以来、台北はひじょうに危険になつていた。新聞社も一部分新店に疎開した。もうこれ以上考へる必要はない。むしろこのさい、いさぎよく辞表を出すべきだと決心

し、六月中旬に辞表を提出した。俸給が杜絶してから、私は恩給の前借りをして急場をしりだ。

いよいよ稲刈りが始まつて、全村にいくらか生気がよみがえつてきた。しかし、空襲はあいかわらず定期便のごとくやつてくるので、私は毎日裏山に上つて待避していた。ある日の空襲で、私が防空壕にはいるひまもないうちに、グラマンが急降下してきて、家の前を走つていったトラックを追撃した。その流れだまが私の家のすぐ前で飛び散つてきた。そのものすごい音に、私は肝をつぶした。その時、私は逃げようもないので、一番小さい女の子を抱いて、部屋の間で小さくなって運を天にまかせていた。幸い弾丸はトラックに当たつただけで、村にはなんらの被害もなかった。戦争になつて八年、初めて戦争のおそろしさを目撃した。

アメリカ軍が台湾に上陸するだろうといううわさがしきりに口にされた。私は台湾には上陸しないだろうと思ひながらも、いくらかの心の動揺はまぬがれなかった。

八月十五日の夕方、かつての同僚劉君と役員が私の家にやつてきた。彼らの話では、正午に天皇陛下がご自身でラジオ放送をされたが、その声はかすれておまけに雑音がまじつてほとんど聞き取れなかった、という。街長はひそかに郡や州と連絡をとつたらしい。町の日本人は街長の宿舎に集まつてなにか協議している。とにかく重大なことが起きたにちがいない、とくわしく説明して聞かしてくれてから、私の意見を求めた。

私の見解では、降伏か、アメリカ軍の日本本土上陸か、そのどちらかで、もしも本土上陸ならば町の日本人がひそかに集まつて会議をするはずがない。しかし、どちらにしても明日になれば

事態がはっきりするから、このさい、いちばん大事なことは自重することで、おたがい言動に氣をつけるよう注意して、二人を帰らせた。彼らが去ってから、私は熟慮の結果日本降伏と判断して、さっそく旅装を整えた。

私は夜が明けるとともに台北へ行くために家を飛び出した。竹北の駅についた時には号外が出ていた。日本の無条件降伏だった。駅に集まっている者は、号外を見ても別にさわりだりしてはいなかった。竹北の田舎では、日本が降伏してもまだ警察のおそろしさにおびえて、だれもそのことを口にしようとはしなかった。しかし、ここに集まっている本島人のそれぞれの顔には、あの種の期待からくる心中の喜びの色をかくすことができなかった。

十 「光復」の歓呼のかけに痛みを思う

台北に出てみると、疎開先から市民が続々と帰って来て、まずおたがいの無事を知ってよろこんでいた。私は台北に着くと、まず弟の宿舎にとんで行った。弟の家族は故郷の田舎に帰っていたが、弟は職務上一人で台北にがんばっていた。弟の無事を知って安堵の胸をなでおろした私は、すぐ新聞社へかけつけた。記者連中は、私が病気で休み、辞職したことも知っていなかった。日本人記者は自発的にしりぞいて、もとの興南新聞社の連中にバトンを渡した。

『興南新聞』は、羅社長を中心に陣容を整えた。社内はもとの『台湾新報』のままであり、下っばが本島人だったので上層の日本人がしりぞいても仕事に支障はきたさなかった。私は呼びもどされて、編集部にはいった。新たに中国文の新聞を発刊し、日本文の新聞はそのままつづけた。私の仕事は、日本文を中国文に訳し、中国文の短評を書くことだった。短評の執筆は正式の接収のあるまでのごく短い期間だけだった。『興南新聞』系統の記者はほとんどそのまま居すわった。

市営バスが回復すると、町は戦前のように急ににぎやかになった。全市は祝賀のためにわきかえった。長年影をひそめていた花灯、花籃、繡彩を取り出して飾り、爆竹をバンバン鳴らしたので、町中が歓呼のルツボと化した。やくざ者のなかには、爆竹を鳴らして往來の日本人の足もとに投げつけて、いたずらをする者もいた。しかし、このとき日本人は隠忍自重して、黙々とその侮辱に耐えていた。私はそれを目撃することに、心中の苦痛に耐えられなかった。

五十年間の植民地的桎梏から解放された島民は、もう有頂天になってはばかりな何物もないありさまだった。この思いあがりから血管まで膨脹して来て、熱血があるだけで三民主義模範省が建設されると思ひこんだ。六百万島民は興奮のあまり、台湾をすぐさま日本時代よりもすばらしい楽園に作りかえようとした。

われわれ新聞記者は、じつに虚心坦懐だった。「建設三民主義模範省」というスローガンを高くかかげて、この理想に邁進した。

島民は一日千秋の思いで、あたかも孤児が暖かい生母を迎えるような心地で、祖国の軍隊のくるのを待っていた。だが、なかなか接収に來なかつたので、政治はまったく真空状態になつてし

まった。

そこで、島民は自発的に各街庄ごとに三民主義青年団を組織し、みずから各地の治安に当たった。政治の真空時代に処して、これほど民心一致立派に自治ができた例はおそらく世界政治史上にもまれであろう。これら青年団員は報酬ももらわず、だれの命令も受けず、八月十五日から接収員の來台するまでの二カ月間の治安を確保した。ことに夜間は冬の防火警戒のように輪番で各地の青年がその任に当たり、一糸乱れずこの真空状態を無事に過ごしたことは、島民の誇りとして特筆大書する価値があると思う。

この時の島民の心理は「見よ、われわれの国は……」という、日本人への抵抗であった。つまり五十年間強制的に日本人の下に置かれていたが、それでも台湾人は屈することなく、つねに精神的に対抗していた。学校でも、運動場でも、各職場でも日本人に負けないようにつねに競争していた。日本人はあくまでも優越感をもって台湾人よりも優秀であるとうぬぼれ、台湾人は自らは漢民族で日本人よりも文化が高いと無意識のうちに精神上の競争をしていた。言いかえれば、日本人と台湾人が五十年間台湾で道徳の競争をしていたと言えよう。その証拠に、台湾の治安のよさは日本内地に劣らないばかりか、うそを言わないこと、信義を守ることなどは、むしろ日本内地よりすぐれていたと言えよう。

治安の一例をあげよう。私が四湖にいた時のことである。暑中休暇にはいり、五十日間私は故郷の家に帰った。宿舍の戸のかぎはかけておかなかった。夏休みが終わって宿舍にもどった時、壁にかけておいた背広はそのまま、そしてポケットには父がくれた金の指輪が一つそのままはいつていた。帰省の時に持って帰るのを忘れたので、もうなくなっているだろうと思っていたが、ポケットに手をつ突っ込んで見たらまだそこにあった。また十五年間、四湖、五湖の田舎に住んでいたが、私は外出の時に宿舍の錠をかけたことはない。それでも物のなくなったためしがない。ここまで治安を確保したことは、もちろんおにも警察の力であるが、しかし、台湾人と日本人が精神的に競争していた事実は見すごすことができない。

いまやまったく解放されて祖国のふところに帰った。もはや植民地人ではない真の祖国の人民である。六百万島民は、心一つにして三民主義の理想国家を建設するのがわれわれの義務であり責任である、と自覚するようになった。元来、国家愛というものは、亡国の民となつてかえって熾烈となり、国なきがゆえにますますあこがれるものである。それもそのはずだ。植民地となれば政治的差別ばかりでなく、教育の不均等、待遇の不均等、機会の不均等と、じつに言うにわれぬ辛酸を味わわなければならない。この苦しい経験をした島民は、いまや日本から解放されて自由を取りもどしたので、みずから進んで祖国に奉仕しようとした。

新興気分は都会から田舎のすみずみまで行きわたり、男女をとわず進んで中国語の習得につとめた。中国語を知っている者は進んで教師となり、無償で講習会を開いて奉仕した。また、漢文（中国語）講習会も雨後の筍のごとく林立しはじめた。人々の心にあるただ一つの希望は、三民主義模範省、日本よりも立派な国の再建であり、その意気ごみはじつに壮といわなければならぬ。しかし、実際には、理想は高くとも、現実がそれに追いつかなかった。たとえば汽車の運行は本島人の手によってうまくいったが、戦争のために四百両の機関車のうち二百両は破壊されて

使い物にならず、また車両もたくさん破壊されて補充ができない。加うるに戦後台北へ出てくる者が多く、そのために汽車の混雑は戦時中よりもひどかった。各方面とも思うようにならないことが多かったが、それでもみな時難の克服に一生懸命努力した。

新聞社もえらい意気こみだった。思う存分自由に記事が書けるので、鳥が籠から飛び出したような気持であった。毎日祝賀の記事が紙上にぎわし、六百万島民は光復の夢に陶醉していた。その間、何人かの中国空軍の軍人が台湾の状況を調べにやって来た。島民は大いに歓迎した。

九月六日には、長いあいだ日本に抵抗した林献堂氏ほか五人の功績が認められ、南京で行なわれる九月九日の受降典礼に台湾人の代表として参加せよ、という通知が国民政府から来た。この消息が伝わるや、林氏の名誉はすなわち六百万島民の名誉であり、彼の心境はすなわち台湾六百万人の気持を代表するものとして、みなよろこんだ。一方、接収要員はなかなか来ない。

その間、「歡迎国民政府準備会」を各市街庄で組織して、着々と準備をしていた。台北をはじめ各都市、田舎の街庄にいたるまで、きれいな光復（祖国復帰）慶祝のアーチを設けた。家ごとに光復にちなんだ紅い門聯、横彩、紅灯をかかけ、歓迎の意匠をこらして國軍の光臨を待った。戦時中の暗い影が一掃されて、じつに明朗そのものだった。

九月九日の受降典礼に参加した台湾代表林献堂氏の一行が南京から帰って来て、台湾信託を中心に大公企業公司を組織した。発起人には元台湾地方自治連盟（注一八）の歴史を主とし、その他ほとんど全島のインテリを網羅していて、資本金一億円の大会社だった。台湾銀行の通貨発行高は戦前までは八千万円だったが、民国三十二年（一九四三年）には三億となり、終戦当時は五億円にな

っていた。これによっても当時の一億円といえはいかに大きいものであったかが想像できよう。終戦時には、通貨は戦前の五倍になっていたが、強制的国民貯蓄により、事実上民間に流通していた通貨量は戦前とおなじだった。

初めの計画では、これを親会社として、日本人経営の民間工場および日本政府直営の鋳工業会社を接収して経営するつもりだった。たとえば、民間鉄工所とか、製茶工場、製氷会社、レンガ工場、炭鉱とか製薬工場など、または映画館、旅館など、日本の民間人が経営しているものはおびただしい数であった。これらを政府の外郭団体とし、政府を補助するために、接収しようとしたのであった。

当時は、愛国の熱に燃えていた島民は、田舎のすみずみまでこれに呼応し、こぞって大公企業に投資したので、期せずして資金は集まった。

林献堂氏は、また海外へ徴用された軍属、軍夫、海軍少年工、特種看護婦などで淪落して台湾へ帰れないもののために「台湾省海外僑胞救援会」を設立してその救済に当たった。海外へ行っている全島各地の家族から五十円ずつ募集した。私の姪も日本にいて帰って来られないので、兄がそれに応じて五十円出した。その他有志の寄付などを集めて六百万円以上になったが、その救済はあまりよい成績ではなかった。これも、その中心は台湾信託公司で、寄付の決算報告がないのは、台湾信託の陳氏が林献堂氏の名義を利用して、その金を流用したためだとうわさされていたが、その真偽は分からない。

八月十五日から十月五日までは政治の真空状態であったが、島民は、大公企業公司や海外僑胞

救済のために気を使ったり、新しい事象に対応して中国語を習ったり、歓迎準備に気を配ったりして、案外太平無事な二カ月であった。この間、上海の商人が、機敏にも衣料をはじめその他戦時中に欠乏していた品物を運んで来ては、台湾の砂糖と換えていった。つづいて福州、厦門、汕頭、香港などの商人もきそって砂糖をねらい、いろいろの物資を運んできては砂糖に換えていった。ことに戦時中に消えてしまった肉類、塩魚類、卵などの食品を大量に運んで来た。おかげで戦時中の飢餓状態から解放され、六百万島民はまったく戦勝と光復のよろこびに酔いしれていた。そして、国軍の光臨を一日千秋の思いで待ちに待った。

十月五日、台湾行政長官公署秘書長兼台湾省警備總司令前進指揮所主任葛敬恩中将が、飛行機で幕僚一行八十余人とともに台北についた。これらの接収員に対し島民はこぞって歓迎会を催した。同郷とか同姓とかでさらに歓迎会を挙行して、台北は毎日お祭り気分できわいでいた。

八月十五日から十月五日までの政治の真空状態のころ、上海、福州、厦門、香港から商人や機主主義者、政治的逃亡者（漢奸）などが、政府の接収員の來台以前にたくさんはいつてきた。事情を知らない本島人や日本人などは、大陸から来た比較的知識のある者を中心とく接収員であると錯覚して歓迎した。これらのインテリ連中は日本人の無条件降伏の弱みにつけこんで、勝手気ままに日本人の家屋に侵入しては、虎の威を借りて、いろいろの物をごまかしていた。

一方、日本の統制経済は終戦とともに崩れてしまった。八カ年の戦争で物資は欠乏し、疲弊困憊している上に統制経済の体制が崩れて米の配給がとだえがちになったため、米価は毎日上がる一方だった。ことに日本の政権にすがって生活していた官吏、サラリーマンなどは一ばん先に悲鳴をあげてしまった。その上、台湾銀行では日本銀行券の千円札の上に台湾銀行という文字を入れて発行したため、貨幣は急に膨張してますます物価の上昇を促進してしまった。職をなくした日本人官吏はすぐさま生活難に追われ、ある者は家族を外に出して働かせ、子供はタバコ売り、女は露店を始めた。罪のない純真な子供たちが学校を休んで街頭に立ち、通りかかる往来の人々に頭を下げて、

「おじさん、どうぞタバコを買ってください。」

と言って哀願する姿には涙を誘われた。ある日、『新建設』の女記者角さんに逢ったところ、仕入れたタバコが一つも売れないので古さん買ってくださいなどと、懇願された。じつは私はタバコを吸わないのですが、というところ、角さんは情ない顔をした。よく聞いてみると、彼女はタバコを仕入れて商売しようと思ったのにも一つも売れないので、友だちを見つけたい売りつけているが、もう二度とこんな商売はできないということであった。

私は、それなら買おうと言ひ、いくつ持っているかと聞くと十六、七個しか持っていないというので、私はそれを全部買った。角さんは、目を丸くしてそんなにたくさん買ってどうするつもりかとときくので、私はこれからタバコを吸うつもりですよ、とごまかした。彼女は不審そうな顔をしたが、私は大まじめで、

「本当にこれから習うのですよ、角さん」

といって全部持って帰った。角さんの気持を軽くするつもりでうそを言った私は、そのタバコをタバコ好きの友だちにやってしまった。

敗戦のみじめさがいかなるものかは知る人ぞ知る、実際にその境遇にならなければ説明だけではかるのではない。思えば私は戦時中の南京であわれない中国人の姿やたくさんの乞食を見た。戦争にだけは敗けるものではないと思った。

また、ある日、『台湾日日新報』時代の同僚で小島という日本人記者が私に、大正町のある金持の家に住みこんでくれないか、その人たちが日本に引き揚げたら、その家を私に渡す、と申しこんで来た。つまり私の新聞記者の名義を借りて、インチキ接収を防ぐためであった。しかし、私は人の弱みにつけこんでただで養ってもらおうのがいやで、それをこわった。

十月十日は、台湾開闢以来の第一回双十節であった。全島いたるところで慶祝典礼を挙げたが、なかでも台北公会堂（中山堂）の慶祝典礼は歴史的な大典礼だった。

当日は午前八時ごろから多数の民衆が公会堂の前に集まり、押し合いへし合いの大にぎわいであつた。

市民、学生、各団体の行列は、戦前の五月十三日に毎年行われた大稻埕だいとうけいのお祭りよりもさらに盛大だった。詩意芸閣（祭礼の山車に芝居の役に扮した人が乗っている）、獅子隊、竜舞、各種の楽隊、武装した大刀隊、さては范將軍や謝將軍（城隍廟の神様）をかつき出し、太鼓をドンドン、ドラをジャンジャン鳴らして公会堂の前をねり歩いた。行列はつぎからつぎへとつづいて果てしなかった。市民総出で、遠くは高雄、台南、嘉義、台中、新竹各地からも集まった。

公会堂のなかの会場では、全島の有志が一堂に集まり、階上、階下は立錐の余地もなかった。壇上には前進指揮所のお歴々が臨席して、式は、予定どおり午前十時に軍楽隊の吹奏する囃りやうやう呪

たる国歌から始まった。私は祝賀典礼の記事をとるために列席していた。三鞠の礼、国父遺囑の奉読を型のごとく行なったのち、司会者の演説、貴賓の祝辞があつて、会場はいよいよ感激のルツボと化した。そのあとを受けて各地からはせまじた代表が入れかわり立ちかわり壇上に立って演説した。私も興奮してきた。もしも二カ月前に台湾人がこの壇上に立ってこのようなことを言ったら、すぐその場で逮捕されて殺されてしまったらう。

かつて林献堂氏が祖国に行き「祖国」という言葉を使ったことが上海の新聞に載っただけで、在台灣日本人の右翼が林氏の頬を打った。現在は、台湾人が、祖国という言葉ばかりか、自由に日本帝国主義を攻撃し、日本の植民政策を罵倒しているではないか。二カ月前のこの壇上では、大東亜聖戦を高唱し、中国を打倒し米英を撃滅せよと日本人が絶叫し、台湾人の御用紳士がこれに附和していた。

歴史は移った。御用紳士のかわりに、日本帝国主義に抵抗した本島人が雄々しく三民主義模範省建設を叫んでいる。八カ月前に、私はこの公会堂に召集されて「俸給生活者一日強制労働」の会議に出たことがあつた。名前は会議であつたが、じつは威嚇であつた。私の前列にいた若い本島人の青年五、六人がちょっとしたことでも在郷軍人に叩かれたのを見た。彼らははじめからいらだっていて、腹いせのために殴っているようだった。私は憤慨にたえなかったが、手をこまねいて見ているより仕方がなかった。

しかし、いまはちがう。日本帝国主義のきずなから解放されて自由になったのだ。しらすしらすうれしくなってきた。かつて新埔公学校の運動場で郡視学に頭を叩かれたことも、一生懸命働

いても俸給はいつも同期生より少なかった不平も、いつも辺鄙なところへ左遷された不満も、懸命に働いたのに日本人だけが六割加俸されるという差別を忍受したことも、一時に消えてしまった。胸は熱くなり、感激の涙がポロポロと落ちてきた。

式の終了後、新聞社に飛び帰り、自分の感激を綴って社に出した。翌日の新聞には、おなじく記事とりに行った王君の感激文が私のよりも光っていた。彼の「痛定思痛（痛み定まって痛みを思う）」と表現した見出しは、二十二年経たいまでもあざやかに覚えてる。彼は私とおなじ師範出身で、私の一期後輩だった。彼は日本に留学して、『蘇の道』という詩集を出したために日本官憲からにらまれ、中学の教師をやめさせられ、日本人の妻とも別れて上海へ避難したが、中日戦争が起こると、抗日分子として逮捕され台湾に送還されて圜（わ）の人となっていた。出獄後『台湾新報』にはいつて『台新旬刊』を編集し、光復後は『新生報』の編訳部にはいり、私とおなじ仕事を担当していた。日本時代に彼の歩いたコースは彼の詩集のとおりいばらの道であり、いきおい彼の書いた光復の感想は私よりも深刻だった。

待ちに待った国軍は十月十七日に光臨した。全島六百万の同胞は斎戒沐浴して迎えた。老若男女総出で全都はわきかえるようなさわぎだった。長官公署の前には、日本人の中学生、女学生、高等学校の生徒、民間団体、紳士から大学教授までが、ずらりと大通りの両側におとなしく立ち並んでいた。その前をドンドン響く太鼓の音、ジャンジャン鳴るドラの響きを残して、長い行列が通っていった。学生、団体、三民主義青年団、獅子隊が光復の幟を先頭にかけて、意気揚々と松山の方へ行進していった。范將軍に謝將軍、チャルメラ、南管、北管（それぞれ中国の南部お

よび北部の歌曲）など、十数年来影をひそめていた中国色がつきつきに繰り出されてきた。五十年間の皇民化運動も一日で吹きとばされてしまった。

私がふと日本人側の方を見ると、だまってさびしそうな姿で行進を見ていた。だれもさわぐ者はない。心中どんなにか無念に思っていることだろう。秋の陽光はまだきびしい光を放って彼らにそそいでいた。日本人は、「支那兵」に降伏しなければならぬとは、おそらく夢にも思わなかっただろう。しかし、それが現実の姿であれば致し方もない。無限の涙をのんで、おとなしく彼らを迎えなければならない運命にあった。

私はこの時、こんなことを考えた。そもそもこんどの戦争の始まりは「暴支膺懲」であった。最初は華北を取るつもりであったが、上海、南京と戦局は広がり收拾がつかなくなったので、軍部は武漢、広東を封鎖すれば中国はかならず降伏すると国民に呼びかけていた。ところが武漢、広東を封鎖しても抗日戦争はいかかわらずつづいていた。そこで日本軍部はうそのスローガンをかけて「近衛三原則」を出し、汪精衛をかつぎ出して「夷をもって夷を制す」の政策で中日両国民をあざむこうとした。しかし、四億五千万の中国国民は日本侵略の野心を知り、その手に乗らなかつた。そこで日本軍部はその責任を全部英米に転嫁して日本国民をあざむき、盲目的に大東亜戦争へと突進した。結果は惨敗となった。

日本国民もじつにあわれなもので、若い青年が幾百万も戦没し、孤児、寡婦はうようよしているだろうと、とりとめないことを考えているうちに、ふと若く美しい一人の日本人寡婦が私の思惟のなかにはいりこんで来た。それは五湖時代の同僚だった。二十年間の教員生活中に何人かの

女教員と心安くはしていたが、日本女性は彼女一人だけだった。毎晩、私の宿舍に訪ねて来て小説のことを語ってくれた女性だった。彼女は文学少女で、天真爛漫、かわいらしい大和撫子おんこで、私に対しても少しの優越感を持たなかった。のちに農学校出身の教員と結婚し、夫は彼女と子供三人を残して戦死してしまった。そうだ、一体彼女はいまごろどこにいるのか……、さぞ困っているだろう、一度見舞いに行こうか、だが、ほんとうに困っていたらおそらく私をたずねてくるだろう。こう思いついた私は、いつかおりをみて彼女を探そうと思った。

彼女はもしも周囲の反対がなかったら本島人と結婚していたはずだ。当時、彼女が自分の自由意志にしたがっていたら、こんなにつらい目にあわなかったかもしれない。そう思うといっそう気の毒になり、同情の涙に誘われた。

どつとあがった万歳の声私の思惟をたち切った。その声は山河をゆさぶるように、いつまでもつづいて消えなかった。各自思い思いに旗を振り、旗の波は揺れて前方はよく見えない。だから声が聞こえた、

「ああ、来た来た、祖国の兵隊さんが……」

私は背のびをして見た。だれもかれも傘を背負っているのが異様に感じられた。なかには鍋をはじめ食器や夜具をかついでいる者もいた。ちょっと変に思ったが、これがすなわち陳軍長所屬の陸軍第七十軍だった。私はしいて自分の感情を抑制して、たとえ見かけが悪くとも八年間日本軍と勇ましく戦ったのではないか、じつに勇ましい、いまのこの姿はやむをえないのだと思いつくと、やはりある満足感をおぼえた。けれども、これは私の一人よがり過ぎなかった。

裝備の完備した活発な日本兵を見なれた本島人は、口にくそ出さないが、心中やはりある物足りなさをおぼえたようだ。一部の口の軽い青年たちは、かげでこそそことあれこれ言っていた。

国軍の光臨した翌日であった。大稲埕の民衆が日本人警官に対し、暴力を加えたという記事が新聞に出た。その午後には大稲埕の日本人警官二人がまた犠牲になってしまった。私はこれ聞いてすぐ編集局長に注意した。もしふたたびこの記事を出したらその結果がどうなるかよく考える必要がある、もしもこのようなバカな記事をつづけて出したら、それとばかりに愚民どもが東門の日本人宿舎になだれこんで、日本女性に対し暴行をしかけるだろう、そうしたら最後、国軍わずか三千に対して、日本軍は正規兵十八万三千、在郷軍人を合わせて三十五万もある、その三十五万が動き出したらどうなるか、まず新聞社がつぶされるだろう、われわれの命も危い、と。幸いに大きな危機はまぬがれた。

祖国にあって抗日戦争に参加していた本島人が前進指揮所主任とともに台湾に帰って来た。そのなかの一人は私の同学の先輩であった。彼の歓迎会に出席した私は、その席上で、彼からこんな演説を聞いた。

「そもそも中国はふしぎな国で、日本とはすこぶるちがっている。日本では2×2はかならず4で答が一つしかないのに、中国では2×2は3になったり、5になったり、はなはだしい時は6や8になったりもする」

私はどうしてもこの話は解せなかったが、ずっとあとになってこの謎がとけた。これは一種の警告で、いままでの考えを切りかえなければ中国社会に適用しないという寓意だった。

十月二十四日、陳儀長官が就任し、あけて十月二十五日には台北公会堂（中山堂）において受降典禮があった。この日の慶祝は第一回双十節よりもさらに盛大であった。二カ月もかけて準備した催しものを全部繰り出して盛大な慶祝行列が行なわれた。三十万の市民がこれに参加し、詩意芸閣はもちろん、幾十年影をひそめていた古い武器、青竜偃月刀、鉄叉、鋼球のようなものでかつぎ出しての長い長い行列が、太鼓のドンドン、ドラのジャンジャンの伴奏で進んで来て、公会堂の前になると万歳を三唱した。行列はつぎつぎといつまでもつづいた。

公会堂のなかの式場は階上、階下とも参加の人でぎっしりつまり、壇上の中央前面に国父の像がかかげられ、壇上の両側には將軍たちが綺羅燦然として並び、來賓席には連合軍の將軍や使節が光臨していた。童顔の陳儀長官はとくに晴れやかに見えた。やがて歴史的な受降典禮が始まり万歳の声は会堂をゆきぶり、拍手の音は万雷のごとくひびきわたった。こうして台湾は完全に祖国に復帰して、五十年の植民地生活から解放された。

私はこの日のあることをこれまで夢にも思わなかった。いまこそ日本時代よりも立派な新台湾三民主義模範省をつくらなければならないと心中堅く堅く決心した。これは私一人の理想ではなく、全台湾の民衆、六百万島民の熱望であった。

無念なことにこの感激はいつまでもつづかなかった。いまから五年前の光復節に、私はつぎの詩を作った。これも光ばかり見ていた光復当時には夢にも思わなかった、後日の感想である。

光復節有感 光復節、感有り

(その一)

光復十七載

瘡痍迄未収

劣紳欺百姓

金棒出風頭

稅吏敲商戶

貪官上酒樓

自由只高唱

為国幾人憂

光復、十七載

瘡痍迄に未だ収まらず。

劣紳、百姓を欺き、

金棒、風頭を出す。

稅吏、商戶を敲き、

貪官、酒樓に上る。

自由、只高く唱われ、

國の為に幾人か憂うる。

(第四句の金棒は、日本語のカナボウで、いいかげんな指導者のこと。「出風頭」は出しやばること)

(その二)

回憶作奴役

淪亡五十秋

過喉忘苦熱

憂国愧前羞

舞弊官商結

滿城風雨愁

馬関条約恨

痛定再思不

回憶す、奴役を作せしことを、

淪亡、五十秋。

喉を過ぎて苦熱を忘れ、

國を憂いて前羞を愧ず。

舞弊(弊悪官出)、官商の結、

滿城、風雨の愁。

馬関条約の恨みは、

痛定まって再び思うや不や。

十一 接收に来た外省人との抗争

陳儀長官は、就任早々、快刀乱麻のごとく日本人の貯金を凍結し、同時に日銀券の上に台湾銀行と刷った千円札の使用を禁止した。この処置は実にあざやかなもので、きわめて短い期間に行なわれたので、日本人に銀行から多額の貯金を引き出す余裕を与えなかった。正直な日本人に対してはいくぶん気の毒ではあったが、一部インチキ日本人の経済操縦の片腕を切ったわけである。それでも、銀行につながりのある大きな鼠はやはり逃がしてしまったということであった。

陳儀長官の部下には、このような有能の士もあつたが、なかにはレベルの低い者も相当いた。「良莠そろわず」の感がなきにしもあらずで、事実、民主主義的進歩分子もいれば、その反対に封建主義的頑固者も相当いた。全体からみれば現代知識を持っている者は少なく、古い官僚的な人間がとくに多い。一番ひどいのは、「三刀」といって剃刀(床屋)、菜刀(料理)、剪刀(裁縫)などの連中もまじっていることであつた(三刀は、日本時代台湾に居住していた華僑に比較的多かつた)。接收員の大多数は戦勝は自らの力によって得たものと思いがかり、独りよがりの優越感を持つ者がとくに多かつた。彼らは自分たちよりも知識のある本島人を使う気になれず、その上接收人員も不足していたので、そのすきに乘じた上海人をはじめ、各地から流れて来た機会主義者、商人、政治亡命者および本島人の一部の機会主義者、インチキ分子がそのなかへまぎれこんでしまつた。

もとより、この接收陣営のなかには、抗日英雄もあれば愛国者もいたであろう。しかし、大河の流れは一本の木では支えられない。大多数の者は戦勝ワルツを踊り、太平の夢を見て、緊縮生活から急に奢侈享楽の世界へと進軍した。この享楽思潮はおそろしい勢いで各方面に広がってしまった。いよいよ接收の段ともなれば、もう眼中に国家の利益というものはなく、私利我欲のために不正をあえてし、いわゆる「発国難財」「国難をくいものにして金もうけをする」のために血眼になつていた。彼らのめざすものは「五子」といって、第一に金子、第二に房子、第三に女子、第四に車子、第五に面子であつた。つまり金、家、女、車を接收し、面子を保って楽しく暮らすというのが目標だつた。

当時、この不正な接收には、本島人の燃えるような愛国感情から見ると、じつに耐えきれないものがあつた。

世間では喧々囂々けんけんしょうしょうとこれを非難し、かつ攻撃を始めた。「民報」「新生報」の日本文版をはじめ、その他の新聞雑誌も力を集中して不正の暴露記事の特筆大書した。しかも大きな不正事件が暴露されるごとに、陳儀長官がかつて「総理記念週」(総理とは孫文のこと)集会で訓戒した談話を新聞紙上に発表したが、彼らにとつては馬耳東風、少しも効果がなかつた。

日本の無条件降伏は日本天皇の命令であつたから、日本人はおとなしくその命令に服し、どの機関も紳士的態度であつさり接收員に引き渡した。まさに「忠臣蔵」における赤穂城の明け渡しのごとき感があつた。この男らしい態度は称讃するに足るものであつた。

各機関が接収されて日本人のかわりに外省人（光復後大陸から新たに来た人々）がそのあとに坐り、下にいた本島人はそのまま残っていた。そのために事情にくわしい本島人が下になり、事情を知らない外省人がことごとく上になって、大きな矛盾をはらんでしまった。これでは政令がうまく運用できるはずがない。本島人はやりきれない気持ちになって嫉妬を露骨にあらわし、外省人は、どうせ上部はみな外省人同士で、いわゆる「官官相衛」「役人はたがいにかばいあう」というわけでおたがいに擁護しあっているのだから、自然優越感を持ち、本島人を軽くみるようになった。そればかりでなく、自己の特権を守るために本島人は日本の奴隷化教育を受けたから、もう一度教育をしないおし再訓練しなければ使えない、という理論を案出して、ついに本島人登用の扉を堅く閉ざしてしまった。ここにおいて外省人と本島人のあいだで奴隷化教育についての論争がまき起り、新聞紙上では甲論乙駁で水掛け論が絶えなかった。

『台湾新報』も接収されて『台湾新生報』と改められた。私はそのまま留用されて編訳部に残り、今度は反対に中国文を日本文に訳すことになった。『新生報』もやはり中日両国文の新聞を出していた。本島人の日本文記者はそのまま残り、中国文の編集は外省人に渡した。羅社長はしりぞいて、重慶から帰って来た本島人の李万居という人に社長の席を譲った。おなじ一つの新聞社であるのにいつのまにか自然に二派に分かれてしまった。日本文の編集と中国文の編集はおのおの別になってしまった。

ところが、新たにはいつて来た中国文記者は日本文記者よりも俸給がほとんど倍に近かった。しかし、日本文編集部長だけは例外で、昇給して外省人なみだった。これでは日本文記者はだまっっていられない。この新しい俸給差別は『新生報』ばかりでなく、政府の各機関でもおなじ現象が起こっていた。日本時代には、日本人だけが六割加俸されるという待遇を受け、幾辛酸をなめて来た記者たちが、光復後もまたおなじ差別を受ける運命に甘んずるのは、むしろ日本時代よりもっと苦痛に感じられた。新社長は重慶帰りの本島人で、しかも、フランスに留学した先覚者であるのに……。心中忿懣やるかたない日本文記者たちは、大きな声でその不満をぶちまけることのできないのが腹だたしかった。かといって、がまんをしていれば物価は天井知らずが上がってくる。が、ことは内輪の問題である、大局的見地から私情を棄ててしばらく自重し、もう少し様子を見てから徐々に解決策を練ることに意見が一致した。

この俸給不平等、差別待遇のさわぎの最中に、陳儀長官の命令によって、本島人の紳士が十数人逮捕された。大多数は日本時代の御用紳士であるが、なかには抗日分子もはいつていた。政府は事前に彼らの犯した罪を宣布せず、いきなり逮捕したので、なんのために検挙されたのか、世間はもちろん、彼ら本人といえども不可思議で少しもその理由がわからなかった。世間から公認されていた御用紳士はともかく、なかに抗日の御大である林献堂氏をはじめ、陳斡氏もはいつているというわさであった。

この消息が伝わるや、まったく寝耳に水で、そのショックはじつに大きかった。後に、林献堂氏の逮捕は誤伝であることがわかった。つまり、林氏のいる席上で陳斡やその他の御用紳士が逮捕されたのであった。内幕話によれば、陳斡の逮捕は、彼が南京から帰って来た時、ある宴会の席上で不用意に浙江財閥の独占的横暴ぶりや、また浙江財閥の手段のおそろしさを披瀝したため

に、光復後、彼の創立した大公企業会社の目的は浙江財閥と対抗するものとみられてしまい、そこで陳儀長官の逆鱗にふれたから、ということであった。真偽はわからないが、陳儀長官があくまでも陳炯を見逃さなかったのは事実である。

いずれにしても、陳炯のような民族主義者は当然表彰しなければならないのに、かえって御用紳士といっしょに検挙しなければならぬとすれば、ほかの台湾人の大方は監獄に入れられてしまう。このでたらめなやり方は、かつての敵たる日本人に対するやり方よりも酷だった。

ところが、この大事件は「馬々虎々」に始まって「馬々虎々」のうちに終わり、彼らは釈放された。その目的がどこにあったのか想像に苦しむ。まったく旧官僚の伝統的作風と見るよりほかはない。いわゆる「新官上任三把火」という手法であり、陳儀長官の「下馬威」(「上の句とあわせ、着任早々の官吏が示威のために小手先を使うこと」という、時代錯誤の大傑作である)。

台湾人が五十年間異族の鉄蹄下にあえぎ、いまや祖国のふところに帰って、これから大陸の同胞といっしょに一家団欒楽しく「天倫を叙する」にあたり、なぐさめてくれるどころか、かえって一大鉄鎚を下すとはなにごとか。この事件は人々の気持を動揺させ、なんとなく恐怖政治の前奏曲のような感じを与えた。

ここで日本時代の御用紳士の身分を一言しよう。日本の統治下では、台湾人は二重の圧迫を受けていた。その一つは日本帝国主義の植民地政策から要求された必然的犠牲であり、もう一つは民族的偏見、あるいは個人的感情から来た侮辱であった。例をあげれば、製糖会社が不当な廉価で強制的に甘蔗さとうきびを買い上げることが前者に属し、会社の職員が斤量をごまかしても農民たちは怨

みごととも言えないし、抗議すればいじめられることなどは、後者に属する。ただし、御用紳士の肩書があれば、後者の場合に彼が抗議しても職員たちは遠慮して、彼の分だけまぬがれる特典がある。

もっとも、現今の特権階級のように「免試出国」とか、「奉命不起訴」とか、台湾銀行から借金しても返済しないで、十億元以上の「呆帳クワイチャーン(貸倒れ)」を残すような特権はなかった。どんな御用紳士でもそれに相当する抵当を入れなければ、台湾銀行から借金することはできなかった。期限が来ても返済できなければ担保品は競売されてしまう。御用紳士の最大恩典は酒、タバコ、食塩などの専売品の売りさばきが関の山で、官有地でも払い下げられたら上々だった。いまの特権階級にくらべたらまだまだ及ばない。

日本時代の配給制度は終戦とともにだんだん崩れて来た。国軍がはいって来てからはますます混乱してしまったので、翌年、すなわち民国三十五年(一九四六年)一月十一日、長官公署が食糧配給制度の廃棄を公布した。その後の食糧の徴収については葉榮鐘(注一七)氏の書いた『小屋大車集』のなかの「徴収米糧発生摩擦」の一小節にくわしく出ているので(二二〇頁)、原文のまま借用する。

米穀徴発のための摩擦発生

民国三十五年一月十一日、長官公署は、食糧配給制度の廃棄を宣布し、翌日つづいて各地の農業倉庫(日本統治時期の機構)の穀の出し入りを封じこんで、製米配給を許さぬことにした。ため

に米価は暴騰した。たまたま旱天がつづき、灌漑水の不足による収穫必減の予測は、ますます食糧の恐慌をうながし、情勢はきわめて厳しくなった。ここに、台中県参議会が三十五年省議会对して提出した「米荒救済」の陳情書を引用しよう。

「(前略)わが中部の水田は六万甲歩(一甲歩は約一町歩にあたる)近くあるが、本期作においては、灌漑水欠乏のため植付不能の分と、植付後枯死した分とを合わせて数千甲歩、その他は枯死するに至らざるも収穫量の激減は火を見るよりも明らかである。本期の収穫量はおそらく平年作の三分の一以下になるであろうと予測する。(中略)本省光復以来、台中県下の食糧米は、さきに食糧局に徴収された分一万八千余石、つづいて蔡少将の恐怖手段をもって強制搬出した分二万五千包(一包は百斤)、合わせて四万余包に達し、米にして四百万斤以上になる。かりに一斤十五円で計算すれば、その金額は七千万円近くに達する。数量は決して僅少とは言えぬ。一般農民の前期収穫米のうち、納入すべき分はすでに納入し、自家用の分はすでに食いつくし、余剰米はほとんどなくなった。したがって、来期の収穫に対しては少しも自信がない。そのために米価は日に日に高くなり、いまや一斤は二十円以上に騰貴した……。」

右の陳情書に掲げられた蔡少将とは、陳儀長官の四人の義子のうちの一人で、長官にもっともかわいがられて飛ぶ鳥も落とす勢いの人である。そして、この紛糾は彼が引き起こしたものである。民国三十五年四月十八日霧峰郷民が提出した「徴収米を寛大なる条件で貸しつけ、民衆の困難を救うよう政府に懇願する」という陳情書中に、つぎの一節がある。

「(前略)わが霧峰郷においては、配給米の断絶と米のヤミ相場暴騰のため、食糧問題はきわめて深刻なる局面に陥っている。ゆえに郷民は地方紳士に依頼して台中県の劉県長に陳情した結果、劉県長は、郷民の困難に同情し、自己の責任において食糧米一千五百包約十五万斤の払い下げを行ない、郷民の一時の急を救ってくれたが、惜しいことに、現状は『一杯の水をもって一車の薪の燃ゆるを消す』がごとく、いかにしても持久はできない。かてて加えて米価は日に日に暴騰し、人民は口を糊することもできず、治安も日ましに悪化しつつある。ここにおいて県政府も坐視するにしのびず、陳長官の許可をえて台中県全県に対し食糧米二万包の払い下げを実行した。霧峰郷もまた一千二百十七包すなわち十二万一千七百斤の恩恵にあずかった。これは本年二月のことであった。

ところがあに計らんや、三月十四日にいたり警備司令部の蔡少将は兵隊三十余名を引率して、機関銃数台をそなえたトラック数両に分乗し、まさに大敵にのぞむがごとき勢いで霧峰郷農業会を包囲した。剣を抜き銃口を向けて、当の農業会副会長林士英をどなりつけながら、強制的に倉庫を開かせ、在庫米二千余包をことごとく運び出してしまった。その挙動の横暴なありさまは、官軍なのか土匪なのか疑わせるほどであった。以後小民らはやむをえず闇米を少しずつ買ひこんで生計を立てているが、困苦の惨状はご想像におまかせする。聞けば蔡少将はこれをもってなお満足せず、五百余石(七万五千斤)の足りない分はどうしたかと追求しておさまらない由。彼は劉県長が払い下げをした事実を正常な措置と認めず、たびたび弊郷農会に来ては即刻納入せよと迫るのであった。一斤十五円の計算によれば、七万五千斤の米は台幣百二十余万円になり、相当地大金になる。今日まで政府が弊郷より取り上げてきた米に対しては一銭一厘の支払も受け

ていい。したがって農業会にこのような大金のあるはずはなく、よそから闇米を買って蔡少将の要求を満たすこともできない。(下略)」

要するに、政府の取り上げた米穀は人民のもの(農業倉庫の米は地主および一般農民の寄託したもの)であるが、政府は一銭一厘も支払ってくれない。それなのにいまた不足分だと言って人民に金を出させ、よそから買い入れて補足させようとしている。このようなやり方では、一般民衆に官軍か土匪か疑われても仕方があるまい。

おまけに蔡少将の傑作はこれだけではない。もっとおもしろい芝居がある。ある日、蔡少将がおなじ警備司令部の熊少将と台中に來たので、劉県長の名でこの兩名のほかに、林献堂先生、霧峰郷長林水來、霧峰農業會長林士英、ほかに彰化から李崇礼、台中から張泉生などの諸氏が呼ばれて話し合いをしたことがある。そのなかの一人が筆者(葉榮鐘)に対して話した当日の状況は以下のごとくであった。

「当日、県政府の盧秘書が來訪し、劉県長が私に旧知事官邸で懇談したいから来てくれとの伝言があった。盧秘書と私は旧知の間柄ゆえ、なかば冗談に県長がご馳走してくれるのかと問い返したが、盧秘書は言を左右にしてちゃんとした回答をしなかった。午後三時、私が官邸にはいったところ、庭園の噴水のあたりに数名の憲兵が銃剣をつけて立っていた。階段の上にも、二階の廊下や応接間の前にも、同様の姿の憲兵が守衛していた。いまままでにない光景だったので、私は内心すこぶる不安で、『鴻門とうもんの会に赴く』ような感じがした。しかし、ここまで来て退くわけにもいかず、勇気をふるって応接間にはいった。他の人々もそろったらしく、私が座につくとともに、劉県長はこれで見なそろったので、これから話にはいると宣告した。

まず蔡少将がやおら立ち上がって、開口一番、『おれは陸軍少将である、官位は低くない。今日までおれは国家のためにつくして來たが、おれは死をおそれたことはない。今日來たのは林献堂先生から米をもらうためである。中部は台湾の米倉であり、霧峰は米倉のなかの米倉である。ところが霧峰に米がないというが、こんなことをだれが信ずるものか。一体あるのかないのか、林献堂先生が政府に協力するか否かによって決まる』と、実に傲慢な態度と不遜な言葉とで威圧した。

林献堂先生はこれを聞いてはなはだ不愉快のようだったが、さすがにご老人で、やわらかに答えた。『いままで政府が運び出した米はみんな人民がみずから食うために残した米である。いま彼らはヤミ米を購入してやっと生活を維持している。しかるに米価は日に日に暴騰し、彼らの困難はなみなみでなく、いまやまさに政府に対し、以前運び出した米の返還を請求し、目前の困難を解決しようと待望している。政府にもし返還する米がなかったら、せめてその代金でも支払ってほしい。いまずぐ返還できないければ、償還期日を指定してもらいたいものである。政府がもし人民から米を取り上げることのみ急いで、代金を支払うことを考えなければ、人民側においては生活を維持することができないばかりでなく、政府においても威信を維持することができないであらう。重ねてご考慮願う』と結んだ。

すると熊少将は满面怒気をおび、坐したまま叫んだ。『おれはいま三十八度の熱を出している。しかし公務のためには死んでもかまわぬ決心があるから、頭痛ぐらいなんでもない。今日のこ

とは林獻堂先生がわれわれの要求を聞いてくれるか否かの一言あるのみ。どうしても聞かなければ老先生に台北までいっしょに来てもらおう。』そう言い終わるか終わらないかのうちに、両手に力をこめてテールブルをたたいたので、彼の座席の前に置いてあったコップは三寸近くも跳び上がった。そして、これはただの憤怒ではなかった。四人の憲兵が物音の止まるとともに闖入してきた。しかも剣を銃のさきにしこんだまま、扉を蹴って鬼神のごとく突入してきた。その情勢を見て、両少将以外の人たちはみな顔色を変えた。とくに劉景長は板ばさみになって、どうしてよいのかわからず、狼狽その極に達した。幸い、この一幕は悲劇に至らず、うやむやのうちに閉会にしたので、事なきを得た。」

現在、神経の正常でない輩やからのほか、このような旧式の硬派演劇をよるこんで見ようとするとする人は一人もいないであろう。しかし、十数年前にはこんな事実がたしかにあったようだ。これはわれわれの民主政治が長足の進歩をした証拠だと信じて疑わない。もちろんいまでも民主政治が軌道に乗っていないとなく人もいる。しかし、筆者（葉氏）はそう考えない。望む程度がちがうだけの、比較の問題だと見る。われわれの政治はたしかに民主政治に向かって進んでいる。時日をもってすれば、かならず軌道に乗るであろう。しかし、時代の進歩は一日千里の早さである。われわれは速度をぐんと上げなければ、ついに時代に追いつくことができぬままに、永遠の落伍者に陥ることをおそれるのみである。

これはたんに台中の一地方のできごとに過ぎないが、それでも食糧の接収についていかに摩擦があったかがうかがわれる。葉榮鐘氏はもと『台湾新報』の文化部長で、かつて私といっしょだった。光復後、彼は新聞社を辞めて台中に帰り、実際にそれを経験していたので、彼の言は信ずるに足ると思う。

葉氏よりもずっとあとのことだったが、私も一度若い陸軍将校の活劇を目撃したことがあった。その場面は汽車のなかだった。南部行きの夜行列車が苗栗駅を出ると、車掌が来てキップを調べはじめた。一人の若い将校が客車のなかに自転車を運び入れて乗っていた。車掌がそれに対してとがめたら、彼は形相を変えて肩から銃をはずし、有無を言わずものすごい勢いで車掌に向かって狙いをつけた。私はそれを見て、

「あぶない！」

と声を出す間もなく、同乗の客といっしょに本能的にいっせいにとなりの車へばたばたと逃げこんだ。このおそろしい一幕を私は終わりまで見なかった。となりの車にいたが、銃声を聞かなかつたので、おそらく車掌が譲歩して事がおさまったらしい。しばらくすると、車掌はまっ青な顔をしてとなりの車からはいってきて、溜息をつきながらまたキップの検査をくり返していた。

戦勝に陶醉した軍人は光復した台湾を戦地のつづきと錯覚して、他人の物を借りても返さず、廟や寺を占領し、公共物を占領し、ひどいものになると人家にまで侵入して鶏をただで取って行く者もあった。また、芝居や映画のただ見をしたり、料理屋にはいってただ食いをしたりする。前者を「看白戯」、後者は「白吃」といって、彼らはこの強盜式の行動を英雄気どりで、これみよがしに得々としていた。

私はある日、大直にある同期生李君の土地を見るために、円山の中山橋で李君と会う約束をした。私が一足遅れて中山橋についた時、見ると李君が二、三人の兵隊にかこまれてさんざんこずかれているところだった。李君はなにかしきりに弁解していたが、中国語がわからないために相手にされず、どこかへ引っ張って行かれようとしていた。李君はまっ青になってもがいているので、私は走り寄ってそのわけを聞いた。この兵隊は中山橋の守備員で、李君がここでうろろしているのがあやしいと言う。私は一応釈明してやったが、やはり相手にしてくれない。しかたなく、隊長に会って誤解されたことを説明すると、やっと許されて李君は難をまぬがれた。だが、李君はひじょうにしゃくにさわり、心中おもしろくなく、二人はとうとう大直へ行かなかった。李君はその後、大直の土地を棄て値で売ってしまった。私も中山橋の一件でその土地を買いそこなってしまった。もしもその時その一甲歩以上の土地を買っておいたら、いまごろ私は数千万円の長者になっていたはずである。

崩れかかっていた食糧配給制度は、民国三十五年一月十一日、長官公署が正式に廃止を公布した。同時に米は自由販売となり、当時闇価格一斤十五円の米が急に二十円となった。そのころ、私は子供と二人で新栄町に住んでいた。そこは市営住宅で、住んでいる人の大多数は、ほとんど日本人の貧民であった。米の配給のなくなったことを聞いたとなりのおかみさんが、涙をポロポロこぼして、これからどうなるのかと心細そうにしていた。私もこの様子には憐憫の情をおぼえた。

元来、日本人は団体訓練のゆきとどいた民族だから、このような場合、彼らはただちに自治会を組織して相互扶助に努め、また、日本へ送還される者の面倒をよくみていた。かつて私の同僚であった日本人記者たちは、率先して範をたれ、荷車を買って一団となり苦力クワリのように働いていた。街頭で見る彼らの白い鉢巻姿はじつに雄々しく勇ましいものだった。

この市営住宅に住んでいた貧民はいちばんさきに送還されたが、引き揚げて帰る時、彼らは、「立つ鳥あとをにごさず」と言って、障子や襖をきれいに張り替えていった。これを見た私はひとかたならぬ感銘を受けた。

かえりみて、本島人社会の現状は、日本人と競争しているあいだは、道義心も高く日本人に劣らなかったが、その競争相手がいなくなると自主的に行動することができなくなり、道義がしだいに崩れて行くのであった。これははなはだ残念だった。

光復後、警察力が低下すると「友仔ユウサイ」（やくざ者）、「鱸鰻コイナグ」、「地痞ヂペイ」（土地の与太者）などが跋扈しはじめた。日本人の食堂にはいったただ飲いたただ飲みをして恥と思わぬ者も出て来た。そればかりでなく、公共物を破壊したり、盗んだり、並木や保安林を盗伐したり、電線を切って行く者さえ出て来た。もう外省の不良分子と少しも変わらず、不道德競争がはじまった。かつての日本時代、道に物が落ちていても自分のものにせず、治安は実によかったのに、光復後はそのメッキの薄皮がはげて地金が現われ、そのみにくい姿をさらすようになった。本島人である私がこれを見てやりきれない気持になるのは当然である。

ことに家屋や店舗の接収にからまって本島人の不良分子と外省人のインチキ者が対抗して武力に訴える事件が絶えなかった。なかでも大正町の家屋や城内の店舗の接収のさいの略奪戦はもの

すく、ときに銃声を聞くこともあった。

さいわいに、この不良分子は一部分に過ぎず、大多数の本島人はあいかわらず三民主義模範省建設の大道に向かって進んでいた。それゆえに本島人の新聞記者たちは自重してほとんど日本人の家屋を接収していなかったため、不正接収に対して監視の目を向け、不正の事実を発見すると容赦なく新聞紙上に報道して指摘した。

各機関とも専門知識を持たなければうまく運用できない部門は、日本人の技術者を留用し、そのほかほとんど接収して、日本人のあとに外省人が「牽親引戚」してその椅子に坐った。接収員のなかには知識水準のいたって低い者も相当あって、彼らははじめて汽車に乗ってよろこんだり、電灯がカチッと音を立てて光るといってはめずらしたり、さては水道の水が壁から出るとびっくり仰天する者も相当にいた。このようにおもしろい接収逸話は、本島人間の茶飲み時のよい笑い草になっていた。

また全然機械知識のない門外漢が工場の接収に行き、機械の試運転の音に跳び上がる者もいれば、日本語で金鎚と書いてある接収簿を見て金で作った鎚と違って大いによろこび、あとで日本人にそれを持って来させてみたら、それが鉄の鎚と分かってひじょうに失望した貪欲漢もいた。接収陣営のなかにはトンチンカンが相当はいっていたので、彼らより知識水準の高い本島人を登用したら反対に使われてしまいそうなので、彼らは自分の保身のために下層職員に本島人女性を使い、花瓶がわりにした。給仕、タイピスト、その他の職も、女性なら高い地位を与えないで済むわけである。

これら接収員は、日本人の財産ばかりでなく、ついに女性に向かって進軍した。菊元（台北最大のデパート）のお嬢さんをはじめ、歌手の浜田さん、私の知っている作家室の女の子も接収された。その他、日本人に限らず本島人の相当な家庭のお嬢さんでもインキな結婚のわなにかかった者が相当いた。彼らは堂々と媒酌人を立てて正式に結婚するのであるが、実際には、たいてい二号に甘んじなければならなかった。同時に上海の軽佻浮薄な気風がまたたく間に広まった。

日本人の摩登ガールや台湾人の先端を走る若い女性も、進んで外省人と手を組んで、街頭を臆面もなく横行闊歩する姿が、雨後の筍のごとくふえてきた。それは本島人の若い青年の強い嫉妬を買ひ、かげで石を投げる者さえ出て来た。モンペ服を脱ぎ捨てた若い女性が、急に美しく着飾り、厚化粧をして本島人の青年を見向きもしないで、外省人と手を組んでむつまじく歩く姿はそのころ戦時中強制的に海外へ徴用されていた軍属、軍夫、志願兵、少年工員などがどっと台湾に帰って来て、失業している青年が多かったなかで、とくに目立ち、それら一群の人々の反感を買った。

日本が戦争遂行のためにギャング統制を行なった結果、台湾の経済は根本的に破壊されてしまった。本島人の経済はほとんど無一物同様、あとはただ山河あるのみだった。終戦当時の商店には商品はほとんど見当たらず、空棚と壁がさびしく立っているだけだった。農村は疲弊困憊の極に達し、肥料および人手不足のために収穫は半減し、米の配給制のために大家族は分家し、失業した青年はもう家族の相互扶助にたよれず、中産階級は転落してサラリーマンになってしまった。加うるに統制経済が崩れた現在、公定価格一斤十五銭の米は、半年後には闇価格が十五円か

ら二十円にまで上がってしまった。

政府はこれら海外帰りの青年失業者に対して救済を考慮せず、かえって奴隷化教育の弊をかか
げて真つ向から論争した。その結果、本島人の感情をますます刺激してしまった。率直に言つて
本島人は侮辱を受けたと感じた。その副作用として、本島人は「排外的」感情を起こし、外省人
を「豚」とあざけるようになった。豚というのはぐうぐう寝ることと食べることばかり知つて、
なにもできないという意である。おなじ中国人でありながら、一方は奴隷化、一方は豚とのし
りあい、まったく子供の喧嘩みたいであった。豚とあざけられた外省人がたまりかねて、教育処
長の職にある者までがこの悪口の仲間にはいり、三月二十日付の『新生報』に、外省人が豚なら
本省人の祖先は何者かと叫んだ。このような論争は、翌三十六年の二月までつづいた。

第一回の日僑送還船が、民国三十五年（一九四六年）二月に基隆に着いた。かつて軍部の手先
になって活躍した日本人右翼文化人や右翼大学教授はあわてて、いちばん先に乗って帰った。彼
らはかつて青少年に向かい「大君の御楯となって死ぬ」と大言壮語していたにもかかわらず、い
ざ自分の番になると、戦犯になるのをおそれてまっさきに逃げて帰った。じつに利己主義であ
り、恥を知らない変節漢どもである。なかに私の知っている大学教授も、一、二まじっていた。

大陸でかつて汪精衛政権の下で働いていた私の同期生章君が、終戦とともに南京から台湾に逃
げ帰つて来て、同期生林君といっしょに台豊公司を組織して貿易を始めた。ところが、政府筋で
は人民の検挙を奨励したため、章君は故郷の反対派から検挙の槍玉にあげられてしまった。彼は
難を避けるために私を頼つて来た。友人としてなんとかしてやらなければならないので、私の家

に約一カ月同居してから、彼はふたたび上海へ戻つていった。私は章君の逃げ落ちて行くさびし
さをまぎらせるために、つぎの詩を作つてはなむけとした。

送礼山再赴上海

礼山（章礼山）の再び上海に赴くを送る

又是艱難苦別時

又是艱難、別れに苦しむの時、

莫因時局乱生悲

莫因時局乱れて悲しみを生ず。

山河雖復瘡痍滿

山河、復ると雖も瘡痍滿つ、

肯把中原医不医

肯て中原の医を把つて医さざらんや。

（最後の句は、ぜひとも中国人みずからの力で過去の損傷から回復せねばなら
ないの意）

章君を見送つてから、私はひとり考えた。章君は運命の子である。日本時代にもしも彼が大陸
に逃げて行かず台湾に残っていたら、強制的に軍属に徴用され、戦地に送られ、鉄砲をかついで
祖国に向かって発砲していたであろう。だが、彼はいち早く上海へ避難し、飯のために偽政権に
入って仕事をしていたので、漢奸にされてしまった。日本の兵隊に対してはかつて祖国の人々を
たくさん殺したにもかかわらず、「徳をもつて怨みに報いる」でその罪を問わず、賢明な政策を
用いたのに、なにゆえ章君のような台湾人を漢奸として逮捕しなければならぬのか、その矛盾
を私はなんとしても納得できなかった。ああ、これが光復後の姿か、このような暗い影は、つぎ
つぎと私に向かってかぶさってきた。

私は久しぶりで田舎の家に帰った。その晩のことであった。夜中に突撃検査があった。私は台

北に寄留していて故郷の戸口簿には名前がない。隣長〔隣組の組長〕の案内役で兵隊が来て調べたのだが、田舎ではときどきあることで、家内はなれた調子で私に、

「あなたはここの戸口簿に名がないから、だまっておとなしく寝てなさい。」

と言ひ残して、子供をつれて検査のため別室に出ていった。とっさのことで、私は考慮する余裕もなく、妻の言うままにしていた。やがて、となりの部屋から戸口名簿により一人一人名前を呼んで対照している兵隊の声が聞こえて来た。私は寝台の隅に小さくなって、じっとしていた。しも、いまここへ兵隊がはいつて来て調べたら、あやしい者に思われてこのままではすまない。おそらく駐在所まで引っぱって行かれ、身分が証明されるまで留置されると思つてひやひやしてしたが、そんなこともなく難関を切り抜けることができた。日本時代なら、名刺一枚で台湾全島どこへ行つても身分の証明ができたのに……、ああ、これはじめて味わう光復の苦しみであつた。

翌日、私は照門のむかしの同僚劉君をたずねた。劉君は光復後、照門国民学校の校長になっていた。校庭に立った私は、感慨無量だった。日本時代私をはじめ教員になった時、ここの分教場の主任をやつた。その時植えた樹はすっかり大きくなつていた。考えてみれば、すでに二十六年前のことである。じつに歳月のたつのは早いものである、としみじみ思つた。

つぎに劉君といっしょに、おなじむかしの同僚林君をたずねた。彼は教員を辞めて、医者になつていた。むかしをしので三人で語りあい、最後に当時の中村校長の横暴ぶりと不正のことになつて、いつまでも話がつきなかつた。

帰りぎわに劉君の宿舎に立ち寄り、劉君の奥さんに向かい、

「校長先生の奥さんになつておめでどう」

と挨拶したら、彼女の顔は異様にゆがみ、つづいて涙をポロリと落とした。私はどうしたことかとふしぎに思つた。彼女は静かにわけを話してくれた。校長になつたことは名誉であるが、学校の俸給が遅れがちで、二カ月前の俸給もまだもらつていない。これからどう生活するか、私は豚を飼つたり、芋を植えたりして働いて家計を助けているのに、と言つてのどをつまらせた。そして、豆だらけの両手を差し出して私に見せた。私は言葉に窮して慰める術もなかつた。

帰途についた私は、前に聞きたいやなうわさを思い出した。学校教員の俸給が期日どおりに払われないわけは、県庁ではその俸給を元手にあてて、品物を買つておいて一、二カ月置けば通貨膨脹のおりから、ひともうけでるので、まずもうけてから俸給を渡す仕組みになっているからだ、ということであつた。万一、それが真実であるとすれば、じつに由々しき問題であつた。

十二 変革への期待と失望と

雨上りのすがすがしい日和だった。宿舍をあとにして私はぶらぶら歩いてた。日本人の家の前ではいろいろな物を出して売つてた。日僑送還の荷物は柳行李三つと規定されていたので、余分の物は持つて帰れず、売るよりほかなかつた。世帯道具、骨董、玩具など、さながら百貨店

のようにいろいろなものが並べてあった。祖先三代の品物を二束三文で投げ売りする日本人のさびしい顔と、二束三文でもなお値切る上海人の貪欲あくなき顔を対比して見ていた私は、初めはおもしろく感じていたが、しまいには気の毒になってしまった。日本人のなかには何十年来まじめに一生懸命働いた人もあるだろう。ペスト研究や毒蛇研究のために倒れた人の子孫がこのなかにいるかもわからない、などと思うと、急にこの場にいるのがいやになり、私は、そうそうにしで立ち去った。

児玉町を出て川端町の手前まで来た時、ひょっこり角さんに出会った。角さんは私を見るとすぐ、私名義の門札を彼女の家にかけてくれとせがむので、それではと、私は彼女の家を訪れてみた。川端駅のうしろにある小さい二階建だった。私は二階の六畳間を見てすっかり気に入る、これを書齋にすれば子供が下でさわいでもじやまにならない。そういうわけで私は彼女の家をもろうようなことになった。

角さんが日本に帰る時、これからもおたがい手紙のやりとりをしようとお念をおして約束したが、台北駅で別れたとき香としてその後の消息がない。私としては、二十数年たつたいまなお彼女のことが気にかかる。

角さんの家を接收して故郷から妻子を呼び寄せると、また一家団欒、楽しく暮らすようになった。

物価は直線的に上昇した。もう俸給だけではまかなくてゆけなくなった。ことに、一日のうち米の値段が二、三回も上がることがあるのでたまらなくなり、故郷の小作人に米を持ってこさ

せて、やっと家計をまかなくなった。だから、ほかの同僚よりはよほど楽だった。ここで初めて感じたのは親のありがたさで、私の父母が一生懸命働いて田を遺しておいてくれたおかげである。

ある日、私が宿舎を出て瑩橋の前に来ると、一軒の店の前で男がござの上に横たわってうなっていた。大陸から流れて来た難民らしい。そのうなり声がうす暗がりを通して切なく聞こえる。近寄って見ると飢餓を訴えている。私はポケットから小銭をとり出して、男の前において立ち去った。かつて南京でよく見かけた戦争難民とおなじである。ああ、こんなでは三民主義の模範省はまだまだ夢のように遠い先のことだと感じた。社に出ると日本文記者の連中がなにかさわいでいた。聞いてみると、外省人との俸給差別について口角泡をとばして議論しているのであった。なかなか名案が出て来ないという。そこで私は王さんに向かい、

「君はかつて上海で李社長と親しくしていたから、われわれの苦情を話したらどうか」

「私が話したところでなんにもならないよ」

と王さんは答えた。そのうち、

「それなら古さんが一番適任だ」

と言うものがあつた。そして、とうとう談判の役を私におしつけてしまった。私はまず編集部長に、みんなの苦情を社長に伝えてくれと頼んでみたが、相手にしてくれなかった。仕方がないので、私は直接社長に会うことにした。私は時間を見計らって、午後三時に社長の宿舎をたずねた。社長はちょうど昼寝から起きたばかりで、風光煌彩ふうこうこうさい、にこにこしながら社交になれた手を出して握手をしてくれた。その手は温かく柔らかだった。一通りの話をしたあと、私は俸給問題に

直接ふれず、話をほかのところへ持っていった。

「本省人は祖国の事情にひじょうにうとい。なかでも、近代百年間のこと、いや革命史はほとんどわかっていない。それで今日はひとつ、社長さん、国父孫中山先生の『天下為公』についてお話しして聞かせてくれませんか」

と水をむけた。社長は滔々として懸河のごとく半時間あまりも私に講義してくれた。話が一段落したところで、私はすかさず、

「ときに社長さん、社員の俸給に本省人と外省人とのあいだに差別があるのも、『天下為公』のためですか」

と質問した。彼は全身をおのかせ、唇をわなわなふるわせながら、

「そのことは……、私がやったことではない。やったことではないし……」

と言ったきり、もうつぎの言葉がでない。私は気の毒になったので、

「とにかく、みな生活に困ってますからご考慮願います」

と言って座を立った。その後、社長に出会っても、もう以前のような愛嬌のよい笑顔を見ることはできなくなった。それから一カ月ほどたったころ、校正課長の席があいたので、私にその欠を補わせて昇給してくれた。しかし、ほかの日本文記者は相変わらずだったので、私自身あまりよい気持はしなかった。

この課長役は鬼門であり、前の課長もその前の課長も本島人であったが、二人ともその職に堪えきれず自分から引退してしまった。第三代目の課長に私を登用してうまくいかなかったら引責させる腹らしい。

校正は夜の仕事で、午後九時に出勤して翌朝の三時まで働かなければならないので、若い人ではないともたない。私の先輩ではもうその役に適しない。しかし、すぐ逃げ出すのも男らしくないので、私はそれに対する策をねった。まず、校正員全部を集めて会議を開き、校正責任を各紙面別に分担させた。いままで遊んで俸給をもらっていた二人の外省人は自分から引退した。それから仕事は順調にはかどり、私がいなくても仕事ができるようになったので、私は毎夜十二時まで居残り、あとは部下にまかせて帰った。

日中に時間ができたおかげで、私は『民生報』の社説を書いたり、雑誌『新新』に小説や随筆を発表したりした。また、戦時中に書いた小説『アジアの孤児(胡太明)』を上梓した。この小説は大当たりで飛ぶように売れたので、暮しも通貨膨張の早い足についてゆけた。歪められた日本の植民地統治下にあえいだ台湾人の気持と苦痛が、この小説によってわかるであろう。戦時中、私が身を賭して書いた効果があり、それが活字となって表われたよろこびは、ほかの人にはわからない。ひじょうな自己満足感をおぼえた。

政府は接收した工場や工業生産機関を復興させるために巨額の貸付をしたが、効果はなかった。たとえば糖業復興のため二十億を貸し出したが、いっこう思うように生産があがらない。したがって貸金はもどってこない。そこで政府の財政を支えるには印刷機にたよるよりほかに道はない。通貨は膨張に膨張してしまった。その上、上海から「老法幣」が絶えず流れてくる。光復当時、祖国の事情を知らない本島人は、祖国の金「老法幣」をめざらしがり、一対一、一対二、

もしくは一対五で、よろこんで外省人と換えている。

政府はその後、台湾銀行をとおして毎日その調整比率を発表していた。民国三十七年（一九四八年）八月にはもう旧台幣一元に対し老法幣一、八三五元の比率であった。貨幣の膨張にしたがつて物価は急激に暴騰したので、国民の生活はますます苦しくなってゆくばかりだった。

陳儀長官とその直属の部下に、あるいは、いたずらに感情に走らず、いまま少しの雅量があつて、本島人の希望する大公企業会社に日本人の工場や工業生産機関の一部を依託経営させていたら、工場や工業が早く復旧し、生産は促進したであろう。また本島人のおびたしい失業青年を救済できたであろう。その上、本島人知識階級に出路を与え、彼らの不平不満を押さえ、かつ外省人との対立を緩和しえたであろう。

しかし、七、八年も重慶にたてこもり、戦争一点張りの世界で過ごしてきた人々が、それ以外の世界のあるのを知らないのもやむをえないことであった。これも悲しき歴史の所産である。これら重慶の山奥から出て来た独善主義の英雄は、自分の戦勝に陶醉してしまい、眼中人なく、せっかく本島人が集めた土着資本一億元を利用することができなかった。そのため一部のインテキ者をふとらせたばかりで、全台湾人が大きな損失をこうむったばかりか、ひいては国家の損失も小さくはなかった。

重慶からの接收官憲のなかには、もちろん正直な人もあつたであろう。しかし、大多数の者はうぬぼれが強く、特権を鼻にかけて排他的であつた。自分の特権を守るためにおのれだけの世界を作つた。当時、口の悪い者はそれを「陳儀公司（会社）」と言つていた。

かつて陳儀長官は着任と同時に、「不偷懶（なまけない）」「不揩油（インチキヤ不正をしない）」「不撒謊（うそを言わない）」というスローガンをかかげたが、一つも実行されなかつた。この三つのスローガンは、よく時弊を見抜いて打った先手であつたが、彼らにとつては馬耳東風にすぎなかつた。「揩油」しないどころか大いにした。「撒謊」しないどころかすすんで「吹牛（ホラ吹き）」や「出風頭（でしゃばり）」をした。それがたくさんの笑話となつて残つた。

たとえば、ある指導員が村民大会に行き、村民に向かつて、いまごろ台湾語を使う者がいるが、時代錯誤もはなはだしい、と言つて見得を切つたが、自分の使つていた言葉はじつは寧波（ニンポ）なまりであつた。すかさず国語を知つていた青年にそれを指摘されて赤面した。また、ある指導員は茶業会社連合大会に臨席したさい、来賓祝辞で、「そもそもこれからは紅茶を大いに植えなければならぬ」とのべて、たいへんな笑話を残した。

当時の社会情況をもっとも明らかにするために、私が民国三十六年（一九四七年）四月ごろに書いた『夜明け前の台湾』から、一、二節を紹介しよう。

一、習慣のばからしさ

日産処理委員会台北市分会へ行つたことのある人は、誰しもその手続きの煩瑣に悩まされ、どうしてよいのやら、まごまごしてしまい、あちらに聞いてみたり、こちらに聞いてみたりして、やうと用を足してくる。下手すると一日ではすまされない。二日も三日もかかつてしまうことは珍しくない。しかし、係もまた係で必死に働いている。汗をたらたら流して押し寄せてくる市民

の催促にいらいらし、側目もふらずに毛筆を懸命に走らせている。どうしてこんなに忙しいのだろう。実に不思議である。こういうところに中国人の封建的性格があり、封建社会から脱けきれない固い殻が残っているのである。二千数百年の習慣が今でも世界で有名になっている官吏の家は、民国になったからとて、その官吏の習性を一朝にして変革できるものではないらしい。

わずか家賃を納めるだけでも、何人の手を経るか分らない。実に複雑きわまるもので、理論上貪汚（汚職）のできたものではない。しかし、肝腎なところが一つ抜けている。表面上、金銭を扱う上に、これぐらいの手を経れば絶対安全のように思われるが、事実肝腎な責任観念が分散されているから、かえって間違いを起しやす。それでその隙が狙われる。たとえ間違いがあっても責任が分散されているから発見しにくい。責任が何人にもかかり連帯責任になっているから、おたがい責任解除に努力する。したがって犯罪をかばって馬々虎々ママツツになつてしまうのである。故に責任を単一に帰すれば、たとえ間違いがあつても発見しやすく、また一人でできる仕事であるから、何人かの手を煩わす必要もなく、仕事が簡易化されて能率が上がる。

これは全く無意味な複雑さである。およそ習慣が長く続くと制度になり、制度が確立すればそれに拘束されて社会の進歩を阻害するのである。そもそも何世紀か遅れた人間が従来の習慣に囚われ、その習慣を無批判に受け入れて、習慣の情性のままに自己を標準にして物を判断するから、そこに矛盾が起こるのである。

たとえばトマトの味を知らないものはトマトが臭いと言う。そういう連中はトマトにビタミンがあることを知るはずがない。自転車さえ危くて乗れないものは、歩くことが一番安全だ。ま

して飛行機なんて夢にも思わない。夕方、風呂から上がり、浴衣を着て下駄をはき、大和撫子をつれて散歩する気持を知らないものに、日本下駄がよいか悪いかは分かるはずがない。また酔眼朦朧、ダンスホールで踊ることを知らない連中が、ダンサーの口紅は赤すぎると言ったところ、他の人は承知しはすまい。

日本人は日本刀を世界一だと言い、中国人はまた漢字と毛筆は東洋文化の粹だと誇る。ところが日本刀のために日本人が数百万殺され、七千万の国民がそのため犠牲にされていることに気がつかない。

中国も同じく漢字と毛筆のために天才が幾百万人殺されているかしのない。そればかりでなく四億五千万人が二、三千年それに悩まされ、新しい文化を習得するのに損をしている。

辮髪時代に断髪を主張するものは異端として、断髪即断頭と主張される。纏足時代には娘の足を過酷に縛るほど親心があり、その娘が大きくなっても親を恨まなればかりか、かえってそれを誇りとしている。そういう時代に生まれた阿呆が、それを美しいと賞美するからである。

戦争しているときに和平を口にするものは、理由のいかんを問わず非国民に扱われる。

万年筆を使い得ない連中は、毛筆が一番よい、美術的に書けて永久に消えない、また誰が書いたか筆跡が残ると言うだろう。そういう連中に限って古今東西の名画をえがく画筆をもって公文や手紙を書かない理由を知らない。書家でなければ使われない毛筆を誇る連中の頭の中には、万年筆もなければタイプライターというものもあるはずはない。

漢字の好きを知っているものは、唐宋の文学の偉大さに驚かされて、これを廃止すると主張す

ることはできない。彼らの子孫がいくら世界の文化に遅れても構わない。その偉大な文化を相続しなければならぬ感情に幽閉されているのである。その代り彼らの子孫は永久にその負債を負って行かなければならない。

そうかと言って現在中国ではこの漢字を急に棄てることができないジレンマに陥っている。言語が統一されていないからである。言語が統一していないときに漢字を廃止したら、ますます統一がなくなる。それで吾人は一刻も早く言語を統一させて、国語を普及し、簡単な標音文字で世界文化を獲得し、それに参与することのできる日を待っているのである。

元来台湾は天恵の裕かなところである。行き詰まるはずがないのに、失望する人が常に絶えない。彼らは何のために失望し、一体何を希望しているのであろう。人によっていろいろな見解があるが、吾人はそれは誠意ある政治であると言いたい。過去三百年間、台湾人は信頼すべき政治がなかった。スペインしかり、オランダまたしかりである。鄭成功が来たときだけはやっと信頼してよいと思っていたが、それも東の間で清朝が変わってしまった。清朝も日本も国内または国外の違いこそあれこれを植民地として扱っていた。元来植民地には倫理がない。故に台湾人は常に猜疑せざるを得ない環境に育ってきたのである。猜疑しなくてもよいものまで猜疑し、その感覚が特に鋭敏である。だから三百年間もつと渴望しているのは誠意のある政治である。誠意さえあれば少々損をしても我慢する。故に百の政策より誠意一つものを言う。上下一致誠意ある政治をすれば、台湾はただちに明朗化されるのである。

ところが、祖国の懐に帰ったからもうその心配がないのに、従来の惰性がついている。ことに公務員の中に不肖分子が入りこんでいるから、前の気持がどうしても清算できない。事実台湾を明朗化するには誠意ある人が必要である。公務員はもちろん、各級参議員もその人を得なければならぬのである。しかし、誠意があるか否かは実に分かりにくい。誠意測定器があれば便利だが、今のところ一時の便法としては、台湾における公務員や各級参議員を全部南京の中山陵へ行かせて国父孫文先生に鑑定してもらうよりほかはない。

それで全省の公務員、並びに各級参議員、政治家、カメレオン文化人、御用商人など全部を取り纏めて中山陵に参拝させ、参拝後、陵内の石段を一気に上がらせる。三百六十段の石段を一気に上がると、どんな利欲の強いものでも息がたえだえになって考える閑がない。それから陵をめぐりさせて国父の偉大さを感じさせた後、陵堂の前に立たせてしばらく展望させておく。するとそこには金子、房子(家)、車子、女子というものが見えない。もちろん、日産(日本人の残置財産)を欲しがらぬ卑しい考えも起らない。その代りに広々とした山河が横たわり、その山河の下には老百姓(人民)が喘ぎあえぎもがいている可憐な姿がかすかに意識せられるだけである。

ああ「革命なおいまだ成功せず」ということを悟ればしめたもので、貪汚なんかできたものではない。必ず誠意が出てくる。それでも三民主義を口にして悪いことをしようとするものがあれば、老百姓(人民)が黙っていて国父が承知しないであろう。

以上は当時の社会および政治の一端をえがいたものであるが、このような状況を見て心あるものはひとしく心配していた。民国三十五年(一九四六年)八月二十九日に、丘念台先生が「台湾

光復致敬団」をつれて祖国に「敬意を表した」動機が、氏の大著『嶺海微颺』のなかにつきのとく記述されている。それによれば、

「台湾光復当初、一般民衆は熱烈に政府を歓迎し、擁護したのにもかかわらず、なぜ、長官公署が政務を引きついで初期において民間との不融和の現象が起こったのか？ 私個人の観察では、左記の二つの要因にもとづく以外にないと思う。

自然的要因

(1) 新旧法令の転換時期において、島民が祖国の各種の法律を了解せず、習慣上、それによらず直にそれを守ることができないために、引いては不満怨嗟の声となった。

(2) 言語の阻隔により彼我の誤解が発生した。

人為的要因

(1) 中央から派遣されて来た人員の素質が不ぞろいのため、なかには少数だが、法にそむき蛮威を振る悪質の者がいて、島民の反感を買った。

(2) 当時駐台の部隊中の一部には、大陸において臨時に補充した新兵がおり、彼らは厳格な規律のある訓練を受けなかったために、台湾の新環境にはいり、得意のあまり自分の任務を忘れ、幾多の違法、または脱線行為をしたことも、一般島民の蔑視と怨恨を招致した。」

この記述を見れば、丘念台先生は当時の社会情勢を見て心配していたのであろう。いや、丘念台先生一人のみならず、おそらく心ある台湾人はひとしく心配していた。私もこの頽勢を挽回する必要があると思った。その後、崇正出版社を創立しようとした動機はまったくこの気持ちからきたものである。

たものである。

上海へのがれた同期生の章君が悄然として帰ってきた。貿易のために上海へ持ち出した物品がまだ売れないうちに、また漢奸として追われてしまった。彼はのがれるためにいろいろと苦心したが、やはり地下工作者に見つけられ、「揩油されて無一物となり、福州から帆船でほうほうの態で逃げ帰って」来たのである。その地下工作者はまさに強盗にひとしいものだった。そのためには彼は台湾に帰って来てもおじてびくびくしていた。彼は私に自分の隠れ家をさがしてくれと頼んできたので、私は幸町に下宿をさがしてやった。

光復節のちよつと前だった。私は突然社長に呼ばれた。何の用かと思ひながら社長室にはいつていったら、彼は、

「政府の命令で日本語版は廃刊することに決まりましたので、やむなく人員を減らすことになりました。それであなたの進退についてはいろいろ考慮した結果、専売局に私の友だちがおります、そこに行けば高等官に任用してくれますから、すまないけれどもあちらへ行つて下さい。それから社を出るとき、三カ月の手当（遣散費）を上げるつもりです」

と、たいへん親切なあいさつだったが、私は自分でもわけのわからない感情が湧いてきて、彼の好意を素直にうけられず、その場でことわってしまった。

日本語版の廃刊がいよいよ決まったので、日本文記者はその名残りとしておのおの自分の感想を書いて発表した。私も別れに際して長いものを書いたが、もういまではなにを書いたか思い出せない。日本語版の廃刊と同時に、私は『新生報』を辞めた。

『新生報』をやめても未練は少しもなかったが、辞めた翌日、台風の来襲で、せっかく角さんにくれた二階建の六畳間が吹き倒されてしまった。

さいわい台風は一日暴威をふるっただけで、翌日からだんだん小さくなった。『新生報』の旧同僚黄君がすぐ見舞いに来てくれた。黄君は被害の跡を見て、私が失業した上に家まで吹き倒されたことをたいへん気の毒がっていた。しかし、私自身としては割合に平気だった。その後、私の教え子余君が来て、彼の接収した店に来てくれと勧めてくれたので、その好意を受けて城内に移った。転宅のとき、余君と同郷の呉君が来て手伝ってくれた。彼ら二人は縁側のガラス戸をはずして荷車に積んだ。私はそれを見てびっくりした。二人が言うには、私の立ったあと一時間もたたないうちにとられてしまうだろう、どうせ人にとられるならもって行ってもおなじだ、と。私は、それはちがう、とられることは事実だが、そのかわり私は取らない、もしも私がガラス戸までもって行ったら私の筆はそのため折れてしまう。今日まで新聞社におり、公共物や日本人の残置財産を大切にせよと書いていたではないか、と言った。二人は小さい声で、バカ正直だなあ、と言って、不承不承ガラス戸をおろして、もとのとおりにしてくれた。

城内に落ちつくくと、『民報』からすぐ編集に来てくれと交渉してきた。しかし、私はそのとき、なんとなく自由な身になりたかった。そこで私は同期生の章君と崇正出版社をおこす準備を始めた。

当時の社会情勢は、光復の初めとはちがって、人心が変わりつつあった。祖国を愛するあまり、心理的な動揺が生まれた。失望、悲観など、それに伴って議論は百出、とりわけ青年たちが動揺し始め、自暴自棄になるものさえ少なくなかった。その頹勢を挽回するために崇正出版社を作って青年を啓蒙するつもりだった。この趣旨を明らかにするために、私は十月末から地方へ遊説に行った。急に自由の身となって旧任地をたずねまわったが、関西や苗栗で昔日の友に逢えるのもまた、じつに楽しいことであった。ことに四湖や五湖では郷公所の職員は郷長（村長）はじめ、ほとんどが私の教え子であったので、これらの元生徒に歓迎され、つきからつきへとごちそうぜめに会い、まるで里帰りのようであった。一日の予定がついに二、三日の滞在になり、帰りをおぼれるくらいだった。

地方行脚から台北にもどったら、民報社ではいろいろな手を使って私を呼び寄せようとした。うんと休もうと思ったが、どうしてもそれが許されなかった。『新生報』を辞めてわずか半月ぐらいで『民報』へ入った。『民報』では私が三面の編集を受け持ち、午後四時ごろに出勤して夜十時ごろに帰って来た。

日中は相変わらずひまだった。この余暇を利用して崇正出版社の準備に一生懸命になった。二、三カ月奮闘した結果、発起人に同意してくれたものは二十七、八人もいた。そこで民国三十六年（一九四七年）一月二十六日、台豊公司以発起人の座談会を開いたが、わずか七、八人しか来てくれなかった。株の応募者は予定の五分の一だけで、現金を納めたものはわずか十分の一にすぎない。私の考えでは発起人が二十七、八人もいれば一人一万元の募金でたやすく成立するものを見ていた。ところがあにはからんや、事實は意外で、崇正出版社はどうとう竜頭蛇尾となって流産してしまった。そのとき、私はつぎの詩を作った。

崇正出版社籌備不成感 崇正出版社の籌備成らず、感あり

(その一)

進退維艱力已窮 進退維れ艱み、力已に窮まり、
渾身努力竟無功 渾身の努力、竟に功無し。
明知填海癡人夢 明かに知る、海を填むるは癡人の夢、
孤掌難鳴苦悶中 孤掌鳴り難し、苦悶の中。

(最後の句は、相談あいてもなく、ひとりで苦しんでいるの意)

(その二)

奔馳数月説如狂 奔馳数月、説いて狂の如く、
熱血奚堪溢老蒼 熱血奚ぞ堪えん、老蒼に溢るるに。
填海難尋填海伴 填海尋け難くして、填海伴う、
事無成就轉淒涼 事、成就無く、転た淒涼。

こういう失敗は、あとで反省してみると、私の世間知らずが原因である。私は教員上りで、世間の人を学校の学生とおなじように扱った。二十何人の発起人を得ても、それを運用する知識がない。当然さきに発起人会を開いて衆知を集め、それによって運用すべきであるが、私はただ自分の意見だけで全体を動かそうとしたので失敗するのも当然であった。要するに私はいつも理想を追求するあまり、一時の熱血のほとばしりによって、十分な考慮もせずに事をなすので、うまく事が運ばないのも無理はないのである。

十三 二・二八事件とその前後

『民報』は『新生報』とはちがって純粹な民間紙である。社員は本島人ばかりで、社長は林茂生であったが、彼はただ名義だけの社長にすぎず、社内では彼の姿をほとんど見なかった。その他の幹部は日本時代の文化協会の連中であった。私はそのグループではなかったが、当時中国語を知っている本島人がいたって少なかつたために呼ばれていた。

主筆の陳は私の国語学校時代の先輩であり、社員とともに奮闘する人であった。たとえば社に日本人から接収した人力車が一台あった。彼は事実上、社の代表であり、外出のときは車に乗った方が体面上よいとみんながすすめても、彼は車に乗らない。彼は社員全体がみな生活に苦しんでいる時に、自分一人が車に乗る気持にはなれないと言って、みんなとおなじようになってく歩いてきた。

『民報』の待遇はよくないが、そのかわり、みんな虚心坦懐、そりもそろって熱血一点ばりで、一刻も早く三民主義模範省を建設することに努力を惜しまない連中ばかりであった。したがって社内の空気はいたって明朗で、おたがいに和気あいあいであった。当時私は宿舎がなかったで、みんながいろいろと心配してくれ、総務課長の世話で大正町にある日本人家屋を一軒接収できた。おかげで宿舎に困っていた私は、城内から大正町に移り、社にも近く便利になった。

大正町はたしかに便利なところであったが、そのかわり来客がおびただしく、職をさがしに来るもの、遊びに来るもの、友だちもいれば旧任地の父兄や生徒も多かった。毎日、ひっきりなしに誰かが来た。それらの客たちは、新しい社会環境に適應するために機会をつかもうとあせっていた。来るもの来るもの事業の話ばかりだったので、ついに事業欲のない私までが浮き足だつてしまった。

私の教え子余君が来て、製茶業が一番よいという。つまり紅茶を作つて東北(旧満州)に輸出し、逆に東北から豆粕をもつて来たら二重儲けになる。余君はかつて東北にながくいたことがあるので、東北の事情をくわしく説明してくれた。決して架空の言ではなく、たしかに一面の理があると思つた。それで、私は潮州にある土地四甲八分(一甲は約一町歩)を売つて、余君と共同で三叉にある製茶工場を一軒買つた。工場は二階建、建坪は四百坪もあり、製茶機械一式および付属茶園十六甲歩もあつた。それを五十数万円で買い取り、私はその百分の四十の金額を出資したが、いよいよ登記したときはすでに百分の三十六になつてしまつた。わずか四分の差だけなので、私は別に抗議もしなかつた。

私は若いときから陶淵明の晴耕雨読の生活を慕つていたので、将来にそなえて関西にいたとき土地を買つておいた。学校教員を辞めたら、その土地を経営するつもりであつた。初めの計画は四甲八分のうち、一甲歩はバナナ、一甲歩はトウガラシ(当時一個六錢で満州へ輸出していた)、一甲歩はパイア、残りは水田にするつもりだつた。また周囲に緑竹を植えておけば半年ぐらいは毎日収入がある。潮州の町までわずか二十分ぐらいで行かれるので、その土地に家を建て、そ

こで陶淵明のように酒を飲みながら詩を吟ずるつもりであつた。この土地は私が二十年間働いて節約して得た金で買つておいたもので、惜しいけれども儲けるためにそれを手放してしまつた。おかげで、私の陶淵明の夢は永久に破られてしまつた。

紅茶と豆粕の二重儲けは一場のはかない夢に過ぎなかつた。余君に経営を三カ年間まかせたが、利益は一銭も入らず、ついに四百何坪の二階建工場、製茶機械一式、付属茶園十六甲歩など、その百分の三十六の権利をたつた二十両の金で余君にゆづつてしまつた。この失敗は要するに私が人を信頼しすぎたためであつた。余君と三カ年共同経営したが、工場を見に行ったのは買うときと売るときだけだつた。私は教員出身で人を疑わない。金についてかれこれ口出しするのはなんとなくいやしく感じた。この性格の欠点は一生なおらない。失敗はつねにそこから来る。事実私は事業に対して、すこしも興味がない。ただ当時周囲の事業熱に動かされて製茶工場を買つただけである。

私が工場を買つたのは民国三十六年(一九四七年)の一月か二月ごろだつたと思うが、社会は非常に複雑化してゐた。当時外省人を「阿山」と名づけ、大陸から帰つて来た本島人を「半山」と称してゐた。阿山と蕃諸仔(本島人)との対立、阿山のなかでも得意の人と失意の人が対立してゐた。おなじ半山でも失意と得意との対立があつた。一番ひどいのは、政と党とが対立して言論が一致しないことであつた。たとえば、当時党では三民主義をしきりに高唱し、民主政治でなければならんと宣伝してゐたが、事實は反対で外省人の独占政治であつた。また当時外省人でなければ三刀(床屋・料理屋・洋服屋をあらわす剃刀・菜刀・剪刀)という言葉が分からなかつたが、そ

れも失意の外省人が福州人の官吏を嘲笑して使ったため、はやりだした言葉であった。こういう対立からの非難、攻撃は直接間接、本島人の大衆を動揺させた。とりわけ失意の半山の罵詈がもつとも本島人の人心を左右していた。そのために本島人の青年を心理的に失望させてしまった。

加うるに失業者が非常に多く、海外から帰って来た青年はほとんど失業していた。とくに戦時中、海南島や広東にいた本島人は、終戦のさい、戦勝に陶醉して前後の考えもなくなった現地の地方民や外省人の官憲により、日本人よりもひどく扱われ、いじめられた。そして、非常な困難をへて台湾に帰って来た。帰って来てみれば、接収に來た外省人官憲の知識水準と彼らとはほとんど差がない。外省人のあるものは知識水準が低くても優越感をもっていたから、成行きとして台湾青年のなかに不満の気持が自然湧いて来るのもやむをえないことであった。それらの本島人青年は理想や目的を忘れてさわぎ、かつ愚痴的感情の走るままに不平ばかり言っていた。光復しても急に植民地的性格から抜けきれず、自主独立の精神を欠いていた。一方大陸から来た人は物欲、色欲に魅せられて国家を忘れ、「揩油（収賄）」やインチキをあえてした。しかも、本島人に対しては尊大にふるまっていた。

また本島人の知識階級は、光復のあかつきには日本時代よりも偉くなれると思っていたが、ほとんどの人が登用されなかった。運よく政府機関へ入っても、閑職で幹部どころか課長さえむずかしかった。これでは、せつかく光復しても期待はずれで、相変わらず植民地と同様な気持でなんとなくつまらなく感ずるようになった。

ここで台湾人について一言しておこう。

台湾人はもとより台湾の歴史と環境によって育ったものであり、おのずから特異性を持っている。祖先はもちろん漢民族である。北方から異族の侵入することに最後まで戦い、敗れて南へ南へと逃げのびたもの、または異族の政權に屈服しないで逃げてきたものである。それがだいたい福建と広東に來て落ちついた。さらに政治的圧迫を感じると、彼らは自由の天地を求めんがために海外へと発展していった。これらが華僑となって台湾または南洋に移住して来たものである。いずれにしても、漢民族のなかでもっとも異族に屈服しないものばかりであった。彼らは大陸にいて闘争したばかりでなく、台湾に來てさらにそれ以上に訓練されたのである。清朝の領土になるや、また異族に統治されるのをいさぎよしとしないで、幾多の反乱をあえてした。それゆえ、清朝は、台湾は「三年小乱、五年大乱」だといって、悲鳴をあげていた。

日本が台湾を領有すると、台湾は孤立無援にかかわらず全民衆が起ち上がって抗戦した。日本軍は明治二十八年五月三十一日北部台湾の澳底に上陸したが、その年の十月によく台南までたどりついた。その間六カ月もかかったのである。その後、台湾人は山に隠れ野に伏してなお三カ年も抗戦したばかりでなく、一応落ちついてからもなお、苗栗事件、西來庵事件、北埔事件をはじめ、幾多の革命事件を引き起こしたのである。また、武力の洗礼を受けて勝つ見込みがないと見るや、その後は形をかえて文化運動の名のもとに闘争したのである。

台湾はかくのごとく人為的環境が闘争的であるばかりでなく、自然的環境も同様である。つねに台風や水害や地震のごとき大自然の圧迫と戦い、加うるに山地人の害まである。この環境のもとに自然に養成されたものは反撥力で、とくに闘争心や競争心が強い。覇気に燃え、意志が強固

で進取的である。また情熱的で激しやすい。しかし、日本の鎖島政治に幽閉され、見聞をせばめられてしまい、ついに雄飛すべき覇気はいつのか愚痴的感情に変わってしまった。その上、三百年間植民地として被搾取の立場に置かれて来た結果、政治渴望症にかかっていた。政治家を非常に偉いものと思うようになり、そして猫もしゃくしも政治家になろうとあせっていた。

光復後、知識人は一斉に政治の狭き門から出ようとしていた。ちようど、やかんでお湯をわかすとき、小さい穴をひとつだけあけておくと、にえたぎった水蒸気は自然その穴から出る。しかし、沸騰に沸騰すれば一時に出きれず蓋は自然に上がってしまう。それとおなじような状態であった。

そこへ物価は上がる、治安は日々に悪くなる。公共物が破壊され、学校のガラスや製糖会社の鉄道のレールをはずして持って行くものさえ出て来た。治安を乱したのは盗賊ばかりでない。丘念台先生の大著『嶺海微塵』によれば、一部分の駐台部隊は大陸であらたに補充した壮丁で、嚴格に規律のある訓練をうけていない。新しい環境の台湾に来て、つい得意になりわれを忘れ、幾多の常軌を逸する行為をした。それで島民にさげすまれ、怨嗟の的となった、と。当時はまったく丘先生の書いているとおりであった。

一九四七年の二月中旬ごろから、旧台幣に裏づけられていた砂糖五十万トンおよび石炭何十万トンが上海に積み出されたうわさが立った。そのために米は一日に二回も三回も上がった。一説では奸商が米を買いだめしたからという。いずれにしろ米が急に欠乏して買にくくなった。市民は驚々として非難し、市民代表が市長に陳情したりしてさわいでいた。社会がこういう雰囲気

になっているところへ、突然大きな事件が起こった。

二月二十七日、私はふだんのように新聞社で三面の記事を編集していた。夜の八時ごろ、あわただしく帰って来た外勤記者が、その第一報を伝えてくれた。

今日、専売局査緝員葉德根ら六人および警察大隊四人が台北市延平北路一帯の私煙（ヤミタバコ）販売を取り締まった。そのうち四人の査緝員が午後七時ごろ南京西路天馬茶室の停仔脚（家屋の軒下に作られた歩道）の露店女タバコ売り、年四十歳の林江適の私煙を取り締まり、彼女の売っている全部のタバコおよび売上金まで押さえて没収せんとした。彼女は査緝員にすがりついて離れずもがいていた。しまいに膝まずいて拜むように、

「このタバコを全部取り上げられたら、ご飯が食べられないから、せめて金と専売製品だけ返してくれ」

と泣きながら哀願したが、彼らはそれに応じなかった。

それを見ていた周囲の者も彼女に同情して、しきりに勸告したがやはりだめだった。けれど、彼女は査緝員にすがってどうしても手を放さなかった。そこで、査緝員のうちの一人が怒って短銃の先で彼女の頭をなぐったので、頭から血がたらたらと流れて、彼女はその場に倒れた。そばに立っていた彼女の小さい娘がわっと泣き出した。それを見た民衆が激昂して、査緝員たちを包囲した。査緝員たちは三十六計逃げるにしかずと延平北路から永楽町へ逃げたが、民衆はますますふえてそのあとを追った。

査緝員はついに永楽町のせまい路地に逃げこんだが、前方にも人がたくさんたかっていたの

で、査緝員の一人が発砲した。その弾丸が自宅の楼下でながめていた市民陳文溪にあたり、彼は即死した。そのすきに乗じて査緝員は逃げてしまった。民衆はますます激昂して査緝員の乗って来たトラックを円環（台北の有名な盛り場）まで引っぱって行って焼いた。

この激昂した民衆はさらに警察局に押し寄せ、下手人を引き出して銃殺せよと要求したので、責任者が出て来て犯人を逮捕して法院に回すと声明した。しかし、民衆は過去の経験に徴してただ一片の声明だけでは信じない。いままで一般民衆は長官公署を「陳儀公司」とかげで罵り、私人の会社と見ていた。彼らは法律をもてあそび、自分のグループすなわち会社内の人は処罰しない。罪を犯したら形式的に法院へ回して論罪するが、有罪と決定しても、あとですぐ出してしまふ。そういうわけで、民衆は当局の声明だけではおさまらなくなっていた。どこまでも犯人を出すようにさわいで、深夜まで解散しない。

翌二十八日は朝から小太鼓をたたいてさわいでいた。はじめは延平北路でさわいでいたが、さわげばさわぐほど民衆は集まって来た。そのうちにだれかがドラを出して来てジャンジャン鳴らす。市民が出て、それを見る。そして、野次馬が出て来て演説する。そのうちに血気のさかんな青年が出て来て、入れかわり立ちかわり演説する。昼になっても民衆は立ち去らない。午後になってだれの発案かわからないが、小太鼓とドラを先頭に、陳長官に陳情すると言って、集まった民衆が延平北路から蜿蜒と城内に向かって行進した。北門から台北駅前へと長蛇の列はつづいた。三条道路はいっぱいの人でうずまった。本島人が主で、なかには外省人も入っていた。

列の先頭がだんだん長官公署に接近したところ、突然長官公署の屋上から機関銃が発射された。

同時に機関銃掃射を受けて、三人ほどがばたばたと倒れた。民衆は後退して、城内に流れこんだ。激昂の極に達した民衆は、もう無分別に外省人と見るや見つけ次第なぐった。一番先に専売局台北分局を包囲して、そこにいた局員をなぐり窓ガラスや机を叩きこわしはじめた。勢いに乗じて手当たり次第ぶちこわし、品物は外へ持ち出して焼きはじめ、狼藉のかぎりをつくしたが、ただ国父孫中山先生の肖像画だけは大切に保存されていた。この混乱の最中にも特別に扱われる孫中山先生の偉大さに島民の愛国心の一端がうかがわれた。この激昂した民衆は、さらに新台公司（菊元を接収してできたデパート）に流れこんで同様の狼藉を繰り返した。いわゆる騎虎の勢いで、これでは外省人の警官に武器を持たせておくことはいたって危いというわけで、青年たちが立ち上がり、市内の警察署にある武器を接収した。この接収に行った青年は、かつての軍夫、軍属、志願兵などが主であった。彼らは素手で、勇敢に警官の武装を解除したのである。

その日の午後、警備司令は臨時戒嚴令を宣布した。台北の青年たちが警察の武器を接収したというニュースはたちまち全島に伝わった。各地の青年はいっせいに立ち上がって自発的に警官の武器を接収してしまった。これがいわゆる二・二八事件であって、この事件の発端はわずかに私煙の取締りにすぎなかった。しかし、その損失は莫大だった。

ここに行政長官公署の発表した「台湾省二・二八暴動事件紀要」によれば、台北市における各機関の公私損失の調査では、公務員と教職員の死者三十三人、負傷者八百六十六人、失踪者七人、公共物の損失が台幣で約一億二千二十六万一千二百九十七元、私人の損失が台幣で約一億五千一百六十二万八千六百十六元である。これは単に台北市だけの統計であって、民衆の死傷損失

は調査資料がないので、この統計に入っていない。しかし、おびただしい民衆の死傷および損失は、それよりもさらにさらに莫大なものであり、歴史上の汚点として記すに足るものである。

この大きな事件のおこりはいたって単純であった。本省人(外省人に対し本島人をいう)はもう外省人警察を信頼せず、彼らに武器を持たせることは非常に危険だと感じてきた。一私煙の取締りをするのに、しかも一人の女に対して、専売局の警官を多数動員しなければならぬという理由はない。しかも、発砲して直接関係のない人を殺してしまった。強盗でもなければ土匪でもない、銃砲を持ち出す必要はまったくないのにもかかわらず、それを持ち出して人を殺すとは……。

彼らがあえてこのような行動に出たそのうらには、ほかに目的があるのであった。彼らは私煙を取り締まる美名のもとに、事実は私煙でもなんでもない専売製品までかっぱらって私腹をこやしていた。民衆はそう疑い、かつ信じていたので、この取締りを不快に思っていた。また私煙の来源については、専売局員の一部不良官吏と結託して、密輸入させていたという。それがついに鉄砲沙汰となり、さては殺人事件まで引き起こしてしまった。

こうなると、本省人はだれ一人として安心していられなくなり、本能的に自衛する必要があると感じて、期せずして青年がいつせいに起ち上がり、武器を接収してみずから治安に当たろうとした。だから、この事件には計画もなければ統一もない。したがって、縦の命令もなければ横の連絡もない。まったく憤激のあまり起こった偶発的で突発的な事件にすぎない。要するに、外省人に鉄砲を持たせることはいったって危険であるから、むしろ彼らの鉄砲をとりあげ、彼らにかわってみずから治安に当たる考えであり、いたって単純なもので、少しの野心もなかった。この天

真爛漫な行動は、台湾人の稚氣の一面を物語っており、それはまた、たしかに政治的無知から来ていると思う。

すでに臨時戒厳をしているのにもかかわらず、私はいわゆる「盲蛇におじず」で、三月一日の早朝、いつものように長官公署の前を通って、城内へ遊びに出た。長官公署の前には機関銃の移動隊が行ったり来たりして警戒していた。私もまた無知で、それを少しも気にせず、悠々と一人で自転車に乗って公署の前を通りすぎたが、もしも四、五人いっしょだったら、あるいは無事に通過できなかったかもしれない。

台北駅ではまだ鉄砲がパンパン鳴っていた。私はただ威嚇の空砲と思っていた。長官公署の前から北門までの大通りには、通行人の影さえ見えない。私は同期生林君の会社、台豊会社に寄ってみたら、みな昨日の出来事を批判していた。一人の外省人はこんなことをしないで、罷市(ストライキ)をした方が有効であると言っていた。もう一人の外省人は、本省人がかばってくれたので助かったと言っていた。林君の話では、彼は外省人が外省人の公務員をなぐっているのを見たという。

その日の午後、私は平日よりも早く出社した。そのとき駱という外勤記者がまっ青になって帰って来た。彼が鉄道部の前を通るとき、四、五十人の民衆が集まっていた。突如鉄道部の二階から、機関銃がその民衆に向かって発射されたのでバタバタと二十数人が倒れた。駱ももうすこしでやられるところだったと言っていた。台湾人はいまだかつて戒厳令に遭った経験がない。戒厳令を下したら三人以上集まってはいけないことを知らない。民衆はやはりふだんどおり、なにか

起こったらおもしろがって集まるのであった。略が説明しているうちに他の記者も帰って来た。彼らの話によれば、国民大会女代表謝娥という本省人女医が昨晚ラジオで事実とくいちがう放送をしたため、民衆の反感を買ってしまった。激昂した民衆は彼女の家にどつと押し寄せ、家具や窓ガラスを手当り次第ぶっこわしてしまった。彼女はかつて日本官憲にいらまれて逮捕されたことがあった。光復後、左に持っていた提灯を右に移して持ったために家がこわされたのだ、と皮肉を言う者もあった。

三月一日、本省人の有識者連中が集まって、「緝煙血案調査委員会」を組織した。前日に布告された臨時戒嚴令について本省人にはその経験がないのでさほど深刻に思わなかったが、そのかわり、重慶から帰って来た本省人の知識階級が大いに心配し、省参議員、市参議員、国民大会代表、参議員などが戒嚴令を解除するように陳儀長官に陳情したので、その日の午後五時、陳儀長官がみずからラジオで全省民に対し四項目の放送をした。

(1)戒嚴令の即時解除、(2)逮捕市民の釈放、(3)軍警の発砲禁止、(4)官民共同処理委員会の組織、また陳文溪の遺家族に台幣二十萬元、タバコ売りの林江邁に対し台幣五萬元の補償金を支給すること、および事を起こした査緝員を法院に回して嚴罰する、と声明した。

社の陳主筆が私に社説をちょっと見てくれと言った。いまままでに例のないことなので、私は念を入れて彼の書いた社説を読んだ。読んだあとで私は、これでよいと賛成の意を表した。すると彼は私の見解をたずねた。私は二・二八事件は不幸な事件であって、だれもがこのようなことを欲していたわけではなかった。このさい一番大事なことは冷静になって、外省人を迫害してはな

らないこと、国民として国家の利害を忘れて軽挙妄動してはならないことを呼びかけるのが新聞社の義務である、と言って私の考えを率直に披瀝した。陳主筆は何回となくうなずいた。二・二八事件中、『民報』の記者で行方不明になった者が一人もいなかったのは、当時の社説のおかげであると言うものもいたが、真偽はわからない。

三月二日正午、陳儀長官は緝煙血案調査委員会の委員全員と会見してつぎの四項目の決定をした。(1)参加者に対し追究しない。(2)被捕者全部を釈放する。(3)死傷者は省籍を分けず一律に補償する。(4)「処理委員会」には各界人民代表の参加を許す。

三月三日、午前十時から台北市中山堂で第一回の官民共同処理委員会が開催された。長官公署から周一鶚、胡福相、趙連芳、包可永、任顯群などが代表として参加した。民間側からはいろいろな代表が出た。私も好奇心にかられて参観にいった。民間代表の顔ぶれは、おもに「出風頭(でしゃばり)」、「吹牛皮(ホラ吹き)」、見え坊などが多かった。なかには「友仔(やくざ者)」も相当入っていた。そういう集まりであったから、会が始まると争って勝手に発言した。自己宣伝やら、でたらめな意見が続出して一つも秩序がない。ことに「友仔」の話は、本事件の処理に関係のないものばかりで、聞いているうちに私はあきてしまった。

私は中山堂を出ながら、学生時代のことを思い出した。歴史の教科書にフランス革命の挿絵が出ていた。今日の会議の様子はあれに似たところがあると思った。社に帰ると、外勤記者が米が一挙に大暴騰したと話していた。一斤六十一元という殺人的な価格であった。これは交通の關係で米が台北に入らなからということであった。

三月四日、処理委員会はおなじ中山堂で開催され、「鐵路制度調整委員会」を成立させて、責を負う人を選定した。杜絶がちになっていた交通が回復して、台北市はしだいに落ち着きをとりもどしてきた。

三月五日午後、処理委員会はやはり中山堂で開催された。処理委員会の組織大綱と政治改革案を決定した。政治改革の要点は七つあった。

(1)公署秘書長、民政、財政、工礦、農林、教育、警務などの処長および法制委員会委員の過半数は本省人を起用すること。

(2)公營事業は本省人に責任をもたせて経営させること。

(3)即時県市長の民選を実施すること。

(4)専売制度の撤廃。(ただしタバコ・酒公司だけは存続させる。)

(5)貿易局、宣伝委員会を廃止すること。

(6)人民の言論、出版、集会の自由を保障すること。

(7)人民の生命、身体、財産の保全を計ること。

台北市はほとんど落ち着いたが、地方はかえって混乱していた。『民報』高雄分社から高雄要塞の要塞砲がうなり出したために、たくさんの市民が死傷したというニュースが本社に入ったが、くわしいことは報道されていなかった。

三月六日、私は余君といっしょに汽車に乗った。彼は工場を見るためであり、私は故郷へ帰るためであった。途中彼はしきりに処理委員会に入った方が将来有利であるとすすめたが、私には

政治知識がないからとって応じなかった。わが社の陳主筆は処理委員会から何回となく請われでも出席しなかった。人にはおのおのの専門がある。ところが光復後、本省人はまったく浮き上がってしまったって、床屋でも靴直しでも政治家になろうとしている。実にでたらめである。処理委員会はまったく光復の縮図であって、学者、参議員、国民大会代表、参政員をはじめ、そのほか各界の代表、政治の政の字さえ知らないでしゃばりやインチキな人間も相当入って混然としていた。

久しぶりに故郷に帰って見ると、町も田舎も実にもどかなもので、ふだんと少しも変わっていなかった。二・二八事件で外省人をなぐった話も聞かない。平穩無事だった。ただ警察のかわりに青年団員が治安の任に当たっているだけだった。それも警察が各地の情勢によって、自発的に武器を青年団に渡したという。ちょうど光復当初、日本人警察が自発的に退いて台湾人青年団にその職を引き渡した時と同様であった。

新聞の編集時間にまにあうようにと、その日のうちに故郷から台北にもどった。台北はすっかり落ち着いていた。夜間でもふだんと変わっていない。西門町でも城内でも大稲埕でも、なかなかのにぎわいであった。つぎの日もそのつぎの日も。ただ処理委員会は動いているが、一般市民はそれに対してあまり関心を持っていなかった。

八日に、閩台監察使の楊亮功が中央の命を受けて二・二八事件処理のために台湾に來た。ところが、基隆キョウリンから台北に向かう途中、五堵で奸党の襲撃にあい、随行員一人、衛兵一人が負傷したとラジオを通して発表された。しかし、一般の推察では陳儀長官の謀略と見ていたが、真偽はわ

からない。

夜、編集を終えて家に帰ると、余君が来ていた。二人で製茶工場の経営についていろいろと相談した。遅くなったので、余君は私の家に泊った。

突然夜中に銃声が起こった。あちらでもこちらでも物すごい銃声が出た。ときどきそのあいだに大砲の音がまじってひびく。遠くからや近くからの音をよく注意して聞くと、城内の方向と樺山あたりや円山辺にとくに多いようだ。どうしたのだろう、いまごろになって銃声が鳴るとは？私はどう考えても解せない。そのうちに近くの大正町にも銃声がシューシューと響きだした。無気味に感じたが、夜はまだ明けない。外の様子はさっぱりわからない。いらいらしてしまった。余君はしきりに妻子のことを案じていた。彼の妻は日本人でまだ若い。

「たいへんだ。妻がどんなに心配しているかしらん」
と言つて、彼は部屋のなかをぐるぐる歩きまわり、居ても立ってもいられない様子だった。全市が豆を煎つたようだ。外へ出て見に行くわけにはいかない。一晚、焦慮動揺のかぎりをつくした。

不安のうちによりやく夜はしらじらと明けた。けれども、銃声はまだやまない。ラジオをひねると、昨晚、奸党および暴徒が北投、松山両道から台北市内に入り、円山拠点、警備総部、陸軍供応局、長官公署、警務処、台湾銀行および大商店を襲撃してきた。軍警がこれに応じて反撃し、暴徒は潰走しつつある、と発表していた。けれども、その後のある日、私が城内へ行って、とくに台湾銀行を注意して見たが、ガラスは破壊されていない。また大商店の襲撃された話も聞

かない。これも中国七不思議の一つにすぎない。

警備司令部はラジオを通して、九日午前六時よりふたたび戒厳令をしいたと発表した。当時陳儀の兵隊がたくさん大陸へ移動したため、島内では警備が薄手になっていた。国軍二十一師が九日に基隆へ上陸したので、陳儀長官が時をかせぐ計略として民心を一時ごまかすために組織された官民共同処理委員会が自然解消されたわけである。同時に「暴徒」肅清の戦闘状態をラジオでたえず放送していた。終日、ものすごい銃声だった。全市まったく戦場になってしまった。私の宿舎の前通りにもシューと弾のどど音が聞こえた。それでも余君は帰ろうとあせっていた。私はそれを引き止めるのに一苦労した。銃声は夕方になってようやくおさまり、夜に入っておだやかにになった。しかし、恐怖だけは去らなかった。

翌十日、銃声はやんだが、やはり落ち着かない。しかし、連日の恐怖がだんだんうすれて来た。余君はどうしても帰るといふ。私はもうしばらく様子を見てから帰った方がよいとさらに引き止め、十時まで待ったが、銃声は一つも聞こえない。そこで、私も新聞記者という職業意識がよみがえって来て、外の様子を知りたくなったので、余君といっしょに自転車に乗って大正町八条通りの奥から出ていった。近くの溝に一人撃たれて死んでいた。

ふと見ると、前面邸内科医院の停仔脚に守備していた兵隊が二人、銃をかまえてこちらをねらっていた。私はあわてて余君といっしょに自転車からとびおり、逆戻りをして両面の溝のわきをつたわって逃げ帰った。帰りつくと、全身汗がびっしょりだった。それから、ふたたび宿舎に引っこんで、一歩も出なかった。外界との接触がないので、不安はいっそうつのつて来る。おか

ずが買えない。さいわい米だけはあったが、いつまでこうしていなければならぬのか、それが気にかかる。

つぎの十一日の朝、余君はもうたまりかねて、どうしても帰るといふ。私は彼を門前まで見送って、せめて無事であるように心のなかで祈った。同時に女の力は、じつに偉大なものだと感じた。私があれば引き止めても、彼はやはり危険をおかして帰って行った。

一週間後、余君が来てその日のことを話してくれた。その日、私の家を出たが、市内は死んだように静かで、一人の通行人もない。長官公署の前で四、五人の衛兵にいったが、ちよつと質問されただけで通してくれた。ところが専売局の角に来たとき、行く手をさえぎられ、十何人の兵隊にかこまれてしまった。いろいろと審問の結果、最後に君はどこのものかと問われて、彼はとつさに機転をはたらかせて関外(満州)のものだとごまかした。彼らは余君は外省人と思ったのか、そのまま通してくれた。その時、彼のふところには三万円の金があった。もしも身体検査でもされたら、実にあぶなかった。なによりも流暢に北京語が話せたおかげで無事に通れたのだと思ふ。

余君の帰った翌日、食物もほとんど尽きてしまった。米だけは田舎から持って来てあったので、まだ余裕があった。おかげがないので、塩をまぜてがまんするよりほかはなかった。ところが昼近く路地から路地づたいに餅を売るおばさんが来た。空谷聲音くうこくせいおんという言葉のとおり、実になつかしい感じだった。おばさんの話によると、大通りはやはりだれも通らない。しかし、路地から路地を歩けば、そうあぶなくないということだった。こういう時、女はやはり重宝なもので、

こんな危険状態にもかかわらず平気で商売をして歩く。これを見ると、女はこういう場合でも男よりは都合がよい。二・二八事件では女が死んだということも聞かなかった。

三日間封鎖されて戦々競々きょうきょうきょうの毎日だった。四日目には秩序も回復し、路地には野菜売りが入ってきた。大通りにはぼつぼつ人影が見え出した。しかし、この事件で相当多数の犠牲者を出した。私の宿舎あたりでも四人は死んでいた。なんでも松山や円山あたりが一番多く、死体のごろごろしているという。また、南港の川のなから針金でしばりつけられた死体が八つも浮き上がったとうわさされた。

知識階級の犠牲者は行方不明が多い。『民報』では林社長だけだった。それにくらべ、『新生報』の日本語版には行方不明が多かった。日本語版編集部長や総経理をはじめ何人も生死がわからなかった。行方不明のなかには私怨のために復讐されたものもいた。たとえば呉判事のようにな、ある軍人の妻が日本人経営の医院に入り、出産の時に手術で死んだ。それが告訴沙汰となった。その時、呉判事は医者に無罪の判決を下したため、恨みを買って報復されたという。

雨降って地かたまる。この事件を処するために、中央から特使として白崇禧將軍が台湾に来ると発表された。島民六百万はほつとした。白部長は小孔明と言われるほどの人で、きつとうまく取り計らってくれると思ひ安心した。町は日ごとに回復されてぼつぼつ商売も始まった。

私がある日、民報社へ行って見ると、机はひっくり返され、活字の棚が倒れて、床には活字がいっぱい散らばっていた。そのほかのものも、みなめちゃくちゃになっていた。小使の話によれば、九日の午前二時に兵隊がたくさん来てこわしたという。つまり、兵隊はその日の新聞ができ

たあとに來たのであった。その後、『民報』はとうとう封鎖されてしまった。

三月十七日午後六時半、白崇禧將軍がラジオで処理方針を発表した。それによって、秩序はたちまち回復された。二・二八事件は、台湾にとつてたしかに大きな嵐であった。人によって、いろいろ異なる見方もあるだろう。ここに一例をあげれば、三月一日、省政府機関紙『新生報』では『延平路事件感言』と題した社論を出したが、比較的公平な見方で、当時の民意を代表したものである。いま、その社論をそのまま写して参考に供しよう。

一昨晚、本市延平路で発生したヤミタバコ販売取締りの行きがかり上起こった不幸な射殺事件で、群衆が激怒し、人心が恐怖におそわれたことに対し、われわれは死者に対し無限の同情を寄せるとともに、今回の事件発生と拡大につき、左記の感想がある。

第一、ヤミタバコの取締りは、もとより専売局の職責であるが、ただし、その方法は根本的にその来源から手を入れるべきである。すなわち、各港口より密輸入する品物を嚴重に押さえて没収してしまえば、ヤミタバコの来源は杜絶する。つきに取り締まるべきは、ヤミタバコを大規模に卸売りしている商人である。このように密輸入タバコの来源を押さえてしまえば、秘密裡にタバコを仲介する人もいなくなり、ヤミタバコの密売もなくなるはずである。だれでも正当な職業につきたい。だれが泥棒のような商売を好んでするか。彼らがヤミタバコ売りをあえてするのは生活に追いつめられた結果にほかならず、ほかに適当な職業が見つからないからこそ、そんな下策に出たのである。街頭を転々として走りまわり、僅少な利益でヤミ商売に従事し、一個人ない

し一家族の生活を維持しようとしているこの事実は、社会の同情にあたいするものである。

しかるに、専売局は大規模の密輸入業者や、仲介の商人に対して取り締まる力がなく、ひとり街頭の憐れな行商人に目を向け、彼らの商品を没収しようとしている。しかも雷のようにかしましく、風のように吹き荒れていささかも仮借することなく、ために今回の不祥事件を惹起したのだが、実に本末顛倒だと言わざるをえない。ヤミ売り行商を過分に取り締まることは、苛酷と言わざるをえず、ヤミタバコがなお陸続として入ってくるあいだは、永遠に禁絶することはできない。

第二、台湾の環境は平和の環境にあり、陳儀長官の施政は民主的施政のはずだ。長官はたびたび部下に対し正式命令を發し、警察官が勤務に出る時には銃を持ち出すなど訓戒して來たはずだ。武器を携帯すると知らず知らずのあいだ事を起こし、不祥行為を起こしやういので、有害無益だと懇々と説き、再三の訓戒があつたのを、われわれは記憶している。警察の勤務さえ武器携帯を許さぬのに、まして専売局の取締員が銃剣を携帯するというのはなんの必要があつてのことだろうか。

残念なことは、説く人は諄々として説き、聞く人は藐々として聞かず、警察官および専売局取締官は依然として武器を携帯して、市中を横行闊歩し、しかも行き当りばったり、いいかげんに人を射殺した。今回延平路で発生した不幸な事件は、まさに彼らが陳長官の日ごろの「武器を携帯するな」という指示に違反した結果である。その時、なぜ発砲したか、その真相のいかんにかかわらず、単に上級の命令に違反し、武器を勝手に携帯した一点だけでも、いささかも寛恕す

る余地はないはずだ。

第三、今回の不祥事件の処理に対し、われわれは死者に対し厚い慰藉をすること、事件を惹き起こした人に対し嚴重なる処罰をすることを主張する。そのほか専売、警察の二つの役所の主管者が、部下を監督する能力の不十分なため、部下が公然と陳長官の命令に違反し、勝手に武器を携帯し、そのために人命を死にいたらしめた責任を追求する。政府当局はこれらの人を懲罰に付し、もって公憤をやわらげ、群衆の激動に対しては慎重なる処理方法を考え、もって社会の人心を安定し、公共秩序を維持するよう望む。陳長官の公正賢明な態度は、かならずやよくこれを善処し、本省同胞の満足をみたしうることと確信してうたがわない。

第四、現在われわれは民主を要求し、憲政の実施を準備しているが、民主憲政は法治精神から離れることができない。法治精神とは、政府も人民も法律を遵守することにほかならない。政府は人民が法にしたがうことを要求する前に、政府自身率先実行して法を守らなければならない。専売局員と警察が勝手に武器を携帯し、勝手に発砲して人命に傷害を与えたことが、すなわち違法であり、法を守らぬ者は「群を害する悪馬」で、国家社会の害虫であるから嚴罰に付すべきである。人民がいま政府に要求していることは、これらの不法者を嚴罰に処することである。言葉をかえて言えば、政府自体が法を守ることを切望しているのである。反面において、人民が政府に法を守るよう望むならば、人民自身も法を守らなければならず、しからずんば自己の立場を失する。

延平路の不祥な事件は大衆の義憤を揺り動かしたに相違ないが、われわれはすでに政府に対し法にもとづいて処罰することを要求した以上、われわれは政府の適当な処置を待たなければならぬ。政府が法にしたがって処置するかどうかを監視すべきである。ゆえにわれわれがどんなに激憤しても、このさい理知冷静を保持し、軌道にはずれた行動は極力避けなければならない。延平路の不祥な事件による血の跡がまだ乾かない今日、再度流血事件を引き起こすことは絶対に戒める必要がある。われわれは不法の公務員に対して限らない怨恨をいだき、政府に対し法にしたがって嚴罰せよと大声疾呼するが、われわれ自身も正当な方法でわれわれの意見と願望とを表示すべきで、絶対に法律的立場から離れて直接手段に訴えてはならない。またその必要もないと思う。この点、本省同胞はかならずやよく了解賛同してくれるものと信じて疑わない。

この社論は、当時の実情を物語り、陳長官の下には法律を守らず命令を聞かない部下がいることを実証している。このほかにも、いろいろな見方があったが、しかし、私は兄弟げんかとして見るにすぎない。しかし、もしもだれかが色メガネをもってこの事件を見るとすれば、本省人の愛国の心情を知らないものである。理屈をつければきりがなが、要するに外省人は出稼ぎ根性で早く儲けて帰りたいものが多い。とくに重慶から出て来た一部の人たちは戦勝気分分で台湾にのぞみ、その特権を背景にしておのれのグループを作って尊大ぶっていた。それに対し、本省人は愚痴的感情に走ってねたみ、おなじ兄弟であるのに彼らだけが特権をもっているのはけしからんと罵倒していた。このようにおたがいいけなし合う泥試合だった。

外省人は思っている、自分たちが八年も抗戦したおかげで台湾が解放されたので、当然われらに

感謝すべきである、もしも自分たちが抗戦しなかったら、君らはいつまでも日本の奴隷ではなかったか、と。しかし、本省人には本省人の言い分がある。それは抗戦の結果、犠牲になった英雄に対しては満腔の感謝をささげているが、君らは単なる代表なのに、ここへきて享樂のかぎりをつくしているのはけしからん。しかも、台湾はわれらの故郷で一刻も早く理想郷にしなければならぬのに、君らのようなへたくそな政治ではだめだ。僕たちが代わってりっぱにして見せるといふ、きわめて単純な考えで一時的カッとなり、武器を接収してしまつた。

しかし、陳儀長官の方は、ついに感情に走り、この機を逸してはならない、このさい一撃を与えるべきだ、と考へた。本省人は「怕法」すなわち嚴罰をおそれてはじめて法を守るのである。過去において本省人が法を守り、日本人に屈服しておとなくしていたのは、嚴罰がこわいためである。このさい一撃を加えておけば治めやすい。当時、このような論調がよく新聞に散見していた。おそらくそういう見解の下に恐怖政策を行ない、むやみに人を逮捕したり殺害したりしたのであろう。そのために本省人のインテリの行方不明は少なかつた。

だが、本省人は陳儀長官の考へているようなものではない。台湾領有当時、かつては日本軍に對し山にかくれ野に伏せて戦つたが、しかし、祖国に對してはだれも発砲しなかつた。こんなひどい目にあわされても、祖国をうらまず、中央から武器を返却せよと命令されれば、すぐに接収した武器を全部もとどおりに返した。じつに素直で天真爛漫だつた。ところが、陳儀長官は本省人のようにあつさりできなかった。事後においても、むやみに人を逮捕した。逮捕された人は逮捕される理由がわからない。その一、二の例をあげよう。

略という『民報』記者が逮捕状が出ていることも知らず、相変わらず長官公署に参上してぶらぶらしていた。そこで知り合ひの人から、ひそかに注意されてもそれを信じなかつた。發行課へつれて行かれて、官報を見てはじめてびっくり仰天した。また、『民報』の主筆は事件後何カ月かたつてはじめて逮捕されたが、その間、彼はいつも悠々として中山北路の大通りを歩いてゐた。自他ともにだれも彼が逮捕されるとは思わなかつた。

かえりみれば、二・二八事件はたしかに不幸な事件であつた。当時陳儀長官の下に有為な政治家が一人でもいたら、おそらくこの事件は大流血に至らずにすんだことと思う。事件が起こつてからの民衆は、憤激のあまり一晚中さわぎ、翌日の午後までもさわぎにさわぎつづけた。この長い時間があつたのにもかかわらず、ただ成行きにまかせ、悪化しても知らぬ顔をしてゐた。拱手無策、この間いくらでも打つ手があつたらうに、それを打たなかつたのは実に残念である。かつ無能とあざけられても弁解する余地がなからう。否、有能の政治家がいなくても、真に人間らしい人間がいて被害者に同情し、何万元かをさげて慰問でもしていたら、民衆の憤怒はただちに解消したにちがいない。

惜しいかな、押す手一ぱりで押したために、本・外省人ともたくさん死傷者を出してしまつたことは、なんと言つてもおそるべき封建的官僚社会の残滓であつて、一人の人間を一匹の蟻としか思わない錯覚を起こしたためであらう。阿Qのように死んで行つた人も少なくない。しかし、歴史は決して悲観する必要はない。人間の社会は、古今を問わず、歪められた政治のために犠牲にされた幾多の人間が下敷きになつて、はじめて歴史が前進する。悲観する必要もなから

う。ちょうど川の流ればかならず海へ流れこむように、途中で山に突き当たって迂回することがあっても、最後には、やはり海へ流れこんでしまう。人類の歴史の流れもおなじわけで、決して悲観するにおよばない。しまいはかならず人類の望む明るい方向、すなわち真の世界へ流れていく。

二・二八事件の直後、私は『夜明け前の台湾』を書いた。その最後にこんなことを書いておいた。

「祖国で漢奸の検挙をすれば、台湾では御用紳士を罵倒している。

上海姑娘がパーマネットに口紅を赤くぬれば、台湾では太鼓帯にセキタをはいている。一方が西洋くさければ、一方は日本くさい。外省人は商売根性が多く、台湾人は大頭病（売名病）にかかっているものが多い。

祖国の新聞では言論自由を叫んでいるが、台湾の新聞では、言論が自由になり過ぎたために、二・二八事件が起こったと言う。今の上海の米騒動も、おそらく言論が自由になり過ぎたためであらう？

しかし、そんなことを言っているうちに、文化はたしかに下降線を辿って走っている。外省人とか本省人とかというバカ騒ぎをしている間、世界の文化は少しも待ってくれない。やはり早いテンポで前進している。吾人はそんなつまらないことを言うよりも、台湾をして理想境たらしめた方がよい。そして教養ある台湾にしたい。

たとえば、物を落としても誰も拾わない。戸を閉めないで寝ても盗人が入って来ない。刺身を食べてもコレラやチフスになる心配がない。停車場に巡査がおらなくても、秩序正しく上下車する。公共便所を汚すものがない。何をしても他人から監視せられない。どこを歩いても巡査に叱られない。どんな文章を書いても発売禁止にならない。誰を攻撃しても鬨討ちをくわない。三角の肩を揺り動かしながら歩いても人が悪口を言わない。このように暢然として身も心も裕かなる自由な台湾にするのが、およそ台湾に住むものの務めであって、外省人も本省人もないわけがある。」

かえりみて二十年前、『夜明け前の台湾』を書いた。その時いだいた理想境の建設については、いまでもその気持は変わっていない。私は愚公ではない。しかし、愚公の子孫にはちがいない。だから愚公が山を移したように努力を惜しまない。そうすれば、いつかは私の思っている理想境も出現するであらう。

夜明け前の台湾



は し が き

余儀なく新聞社をやめた。やはり時の力の偉大さを感じずにはいられない。突然、仕事がなくなったお蔭で遊ぶことになった。年がら年中遊び暮らす人さえいる世の中で、一、二カ月遊んだところで、誰にも憚る必要はないのだが、物価が天井知らずに騰って行く代りに、文章がだんだん下落して二束三文の価値しかないのにもかかわらず、それをいじっているのは贅沢ですよ、と家内がしきりに文句を並べる。こういうとき、もっと融通のできる人間に生まれて来たら、と思うことさえある。

しかし、それも生れつきで仕方がない。そうかと言って、何もしないで毎日ポカンとしているわけにもいかないから、遊んでいる間、何か書かざるを得ない。書き始めてから二十日間、お蔭で一冊の本に纏めてしまった。内容は至って平凡なものであるが、平凡なるが故に、俗世間の議論する問題ばかりである。特に青年男女や学生に読んで戴きたいつもりであるが、読んだ後、「ああ助かった」というわけにはいかないが、少なくとも現在の溜息をいくつか減らすことができると思う。もちろん『左傳』や『論語』のように読む価値もなければ、そのように読みにくいものでもないから、肩をこらさず読めるわけである。お茶や煙草の代りにと思えばよかるう。

しかし、高いお茶代を払って喫茶店で愚痴をこぼすよりも、これを読んだ方が早く憂鬱が取れ

るかもしれない。この意味において書いたのである。

正自里にて 著者

民国三十六年（一九四七）五月十七日

一 台湾青年の進むべき道

筆者は一野人である。野人なるが故に言うことが粗野無礼を極めることを免れない。それで、ときには感情の走るままに筆を走らせることもあれば、ときには露骨な批判をあえてし、礼を失う場合も多いが、それを野人の戯言だと思えばいささか許されぬこともなからう。元来野人というものは、軽っぽくて教養が足りない。教養が足りないから気軽にものが言える。気軽にものが言えるから礼を失う場合が多い。どうせ三民主義の世の中でおたがい自由平等であるから、少々礼を失うことがあってもあえて咎める必要もなからう。

現在、米は一斤五十元もする。溜息を吐いたところで安くなるわけでもない。溜息ばかり吐くと、かえって腹が空く一方で、建設の勇氣も出ない。建設の勇氣が出なければ、模範省も遠い夢である。そうかと言って、にわか三民主義を受売りしてもすぐ腹が一ぱいになるというわけにもいかないから、むしろ野人の言うことを聞いて、しばらく空腹を忍んでも、せめてこの憂鬱さを忘れようではないか。今や、わが国は一大試験期にある。国を愛するものは齊しく狂わんばかりである。抗戦八年、そのために消耗された物力、精神力と言えば、おそらくわが国開闢以来のことであって、戦争に勝ったからとて安逸を貪り太平享樂の夢を見てはたいへんである。

それこそ、緊禪一番、建設に従事しなければ功一篋を虧く憾みがある。むしろ、抗戦中よりいっそう心をひきしめて長期建設に邁進しなければ、揚子江の水の清きを待つ愚と同じである。隣国を見給え、日本は敗戦したとはいえ、あらゆる艱難辛苦の中から生き伸びようとしており、新

しい希望に燃えている。そして国民が一致団結して民主国家の建設に励んでいるのだ。ひるがえってわが国はどうかというに、内争ばかりか内戦をさえあえてしている。そればかりでなく、狭き台湾でも外省人と本省人が対立して争っている。ああ何という、バカ騒ぎであろう。

わが国は建国以来血の歴史である。なかんずく、ここ五十年間は実に惨たる血の闘争をして来た。満清を顛覆せしめ、軍閥を打倒した。それこそ前仆後継、犠牲に犠牲を續けて来た。最後に抗戦すること八年、国のために殉ずる英霊数千万、国帑幾千億を投げ棄て国を賭して戦った。ああこの犠牲、この努力があつて、はじめて台湾に青天白日旗が掲げられたのである。さる三月十八日、蔣主席が南京還都二周年記念日に当たり、この二十年間國家の遭遇せる内憂外患、その危険艱難なるありさまは、実に歴史にその前例がない、と言われている。しかし、全く血と涙の歴史である。今や憲政実施を眼の前に控えている。歴史は一步前進、否、飛躍せんとしている。この秋に当たり、われわれ六百万の民衆は果して燃ゆるがとき意気ごみを持っているだろうか？ここにわれわれは冷静に考えなければならないものがある。新しい歴史を作るには新しい構想が必要である。同時に自己を省みる必要もなければならない。

過去、わが国は内憂外患、それを排除せんとして四億の民衆が一致協力救国の戦線に馳せたのである。ことに有為な青年は軍と政に馳せ参じ、至誠建国に努めたのである。そればかりではなく、科学者も文人も美術家もことごとく救国戦線へと馳せ参じたのである。つまり医者も技師も画家も、救国せんがために政治家か軍人へと一方的に馳せていった。一旦この思潮が澎湃として生ずるや、全国の青年は好むと好まざるとにかかわらず、その潮流に流されて軍と政の二つの

道に出てしまった。しかもこの現象が五十年も続いたので、いざ建設時期に入ると、技師はポカソとしてなすところを知らず、医者も顕微鏡の扱い方さえ忘れて、聴診器を執っても、さて心臓はたしか右にあつたが、これは左ではなかつたのかと言つて不思議がるのである。そういう錯誤が随所に現われることは決して不思議ではない。むしろあたりまえである。

それで台湾を接收に來た技術員や学者などが、いろいろなナンセンスを播き散らすのもあえて咎めるに足りない。彼らの中には、国を救うために自分の専門を棄てて試験管や筆の代りに銃を執つて戦つた人もいるに違いない。それも止むを得ないことであるが、これからの中国はいったいこれまでのように軍と政の二つの道にのみ走つて好いだらうか。深く深く吾人は反省し内觀しなければならぬ。およそ一国を理想化せんとするには、ただ、政治家や軍人にのみ頼ることはできない。しかし、まして平和時代においてをやである。今や中国は軍人や政治家のみを必要としない。むしろ科学者や技術員や職工を必要とするのである。ことに近代文明に立ち遅れた中国にはいかに科学が必要であるか、これは論をまたないのである。広袤四百余州、地上にも地下にも幾多の資源がいたずらに放置されている。中国の再建はまず科学から始めなければならぬ。科学人材なくして中国の建設を云々するものありとすれば、それは雲を掴むような話である。

青年諸君よ、起て！そして技師となれ、鉞夫となれ、そして職工にも建築家にも、そしてまた学者ともなれ、君らの前途は洋々として輝いており、いささかも現象に揺さぶられてはならない。いやしくも中国を背負ひ建設の任に當たる青年たちよ、美しい現象に惑わされて眼前の小利に甘んじてはならない。少なくとも十年か二十年か先のことを考へて勉強する必要がある。吾人

は勧告する。本省の青年たちよ、決してこのたびの事変「二・一八事件」によって志を失ってはならない。よりよき理想を求めて進み給え。何故ならば諸君の前途には無限の途が展開されており、広々とした四百余州が諸君の開拓を待っているのだ。しかし、それには自己の完成を計らなければならぬ。すなわち実力を持つことが先決問題である。

廣大無辺な処女地であるわが大中国を開拓するには、いくら人材があっても足りない。ために本省の青年を根こそぎ動員しても、全人口の八分の一か、もしくは十分の一しか集められない。つまり、六、七十万しか動員ができない。ましておのれの意志によって事をなさんか、その半分かさえよそへ繰り出すことができないのである。

わずか三、四十万ぐらいの青年を全部技術員にしたところで、中国の建設をもたらすことはできない。こう考えるとき、われら青年の前途がいかに悠遠であるかが判るのである。吾人にただ一片の技術さえあれば……。しかし、かく説くも、青年たちはおそらくなお躊躇逡巡、疑念を差し挟み、一片の空言だと思ふ人がないとも限らない。けれども現実を凝視してくれ給え、台湾でさえ日本人の技術者や科学者を留用しなければ動けない現実ではないか。ああ廣大無辺なわが国土、その資源、北は万里の長城を越えて東北三省の工業地帯あり、西は揚子江の水源を極め、遠く青海、新疆、西藏など、千古未開の処女地帯あり、南は天恵ゆたかなる宝庫あり、しかし南洋の経済権さえわが同胞の手に握られている。東亜の天地、いずくにかわが同胞のおらざるところあらん。青年諸君何をか悲観する必要がある。われらの前途、遠かつ大である。

しかし、前途に洋々たるものがあるからとて、青年に志気がなく齟齬そごとして蝸からむりの角の虚名を争い、蠅頭の微利を急々乎として求めんか、大中国はついに興る能わずして沈淪へと浮沈の喘ぎをいつまでも続けるであろう。青年諸君よ、大志を持って、しかして科学建設のために一生を捧げ、各自専門家となり、技師となり技術者となって国家民族のために活躍すれば、そこに中国の前途に光明が輝くのである。

ところがためにわれらの身辺を顧みたとき、惘然として皮膚に粟を生ずる。食糧以外われら是一体何を生産しているのか、街頭を闊歩する現代青年や現代女性を見給え、そこには泣笑いがある。美しい洋服、腕時計、めがね、外套、カラー、万年筆、ガラス帯など、いずれも中国青年の手では製造し得ないものばかりである。女性の身辺を裝飾するものを見るには、さらに悲観するものが多い。パーマント用の油、高級白粉、クリーム、ロイドめがね、美しいガラスのハンドバッグ、ガラス・マント（戦後の台湾ではビニールをガラスと称した）、そのいずれか外国製品でないものがあろうか。ここに中国の憂鬱がある。ああ中国を救うには、どうしても工業生産の水準を高めなければならぬ。それにはどうしても青年技術者が必要である。大ナポレオンはかつて「戦争に勝つには、一に金、二に金、三に金、四に金、ついに十七まで金である」と叫んだことがある。しかして今やわが中国を建設するには一に科学、二に科学、三に科学、四に科学、そしてナポレオンと同じく十七も十八も科学であることを絶叫して止まないのである。

三月二十二日南京合衆社電によれば、わが政府が日本工業の復活に対して抗議している。その理由は、日本の生産水準が一九三〇年から一九三四年の状態に回復すれば再び中国の脅威となるからである（一九三〇年に、日本がわが東北を侵略した）。しかし、日本工業生産の水準をいく

ら低くしても、中国の工業生産がいつまでも零位の状態に止まれば、年が重なるに従ってストック品ができ、やはり脅威となるのである。ここにわれわれが特に自覚しなければならぬのは、おのれの工業の生産水準を高めることである。

青年諸君よ、何をか争う！ 一人一人が国士となって、来たるべき国難を未然に防がなければならぬのだ。それには一人一人が産業戦士となり、技師となり、科学者となって、おのれの完成を計り、おのれの技術を練磨しなければならぬのである。そして中国の工業生産のために身を捧げることである。かのごとく説いても、筆者は決して日本工業を相手に競争せんという、けちくさい考えは持たない。むしろ進んで日本の技術者を活用し、アジア工業生産の水準を高めて世界文化に匹敵しなければならぬときを思っている。

願みるに、光復以来ごく少数のものを除き、男女老若幾人が時流に流されなかつたであろうか。否、六百万の民衆が大頭病（売名病）に罹り、争つて頭にならんとあせている。そして猫もしゃくしも政治という窄き門に殺到して押し合っている。政治というたつた一つの道から出ようとあせている。そこに無理が生じないだろうか。しかし、この現象はただわが台湾のみではなく、全国の青年もこの弊に陥っている。ことに台湾は過去三百年間ほとんど政治という恩恵に浴びなかつたため、いっそう政治欲に燃えているのである。そして政治でなければ国家民族を救えないものだと錯誤するのも所以がある。中国百年の大計から見れば、この政治病は有害無益であつて、ことに青年諸君は気をつけなければならぬのである。

それ吾人が最も奇怪に思うのは、大学教授や技術者さえ思い上がり、政治ブローカーとなつて政治舞台に出入りすることである。半分売りの政治常識を、しかも大事そうにもつたいぶつて民衆に発表することである。その中には、相当な学者さえ混じっているのは不思議である。自己の専門を棄て、青白い顔をして民衆の前に政治のイロハを放送する姿はむしろ滑稽である。大学教授が万巻の図書を擁し、名利を超越して、汲々乎として真理の探究に専念している神々しい姿こそ、吾人をしておのずから襟を正し、崇敬の念を起こさせるものである。そして一たびその専門知識を発表するや、誰か感銘せずいられようか。ああ台湾の学者や技術家は、何故ダイヤモンドを棄てガラス玉に換えて喜んでいいのか、それが不思議でならない。

台湾の医学の発達が全国一であることは、すでに自他ともに許している。また数千の名医を擁しているのも事実である。そして光復後、コレラ、腸チフス、天然痘などが到るところに流行しているのも事実である。吾人はそれをすぐお医者責任だという意味で言っているのではない。この数千のお医者の中に、真に台湾を愛し中国を愛する医者がおるか否やを心配するのである。

日本の領台当時、ペスト、コレラをなくすために一生を捧げた学者さえいる、と聞いている。しかして、わが台湾の医科学者が一生を捧げて中国から伝染病を一掃する決意があるや否やを心配するのである。もしも台湾の医学界を総動員して中国を伝染病の禍いから救い出したとき、中国人はもちろん、全世界の人々からどんなにか感謝されるであろう。また台湾の医師者を動員して中国を阿片の害毒から救い出したとき、その功績は、けちくさい省参議員や参政員や国大（国民代表大会）代表の比ではなく、五院の院長を超越して人類史上にその芳名が残るであろう。しかし、吾人がかく提言すればおそらく反発的に現実と遊離した空論だと思ふ人がないでもない

いだろう。そういう懷疑論者は前途の障害を絶対的なものと見ているからである。およそ実践には、それより起こる障害や困難は相対的なものであり、実践者の意欲と熱意にかんにより、それを除去することができるのである。燃ゆる熱血と金剛石のごとき意志をもって貫けば、決して大山を挟んで北海を越えるものではなく、もとより長者のために枝を折るの類に属すべきものであって、ただなすかなさざるかによるのである。

日本の金原明善という熱血児が、天竜川の治水のために狂気のごとく奔走して成功した例がある。ときの日本政府は、決してはじめから彼の事業を理解しているのではなく、また当時日本政府の財政も余裕があったというわけでもない。全く金原という青年の熱血に感動して協力したのである。地方民はもちろん彼の誠意に感動して立ったのである。それ台湾医学界が蹶起すれば、たとえ中国から伝染病を一掃し得ないにしても、台湾をして衛生模範省たらしめ得るのである。数千の名医が私心をなくし一致団結良策を立てて決行すれば、たとえ政府に理解がなくても、コレラや天然痘はある程度まで食い止められるはずである。

惜しいことには、自己の専門を棄てて大頭病に罹り、政治ブローカーとなって躍る学者の心理を、吾人はどうしても理解できないのである。また天然痘やコレラが大流行しても、省民の注意を呼びかける医者さえいないのは実に不思議である。皆が皆というわけではなく、中には非常に真面目な学者も何人かはおるのであるが、思うに台湾にはただ医科学だけが科学らしいものがあるのに、その医科学者さえ浮腫では、そのほかが思いやられるではないか。医科学のみならず、今こそ学者が落ちていて人材を養成し、わが国のために尽すべき秋である。

中国は今や、清貧に甘んじ汲々乎として真理の探究に没頭する大学教授と、燃ゆる信念をもって中国の工業生産のために殉ずる青年を必要とする。日本がわずか五十年か六十年で近代国家に進歩した蔭には、研究に没頭して日露戦争さえ知らなかった学者がおったのである。ひるがえって研究室を守って研究に没頭し、国家民族のために一身を捧げ、名利に走らざる学者が台湾に幾人おるだろうか。かくのごとき真剣さがなくては、中国科学の建設もまた一場の夢に終りはしないだろうか。故に吾人は声を大にして、青年諸君に十年か二十年先を考えて、国家民族のために奮起し、科学の研究に専念するようお勧めしたい。人はよく言う、中国は学者を尊重しないと。なるほど……。しかし、吾人は反問したい。尊重されるような研究をしているや否や、もし真に実力があれば、自国に認められなくても世界の学者は黙っていないはずであろう。

しかして、わが国は過去において大学教授のポストを政界へ乗り出す踏台として利用した学者がないだろうか。それが学者の墮落でなくしてなんであるう。過去の台湾には、そんな弊風がなかった。今ようやくその弊風が芽生えつつある秋に当たり、吾人は一片の愚誠を捧げて苦言を呈する所以である。

孔子の偉大なる所以は弟子三千人を導いたからである。それ、もし七十二賢なかりせば『論語』も残らなかつたであろう。なぜならば、『論語』は孔子様の作ではなく、弟子のより集めた記録であるから……。エジソンの偉大さは、研究室に立て籠って三千余種のことを発明して人類に貢献したにある。もしもエジソンが研究室を後にしていたずに政治演説をほいままにした場合、果していくばくの功績を残すやら疑わしい。

幸い台湾は全国で一番工業建設の与件に恵まれている。また工業基礎がいくぶんか建設されてある。そしていくらかの科学人材もある。これから大中国の工業を建設するには、台湾において人材を養成することが一番捷徑であるが、台湾の青年をことごとく技術者に仕立ててもなお足りないことを知らなければならぬ。すなわち台湾の科学陣営はまだまだ貧弱なもので、世界水準に達していないことを自覚しなければならぬのである。アメリカのような科学の先進国でさえ、自国の科学陣を充実するにドイツから追われたユダヤ人の学者を迎えている。吾人は決して自惚^{うぶげ}れてはならない。光復後、井戸の蛙式に外省人に対し台湾の科学を誇っている人がおるが、世界の人はその小成を見て鼻の中でくすぐったがっていることだろう。青年諸君は外省人を標準にして科学の勉強をしてはならない。世界を標準にして努力すべきである。ことに台湾青年は中国の科学と工業生産のためにその任務を担当すべきである。それが祖国に尽すべき唯一の道であらう。

わが国は過去数千年間、作文教育を続けてきた。その弊が最も顕著に現われている。しかし、台湾青年も今、目醒めなければ時流に流されて、十年後にはただ口先の上手な青年が氾濫するであろう。日本も明治教育の弊が積もり重なって、大正の終りには法学士がうようよとして実に困ったことがあったが、日本は早くその弊を悟って実業教育に転向したのである。台湾も過去においてその弊害があった。光復後ますますその弊害が大きくなりつつあるのである。わが国は、民国になってからも内憂外患、科学を顧みるいとまがなかったために、いわゆる作文教育を五十年も続けてきたのである。それで「漂亮話(きれいな言葉)」は話せるが、いざ實際建設になると、経

験がないために右顧左眄してなすところを知らず、せっかく接收した工場をいたずらに錆びるに任せ、しまいには経営不能となって、むしろ機械を解体して部分品を売った方が利益になるといふ算段になるのも無理のないことである。

青年諸君、この欠陥をいたずらに棚にあげて責めたところで何にもならない。身から出た錆である。それよりも、一切の愚痴的感情を棄てて、十年後、二十年後の中国を背負うべく科学者か技術者となり、今から学窓に立て籠^{こも}って研究せられんことを切に望んでやまない次第である。

今年の春、黄又南という一青年が、オランダ領バタビヤからはるばる宝船に乗ってこっそり台湾へ戻って来た。黄君は抗戦中バタビヤに行き、留学中日本で習った紡織技術をもって、ここで紡織事業を起こしたのであるが、それが成功して愛妻華僑の娘を伴い、山なす物資を積んで故郷に錦を飾って帰って来たのである。これは決してオトギ話ではない。竜潭郷の一青年である。能あるものはただでは置かぬというのが世の中で、蘭印政府では黄君を留用して離さないため、今なお彼の地に戻って活躍している。

これ、技術がいかに大切であるかを証明するに足る。ためしに青年諸君が時計、電球、ガラスそのほか日用雑貨のうち何か一つ大量生産できれば、市場が四百余州、前途いかに大であるか、まさに男子畢生の事業に値いする。ここに台湾青年の道があり、ここに着眼してはじめて光復の意義があるのである。故にただ感覚的のものを見、ものを判断するものではなく、吾人はどこまでも頭腦的に理性的にもを判断し、目前の現象に動かされてはならないのである。

ここに吾人の注意に値する近代工業革命家が、わが中国にも一人おる。それは張謇^{ちやんせん}(南通)で

ある。張謇は清国最後の状元であつて、幾多の名譽職を顧みずおのれの所信を貫徹したのである。すなわち光緒十年粵督張樹声および李鴻章が相前後して彼を招聘せんとしたが、彼は「南に張を拜せず、北に李に投ぜず」と豪言したのである。

また光緒十八年翁同龢が彼を国子監南学に、同二十一年南江総督張之洞がまた彼を江寧書局総校に招聘せんとしたが、彼は頑として動かなかった。彼はもう官吏では中国を救うことができなことを知っていたからである。それで彼はもっぱら工業革命を計ろうとして故郷に帰り、南通地方において紡織の事業を始め、工業、農業、教育、交通、銀行、慈善など大小百七、八十の事業を創立して民福国利を計つたのである。彼の事業の基本はもちろん工業生産に置いていた。彼が七十一歳の誕生に当たり、各国領事団が各国の政府を代表して祝賀に臨席した。わずか一人の私事のために、各国がかくも関心を持つことは異と言わざるを得ない。米国の『密勒氏評論報』はそのときの様子を報道し、大いに張謇の功績を賞め讃え、ついに「南通は中国地上の天堂である」と喝破した。

決して過褒な言葉ではない。近代中国は乱髪のもつれたがごとく、どうして好いから分らない状態にあり、沈淪へと喘いでいるが、ひとり南通地方だけがこの余波をほとんど受けずに安楽に暮らせたのは張謇のお蔭であつて、工業生産があるためである。彼こそは中国近代紡織業の親であつて、民族工業の開祖である。

いかなる事業でも、そう容易に成功するものではない。彼の事業も同じようにはじめから軌道に乗っていたわけではない。すなわち彼が官服を脱いで故郷に帰り、いよいよ紡織事業を始めようとする、地方民から「状元公はもう気が狂つた」と言われ、口の悪いものは彼を「失敗官僚の綁票（ゴンドラ）（人質をとつて金銭をゆする）」と罵つていた。それもそのはずで、紡織工業は従来の手工紡織の利益を壟断するものだと誤解されたからである。それで事業を始めようとしたが資金が集まらない。彼はついに進退兩難、「この事業を成功させなければ面目がなくて死ぬこともできない」と歎いていたという。しかし、彼の鋼鉄のごとき意志はこの難関にぶつかって砕けるものではなかった。彼は終始一貫、それこそ不撓不屈の精神をもつて、全生靈を挙げて工業救国のために奮闘したのである。

およそ人類の歴史は狩猟時代から牧畜時代に、牧畜時代から農業時代に、農業時代から工業時代に進化している。三百年前から文明国はすでに工業時代に入り、目覚ましい活動をしている。しかるに、わが中国はいまようやく工業時代に辿り着こうとしている。一大自覚と一大決心と一大勇気がなくて、果して先進工業国に伍してゆくことができようか？

二 奴化教育と台湾教育に対する管見

光復後、方々で台湾における日本教育を粗上上げていろいろと論評している。そのうち教育専門家もおれば、一言なかるべからざる連中も混じている。花々しく論争しているが、どれもこれも千篇一律、簡単にそれを奴化教育、もしくは日本教育の害毒だと譏（あざわら）っている。いまだ台湾における日本教育の真髓に触れず、正鵠を得ていないのははなはだ惜しいことである。多くは主観論であり、感情論さへ相当入っている。ただ一種の漫罵に陥り、将来の台湾教育に対してはほと

んど意見らしいものがない。それでは何のために論じているのやら意味をなさない。

しかし、台湾の明日の教育に対して過去における教育の善悪を検討することも決して無意義ではない。むしろ徹底的にその長短を窮め、一刻も早く具体的に対策を立てる必要がある。いたずらにおのれの感情に走り、口々に奴化教育だと罵って本省人の感情を刺激するばかりでは何の役にも立たない。また日本教育の害毒だと罵倒して痛快がるようでは、全く子供に等しい感じがする。しかし、奴化教育と罵倒したからとて、台湾の教育が急によくなくなるわけでもない。むしろその欠陥を真に知って、徐々にそれを矯正する必要がある。ただ漫然と毒舌的に奴化教育だと言い、自分はその教育を受けていないという立場から、本省人よりも偉いように見せびらかす見栄坊はありはしないだろうか。もしもそういう意味で論ずるとすれば、全く子供と同様である。

さらに深く政治的意味を帯びるとすれば、教育の邪論であって一顧するだに価値がない。政治的に罵倒する意味とは、つまり「本省人は奴化教育を受けている。奴化教育を受けているから、多かれ少なかれ奴化精神を持っている。奴化精神がある以上、国民として精神的に欠陥を有しているということになる。故に祖国の人民と一様に扱うわけにはいかないから、ある時期まで被治者として我慢しなければならぬ」と、もしもそういう用意の下に論ずるとすれば、本省人をあまりにも侮辱しているのであって、これはおのれの政治的生命を維持せんとする愚論にほかならない。

およそ奴化教育とは、ある前提の下に教育することで、日本の軍隊教育やファッショ教育やナチス教育などがそれである。純正教育とは違って、主義を擁護するための教育である。純正教育は自己の完成を目的として人格陶冶に重きを置き、人格の完成をもって教育の目的としている。しかして日本教育は日本帝国主義を擁護せんとするための教育である。日本帝国主義の目的を達成するために個人の犠牲を強要している。この意味において、日本教育も奴化教育だと言うべきである。それで日本教育を受けたものはことごとく奴化教育を受けたことになる。日本内地とか台湾の別なく同じである。故にひとり日本内地に留学したものが奴化教育を受けないで、台湾におけるもののみが奴化教育を受けていると論ずるは、はなはだ偏見である。

その意味で外省人も相当日本の奴化教育を受けている人が多い。また、清朝は満清帝国を擁護するために三百年間大陸において奴化教育を施した。ひとり、台湾のみならんやである。されば台湾が五十年間奴化教育を受けたからとて、その宿命的事実に対して憤慨する必要もなからう。また、咎められたところで払拭できない事実である。日本が帝国主義を敢行し、台湾人をして植民政策の擁護、もしくはそれに協力するように教育したことは事実である。しかし、その教育は成功していない。このことは^(注一三)苗栗事件、^(注一四)西来庵事件をはじめ、常に幾多の革命事件が絶えなかったことを見ても分かる。

それと同じく清朝は大陸において三百年間奴化教育に努めたが、その結果も同じである。また、南洋華僑も外国から奴化教育を施されているが、一旦本国が革命運動を展開するや我先にその急先鋒となつて活躍したではないか。これがすなわちわが国民の特徴であつて、決して奴化されるものではない。同じ漢民族であるから、ひとり台湾だけが奴化される心配はないから安心してよいわけである。それで国粹論者はいらいらして神経衰弱にならなくてもよいわけである。奴

化教育をいつまでも論ずることは決して芳ばしいことではない。過ぎたるは過去で、過去は亡骸であり、亡骸に鞭を当てる必要はない。大きい意味では、現代の国家は深淺の差こそあれ、ことごとく奴化教育を施している。これも国家生活をする以上止むを得ないことであえて咎める必要もなからう。

さて日本教育は、精神教育において国体明徴、修身、歴史教育に力を入れて国民に盲信させ、いわゆる奴化教育を施してきた。しかし、科学教育においてはその痕跡がない。また科学の奴化はおよそ意味をなさないものであり、またできるものでもない。以上述べたように、台湾における日本教育の精神教育、いわゆる奴化教育は成功しなかった。むしろ常に破産している。本省では常に内面的に外面的に闘争している。そればかりではなく、祖国に帰って日本帝国の打倒に邁進してきた志士も相当多かつたのである。

その代り、科学教育はある程度成功している。今日、本省青年の科学思想は外省に比べて劣っていない。平均すればむしろ一日の長がある。こう説いたからとて、吾人は本省の科学に満足しているのではない。原子能時代の今日、むしろその幼なさを心配しているのである。

さて日本教育の精神教育を、さらに検討しよう。日本教育は幾多の変遷があり、ことに最近十年間は恐ろしいナチス教育に偏ってきた。すなわち全国を挙げてファッショ化に努力し、人間性を抹消して、ただ命令に服従する精神を鼓舞してきた。その結果、動物的闘争性がいやが上にも高まり、判断力に欠陥を生じ、理性的明智を欠くようになってきたのである。それで直接行動を好み、武力闘争を喜び、あらゆるものを武力手段に訴える癖が生まれてきたのである。故に日本

人は話より手の方が早いのである。

話は別だが、筆者があるとき学生と無駄話をしていた。その中の二、三人の学生が柔道の自慢をしていたので、僕が冗談半分に、柔道が強くても虎や狼にはかなわないだろう、今日の学生が文化を誇らずに動物的争闘力を鼻にかけるようでは情ない、と諷刺したことがある。

しかして過去の日本教育の欠陥もここにありはしないだろうか。二、三年前、ある友達が僕にこんなことを言ったことがあった。現在の若者は親切に言いきかせても、なかなか分からない。それよりも理窟を言わないで、頭から命令した方がかえってきくという。そのとき僕は半信半疑であったが、その後、僕が直接にそれを経験したことがあった。ある日汽車が非常に混んで車内にはいりきれず、デッキにぶら下がっているものがたくさんおった。僕は汽車の中ほどにおったが、そこは比較的空いていた。僕が、ちょっと老婆心を起こして、

「おたがい詰めましょう、デッキは危いから」

と隣の青年に勧めたところ、その青年は横柄に構えて動こうとしなかった。すると、隣にいた国民服を着た男が、大きな声で、

「おい、なぜ詰めんか」

とどなった。その青年は文句も言わず素直に詰め寄せた。そこで僕は「なるほど、ナチス教育の弊がここにあるのだな」と思った。

日本人は命令一下、団体行動だけは非常にうまく行くが、個人的、機動的にはなはだ動きにくい。ことに兵隊がその著しい例であろう。これも教育のしからしめるところであって、形式的、

公式的、方程式の弊に陥っているからである。最近十年間、台湾の日本教育もたしかにこの弊害が顕著に表われている。彼らのいわゆる硬教育は実に無理な教育である。ことに国民学校の児童は朝からどなりつづけられて常にびくびくしている。せつかちで、のんびりとしたところが一つもない。学校の体操の先生や訓育主任などは、まるで閻魔殿前の牛頭將軍や馬又將軍の化物である。それでは教育愛があるはずはない。ことに戦時下においては無理な注文が実におびただしい。先生は朝から、

「馬草を刈ったか、砂を運んできたか、びんや缶を集めてきたか」

というように、供出物品ばかり集めている。これを忘れて持って行かないと、すぐに非国民だと罵倒され、ひどい目に遭わされていた。この時代の子どもが一番不幸で、人生のもっとも楽しい少年期は無惨に蹂躪されて、少年の夢さえ見られないのである。常におびやかされ、叩かれ、いつもいらいらびくびく過ごしてきたのであった。

戦争中ある大学教授が、筆者に自分の子供のことを話されたことがある。

「どうもこのごろ、うちの子供はちょっと叱ると泣き出す。どうも男らしくない」と言う。そのとき、僕は日本の戦時教育を解剖して聞かせたことがある。学校では毎日無理な訓練をして朝から叱り飛ばしている。先生から児童に対する無理な注文は子供をして焦燥せしめ、いきいきとした気持を持たせない。故に家庭に帰ってきたら、子供の世界を作ってやる必要がある、と言ってあげた。そして、その大学教授からよく注意してくれたと言って感謝されたことがある。日本の戦時教育は実に直線的であった。わざと青年に批判力を持たせないで特攻精神を養成している。

言い換えれば精神年齢の至らない少年の動物的闘争性を利用して戦力を強化したのである。この戦時教育の弊害は、たしか台湾の学生にも多かれ少なかれ影響しているように思う。故に教育者はこの点について大いに留意する必要があるはしないだろうか。

ことにわが国がこれから大いに科学教育の振興を計らなければならない秋に当たり、台湾の学生をして頭腦的に判断力の練習をさせなければ、思考力をもっとも必要とする科学がその発達を阻まれる虞れがないとも限らない。

次に祖国の教育を一瞥しよう。しかし、わが国の教育について筆者は深くそれを研究していない。その上、祖国の事情に疎い上に大陸教育の仕事に携ったことがないから、その観察は粗漏にしておそらく群盲象を評すと同じであろう。故に批評するのではなく、ただ自分の感じの一端を述べるつもりである。

わが国の教育は大ざっぱに言えば天才教育である。また国民学校から大学に至るまで作文教育をしているとも言えよう。設備が不完全であるから、実験、観察の教育がほとんど行なわれていない。実験、観察を生命とする現代の科学教育は、このような教育ではむしろ跛行教育だと言うべきであろう。たとえば理論を知っていても、実際に当たるとおよそ食い違った距離が相当あるわけである。だから外省人は「漂亮話」は言い得るが、実際に当たれば仕事の一つもできない、と本省人からそう見られているのもあながち理由がないでもない。

また天才教育であるから、できるもののできないものとの距離が実に大きい。同じ大学を出ても雲泥の差がある。その点、日本教育は画一主義の教育であって、卒業生の実力もだいたい同じ

である。故に特別な天才が少ないわけである。天才教育の弊は片輪であるが、画一主義の教育は靴下の糸のごとく皆同じ長さになっている。

故に日本の中等教育はこの点が実に無理で、十数科目、好むと好まざるとにかかわらず、様に努力しなければならない。優等生になるには、喧嘩（柔道や剣道のごときもの）まで一番でなければならぬのである。一方的に力を集中することができないから、天才がなかなか出ないわけである。また身体を錬る必要はあっても、喧嘩まで一番になる必要はないのである。

その反対に、中国の天才教育は天分のあるものはぐんぐん伸びるが、しからざるものはさっぱりできないのでとてもお話にならない。一概に大学卒業生といっても当てにならない。現在中国の大学生は、大体において三分の一がいわゆる大学生でそのレベルに達している。このうちの三分の一は優秀なもので、日本の学生では往々にして追従を許さないものがある。中間の三分の一はややレベル以下で、残るあとの三分の一は名義上の大学生であって、いわゆる仕様がないう連中である。現在、台湾教育にもこの仕様がないう連中が殖えつつあることは実になげかわしい事実である。教育者や教育行政家は大いにこの点に留意する必要があると思う。

それから過去における台湾教育は実験、観察が盛んに行なわれていたが、近ごろは大いに閑却された感がある。この点だけが大きい祖國化されてきたが、あまり感心できない祖國化である。また台湾の学生は今まで日本人を相手にして猛烈に競争していた。決して日本人に劣らない覚悟があった。ところが日本人がおらなくなつて競争の相手をなくしたから、おのずから安逸を貪り、おのずから天狗となつて、墮落した感がある。この気持は、学生ばかりでなく、本省人全体

にそういう思い上りの嫌いがある。この点について三省の必要はなかるうか。吾人は眼孔を大きくし、世界を相手にして競争する必要がある。

祖國は文章の国で二、三千年間作文教育をしてきた。民国になつても依然旧態を脱せず、国民学校から大学まで作文教育をしている感がある。日本も一時その弊に陥つて法学士がうようよして困つたことがあつたが、日本は早くその弊を悟り、転向してしまつた。中国はもうこれ以上作文教育をすることは無意味である。これから科学時代に入り、大いに技術者を養成する必要がある。故に台湾教育もこの点に目覚めなければならないであらう。光復後、中学校が乱立してきてた。実業学校の増設はまだ聞かない。これからの台湾は、まさか政治屋や事務員ばかり養成する必要もなかるう。また台湾教育が技術人材を養成しない限り、祖國のためにあまり役に立たない。そればかりでなく台湾自体が行き詰まってくるのである。

台湾の人口は六百七十万、その密度は世界でも第三位となっている。

それで台湾の人口がこれ以上殖えると、どうしても外へ繰り出さなければならぬ。それで青年はどうしても祖國や南方へ発展しなければ窒息する運命になるのである。ところが海外へ行くには空手ではない。ただ口先上手な青年ならば、祖國でもありあまっている。それにはどうしても技術を持って行かなければならないのである。故に台湾教育は大いにこの点に力を入れるべきである。

それから、わが国は大なる農業国である。現在でもいまだに粗放農業であるから、これを立体化するには技術者や指導者がいくらあつても足りない。その上農産加工が発達していない。紡

主要国の面積人口比較

		面積	人口 (1939年)	人口密度 (1方秆あたり)
		千方秆	千人	人
中 国		4,085	459,454	112
日 本		382	72,750	190
イ ン	ド	4,079	365,900	90
英 国		244	47,600	195
仏 国		551	41,980	96
ド イ	ツ	586	79,577	136
イ タ	リ	310	43,430	140
ソ	連	21,179	170,400	8
米 国		7,839	130,300	17
カ ナ	ダ	9,569	11,255	1
ブ ラ	ジ	8,511	44,116	5
アル	ゼ	2,793	12,957	5
濠 州	連 邦	7,704	6,936	1
南ア	フリ	1,222	10,070	8
台 湾		36	5,747	160
台 湾 (現在)		36	6,700	186

織、製茶、製糖をはじめ缶詰工業もいまだしであるし、この方面の技術者もなお寥々たるものである。

次に地下に埋蔵せる資源もまだ開発されていない。この方面にも科学陣容を整える必要がある。かく数え来たれば、台湾全人口を技術者に仕立てても足りないのである。それで台湾の明日の教育も、この諸点に着眼して大いに改革する必要がある。また、台湾青年もやはりこの諸点に

留意して自己の技術を磨き、将来に備える必要があるのではないか。いたずらに愚痴的感情に走り、愚痴ばかりこぼして自己の使命を忘れてはいないだろうか。しかし、いささかもそういう気持があつてはならない。

話は別だが、台南工学院が工場を接收するに地方民とごたごたした記事が新聞に出ている。本省人は自己の利益ばかり考えて国家の前途を忘れてはいはしないだろうか。およそ大学の付属工場は多ければ多いほどよい。大学教授すなわち技術者で、学生の実習すなわち教育である。工場はすなわち学校である。また実験室である。およそ学校の教室や実験室から利潤が出るはずはない。自分の利益のために屁理窟をつけて接收の邪魔をしているのは、実に怪しからんと言わなければならない。また、この問題について本省の参議員や参政員や国大代表諸公が黙って見ているのも実に不思議ではないか。

台湾を模範省たらしむるには、まず教育から！ その教育の中でも、科学教育、工業教育、実業教育は急務中の急務であつて、同時にまた台湾の今後における進むべき道であると思う。

三 新時代と共に前進

現在、台湾の青年はよく溜息を吐く。なんのために溜息を吐いているのやらはつきりした意義がないようだ。ただ漫然とわけの分からない溜息を吐いている。もちろん、その中には何割か現実には追い詰められて溜息を吐かなければならない心境になっている青年もある。その他の青年はむしろ現実の波瀾の激しさに驚かされて自信力を失い、人が吐くから自分も吐いてみるだけで

ある。それで社会全体が何となく疲れているように見える。このごろでは、街頭を颯爽として闊歩している青年がほとんどおらない。その代り、公務員や軍人などはなかなか元氣よく歩いている。

天下國家を背負う青年がそんな元氣のないことでは、模範省台湾の建設もその望みが薄らいでいく心配がある。熱しやすくさめやすいのが台湾青年である。このごろでは光復当時のような意氣組みが見えなくなっている。台湾青年の任務は建設にある。どこまでも中国建設のつぼの中に飛び込んで、おのれの使命を全うしなければならぬ。傍觀的態度やちょっとしたことでも失望するようなめしさではいけない。建設する意氣組みがありさえすれば、たとえ前途が遠くても一歩一歩と近づいていけるのである。この理念を放棄すれば自殺的行為で、それこそ光復の意味がなくなるのである。

台湾は過去五十年間、日本の植民地としてわずかに三つの出路しか与えられていなかった。一は医者で、二は下級官吏で、残りが弁護士であった。これが日本の台湾統治中最も賢明な策であった。日本の植民政策がこの三つの道を台湾人に与えたために、台湾が五十年間小康を得たと言い得るのである。前の二つの道の推進のため、医学校と國語学校(註)(師範学校)の二つの学校を作った。一つは自費で、一つは官費である。それが最も巧妙な方法で、したがって台湾の中産階級以上の優秀分子はみずから自費の医学校に馳せ、中産階級以下の優秀分子は官費の師範学校へと馳せたのである。入学の数が制限されているから、この登竜門をくぐるにはよほどの優秀さがなければだめであった。

医学校から出た医者は、大富になれず中富か小富に落ちつき、日本の大資本家と競争して利を争うことができないから摩擦が起こらない。一旦医者になれば、いくら優秀分子でも毎日の忙しさに追われて時間に余裕がないから、経済的活動もできなければ政治的活動もほとんどできない。また容易に干渉ができる。

師範学校から出たものは五カ年の義務年限がある。燃えるがごとき青年期を、否でも応でも二十坪以内に縛りつけられる。そして教員は下級官吏として最小限度の生活安定が与えられており、その上恩給の恩恵に浴せられる。故に師範学校の卒業生は万斛の熱血を抱きながら、宿命的に五カ年間教壇に立たなければならぬのである。そのうちに妻を貰い子供ができ、ついには現実の恐怖が付帯して、多くはその運命に任せて教壇に踏み止まり、思う通りの活動ができなかった。それでも医学校や國語学校から出たものの中に一番反抗分子が多かったのである。

この政策が慣性になり、社会の習性となって、優秀な青年が無批判的に医者か教員かへ馳せてしまったのである。

ところが、光復後、今まで羽振りを利用していた医者が、日本の保護政策がとれたために社会の地位が揺さぶられてきた。また今までご飯の食えた教員や下級官吏が転落させられて、生活がもつとも脅かされることになった。これが光復後の著しい社会現象である。これらの指導層は自信力をなくしたために前途の希望が薄らいでいき、無限に青年に影響したのである。それが社会一般の現象となって現われ、やるせない頹廢気分に変わりつつあったのである。この現象は、つまり前の社会的習性をそのまま維持して新たな社会に適用せんとするものがきでもある。

しかし、社会は台湾光復と同時に飛躍してしまった。もとのままの姿勢ではこれを切り抜けることができない。このもがきを見て暗黒そのものだど錯誤するのは早合点である。歴史は矛盾があつてはじめて正しい方向へ進展し、かつ矛盾の量によって進歩の速度に正比例する。大なる矛盾があつてはじめて大なる進歩がある。この意味においてむしろ喜ばしい現象である。しかしして、台湾は植民地から脱却した。これは日本帝国主義の矛盾からきた自然の結果である。

そもそも本省人は過去五十年間、日本の植民地として生活が制約されていた。ここに自然に養成された植民地的性格がある。この旧態を棄てなければ新たな動きに即することができない。つまり新しい時勢に応じて、台湾青年の頭の切り替えが要請されているのである。すなわち新しい生活のタイプが必要である。

しかしして、日本時代の天才も今日では凡人に変わってしまったのである。否、変わったのではなく、もとの姿があるのままに現われたのである。日本時代の天才は、多く日本の御都合主義の天才であつて、その尺度は台湾的、植民地的であつて、世界的でなかつたのである。

ところが、光復後台湾は世界の文化に接触し、直接的、間接的に交渉してきた。ちよつと出来具合がよいからとて誰も認めない。つまり日本時代に認められた人間は、もう提灯を持ってくれる人がなくなり、心理的に淋しくなつてきたのである。それで本省人はあらゆる方面において、根本的に生活態度を切り替えない限り大成はむずかしい。台湾は、もとより人より遅れて世界に顔を出したのであるから、人より早く長者ぶつていては将来が危ない。今までの台湾は台湾のみ

の社会であつた。その尺度はどこまでも台湾的であつた。ちよつとした大学を出ても、田舎では天才に祭り上げられる。ところが台湾が解放され、その尺度では通用しなくなつた。水準が高くなつて、世界的でなければならぬようになった。大学卒業生なら祖国ではうようよしている。そればかりではなく外国留学生も多い。

祖国は広い。広袤(ひろびろ)四百余州、教育は普遍的に発達してないが、その代り人口が多いから世界的知識水準に達しているものも多い。ただの思ひ上がりでは祖国に認めてもらうわけにはいかない。

台湾は絶海の孤島として閉じ籠ること五十年、窒息させられた文化しか入つてこない。加えるに、日本は植民政策として二つか三つかの出路しか与えていなかった。それさえ、ある制約下に、かつ監視されたものであつた。

光復後急に解放されて四通八達広々としてきた。そのために多岐亡羊の感があり、かえつて迷うのである。ちよつと、籠の鳥が急に広々とした大空に出され、どこへ飛んでよいやら、しばらくは疎むと同じ理である。かえつてもとのところに戻りたい気持ちさえ起こる。これも一時の現象であつて、新たな環境に慣れるにしたがつて旧態の馬鹿らしさを悟るであらう。

さて台湾の青年がこの新たな環境に適応するには、世界文化の獲得と地域的觀念の打破が必要である。自己の知識水準を世界に求め、今までの台湾的、地域的考えを棄てる必要がある。

過去における文化はいわゆる台湾的・植民的文化であつて、日本を標準とした文化である。日本側から強いられたものさえある。悪く言えば、カメレオン式文化と言えよう。過去における報

国文学会や皇民奉公会で唱える皇民芸術や皇民文化などは全くその類である。

カメレオン式の文化はカメレオン式の青年を産み出す。台湾総督府の官吏は、このカメレオン式文化を推行するために一生懸命であった。世界の水準から見れば幼稚くさいものまで天才として賞めたり、おだてたりした。そればかりではなく、日本の水準にさえ達しないものまで特筆大書して賞めたりした。それで本省の具眼の士は「天才」を「天災」と言っている。このカメレオン式文化の下に、六百七十万の同胞が宿命的に五十年間生活してきたから、よく見直さないと世界の文化から置き去りにされてしまうのである。

もう一つは、台湾青年が知らず知らずのうちに地域的偏狭に陥ってしまっている。次の例をもつてしても、よくその一端を窺うに足ると思う。

最近ある銀行が上海に出張員を置くべく、本省人の青年を二人行かせようとした。月給台幣二萬元、宿舍や食費一切は銀行支給である。本人の待遇を数倍上げたのである。ところが、その二人の青年はなかなか行こうとしない。その理由は、叩かれる心配があると言うのだから、笑わざるを得ない。また台湾省内であっても故郷から転出するのがいやで、たとえ待遇をよくしてやっても喜ばない。「実に人事の移動はむずかしい」とある銀行家が語った。

これはすなわち過去における台湾青年の一性格である。故郷に近いところは、生活費が安い上に万事都合がよい。こういう觀念に執着するのは、つまり過去における政治のしからしめるところである。日本時代には実力があつても上がれる段階が限定されていた。いくら上がっても限りがあり、絶対に主腦者にはなれないのである。

いくら働いてもどうせ同じ階級ならば、生活の便利な方を選ぶのが人情で、理の当然であり、この環境によって自然養成されたのである。これからは禹も人であり、われも人である。実力さえあれば上がれるのである。もう地域的偏狭に固執する必要はなく、反対に祖国へ雄飛すべきである。それから地域的偏狭に固執すれば唯我独尊に陥り、したがって排他的、偏頗的になってしまう。それでは大人物になれない。これからの青年は、この積弊を棄て祖国の優秀青年と手を携えて新しい時代の建設に邁進しなければならぬであろう。

新しい時代に生きんとするものは時代と共に歩くか、それより一步前進しなければならぬ。そうでないと時代から棄てられる。今後の台湾青年はすべての点において一步飛躍しなければならぬ。そうでないと時代から棄てられる。今後の台湾青年はすべての点において一步飛躍しなければ窒息してしまう心配がある。故に青年は知識を世界に求め、狭い地域的思考を打破して、新しい時代のラッパと共に前進すべきである。

四 為我論とお役人理論

極端な為我論者、毛一本抜くことも天下のためにはしない楊子がもしも今の世の中に生きていたらきつと悲鳴を挙げるに違いない。

「現代人は皆俺の先生だ。自分は押しも押されもしない為我論の大家だと思っていたが、現代人は俺よりも進んでいる。全く上には上があるものだ。俺は毛一本抜くことも天下のためにはしないと言ったが、まだ天下を挙げて俺のためにつくせということを知らなかつたよ」

と言つてかぶとを脱ぐに違いない。現代の為我論は實際楊子を感じさせるほど進歩して来た。

まず堂々と大義名分を掲げ、天下に向かつて呼びかける。それを商売にしてご飯を食っているから、普通のものには気がつかない。どうせ為我論の専門家のやることであるから、そうたやすく発見されるものではない。光復当初、為我論が相当流行ったが、本省人は祖国や海外の事情に疎いから、なかなか発見されなかった。その主なものを少し紹介しよう。

○浙江財閥が来るから本省人は公司を作らなければならないと、全省から零細な資金を集めて公司を作るには作ったが、あとは分からない。

○在日同胞は悲惨その極に達している。救済しなければならぬ。「有錢出錢」だ、それが同胞愛である。さて全省から数百万円集めたが、日本から帰って来た同胞は誰もその恩恵に浴していないという。

以上は、ありふれた為我論で別に感心するほどのものではなく、詮索しなくても分かる。

○台湾人は五人に四党だ、団結する必要がある。福州人のように一人を推し立てそれにぶら下がつて行くのが一番よいという。

さて、その言葉の裏に俺を擁護せよという意味がないだろうか。三民主義の国家を建設するのに、一人にぶら下がつて行くなんて、はてな？ 台湾人よ団結せよ、この言葉に注意する必要がある。これも団結して俺を擁護せよという意が織り込まれている感がする。また変な意味に取られる。団結して何をするか、明確な意識を与えていないようでは、青年をあやまらせることがある。ややもすると、知らず知らずのうちに對抗意識が植えつけられる。団結して建設に邁進する

ならば話は分かるが、ただ団結せよ団結せよと言う政治屋の言葉に一杯食わされる心配がある。

○一時台湾語の役割を、さも大切なもののごとく誇張的に宣伝したが、これも為我論であった。この為我論はもともと台湾青年を窒息せしめるものであって、百害あって一利もない。中国語の通用する範圍は英語に次ぐ。いやしくも中国人たる以上、国語を知らなければ恥辱だと思わなければならない。大陸へ行けば、米人も英人もドイツ人もイタリア人も、中国語を自由にあやつるものがある。光復後、台湾における日本人でさえ中国語をしきりに習っている。台湾語を上手に饒舌しやべしても、ひとたび祖国へ行けばいよいよ鳥なき里の蝙蝠たることが分かる。

これに関連して、吾人は台湾国語模範省を提唱したい。もしも為政者が国語普及に力を入れ、全省を挙げて国語を推進するならば、台湾はどれぐらい明朗になれるかしのれない。つまり余力を一方に集注させておけば、現実からくる不満が軽減してくるのである。それ、全省国語大コンテスト大会を開催して競争せしめ、青年学生組はもちろん、老人組、農民組、商人組、公務員組というように分けて、各郷鎮で予選を行ない、それに優勝したものを各県市においてさらに選び、かくして選出したものを集めて大会を開く。大会には首脳長官が列席して優勝者にそれぞれ賞与を与えれば、半年か一年かで国語模範省になれるのである。かつ人心に帰趨するところがあるわけだ、したがって模範省建設の具体化になる。これが成功すれば、衛生模範省、科学模範省へとスローガンを換えていけば、いずれもやすやすと実現できるであろう。

国語が分かれれば、本・外省人間の隔たりも半分以上取れる。これによって青年は祖国の事情を知り、かつ祖国へ雄飛せんとする志を起こし、したがって愚痴的感情に馳せる閑がなくなるわけ

である。外省から来た人々は、街頭でうろろして色欲や物欲に馳せるより、国家のために国語でも教えた方がよいではないだろうか。

およそ、大多数の利益を忘れて私利私益を計るものは、すべて為我論であって、それによつてなすことはすべて為我行爲である。前に挙げた奴化教育論をもつて本省人を罵倒し、みずから優越感を持つのも為我論である。

〇二、三日前、僕は下駄を買った。その時ひょっこり友達に会ったが、「君、そんなものをはいていたら叩かれるよ」

と親切に注意してくれた。そんな馬鹿なことがあるかと反問したら、友達は真面目くさって、このごろの世の中は常識では判断できるものではないよと答えた。

僕はそれをデマだと思つて別に気にしなかつた。およそ血眼になつて日産の家屋をあさる連中が聳や障子やフスマを焼き棄てない限り、下駄をはいても構わないと思つたからである。下駄は、わが国にもよく流行つた時代がある。それは晋の時代であつた。その時代に流行つた下駄は日本下駄と同じかどうかは分からないが、それはどうであつてもよい。問題はただ日本の下駄はわが国の文化に適するか否かである。日本下駄は安くてはき具合がよく、水虫にかからないから、ことに台湾のような熱帯地に適していると思う。およそ文化の取捨選択はおのれの文化にプラスかマイナスかによつて定めるのであつて、感情に左右されてはならない。外国のものだから悪いとすれば、洋服も靴も旗袍チンパオも電燈も汽車もいけない。国粹ばかり尊重するならば、芝居に出てくるような長靴をはき、長い辮髪をぶらりと下げるほかはないだろう。

為我論を集めれば実に多い。僕が新聞社におつたとき、俸給の調整が悪いと言つて下級公務員から毎日何十通も投稿してくる。その代り建設的論文を見たことがない。これが公務員の墮落でなくして何であらう。本省人も外省人と同じように主観的の弊に陥り、おのれに都合のよいときはやかましく言うが、おのれに都合が悪いときは言わない。

たとえば台湾に加俸制度がある。それにならつて安家賃を定めた。また日本人小学校を見て省立国民学校を立て、教員を配置しておのれの子弟だけよくしようとしている。つまり祖国にないものまで、おのれに都合が良ければ廃止しようとしなない。反対に祖国にあつてもおのれに不利ならば実施しない。これも為我行爲の一つである。この為我行爲は本・外省人共に笑うことではできない。たとえば、水道町や川端町の日産家屋の破壊行為は何と言つても公德のないものであつて、日本人の中には退却しながら障子やフスマを修繕していったものもいるのと比較した時、吾人は心の中で恥かしがらずにはいられない。

さて省参議員諸公はどうであるか、ちよつと詮索する必要がある。このごろ口の悪いものは三十人の省参議員諸公を利権請負業者と名づけている。吾人はそんなにひどく思つていないが、それでも参議會を通じてやはり莫名其妙(訳のわからないこと)があると思う。

第一回の参議會は実に熱心なものだ。ハイハイ私、まるで小学生のように発言を争つている。ところが第二回になれば、その熱がけりりと冷めてしまった。それもそのはず、中には銀行や国営会社の重役やその他有利な地位を獲得した者もあり、もうものを言う必要がなくなつたからである。小利を見て使命を忘れるは参議員諸公ばかりでもないから、咎めたところでどうにもなら

ない。ただ吾人は参議員としての節操について一言したただけである。

そもそも参議員は民衆の代表である。ところが、往々にして家族の代表だと思っているものがあるらしい。中には人から攻撃されると、お母さんが許さないからと称して議員を辞めるという大きな子供さえいる。実にわがままである。参議員は選挙民の代表であって、個人でもなければ、家族の代表でもない。それであるにもかかわらず、往々にして自分の意見をでたために発表するものがある。いやしくも選挙民の代表ならば、個人の意見ではなく、民意を取り纏めて参議院に臨むべきである。参議院が終われば、その結果を選挙民に報告すべきである。ところが参議員は、選挙民に一言も言わず、勝手に参政院に出馬したり国大代表に出馬したりするのは、はなはだ民意を無視している。また無節操だと言われても弁解する余地がない。

しかして、真に民意のためならば三十人の議員が意見を一点に集中し、たとえば政府をして肥料を全農民に供給せしめるだけでも、三分の一増産になれるのである。つまりない意見を一人が五十も百も出して自己宣伝するより、一つを貫徹した方がどれぐらい民のためになるかしかない。

以上述べたような為我論や為我行為は新中国を建設するに最も悪いものである。

次に官吏の理論を一瞥しよう。日本の官吏は常に二段論法を使っていたが、台湾の公務員は論理の立脚点を換えて詭弁を弄ぶ癖がある。

たとえば一機一艦、米国がいくら軍艦を作っても日本に勝てないというような一段飛躍した二段論法を用いて国民に呼びかけていた。または一対十、敵がいくらあっても構わないというようなものがある。それでも日本国民は正直であるから、それを不思議に思わないものが多い。ところが、台湾の現在の公務員は二段論法を使わない代りに、いわく、私煙(ヤミタバコ)を売るものがあるから私煙を喫む人が出てくる、もしも売る人がおらなければ喫む人もいない、故に私煙を喫んでも罪はないわけである。ところがこの理論を是認しておいてから、逆に私煙を喫む人がおるから売人が出てくる、もしも誰も喫まないとすれば売人がない、故に私煙を喫む人がおる人と反問したら、どう答えるであろうか。またいわく、贈賄者が台湾におるから賄賂を受ける人が出てくるのである、もしも贈賄者がいなくなったら貪官汚吏(汚職官吏)は一人もいなくなるであろう、と当局が発表したことである。これはすなわちお役人理論である。

もう一つ紹介しよう。犯罪者に対する逮捕の比率がよくなったから治安はよくなったと主張する。なるほどそう聞こえるが、しかし犯罪の数が増加すれば、その比率が同じであっても実数が殖えているのである。つまり犯罪者百人の一分は十人で、犯罪者千人の五分は五十人である。何という詭弁ではありませんか。さすがに白馬非馬論を唱え出した本場だけあると思う。

五 宣伝の副作用と逆効果

宣伝は大切なものである。しかし、宣伝に副作用や逆効果があることを忘れてはならない。いたずらに感情に支配されると、たいてい副作用が起こるのである。どこまでも頭腦的に大衆の好むような言い方をしなければならぬ。たとえば前に述べたが、本省人は五人に四党だ、福州人のように一人を推し上げる必要があるというような宣伝は巧妙な部類に属する。かつて中日戦争

の真最中に、ソ連ではこんなことを新聞に出したという。

ある宿屋の女中がお客の持っている腰巻のものが欲しくてたまらなかった。そこで女中はお客に忘れ草をたくさん食べさせた。次の朝、きつと腰巻のものを忘れていると思い、さがして見たが忘れていなかった。これぐらい忘れ草を食べさせたら、きつと何か忘れているはずだと思って一生懸命調べたら、やっぱり忘れていたものがあつた。それは宿賃であつた。今や阿部大將は忘れ草をたくさん積んで南京に行き、それを中国人に食べさせた。これぐらい忘れ草を食べさせておいたから、きつと何もかも忘れているだろうと思つたら案の定、中国人はほかのことは皆忘れたが、ただ自分の親や兄弟が殺されたことだけは忘れなかつたという。実にうまい宣伝である。

光復後しきりに奴化教育を論じた結果、本省人の感情を刺激してしまつた。率直に言えば、本省人は侮辱されたと感じている。その副作用として本省人は排他的感情を起こし、外省人を豚とあざけるようになった。豚といふのはぐうぐう寝ることと食べることをばかり知つて何もできない意である。

同じ中国人でありながら、一方は奴化、一方は豚、子供に似た喧嘩である。つまりボールを壁に向かつて投げつけるのと同じ理で、必ずはね返ってくるわけである。今度は外省人がたまりかねて、教育処長までこの悪口の喧嘩の仲間入り、三月二十日の『新生報』に、外省人が「豚」ならば本省人の祖先は何か、と叫んだ。このように一年半悪口ばかり言い合つてきた。その副作用は決して少なくない。どうしてこんな小さい感情に囚われる必要があるか。本省人の欠陥を見抜いたら、ひそかに策を講じさえすれば悪口を言う必要もなからう。

また政務会議に伴奏として、台湾に政治人材がないと宣伝した。もちろん、その用意するところは市県長民選即時実施の封鎖であるが、本省人の方は、人材がないと言えば「ある」と駁するのである。これらは皆感情が主である。しかし、感情に支配されると人心を失う場合が多い。たとえば、台湾の参政員は今のところ拍手議員である。誰が南京へ行つても同じである。たとえ抱負や経綸があるからとて、スクール（派閥）に入つていないから力がない。ところが過般の選挙に際し、投票氏名の墨のつき具合がどうかで南京まで騒いだものだ。その場で三十人の参政員に採決してもらえば、事が簡単に解決するものである。

それをそうしないで、いたずらにおのれの感情に固執して民政処の主張は通つたが、その代り六百七十万人の感情から離れてしまつた。つまり勝つて敗けたことになる。

およそ、宣伝や政治は、ただ個人の感情に囚われてはならない。どこまでも理性的、頭腦的でありたいものである。小さい感情に囚われると悪口の言い合いになる。どこまでも大局から国民に呼びかけるべきである。たとえば現在政府は糖業を復興するため二十億元を投じたが、もう糖廠（製糖工場）が復旧したから甘蔗を植えないと糖廠は動かない、糖廠が動かなければ台湾の経済が回復できない、また失業も救われない、と早くこれを皆に知らせれば本省人も一致協力するのである。

また光復当時、汽車の機関車が四百何十輛のうち二百輛ぐらい壊れていた。修繕が終わるまで汽車の混雑は免れないと皆に知らせれば、無能という譏りを免れるであらう。

日産処理委員会台北市分会へ行つたことのある人は、誰しもその手続きの煩瑣に悩まされ、どうしてよいのやら、まごまごしてしまい、あちらに聞いてみたり、こちらに聞いてみたりして、やっと用を足してくる。下手すると一日ではすまされぬ。二日も三日もかかってしまうことは珍しくない。しかし、係もまた係で必死に働いている。汗をたらたら流して押し寄せてくる市民の催促にいらいらし、側目もふらずに毛筆を懸命に走らせている。どうしてこんなに忙しいのだろう。実に不思議である。こういうところに中国人の封建的性情があり、封建社会から脱けきれない固い殻が残っているのである。二千数百年の習慣が今でも世界で有名になっている官吏国家は、民国になつたからとて、その官吏の習性を一朝にして変革できるものではないらしい。

わずか家賃を納めるだけでも、何人の手を経るか分からない。実に複雑きわまるもので、理論上貪汚(汚職)のできたものではない。しかし、肝腎なところが一つ抜けている。表面上、金銭を扱う上で、これぐらいの手を経れば絶対安全のように思われるが、事実肝腎な責任觀念が分散されているから、かえって間違いを起こしやすい。それでその隙が狙われる。たとえ間違いがあつても責任が分散されているから発見しにくい。責任が何人にもかかり連帯責任になっているから、おたがい責任解除に努力する。したがつて犯罪をかばつて馬々虎々マァツツになつてしまふのである。故に責任を単一に帰すれば、たとえ間違いがあつても発見しやすく、また一人のできる仕事であるから、何人かの手を煩わす必要もなく、仕事が簡易化されて能率が上がる。

これは全く無意味な複雑さである。およそ習慣が長く続くと制度になり、制度が確立すればそれに拘束されて社会の進歩を阻害するのである。そもそも何世紀か遅れた人間が従来の習慣に囚われ、その習慣を無批判に受け入れて、習慣の惰性のままに自己を標準にして物を判断するから、そこに矛盾が起こるのである。たとえばトマトの味を知らないものはトマトが臭いと言う。そういう連中は、トマトにビタミンがあることを知るはずがない。自転車さえ危く乗れないものは、歩くことが一番安全だ。まして飛行機なんて夢にも思わない。夕方、風呂から上がり、浴衣を着て下駄をはき、大和撫子をつれて散歩する気持を知らないものに、日本下駄がよいか悪いかは分かるはずがない。また酔眼朦朧、ダンスホールで踊ることを知らない連中が、ダンサーの口紅は赤すぎると言ったところで、他の人は承知しはすまい。

日本人は日本刀を世界一だと言い、中国人はまた漢字と毛筆は東洋文化の粹だと誇る。ところが日本刀のために日本人が数百万殺され、七千万の国民がそのために犠牲にされていることに気がつかない。中国も同じく漢字と毛筆のために天才が幾百万人殺されているかもしれない。そればかりでなく四億五千万人が二、三千年それに悩まされ、新しい文化を習得するのに損をしている。辨髪時代に断髪を主張するものは異端として、断髪即断頭と主張される。纏足時代には娘の足を過酷に縛るほど親心があり、その娘が大きくなつても親を恨まないばかりか、かえつてそれを誇りとしている。そういう時代に生まれた阿呆が、それを美しいと賞美するからである。

戦争をしているときに和平を口にするものは、理由のいかんを問わず非国民に扱われる。

万年筆を使い得ない連中は、毛筆が一番よい、美術的に書けて永久に消えない、また誰が書い

たか筆跡が残ると言うだろう。そういう連中に限って古今東西の名画をえかく画筆をもって公文や手紙を書かない理由を知らない。書家でなければ使わない毛筆を誇る連中の頭の中には、万年筆もなければタイプライターというものもあるはずはない。

漢字の好きを知っているものは、唐宋の文学の偉大さに驚かされて、これを廃止すると主張することはできない。彼らの子孫がいくら世界の文化に遅れても構わない。その偉大な文化を相続しなければならぬ感情に幽閉されているのである。その代り彼らの子孫は永久にその負債を負って行かなければならない。

そうかと言って現在中国ではこの漢字を急に棄てることができないうしレンマに陥っている。言語が統一されていないからである。言語が統一していないときに漢字を廃止したら、ますます統一がなくなる。それで吾人は一刻も早く言語を統一させて、国語を普及し、簡単な標音文字で世界文化を獲得し、それに参与することのできる日を待っているのである。

七 台湾はどうしたらよくなるだろう

元来台湾は天恵の裕^{ゆた}かなところである。行き詰まるはずがないのに、失望する人が常に絶えない。彼らは何のために失望し、一体何を希望しているのであろう。人によっていろいろな見解があろうが、吾人はそれは誠意ある政治であると言いたい。過去三百年間、台湾人は信頼すべき政治がなかった。スペインしかり、オランダまたしかりである。鄭成功が来たときだけはやっと信頼してよいと思っていたが、それも東の間で清朝に変わってしまった。清朝も日本も国内または

国外の違いこそあれ、これを植民地として扱っていた。元来植民地には倫理がない。故に台湾人は常に猜疑せざるを得ない環境に育ってきたのである。猜疑しなくてもよいものまで猜疑し、その感覚が特に鋭敏である。だから三百年間もつと渴望しているのは誠意のある政治である。誠意さえあれば少々損しても我慢する。故に百の政策より誠意一つものを言う。上下一致誠意ある政治をすれば、台湾はただちに明朗化されるのである。

ところが、祖国の懐に帰ったからもうその心配がないのに、従来の惰性がついている。ことに公務員の中に不肖分子が入りこんでいるから、前の気持がどうしても清算できない。事実台湾を明朗化するには誠意ある人が必要である。公務員はもちろん、各級参議員もその人を得なければならぬのである。しかし、誠意があるか否かは実に分かりにくい。誠意測定器があれば便利だが、今のところ一時の便法としては、台湾における公務員や各級参議員を全部南京の中山陵へ行かせて国父孫文先生に鑑定してもらうよりほかはない。

それで全省の公務員、並びに各級参議員、政治屋、カメレオン文化人、御用商人など全部を取り纏めて中山陵に参拝させ、参拝後、陵内の石段を一気に上らせる。三百六十段の石段を一気に上がると、どんな利欲の強いものでも息がたえだえになって考える閑^{ひま}がない。それから陵を一めぐりさせて国父の偉大さを感じせしめた後、陵堂の前に立たせてしばらく展望させておく。するとそこには金子、房子(家)、車子、女子というものが見えない。もちろん、日産(日本人の残置財産)を欲しがる卑しい考えも起らない。その代りに広々とした山河が横たわり、その山河の下には老百姓が喘ぎあえぎもがいている可憐^{かわい}な姿がかすかに意識せられるだけである。

ああ「革命なおいまだ成功せず」ということを悟ればしめたもので、貪汚なんかできたものではない。必ず誠意が出てくる。それでも三民主義を口にして悪いことをしようとするものがあれば、老百姓（人民）が黙っていても国父が承知しないであろう。

さて冗談はともかくも、台湾の現下の急務は何と言っても物価安定であるが、そのうち米が一つ安定すれば街頭の溜息が九割五分減ってしまふ。しかし、物価の全般の安定については台湾を孤立的に考えるわけにはいかない。どうしても祖国とにらみ合わせる必要がある。故に軍事上にも外交上にも関連してくる。

軍事が進展し、津浦線や京漢線が確保できれば、北部にある物資、石炭のようなものが運輸され、上海の工場を動かせるのである。その上対米借款が成立すれば、金融が好転してきて物価もいくぶんか安定するであろう。それらの現象が直接間接台湾に影響しても物価を急に安定させることができるかどうか分らないが、しかし、米価だけは安定できそうである。

台湾には公有土地が百分の七十三あり、そのうち五分の一が耕地である。地租征実（実物徴収）は約十分の一に当たる。兩者を合算すれば、政府の方では台湾の米を十分の三持っていることになる。台湾の米を台湾で食べるだけあると見なせば六百七十七万人分あるわけである。そのうちの十分の三はすなわち約二百万人分である。それを公務員に約二十万人分配給し、軍用米を除いてもなお相当の数量が余る。それにもかかわらず米の暴騰に対して策がないのは不思議である。

次は警政の統一が大切である。警察大隊あり、法院警察あり、専売局警察あり、鐵路警察あり、水上警察あり、その命令系統が一致していないから、機関と機関との摩擦が起こりやすいわ

けである。ことに収入ある機関に警察権を持たせることはよくない。もしも野心家はその機関の長になれば、警察をいくらでも強化し利用することができる。それによっておのれのわがままを擁護し、法を乱すことはわけもない。

商鞅は嚴罰論者であった。しかし、法令を下してもあまり行なわれなかつた。そのときに太子が法を犯した。商鞅が言うには、法律が行なわれぬのは上から破るからである。けれども太子を罰することはできないからとて、そのお守り役を罰した。それから人民は皆その信賞必罰に服したということである。現在の公務員の中にも商鞅のときの太子はないとはいえないだろう。

現在、人民檢舉を奨励しているが、一得一失、むしろ得が少なく失が多い。世の中は君子ばかりではない。怨みをはらすために手段を選ばない人間が出て来ないとも限らない。植民地の離間政策としてインドではこれを使っていたが、台湾ではもうその必要もなからう。

台湾を性急によくすることはできない。日本が戦争を遂行すべくギャング統制を行なったため、台湾の経済が根本的に破壊されてしまったのである。本省人の経済が無一物にされてしまひ、残すところはただ山河あるのみである。終戦当時、商店には商品が一つもなく、残っているのは空棚と壁が淋しく立っているだけであった。

そして戦前はどの中産家庭も千円や二千元を持っていたが、それも八年間戦争したために貨幣価値が下がって、十円か二十円かの値になってしまった。つまり千円持っている人は九百九十円まで戦費に使われてしまったのである。ところが統制経済が崩れてしまひ、赤貧の姿があらひのままに現われてきたが、それでも多くの人はそれを悟らないのである。鍋も着物もすべて戦争のた

めになくしてしまった。それを元の通りに回復するには、わずかに農業生産にまつほかはないのである。不幸にして昨年は早魃と台風のために六割の収穫しかなかった。しかし、農業生産が全面的に回復され、なかんずく甘蔗を前の通りにたくさん植えつけ、製糖工場がもとのように動けば、台湾に再び山歌の唱えられる日がくるであろう。

八 民主政治と政治人材

中国は民族英雄の多い国である。いざ民族の存亡の関頭に立つとき、必ず民族英雄が出て敢然として戦う国柄である。その代り政治人材が至って少ない。五千年の歴史中、万人が万人齊しくありがたく思っている政治家はたった二人しかいない。

それは堯と舜だけである。今でも四億五千万の民衆が堯天舜日と言って崇め慕っている。ところが禹も治水の大功があり、また歴代の学者が大いにその功を賞め讃えているにもかかわらず、あまり尊敬されていない。つまり禹も人、われも人なりと言っている。なぜこんなになったかと言えば、禹の子孫が天下を盗んだからである。天下は天下の天下であって、おのれの天下ではない。禹の不肖子孫が天下を私有物にしてしまったから、その罪が禹にまで及んだに過ぎない。

天下を私有物にしたのは、そもそも禹の不肖子孫がその嚆矢であって罪魁である。その後、歴史がそのために歪曲されて、真の政治家が出る機会をなくしたのである。それで、その後の政治家は天下を私有物にする帝王の番犬となってしまうから、国民から尊敬されるはずはない。故に堯天舜日と言っても禹のことは言わない。そしてその他の番犬においてをやである。それで中

国は聖人、君子、哲人、詩人は輩出するが、政治家は出なかった。その代りに、これを破る英雄がときどき出てくる。しかし、これらの英雄児は常に禹の不肖児をまねする。

ところが国父孫中山先生が「天下為公」のために戦って民国を創造したから、いわゆる政治家なるものも出てくるであろう。政治家は決して政治屋ではない。政治屋はご飯を食べるために政治を言っているのである。政治家は「天下為公」のために奉仕するのである。政治家はただの人材ではない。ただ智識があってもだめである。真に天下のために奉仕する精神がなければならぬ。民衆のために犠牲になるものでなければ、民主政治は語れない。また民衆もそれを信頼しない。真の民主政治は民選に限る。

民選のよい例は台湾にたくさんある。新竹県枋寮の義民亭のお祭は年に数千万円かかる。しかし各郷鎮から選挙された爐主は、その祭典を扱ってまだ間違いを起こしたことがない。しかも、それら爐主の知識水準はおよそ天地の距離もあろうが、よくやって行けるのはその誠意によるのである。およそ、民主政治は決して傑出した人材が要らない。国民の知識水準から飛びぬけるものはかえって国民を引きずって行く力がない。国民の水準がそこまで行っていないのに、一、二人の天才のために損をしている例は古今東西よくあることである。成吉思汗^{ジンギスカン}しかり、ナポレオンしかり、迷惑するのは国民である。このごろ、政治人材をしきりに論じているが、これら憲法が実施されて民選にもなれば平門英雄（大衆出身の英雄）も出るであろう。

英国の大政治家大ピットでさえ、政治人材を否定して小ピットに、「議會を見よ。大英国はわずかな知識で動いている」と言った。そんなことに気を取られるより、科学人材の少ないのが心

配ではなからうか。

九 台湾文化の一瞥

おのれを知ることとは、たやすいようで一番むずかしいことである。孫子の兵法にもおのれを知れという必要性を説いている。いわく、「おのれを知れば百戦百勝す」と言っている。台湾人は過去において、いろいろに検討されてきた。日本人は日本人としての見方で、それを利己主義だと批評していた。今度は外省人が来て奴化だと言う。いずれもあまり芳ばしい批評ではない。しかし、台湾人はこれらの批評に対して内心はなはだ服しないようだ。利己主義だと言われたところで怒る必要もなければ、奴化だと罵倒されたからといって真赤になって喧嘩する必要もなからう。要はおのれをさらに掘り下げて考える必要があるのである。

台湾人はもとより台湾の歴史と環境によって育ったものであり、特異性を持っている。台湾の祖先はもちろん漢民族である。北方から異族の侵入することに最後まで戦い、敗れて南へ南へと逃げ延びたものか、もしくは異族の政権に服しないで逃げてきたものである。それが大體福建と広東に来て落ちつく。さらに政治的圧迫を感じると、彼らは自由を求めんがため海外へと発展していく。これらが華僑となって台湾または南洋に移住したのである。一部は満清と抗戦せんがために鄭成功について来たのである。

いずれにしても漢民族の中でもっとも異族に服しないものである。彼らは大陸において闘争したばかりでなく、台湾に来てさらにそれ以上に訓練されたのである。はじめはスペイン、オランダと対抗した。鄭成功のときだけは何らの摩擦もなく安楽に暮らしていたが、清朝の領土になるや、また異族に統治されるのを潔しとしないで幾多の反乱をあえてしたのである。清朝では、台湾は三年小乱、五年大乱と言って悲鳴をあげていた。

日本が台湾を領有するや、台湾は孤独無援にかかわらず、全民衆が起ち上がって抗戦したのである。日本は明治二十八年五月三十一日澳底（あうてい）に上陸したが、その年の十月になってようやく台南に辿りついた。その間六カ月もかかったのである。

太平洋戦争において日本が全軍力を琉球に集中し、米軍に対陣してわずか三カ月しか支え得なかったのに比べて、その意気たるや壮と言わなければならない。しかも彼らは山に隠れ野に伏してなお三カ年も抗戦したばかりでなく、その後、苗栗事件、北埔事件（北埔）をはじめ、幾多の革命事件を引き起こしたのである。武力の洗礼を受けて勝つ見込みがないと見るや、その後、形を換えて文化運動の下に闘争したのである。

これによって観れば、台湾は三百年間ほとんど抗争してきたのである。故に日本の同化政策はどうしても成功しなかった。内台共婚法を布いても日本姑娘は貰ってくるが、台湾娘が日本人の妻になったものは九牛の一毛以下である。こういう環境に育った台湾人には、思想の住家がなくて、常に恋々乎として祖国を憧れていた。故に台湾人は死を「唐山（中国）に帰る」と言っている。

光復後、日本人の妻にならなかった娘が祖国から来た人々とたくさん結婚したのも、その一端を窺うに足る。また二・二八事件において、専売分局内にあるものがことごとく焼かれたにもか

かわらず、国父孫文先生の写真と国旗は大事に保存されていたという。そんなどきどき紛れにも国家を忘れなかったのもその証拠である。

台湾はかくのごとく人為的環境が闘争的であるばかりでなく、自然的環境も同じである。常に台風や水害や地震のごとき大自然の圧迫と戦い、加うるに「蕃害」がある。この環境の下に自然に養成されたものは反発力で、特に闘争心や競争心が強い。覇気に燃え、意志が強く進取的である。しかし、日本の鎖島政治に幽閉され、見聞を狭められてしまい、ついに雄飛する覇気が愚痴的感情に変わってしまった。その上、三百年間植民地として被搾取的立場に置かれた結果、政治的欠乏症にかかってしまった。政治家を非常に偉いものだと思うようになった。そして猫もしゃくしも政治家になろうとあせっている。

莊子に言わしめれば、政治家は泥亀よりも価値がないものである。かつて楚の君が莊子を宰相にしたいと言ったところ、莊子は笑ってその使者に「お祭の時、犠牲に用うる牛をこらんなきい。かねて立派なご馳走を食べ、立派な飾りをつけているのは結構だが、いざ祭というときには大事な生命を捨てねばならぬ。宰相になるのは結構だが、身を苦しめ心を苦しめねばならぬ。それよりも泥亀になって溝の中におった方が何の苦もなく、いつまでも生きていられる。私は犠牲となるよりも泥亀になった方がいいと思うから、宰相は真平御免だ」と言ったことである。

とにかく、今や台湾はこの政治家病を何とかして直す必要はないだろうか。最近十年間、日本は戦争を遂行するために台湾の青年を全部動員して、生産とサラリーマンとの二階級に分けてしまった。しかも、その上ギャング統制によって中産階級をほとんど引き抜いてしまった。故に動

員されたことのある青年が早くサラリーマン根性を棄てて生産事業に従事しなければ、戦争下ににおける社会のごとき跛状態がいつまでも続くであろう。

さきに述べたごとく、台湾は三百年間植民地的環境に置かれてきた。しかしその環境から産まれた文化は植民地的性格を帯びている。故に真の文化に育て上げるまでには一步飛躍しなければならぬ。過去の文化はどうも根がついていない。人の気持を揺さぶるものがない。芸術にしても文学にしても同じである。堂々と根を張り、世界の芸壇や文壇に枝葉を出していない。台湾美術展覧会は上野における日本画壇の延長であり、文壇はぐにやぐにやしてカメレオンに似たようなものである。竜山寺や北港の媽祖廟は大陸建築から見れば稚氣がいっぱい入っている。漢詩は形式的、方程式的であって、生命が躍動していない。

ちょうど本篇を書いている際、ある文化人が僕に台湾は生菓子を上手に作れるようになったが、新港アメはまずくなかった、また大陸へ行けば文盲のお婆さんでも月の下で林黛玉を語って子供に聞かせることができるが、台湾ではもうだめだ、また芝山巖学堂で写した台湾女学生の美しい線は現在の女性に見られなくなった、と言って嘆いていた。そして民俗民芸をもう一度顧みることが急務である、と文芸復古を唱えている。もちろん、林黛玉や『浮生六記』に出てくる芸娘のような蘭の香りのする女性はたしかに愛らしいが、現代娘のうち教養があつて、バラのごとくはでやかな女性にもまた棄てがたいところがある。しかし、教養の足りないものは、バラが萎れたごとく、まわりの刺がいたずらに目にちらつくのは考えものである。

文芸復古も程度問題で、それに固執すれば明時代のように結局唐宋のような文化は生まれな

った。中国には五千年の文化がある。歴史が長ければ長いほど、歴史から来る好きもあれば悪さもあることを忘れてはならない。アメリカは新大陸において、英人の歴史に制約されることなく科学主義を取って、アメリカ文化を生まれさせたのである。

この意味において、台湾はかえって新しい文化を作るに便利である。今さら復古主義に固執する必要はない。吾人は新しいとか古いとか考えるよりも、真に文化の価値があるか否かを考えた方がよいと思う。文化は日進月歩であって、どこまでも科学的に前進してゆくべきである。

台湾の文化人は、過去におけるカメレオン式態度を一度清算する必要がある。為政者の要求によって右顧左眄しては真の文化は生まれてこない。真の文化はどこまでも世界を標準に科学的に研究しなければならないと思う。

また、ある青年画家は、台湾文化をよくするにはスクールが必要である、と僕に、「強い力になるスクールがないと、たとえ一、二の天才が出てもバトンを受け継ぐものがないから、偉大な文化は生まれない。また、お土産の価値しか持たない芸術では情ない」と言っている。この意見には吾人も賛成であるが、ただスクールは非常に偏頗的、排他的傾向に陥る心配があるから、それさえ気をつければよいかと思う。スクールはリーダーが必要である。今のところ台湾知識人は大頭病にかかっているから、おたがいそれを自覚した方がよいのではないかと思う。

台湾は天恵的に恵まれて歴史が若い。したがって台湾青年は見聞が狭く、主観的、感傷的であって、ロマンチックになっている。大陸は歴史が古い。歴史からくる好きが多い代りに、悪さも少なくなく、現実が酷しいために夢がない。それであるから、甘たるい夢を見ている感傷的な台

湾青年は、よく大陸から来た人の現実主義に衝き当たって驚き、どうも外省人とは肝胆相照らして語れないと言う。それもそのはず、大陸は環境が複雑で因襲と伝統の圧力に疲れきって、夢のようなことを語っている余裕がない。ただし、現実の問題になれば真剣になってくる。試みに金儲けの話を持ち出してごらん、きっとその態度が変わるであろう。

しかし、現実から離れた問題をいつまでも議論する台湾青年はよほど幸福であって単純である。単純であるから純真だ。不措油（ワイロをとらない）と言えばそのまま信じてきいて措油の世界を知らない。大陸は歴史が古いだけあって措油以上の世界がある。実に複雑であって、その複雑性に適応して偏狭なグループの観念が強く、強烈な排他感情が勇ましく現われてくる。どの部門のものもおのれのグループで閉じこもろうとしている。グループ圏内では人情的であり家族的であるが、現代の中国青年の中にはその矛盾に対して憎悪を感じ、反動的にそれを打ち壊そうとする純真なものも多い。彼らは自分の環境を中正に批判し、そして新しい環境を作ろうとしているが、多くのものはやはり現実的である。

日本人は静寂を好み、小じんまりとした畳部屋でお茶を啜りながら研究や仕事に精を出す。故になかなか真面目である。

大陸から来た人は、多くは街頭に出て物欲、色欲、食欲を満足させるためにさまよって歩き、口は懸河滔々雄弁を揮うものが多く、現実的により享楽しようとあせっている。これも悲しい歴史の所産である。

しかし、本省人は理想や目的を忘れて騒ぎ、愚痴的感情の走るままに不平ばかり言って、人

が号令をかけなければいつまでも足踏みをしているものが多い。そこに植民地的性格があり、そこに幼なさがあり、かつそこに自主独立の精神を欠いている。男がこんな調子であるから、女はさらに幼ない。思想だけは一応封建社会から抜け出したように思われるが、身体はやはりものまま、封建社会の中でじっとして動かない。

人生の大事な結婚でさえ自主性がなく、おたがい知らなくても、肩書や出身学校を見て結婚する。まるで学校や肩書と結婚するようなものだ。しかし、時たまそれに反抗して勇ましく出れば、社会知識が少ないためにすぐつまづくのである。彼女たちはまだ方便という言葉を知らないからである。昨年せつかく女給の媚態廃止をやって、かえって女給自身が反対する。彼女たちはチップや遊興税の性質を知らないからである。

台湾の女性は台所にいる時間が長い。台所の時間を短縮しなければ新しい文化を獲得することはできない。科学を知らない彼女は、いつまでも台所の中でぐずぐずしている。彼女たちは火を起こさなくても食事のできる文化人のいることを、まだ知らないのである。食事の科学化だけでなく台湾の女性は一歩前進しなければならぬであろう。ましてや、そのほかの婦人問題においてをやである。

最近では、用もないのに時価数千円もする大きなガラス・ハンドバッグを右腕に巻きつけ、誇らしげに抱えて四日三晩台北市中をさまよひ、大官の太太クワイタイ（奥さん）になろうとして歩き廻っているカメレオン女性がいるそうだ。あんなきれいなガラス・ハンドバッグの中にチリ紙と白粉を入れておくのはもったいない話だ。もしもそのような女性が赤い唇を動かして婦人問題を云々し

たらどうなるであろうか？

婦人問題を書けばきりがない。その上、紙面も許さないからここで止めておく。いずれ適當な機会があれば、さらに語ろう。

台湾の歴史の歩みと大陸の歴史の歩みとは、三百年間でいろいろと違ってくる。否、たった五十年で変わっている。厳密に言えば三百年間、祖国では民国になってはじめて三十六年解放され、その間台湾では鄭成功時代に二十二年解放されている。それを相殺すれば、台湾は祖国より十四年だけ多く淪陥（異民族統治を受ける）したわけである。それを簡単に比較しても面白い。辛亥革命に対して苗栗革命がある。五四運動に対して文化運動がある。祖国では七十二烈士のごとく犠牲となった者で有名になったのが多く、台湾では唐景崧とうけいそうのように祖国へ逃げ帰って有名になった人物が多い。

祖国で漢奸の検挙をすれば、台湾では御用紳士を罵倒している。上海姑娘がパーマネットに口紅を赤くぬれば、台湾では太鼓帯にセキタをはいている。一方が西洋くさければ、一方は日本くさい。外省人は商売根性が多く、台湾人は大頭病（売名病）にかかっているものが多い。

祖国の新聞では、言論自由を叫んでいるが、台湾の新聞では、言論が自由になり過ぎたために、二・二八事件が起こったと言う。今の上海の米騒動も、おそらく言論が自由になり過ぎたためであろう？

しかし、そんなことを言っているうちに、文化はたしかに下降線を辿って走っている。外省人とか本省人とかというバカ騒ぎをしている間、世界の文化は少しも待ってくれない。やはり早い

テンポで前進している。吾人はそんなつまらないことを言うよりも、台湾をして理想境たらしめた方がよい。そして教養ある台湾にしたい。

たとえば、物を落としても誰も拾わない。戸を閉めないで寝ても盗人が入って来ない。刺身を食べてもコレラやチフスになる心配がない。停車場に巡査がおらなくても、秩序正しく上下車する。公共便所を汚すものがない。何をしても他人から監視せられない。どこを歩いても巡査に叱られない。どんな文章を書いても発売禁止にならない。誰を攻撃しても鬨討ちをくわない。三角の肩を揺り動かしながら歩いても人が悪口を言わない。このように暢然として身も心も裕かなる自由な台湾にするのが、およそ台湾に住むものの務めであって、外省人も本省人もないわけである。

(一九四七年五月十三日脱稿)

一〇 付録・日文廃止に対する管見と日本文化の役割

本省人が日文(日本語)と別れを告げることは、日本人の娘と別れを告げるよりさらに辛いらしい。その証拠には、去る三月、日本人送還の際、たとえやさしくしてとやかな大和撫子と相思相愛の仲であっても、いざの場合、誰もめめしく苦情を言わなかった。実際若き男女の間では日本人と甘き恋を私語くものもおれば、友愛関係にあるものもいたはずだ。

それなのに、誰も「俺は辛い、別れにくい」という愚痴をこぼさなかった。ところが、日文廃止という政府の方針が決定され、十月二十五日に実行すると発表するや、俄然、若き男女に大きなショックを与えた。大げさに言えば断腸の思いである。全省を挙げて非難轟々、それに反対し

ている。ところが、当局の目から見ればどうも男らしくない。当然、別れなければならぬ運命にある日文に対して、めめしく未練がましいことばかり言っているのは実に怪しからん奴だ、とどなりたくなるであろう。しかし大義名分のために、日本人の娘との身を切るような思いをも棄てられる本省青年が、日文に限ってかれこれ言っているのは決して勇気がないのではない。そこには深い理由があるのである。

現在、国文(中国語)新聞や雑誌が日文の編纂よりも進歩的で内容がいくぶんでも充実しておればまだしも、試みに政府の機関紙を見給え。いかに陳腐であるか、まず文章から考察しよう。彼らの文体は言文一致体(白話文)でもなければ、古文体でもない。すなわち「半古董」的なものである。

目下わが国では挙国一致、国語と白話文運動に拍車をかけているにもかかわらず、指導性を持つ新聞がこんな調子では情なく思うのは当然である。文明国の中でわが国のような難解な新聞があるであろうか。白話文でやさしく書ける新聞を、おのれの学問を誇らんためにわざわざしく作って能とする読書人根性では、台湾の文化は指導できないであろう。内容も各機関から貰った宣伝文をそのまま登載している。まるで広告に似たようなものだ。

さて、本省の青年は広告を読んで満足するような稚拙な頭を持たない。それから文化欄には白話文が登載してあるが、内容が実に乳くさい。形式ばかり重んじて、「断章取義」のそりを免れない。内容がなく、読者の胸を打つものがない。きれいな語句、しかも慣用語を並べる能は持っているが、言い換えれば文字の職工だ。写真も陳腐だ。まだ抗戦中のものを載せているのがあ

る。そんなことでは青年がついて行かないのももつとだ。願わくはもう一度反省していただきたい。

さて日文であるが、日文はなぜ悪いかというに、過去において武装されたからである。しかし、今やその武装も解除されてしまった。日文も本然の姿に立ち帰った。決して悪いものではない。もしも悪いとすれば、外省人が本省に来て日本人の娘に心酔するはずはない。すなわち大和撫子の甘い言葉聞いて喜ぶ連中は、その言葉を文字に表わして悪いと言うことはできないはずである。武装を解除された日文は、文化の紹介を務める役割として大切なものである。ことに世界各国の文化がほとんど日文で訳されている。日文一つ解すれば、各国の文化に接することができる。

ことに事変前、わが国からたくさん留学生を日本に送っている。しかも貴い国帑こくたうを使っている。今や、わが国としては一度に六百五十万の日本留学生が祖国に帰って来た。その留学生がハイカラがって日本語を使ったり、日文の新聞雑誌を読んだりして、何も不思議はないはずである。むしろ喜ぶべき現象である。それなのに日文廃止の愚をあえてする、当局の意志が那邊にあるのやら、吾人は了解に苦しむ。せつかく留学して帰って来た貴重な文化を培養しないばかりか、かえってそれを踏みにじる愚をあえてする。後世の歴史家は何と批評するであろう。

国粹論者よ、漢民族、漢民族と言っているが、試みに諸君の洋服や靴やシャツやカフス・ボタンの、えり、旗袍等の外国製品を脱いでごらん。おそらく辮髪だけが残るであろう。その辮髪さえ切ってしまったではないか。満州事変後、日本は自国民さえ国民と非国民の二つに分けてしまっ

た。つまり軍人や軍部に関係あるものは国民で、その他は非国民である。秘密という煙幕を引いて、ラジオの短波さえ大学教授の知識人に聞かせなかった。彼ら軍人や官僚がいよいよ跋扈して秘密一点ばりで国民の知識の門戸を閉鎖してしまった。そのために日本の科学が窒息してしまひ、結局、敗戦の運命を辿った。

ここに、われわれは冷静になって考えなければならぬものがある。わが国では日本留学生が六百五十万人一度に帰って来たのである。中国にとって実に見出たいことである。かりに米国や英国から留学生が六百五十万人帰ってごらん。欧文新聞や雑誌の騒ぎではない。ダンスホールはもちろん、おそらく大通りの街頭でキッスしても「很好」(大変よろしい)と言うであろう。

日文廃止については、いろいろないきさつがあるろう。不幸にして現在外省人と本省人との間に面白くない感情が醸し出されてしまった。この雰囲気では、すべての理論が空である。どんな理屈でも通用しないことを知っている。ただ、文化のために日文存続は果して中国文化を阻害するものか、公平な文化の秤はかりにかけて再検討する必要があると思う。私の考えでは、政府機関紙の日文は当然廃止すべきであるが、その代り日文新聞や日文雑誌は過渡期と言わず自由に発刊しても害がないと思う。

それから、日文化は必ずしも皆日本文化とはいえない。その中には世界の文化がたくさん翻訳されている。ことに自然科学に至っては国文で書いている書物が至って少ない。教育第一と叫びながら、児童や青年学生の読物がない。それであるから、ただ一時の感情に囚われずに、これらの文献を翻訳してわが国の文化に資すべきである。なかならず日本の児童文庫には文化的なも

が多く、それを取捨選択して本省人の文士に翻訳させれば失業の救済にもなるのである。吾人は戦勝気分感情に支配されてはならない。かつてアメリカは排日の真最中に、米国医学会が黄熱病で有名な野口英世博士の業績を表彰して彼に銀牌を贈ったことがある。

今度台湾にも日本人の学者が相当留用されている。実に賢明な策である。これらの学者の中には研究の途中にあるものもあるであろう。あるいは研究の端緒にあるもの、もしくは腹案中にあるものも相当あるものと思われる。また台湾でなければ研究できないものもあるであろう。その研究を助成し完成せしめることになれば、中国の文化に寄与するばかりでなく、世界の文化にもプラスすることになるのである。

アメリカの大半は学問を愛したからである。ドイツから追われたユダヤ人の学者を収容し、太平洋戦争中に日本語を盛んに研究した。ひるがえって日本は甲午の戦（日清戦争）に勝って思い上がり、ついに中国を軽視した。中等学校の教科書に漢文はあるが、その教科書の内容は中国ではすでに骨董品としているものばかりである。それでは中国を認識することはできない。それが前車の鑑でなくても、日本はわが国の隣にあるから日本語を知ったところで損にはならないであろう。

（本篇は、昨年「一九四六」、雑誌『新新』第七期に登載したものである。）

注

* 数字は本文行間のそれに対応している。

一 民主国（台湾民主国）

日清戦争（甲午中日戦争）の結果、馬関条約（一八九五年四月）で台湾と澎湖諸島の日本割譲が決まると、これに反対する台湾の軍官民は、同年五月、台湾民主国の建国を宣言した。清国の宗主権を認めた上で、永清という年号を立て、清仏戦争以来劉永福と共にあった唐景崧を総統に推戴し、丘逢甲を副総統兼全台義軍総領とした。だが、まもなく日本軍が上陸すると、半月たらずのうちに中心人物はほとんど台湾から脱出し、民主国は事実上崩壊した。一方、各地で組織された抗日義民軍は、約五カ月にわたって果敢な抵抗をつづけた。日清戦争以後台湾の守備を任せられた劉永福も、台南でこの戦闘に加わっていた。

二 蕃人、蕃地、生蕃

台湾には少数民族として南方のマレー系に属する高山族がいて、さらにタイヤル、アミ、ブスンなどの数部族に分かれている。日本統治時代には高砂（たかさご）族と名づけられていた。

漢民族による開発の進行にともない、しだいに山地へ追い上げられ、「蕃人」と呼ばれ

た。一部の部族に首狩りという特異な風習を持っていたためもあって、清朝以後、「蕃地（蕃界）」と漢民族が主として住む平地との境界には、警備のため隘勇（あいゆう）線が設けられ、のちには鉄条網を張って電流を通したりした。漢民族と同化して生活するものを「熟蕃」と呼んで、「帰服」をがえんじない「生蕃」と区別した。

三 客家（ハッカ）

台湾の先住民が高山族であるという説は、最近の考古学的研究では疑わしい面も出てきたらしい。しかし、いずれにしても現在の台湾に住む漢民族の大半は、大陸からの移民である。その重要な一部分を占める客家は、もと黄河流域に住んでいたが、のちに南下して福建、江西、広東三省の交界地域を中心に住みついた漢民族の一部の呼称で、移住者の意を持つ語と解釈されている。進取の気象に富み、太平天国の洪秀全、楊秀清、ならびに新中国の指導者である朱徳、葉劍英、廖承志、郭沫若らも、その出身である。

四 書房

日本の寺小屋に相当する伝統的な教育機関で、学堂、書館とも呼ばれた。公学校で漢文（中国語）教育が禁止されてからも、ここではそれを教えていたこともあって、日中戦争直前までは、なお存続していた。しかし、戦争の激化にともない、日本当局の弾圧が厳しくなり、公的には存在できなくなった。

五 公学校、小学校、国民学校

一八九八年、台湾での初等教育は、「内地人（日本人）」の入学する小学校と「本島人

（台湾人）」の入学する公学校の二本立てを基本として始められた。このほか高山族に対しては、山地公学校と、駐在所によって運営される蕃童教育所がつけられた。のち一九四一年にすべて国民学校と改称されたさいにも、第一号表、第二号表、第三号表の区別の中でその差別は、そのまま引きつがれた。

六 国語学校（師範学校）

日本が台湾で最初に作った学校は、医学校を除くと、一八九六年に総督府直轄の官立学校として設立した国語（日本語）学校一校と国語伝習所十数校であった。前者は教員養成が主眼だが、後者は公学校に移行する以前の初等教育機関であった。本書の著者呉濁流が入学したころの国語学校は、公学師範部（台湾籍四年、日本籍一年）、小学師範部（日本籍一年）、国語科（台湾籍四年）に分かれていて、台南分校や付属の公学校、女学校、小学校があった。一九一九年、台湾教育令の施行以後、国語学校は廃止されて台北師範と改められ、台南分校は台南師範となった。

七 清仏戦争（中法戦争）

一九世紀後半、安南（ベトナム）の侵略を進めたフランスは、その宗主権を主張する清国と対立した。太平天国に加わっていた劉永福が、黒旗軍を率いて、一八七三年と八三年の再度、東京（トンキン）地方でフランス軍に抵抗したことはよく知られている。一八八四年、清国との国境に近い諒山（ランソン）での清仏両軍の衝突を機に、対立は激化した。フランス軍は北上して、台湾の基隆（キールン）、淡水、さらに福建の福州を攻撃、澎湖島を占領

した。清国軍は台湾や諒山で勇敢に戦ったが、清朝政府は一八八五年に天津条約を結び、フランス軍を台湾から撤兵させるかわりに、安南に対する宗主権を放棄した。

八 台車

いわゆるトロッコだが、産業開発にともない各所に敷設されたので、道路や橋の完備しない地方では、時として唯一の交通機関ともなっていた。日覆いをつけた特別台車もあった。乗客はふつう四人まで、これを平地では一人、上り坂では二人の人夫が押した。

九 教諭、訓導

初期の台湾では、初等教育機関の教員は、小学校で教諭と助教、公学校で教諭と訓導と呼ばれた。台湾人は訓導だけで教諭にはなれなかった。また免許状を持たぬ雇員は、それぞれ教諭心得、訓導心得と呼ばれた。台湾教育令が出て、一九二二年以後、教諭がすべて訓導と改められると、今までの訓導が准訓導となり、雇員はともに教員心得となった。

一〇 六三法反対運動

一八九六年に公布された六三法については、本文を参照。この反対運動を最初に進めたのは、当時東京にあって台湾の政治改革を志していた留学生を中心とする新民会と台湾青年会であり、後者の機関誌が『台湾青年』であった。この運動は、やがて一九二〇年代の台湾議會設置請願運動の発展と共に、台湾文化協会へと引き継がれ、その中へ解消していった。

一一 文化協会（台湾文化協会）、台湾民衆党

一九二一年、台北の開業医蔣渭水らが、林献堂を総理に推戴して結成した。第一次大戦後の民族自決主義の影響を受け、新聞雑誌の発行や講演会の開催などで啓蒙活動をつづけた。日本の当局は、政治結社とならないことを条件に結成を認めたが、講演会などはしばしば解散中止を命じられた。一九二七年、社会民主主義者連温卿らを中心とする左派が多数を占め（新文協と略称）、分裂脱退した蔣渭水、謝春木（南光）ら中道左派の旧幹部は、中間派の葉榮鐘、右派の蔡培火らと台湾民衆党を結成した。その後、一九二八年に結成された台湾共產党の活躍もあって農民組合や労働組合の組織化が大いに進むと、新文協も急進的な傾向を強めた。一九二九年には連温卿らも除名され、一九三一年の第二次台湾共產党検査のさいには、多数の幹部が連累を受けて、組織的な活動は不可能となった。

一二 台湾新文学

一九三五年二月創刊、台湾新文学社発行。楊逵が中心となって編集し、同人には頼和、吳新榮、頼明弘などプロレタリア文学に近い人たちがいた。通巻一四号で終刊。

一三 苗栗事件（羅福星事件）

羅福星は広東省生れたが、台湾へ来て新竹庁苗栗牛欄湖庄で育った。のち故郷へ帰り、孫文の同盟会に加わった。シンガポール、バタビアなどで教職についていたが、辛亥革命には民軍を組織して参加した。一九二二年一月、台湾に渡り、台北と苗栗の間を往復して同志の糾合に尽力した。翌一三年秋、この動きをさぐっていた日本警察によって検査が開始され、羅福星も同年一二月に淡水で逮捕された。一九一四年二月から三月にかけて検査者九二人についての裁判が開かれ、羅福星をふくむ二〇名が死刑（即日執行）、二八五名が無期

の判決を受けた。

一四 西来庵事件

一九一五年、台南市にある西来庵を根拠地として、余清芳（日本滞在の経験をもつアナキスト）、羅俊、江定らは、抗日蜂起を計画し、信徒から廟宇の修築資金を募る名目で資金を集め、台湾の各地や福建で同志を組織していた。この年五月、同志の一人が捕えられてから、日本警察による検挙が開始され、六月には羅俊が逮捕された。翌七月には余清芳らが高雄庁屏東甲仙埔支庁で派出所などを襲って日本人三十余人を殺し、八月初旬には台南庁噶吧岬支庁で警察隊と交戦して一二人を殺した。だが数日後にはこの噶吧岬で日本警察と正規軍の包囲攻撃にあい、最盛時に一、〇〇〇人をこえていた蜂起軍も潰滅して四散し、八月下旬には余清芳も捕えられた。この包囲のさい、日本軍は数千人に及ぶ一帯の住民を老幼男女の差別なく虐殺したといわれている。裁判の結果、検挙者一、九五七人のうち八六六人が死刑の判決を受けたが、九五人が執行されただけで、他は減刑された。なお、さらに山中に逃れていた江定らは、翌一六年四月に投降し、五一人のうち三七人が死刑にされた。

一五 霧社事件

一九三〇年一二月、台中の山地にある高山族タイヤル部族の住む霧社で、約四〇〇人の高山族が公学校で運動会が開かれようとしているところを襲い、日本人一三六人を殺した。事件後、日本側は警察と軍あわせて三千余人を出動させ、二カ月かかってようやくこれを鎮圧した。岩窟に立てこもった高山族を攻撃するため、日本軍は毒ガスを使用したといわれている。

る。（雑誌『中国』一九六九年八月号参照）

一六 台北帝大

朝鮮の京城帝大（一九二四年予科、二六年本科設立）につづいて、一九二八年、台北に開校された。当初、文政と理農の二学部であったが、のち医学、工学が増設され、理学と農学が分離した。このほか熱帯医学研究所、南方人文研究所、南方経済研究所などがあって、日本の南方進出の学問的拠点となっていた。

一七 葉 栄 鐘

林献堂の援助で日本に留学。明治大卒業後、抗日運動に参加。林の通訳兼秘書を経て、一九四〇年には『台湾民報』の東京支社長に就任。光復後、一度、台中図書館の編訳組長の任についたが、二・二八事件のち辞職、以後一九六六年まで林が会長であった彰化銀行に勤める。著書、『半路出家集』（一九六五年）、『小屋大屋集』（一九六七年）、『台湾民族運動史』（一九七一年）など。

一八 台湾地方自治連盟

一九三〇年、台湾民衆党の労働運動重視の傾向に反発し、楊肇嘉、蔡培火らが、林献堂らを顧問として、結成した。台湾における地方自治制度の改革を日本の国会に陳情したりしたが、その構成員には御用紳士や豪商、上層地主などが多く、日本人も加わっていた。

一九 陳 儀

中国の政学系の軍人、政治家。浙江省紹興の人。清末から民国初年に浙江省で軍務につ

西暦	年	譜	事	項
一九一五				西来庵事件〔注二四〕
一九一六		新埔公学校を卒業、国語学校師範部に入學		
一九一七		国語学校、台北師範と改称する。学生団体の日本内地旅行に参加（一八日間）		朝鮮、三・一運動
一九一八		台北師範を卒業、公学校訓導（照門分教場主任）となる		中国、五・四運動
一九一九				尼港（ニコライエフスク）事件
一九二〇				中国共産党結成
一九二一				台湾文化協会結成〔注二〇〕
一九二二		四湖公学校に左遷さる		
一九二四		五湖分教場に移る。林先妹（一九歳）と結婚		（昭和元年）
一九二六		四湖公学校にもどる		台湾民衆党結成〔注二一〕
一九二七		苗栗栗社（漢詩同人会）に参加		台湾共産党結成
一九二八				台北帝大開校〔注二六〕
一九三〇				霧社事件〔注二五〕
一九三一		一年間休職する		台湾地方自治連盟結成〔注二七〕
一九三二		五湖公学校に復職		満州事変（九・一八）
一九三三				上海事変
一九三六		『台湾新文学』〔注二二〕で、「くらげ」「どぶの緋		西安事件

一九三七		鯉」などの作品が入選。父親没す（六九歳）		蘆溝橋事件、日中全面戦争へ
一九三九		関西公学校の主席訓導となる		第二次世界大戦（一四五）
一九四〇		馬武督分教場主任に左遷さる		
一九四一		母親没す（六九歳）		太平洋戦争起こる
一九四二		新埔運動場での事件を契機に教員を辞める		
一九四三		南京に行き、『大陸新報』記者となる		台湾に徴兵制実施（九月）
一九四四		台湾にもどり、米穀納入協会苗栗出張所主任となる		
一九四五		小説『胡太明』（アジアの孤児）起稿。米穀納入協会新竹支部に転勤		
一九四六		小説「陳大人」執筆。『台湾日日新報』（のち併合）されて『台湾新報』（記者となる）		ポツダム宣言、日本降伏、台湾光復
一九四七		『胡太明』完稿（五月）。『新生報』記者となる		二・二八事件
一九四八		『胡太明』出版。『民報』記者となる		
一九四九		エッセイ『夜明け前の台湾』出版。崇正出版社の設立に失敗。台湾省政府社会処科員となる		
一九五〇		小説『ポツダム科長』出版。大同工業職業学校の訓導主任となる		中華人民共和国成立
一九五一		『藍園集』出版。機器公業同業公会専員となる		朝鮮戦争（一五休戦）
		小説『泥濘』（四六年起稿）完稿。同業公会財務組長となる		米、第七艦隊を台湾海峡に派遣
				対日講和サンフランシスコ会議

西曆	年	譜	事項
一九五二	小説「十円札の一生」(日本文、未完成)		日本、国府と日華平和条約締結
五三	同業公会専門委員となる 胃出血(一カ月半)		米華相互防衛条約調印
五四	『アジアの孤児』日本で出版(翌年、『歪められた島』と改題して再刊) 日本旅行(六週間) 小説「狡猿」(翌年起稿) 完稿		
五五	『風雨窓前』出版		台北で米大使館占拠暴動(五・二四)
五九	一次咯血(翌年二次咯血、三次咯血)		
六二	中国語版『亜細亜的孤児』出版		
六三	『濁流千草集』『瘡疤集』出版		
六四	台湾文芸雑誌社を創立、『台湾文芸』を発刊		
六五	小説「幕後の支配者(見えざる支配者)」 「幾多矛盾(幾多の矛盾)」 「牛都流涙(牛の涙)」 など執筆		プラント輸出問題で蔣あて吉田書簡 日本、国府と円借款契約 中国、文化大革命始まる
六七	小説「路道々(道はひとすじ)」(一九六〇年起稿) 発表 苗栗衆社顧問となる 『吳濁流選集』全一冊(小説・漢詩随筆) 出版		
六八	「無花果」を『台湾文芸』に発表、世界旅行に出る		日米共同声明
六九	旅行記『談西説東』出版 吳濁流文学賞を設置		

一九七〇	『無花果』出版(翌年に入って販売禁止となる)	国府、国連の代表権を失う
七一	沖繩・日本旅行(四五日間) 漢詩随筆集『晚香』出版 『泥濘』(一九九九年に中国語訳成る) 出版	

*年譜の部分は『吳濁流選集』および『晚香』に付載の年表に拠って作製した。

呉濁流の文学

尾崎秀樹

一

私が呉濁流の著作にふれた最初は、一九五七年六月にひろば書房から出された「歪められた島」である。これは第二次大戦末期、つまり一九四三年から五年へかけて書きつがれ、一九四六年「胡志明」の題名で刊行されたが、誤解をまねくことを懸念して題を改め、日本の一二三書房から「アジヤの孤児」の表題で刊行されたものをさらに改題し、再版した長篇だった。

私はこの「歪められた島」を一冊十円の古書の山から見つけ出し、買い求めたが、そのときはそれほど期待してはいなかった。作者についてもほとんど知らなかったし、内容もどのようなものか、読むまでは知識がなかった。しかしその頃から台湾問題に関心を抱いていた私は、この本が台湾の作家による日本統治時代を背景にした作品だということだけで買う気になったのだ。

だが読みはじめてそのとりことなった。主人公胡太明の歩みが、切実なものとして私の胸をしめつけたのだ。台湾中部の田舎のある名家に生まれた胡太明は、学者だった祖父の考えで書房に入られ、四書五経を学んだが、書房が閉鎖されたため公学校へ移り、さらに師範学校に進んで

新しい教育をうける。卒業後胡太明は田舎の公学校の訓導になるが、台湾人にたいする差別はきびしく、同僚の若い女教師である内藤久子への慕情も、彼女の転勤によってうち切られてしまう。太明は植民地社会の矛盾に堪えられず、日本へ留学したが、そこにも安住の場所はなかった。東京の留學生の間には、政治的抑圧にたいする抵抗の意欲が渦をまき、自治をのぞむ要求が政治的実践へと彼らをかちたてていた。しかし太明はその世界へ入る決断がつかず、学問の分野へ逃避して孤立することになった。

学校を卒業した胡太明は、かつての同僚が経営する甘蔗農場で働いたが、大製糖会社の搾取でその農場もつぶれてしまい、失業し、恋に破れ、家庭の問題にも悩んだあげく、大陸へ渡った。そして淑春と結ばれ、女の子までもうけたが、懐疑派の太明は派手好きで開放的な彼女についてゆけず、日中両国の緊張にともない、あらたな決断に迫られる。多くの友人たちが抗日戦線に参加するのを見ながらもためらううちに、台湾人であるということからスパイの嫌疑をうけ、逮捕されてしまった。幸いに教え子に助けられて脱出することに成功し、台湾へもどったものの、傷心を抱いて帰国した彼を迎えたものは尾行する刑事たちだった。大陸帰りはいずれもスパイとして監視される時代だったのだ。

そうするうちに日本の対華侵略が全面化し、広東作戦が開始されると、彼は要注意人物として強制的に動員され、通訳として戦場へ送り出される。彼はそこで善良そのものな日本兵士が中国娘を犯し、暴行後銃殺した話を平然として話しあっているのを耳にして、戦争の悲惨さを知ると同時に、その加害者の一人として動員されている自分の立場を思い知らされた。そして若い抗日



古希を迎えた吳濁流氏

戦士が殺されるのを目撃し、精神錯乱のまま送還される。

だが戦争の苛酷さは戦後も銃後もなかった。台湾では「皇民化」に名をかりた狂気が吹きあれ、若者たちはつぎつぎに戦場へ強制的にかりたてられ、それまでの経済的搾取にくわえて露骨な精神の破壊までが行されたのだ、一時統制機関の付属団体に入って働いていた太明は、日本人の進歩的分子と組んで雑誌を発刊、現実の暴露にとめるが、それも長くは続かず、弟が強制労働の結果、悲惨な死を招いたことから、否応なしに問題との対決にむかい、これまでの生きかたを反省し、誠実に生きつつもりでありながら結局は現実との妥協におわっていたことをみずからはげしく責め、やがて発狂してしまう。

この胡太明の一生は、日本の植民地支配

がひきおこした社会的、精神的問題の縮図であり、その犠牲であった。そこには土地を奪われた台湾農民の苦しみや抵抗は描かれていないにしても、教員、役人、医師等々から、日本支配の走狗までの人間像がつぶさにとらえられていた。そして台湾人と中国本土人との関係、あるいは台湾人と日本人との関係などが、政治的矛盾の集約的表現である戦争の問題までふくめて、ダイナミックに描かれているのだ。しかも支配と被支配といった対局的な単純な構図ではなく、被支配者のなかに売弁的傾向をもつものがあり、支配民族のなかにも、台湾の苦悩に同情をよせる進歩的分子がいることを、立体的な厚みをもって包括し、問題のひろがりや時代的推移のうちにたどっているのは、みごとといつてよかつた。

しかも作者はこの主人公を革命的な人物にも、退嬰的な分子にもせず、きわめて普遍的な人間——弱くも強くもなり得る可変的な実態として造型しており、そのことがまたこの作品に深い現実感を与えている。その意味では、主人公胡太明の像は、日本統治下における台湾知識人の典型であり、時代状況を満身でうけとめたタイプだといえる。おそらくこの長篇を読んだ台湾出身のインテリゲンチヤは、胡太明の苦しみや自分の苦しみを見出し、その喜びに自己のそれを発見したにちがいない。それはそのまま日本の植民統治下における社会的、歴史的断層をあらわすものであつた。

私は読みすすむうちに、胡太明の造型の裏に息づいている著者の表情をみた。それは荒々しくたけりたつものではなかつたが、事柄の実態をどこまでもつきつめずにはいられないねばりと、勁さをしめすものだつた。それだけにまた訴える力もよりふかく、また深刻なものがあつた。

一山十円の古本のなかから、このような力強い大地に根を下した大作を見出し得たことは、私にとつては驚きであり、台湾の作家の芯の太さをあらためて教えられる思いだつた。中国の文学の伝統がそこに生きている。魯迅や茅盾にみられる人生派としての現実凝視の眼が、呉濁流にもある。しかも一知識人の生涯を追うことによって社会的ひろがりをとらえ、歴史の流れをそこに浮かびあがらせる力量は、大河小説の伝統にもかなうものであつて、私はロマン・ロランの「ジャン・クリストフ」やトマス・マンの「ブッテンブローグ家の人々」、あるいは巴金の「家」、老舍の「四世同堂」などを読んだときにうけたと同質の感動をおぼえたものだ。もちろん文学の純度からいえばいたらない面があるにしても、質的には遜色のないものであり、この作品をうんだ文学の風土に、大陸文学の伝統の根とでもいったものをみる思いだつた。これはけつして誇張ではなく、それを読んだときの正直な感想である。

文学を文学たらしめるいちばんたいせつな要素が、そこにはあつた。彫りこみの深さや表現のたくみさでは、この長篇を越える作品はほかにも無数に存在することだろう。だがこの「アジャの孤児」（歪められた島）には、呉濁流でなければ語れない人生の真実がこめられていたのだ。作品の印象は骨太な感じであつた。だがその骨の太さは中国人のそれであり、大地に根をおろした大樹のたしかなさをしめしていた。

それだけではない。この長篇は文学である前にもうひとつ私自身の欠落していた部分にたいする反省をうながす覚醒剤の役割をもはたしてくれた。それは一口にいつて、植民地台湾に生まれ、そこで育ち、日本へ引き揚げてきた私自身の過去をふりかえらすつよい衝撃だつたといえる。台

湾割譲以来五〇年の間、台湾の民衆は政治的、社会的、経済的な収奪にあえいできた。私たちはそのなかにいたわけだが、しかし日本人であることが、事態の認識を曇らせていた。知らなかっただけではなく、知ろうともしなかったことが、この本を読んでよく自覚された。

植民地二世である私は、それらの関係をごく自然に、疑いもたずに眺め、過してきた。国語常用の名による母国語の収奪、皇民化の美名にかくれて強行される植民地支配の実状を、この眼にしながらも意識化できなかった二重の錯誤を、あらためて思わないわけにはゆかなかった。呉濁流の「歪められた島」は私の気持のなかにこのような波紋をなげかけたのである。

二

日本はかつて台湾、朝鮮、満州（中国の東北地方）を直接、間接に支配した。その植民地支配の歴史は八月一五日によって終止符をうたれた。しかしその歴史的整理はまだなされていない。なされていないどころか、またぞろ日本の軍国主義的傾向の復活にもない、過去の古傷をごまかし、言いくるめるような動きさえみられる。それは日中戦争の過程で、日本軍が行った三光政策をはじめとする暴虐行為をあつかうことを、今さらなにもいって顔をそむける態度にもあらわれている。歴史を正しく位置づけようとはせず、いつもなしくずしに事柄を処理し、あいまいなままに時間の経過にゆだねることは、あやまちを二度、三度と繰り返すことにも連なる。

私たちはかつて日本がアジアの各地でどのような政治的、経済的な収奪を行ってきたか、それを自分自身の問題として受けとめ、凝視しなければならぬ。そうすることはこれからの日本でありかたを正してゆくために必要である。事柄を公式的に加害者、被害者にかけて考えるのではなく、自分自身の問題としてそれをつきつめてゆく、そのような段階に私たちはきている。

日本は西欧社会よりも遅れて近代化の歩みをはじめたとき、アジア民衆の犠牲の上にそれを実現する富国強兵策をとった。そして最初の植民地である台湾でこころみたまさままなくわだてを、そのつぎの段階で朝鮮におしつけ、ときには修正し、ときにはより暴圧的な手段を講じながら、偽国家満州国の成立をうながし、虚妄の繁栄を保持しつづけたのだ。ふり返ってみると、そこには累々とした死屍が横たわり、歴史の傷痕がぎざまざまれている。だがそれに気づく人がはたしてどれだけいるだろうか。

台湾割譲に反対し、台湾民主国をたてて日本の征討軍をなやませた革命的伝統は、総督府権力の政治的強圧、六三法の制定や匪徒刑罰令、保甲制度の実施、招降政策などをもってしても、根絶やしすることはできなかった。義和団事件に影響されておこった明治三〇年代初期の武装蜂起をはじめ、四〇年代に入ってから苗粟事件、西来庵事件等々があり、敵罰主義でのぞんだ日本の官憲は、武力弾圧による強引な地ならしの後、文治主義にむかい、それまでの露骨な差別政策から、猫をかぶった同化政策へときりかえた。中国本土の辛亥革命や世界的なデモクラシー思潮は、台湾の先進分子をも動かし、在京留學生のあいだに民族的な自治の要求を芽ぶかせ、啓蒙的な段階を経て、台湾議會設置請願の大きな運動のうねりをつくり出す。台湾文化協会はその中心的組織だった。

しかし台湾経済の資本主義化がすすむにつれて、土地収奪による農民の抵抗や労働争議が続発

し、農民組合や労働組合が組織される歴史的過程のなかで、文化協会は急進化し、右派および中間派は合法政党中央民衆党を結成、左派はより尖鋭化して日本共産党台湾民族支部を組織した。だがこういった国際連帯の意識にたつ民族解放の運動も、日本の対華侵略が露骨になるにつれて、強圧をくわえられ、やがて皇民化運動というドレイ化政策のゴリ押しのもと、台湾島民を南方侵略の尖兵として動員するところまでいたる。

この過程は良心的な胡太明が歩んだ道であり、苦しんだコースであった。そして作者呉濁流がつぶさに味わってきたきびしい道でもあったことだろう。広鴻文出版社から刊行された「吳濁流選集」の巻末付録の略歴をみると、彼は一九〇〇年に新竹県新埔鎮巨埔里に生まれ、新埔公学校を経て国語学校師範部（一九一九年の官制改革で台北師範と改められた）に学んだ。卒業後公学校教諭となり、照門分教場主任をつとめたが、「学校教育と自治」と題した論文が当局にいらまれ、四湖公学校に左遷された。その後五湖公学校、関西公学校等を歴任したが、反骨の持ち主だった彼は榮達の道を歩むことはなく、僻地へ廻されることが多かった。学校教師をやめたのは一九四〇年のことだ。新埔運動場における郡視学の教員凌辱事件に怒って職を辞した。

翌年一月大陸へ渡り、南京の大陸新報記者となったが、時局の緊迫化に身動きできなくなり、一九四二年三月台湾へもどり、米穀納入協会の苗栗出張所主任となった。その後台湾日日新報、台湾新報、新生報、民報等の記者を経て、出版事業にも手を染めたが失敗し、大同工業職業学校の訓導主任をつとめ、また機器工業同業公会の専員から財務組長となった。

その文学歴はふるく、一九二七年に苗栗詩社にくわり、さらに大新吟社に参加するなど、は



饒暉の筆名で一九四六年一月二十四日付『民報』(二二八事件で廃刊させられた)に書かれた「職業教育を提唱する」の論説

やくから旧詩の詩作を手がけたが、創作は「台湾新文学」に「くらげ」「ペンのお雲」「どぶの緋鯉」等が入選したのが最初だった。つづいて「自然へ帰れ」を発表、「五百銭之蕃蔗」や「功狗」を書いた。しかし彼の作家としての名前がひろく知られるようになったのは、長篇「胡太明」（アジャの孤児）が出版されてからである。この作品は呉濁流にとっての青春の遺書でもあり、また歴史の証言ともなるものだった。

一九六四年に台湾文芸雑誌社をおこし、「台湾文芸」を創刊、台湾の文芸界に多くのものをもたらししてきた。作品にはすでにあげたもののほかに、「ポッドム科長」「泥濘」「狡猿」「道はひとすじ」「無花果」等があり、その作品の大部分は二巻本の「呉濁流選集」に収められている。なお詩集には「風雨窗前」や「濁流千草集」があり、現在もなお台湾文芸界にあって第一線で活躍している。

私は何度か彼と話しあう機会があつたが、アゴのはった意志的な表情は、大柄な風格とともに、なにかどっしりと大地に根を下した強靱さを感じさせた。その長篇がもつ味わいとそっくりな風貌である。日陰に育ったもやしなどとは無縁なたくましさをもち、言葉をひとつひとつ選びとってゆくような日本語の会話が、その篤実な性格をあらわしているように思えた。

「無花果」は彼が主宰している「台湾文芸」の第一九、二〇、二二号に分載され、一九七〇年秋に林白出版社から出版された二百ページほどの作品である。私は雑誌誌上で読み、その後著者から単行本になった「無花果」を贈られた。ちなみにこの出版社からは日本の文芸作品の翻訳もいくつか出されており、芹沢光治良の「巴里に死す」、松本清張の「ゼロの焦点」、あるいは川端康

成の「眠れる美女」なども出ているようだ。

「無花果」は、長篇「アジャの孤児」が作者呉濁流の経てきた苦渋に満ちた体験を投影していた以上に、作者の身近な素材にひきつけて、話が展開されている。「無花果」のなかの〈私〉が呉濁流自身の履歴と重なりあうことは、巻末につけられた略年譜と対照してもあきらかであろう。胡太明に作者の分身がみられるとすれば、それ以上に「無花果」の主人公の軌跡には、呉濁流その人の息づかいが感じられる。ここではその筋書についてはあらためてふれないが、祖父から抗日時代の話を聞いて育った主人公の意識のなかには、雑草のつよさにも似た骨太いものがあり、個人の歩みを語りながら、それが社会的、政治的な諸問題に関連してゆく叙述のしかたは、あきらかに日本の私小説的な土壌とは断ち切れた歴史的ひろがりをしめしている。それは「かえりみて私の歩いて来た人生コースは平凡ではあるが、それでもいくつかの歴史的な大事件に逢っている。第一次大戦、台湾中部大震災、第二次大戦、台湾光復、二・二八事件などがある」という文章でもあきらかであろう。

実際にこの自伝的長篇では、主人公の歩む人生のコースは波瀾に富んだものとはいえないかもしれないが、胡太明の場合以上に普遍性をもっており、平凡なるがゆえに事態に冷静に対処し、歴史的な諸事件ともふれあい、事柄の本質をまともに受けとめてゆく誠実さを感じさせる。「アジャの孤児」のなかに、胡太明が庭先で物思いにふけているとき、大きな葉の裏にかくれてひっそりと、しかしゆたかな実を結んでいる無花果を目にとめるくだりがある。主人公はそのひとつをもぎとって中をわり、真赤に熟れた実の中味をみて、ふかい感動におそわれるのだ。「およ

そ、ものにはふたつの生き方があるのだった。仏桑花のように、きれいに咲いて実を結ばずに散ってゆく花。そして無花果のように、目立つことはないが、人知れぬところでこっそりと結実するもの。それはいまの太明にとって意味深い示唆をふくんでいるように思われた。彼は無花果の生き方になんとなく胸をうたれるのだった。

このくだりは「無花果」の冒頭にひかれてあり、それがそのままこの長篇の主題をなすものであることは、説明するまでもあるまい。「無花果」の文中にも『無花果』のように、人の見えないうところで花を咲かせよう。平凡に生きる人生なら食べられさえすれば結構、そうさせる必要もないだろう」と述べた箇所がある。植民地統治下の住民の抵抗は、その支配権力がつよければつよいだけ、不屈のねぼりづよさを必要とする。情勢の展開によっては突撃もやむを得ないが、猪突猛進主義は自滅の道でしかない。絶えまない日々の戦いが、最後の勝利をもたらす。主人公の生活の周辺にもさまざまな嵐が吹きあれ、好むと好まざるとにかかわらず、その渦にまきこまれるが、自決主義は実を結ばない。主人公の生きかたは地味であり、歴史の檜舞台で脚光を浴びるような動きはないにしても、最後に笑うものはないのであるかを知っている強靱さがある。これは大衆のもつねばりであり勁さであり、究極においては歴史をささえるそれであることを思わせる。戦乱の絶え間ない中国社会にあって、営々として生き抜いてきた民衆の骨の太さをそこにみるのは、私人ではあるまい。主人公は日本統治下の国語学校に学んだ教師であり、ジャーナリストだ。だがその知識人としての苦渋は、台湾島民の苦悩にかさなり、かつての中国本土民衆の夜明け前の苦しみとかよいあうものがある。

三

「無花果」から私たちが何を汲みとるべきか。「無花果」は文学作品であると同時に、私たちに過去の植民地統治時代の傷痕を思い出させる作品である。主人公の〈私〉は、祖父や父から割譲当時の抗日闘争について話をきく。それは上から指令されたものでも組織されたものでもなく、民衆の自衛の意識にもとづくものだった。強盗がおし入ってきて乱暴を働けば、みずから汗してひらいた土地をまもり、自衛にたつのは当然である。ごく平凡な一般の民衆が抵抗したのも、郷土愛に根ざす自然な発露だったといえよう。それにくらべて、唐景崧やその軍隊は敗滅し、醜態をさらして逃げ去る。「台湾人は無意識のうちに、台湾は自分たちの祖先が開拓したものであって、われら子孫は、それを守る義務がある。われわれの祖先が幾多の艱難辛苦と努力によって建設してきた村には、一寸の土地に一寸の汗と血と涙が流れている」という作者の言葉には、その思いがこめられている。

しかもその意識を土台にして、日本統治時代から光復後の二・二八事件にいたるまでをつぶさにたどっており、理非曲直をただしている点に、時代の証言としての意義がある。なまじり屈をこねることなく、事柄の推移を冷静に追っているだけに、読者にとってはそれが納得ゆくものとして受けとめられるのだ。この長篇の特色はすべてこのような基本的態度から発しているが、同時にそれを読むことによって、私たちは過去のさまざまな問題をふり返らないわけにはいかない。とくにうずきをもって思い出されるのは、*く*国語教育*く*の遂行だった。日本はかつて台湾の植民

地支配に関し、経済開発と教育制度の確立をおおいに誇ったことがある。しかし歴史に照らして冷静にそれをみれば、台湾経済の近代化とは植民地収奪の潤滑油としての地ならしにすぎず、教育制度の確立とは、台湾の民衆から母国語を奪い、日本語をおしつけるドレイ化政策にすぎなかった。

台湾には国語を常用しない中国人子弟を収容する初等普通教育機関として、公学校がもうけられていた。日本人は小学校に通い、台湾系の中国人は公学校に通った。公学校からも中学へ進学することは可能だったが、すべて日本語によるものであり、いくらすぐれた才能の持ち主でも、日本語をマスターしないかぎり、上級学校へ進むことは許されなかった。日本語による同化政策は明治二八年五月、台湾総督府仮条令の制定によって、民政局内に学務部が設置され、伊沢修二が学務部長心得になって以来、八月一五日まで一貫してとられてきた政策であり、植民地支配の精神面におけるカナメの部分ななすものだった。しかもその政策は緩和されるどころか、戦争が激化するにつれてますます強化され、やがて国語を常用しない者には、満足に米の配給もしいといったきびしさをあらわすようになる。もちろんなにかの公の職につくためには、日本語を知らなくてはならなかった。しかし家庭内においては台湾語が用いられ、いわゆる言語の二重生活が結果される。しかもそうやって教育された台湾の住民たちは、日本資本主義の経済的搾取の末端で、技術的な補助者となるか、国語教育の第一線で母国語を抹殺するための役割をはたすかの、いずれかの道を選ぶことが強制され、戦争が苛烈化してからは、同胞に刃をつきつける場いまで追いやられたのだ。

矢内原忠雄は「帝国主義下の台湾」のなかで、「領台当初統治上最も実用ありし医師養成を除き大正八年に至る迄は全く専門教育機関を有せず、実業学校も欠如し、本島人に対する中等教育も不備であった。之を此期間に於ける異常なる産農の資本主義的発展に対比すれば、領台後二十五年間の台湾統治の精力は大部分が経済に集注せられ、教育は重要視せられざりしを知る。国語教育と医学、之れ台湾統治の実用上許容せられたる教育の全部であった。通常、植民地教育の基礎と称せらるゝ技術的教育すら台湾に於ては無視せられて来た。蓋し必要なる技術家は内地より供給せられ得たからであらう。本島人はたゞに台湾に於て専門教育を受くる機関を有せざりしのみならず、大正八、九年頃に至る迄はその内地留学をも、殊に法律政治の勉強は、官憲の妨害を受けたのである」と述べたことがある。開業医となつて経済的独立を得る場合を唯一の例外として、台湾の知識分子は上級学校進学をあらゆる面から阻まれ、国語の理解力というハードルを越えた者も、日本人の鋳型にみずからをはめこむことなしには、その才能をのばす道を得ることができなかった。矢内原忠雄は台湾における諸学校の日本内地人と中国人(当時の表現によれば本島人)の生徒数を対比した表を掲げていたが、大正末年の一九二六年度末の数字では、普通教育を受けている生徒数は、内地人二三、七一人にたいして本島人二一〇、七二七の多数にのぼるにもかかわらず、中学ではその数が逆転して、六、八五六人にたいして四、六四二人と激減し、高等学校では二二〇人にたいする二八人となる。また専門学校では四七七人にたいして二五一人にすぎず、中国人にとって専門教育の道がいかに狭き門であったかが推察される。

矢内原は蔡培火の「日本々国民に与ふ」のなかから、「此れ等は立派な能力搾取の教育、露骨な

愚民教育ではないか。彼等官僚はこれを称して一視同仁の聖旨に基いた母国人と同様の生活を享けさせやうとする同化主義の教育法だと云ふ。噫！同化よ、誠に汝の名目による国語中心主義は我々の心的活動を拘束抑制し従来の人物を凡て無能化して一切の政治的社会的地位を挙げて母国人の独占に任さねばならない。また此の新仕組の教育を受けた青少年は特別な俊才の外多く低能化されて新時代の建設者たる資格を失する理である」、その他の言葉を引いていた。だが私たちが日本人は、ごく一部の人を除いて、ほとんど彼らの訴えの内容を正當に理解することができなかつたのだ。

呉濁流の「無花果」を読みながら、私は日本の植民地支配がどのようなものであつたか、台湾の知識人、ひいては台湾の民衆にとつて、日々暮しのなかに介入してくる日本統治とはなにであつたかを、まざまざとみる思いがした。そのことの反省なくしては、日本のこれからのアジア諸民族との友好もなりたない。事柄は過去にあるのではなく、むしろ現在にあり、未来にあるというべきだろう。呉濁流の作品はそのことを私たちに、具体的な創造世界とおして語りかけてくる。

二・二八事件の問題については、邱永漢も小説にしていた。しかし呉濁流はこの事件が民衆の自衛的な意識に発するものであり、自発的なものであつたことをとらえている点に、視点のたし加さを感じさせる。日本の植民地支配の圧制から解放された台湾島民が、中国本土から来た人々にたいして憧憬の念をこめて迎えたこともわかるし、それだけにまた挫折感も大きかつたことが理解される。政治的、経済的な要因はその上にたつて考えられるべきであつて、日本敗戦から二・

二八事件へいたる歴史の屈折面を、主観的判断におちいることなく描いていることにも、この長篇の価値は見出されると思う。

エッセイ「夜明け前の台湾」とあわせて読むことによって、著者の考えは明瞭にうかがわれる。「アジアの孤児」のなかに「現在の暗さ、つまりこれは夜明け前の暗さというものだ。やがては、明けてゆく暗さなのだ」という太明の思いが述べられていたが、「夜明け前の台湾」も執筆当時の実感をこめたものであり、また未来への志向をもつものとしても受けとれる。

呉濁流の文学は植民地育ちの自分にとって鏡の役割をはたしているようだ。

愚民教育ではないか。彼等官僚はこれを称して一視同仁の聖旨に基いた母国人と同様の生活を享けさせやうとする同化主義の教育法だと云ふ。噫！同化よ、誠に汝の名目による国語中心主義は我々の心的活動を拘束抑制し従来の人物を凡て無能化して一切の政治的社会的地位を挙げて母国人の独占に任さねばならない。また此の新仕組の教育を受けた青少年は特別な俊才の外多く低能化されて新時代の建設者たる資格を失する理である」、その他の言葉を引きついでいた。だが私たち日本人は、ごく一部の人を除いて、ほとんど彼らの訴えの内容を正當に理解することができなかったのだ。

呉濁流の「無花果」を読みながら、私は日本の植民地支配がどのようなものであったか、台湾の知識人、ひいては台湾の民衆にとって、日々の暮しのなかに介入してくる日本統治とはなにであつたかを、まざまざとみる思いがした。そのことの反省なくしては、日本のこれからのアジア諸民族との友好もなりたない。事柄は過去にあるのではなく、むしろ現在にあり、未来にあるというべきだろう。呉濁流の作品はそのことを私たちに、具体的な創造世界をおして語りかけてくる。

二・二八事件の問題については、邱永漢も小説にしていた。しかし呉濁流はこの事件が民衆の自衛的な意識に発するものであり、自発的なものであったことをとらえている点に、視点のたしかさを感じさせる。日本の植民地支配の圧制から解放された台湾島民が、中国本土から来た人々にたいして憧憬の念をこめて迎えたこともわかるし、それだけにまた挫折感も大きかったことが理解される。政治的、経済的な要因はその上になつて考えられるべきであつて、日本敗戦から二・

二八事件へいたる歴史の屈折面を、主観的判断におちいることなく描いていることにも、この長篇の価値は見出されると思う。

エッセイ「夜明け前の台湾」とあわせて読むことによって、著者の考えは明瞭にうかがわれる。「アジアの孤児」のなかに「現在の暗さ、つまりこれは夜明け前の暗さというものだ。やがては、明けてゆく暗さなのだ」という太明の思いが述べられていたが、「夜明け前の台湾」も執筆当時の実感をこめたものであり、また未来への志向をもつものとしても受けとれる。

呉濁流の文学は植民地育ちの自分にとって鏡の役割をはたしているようだ。

『無花果』は、雑誌『台湾文芸』の一九、二〇、二一号（一九六八年四月、七月、十月刊）に中国語で連載され、のち一九七〇年十月に台北の林白出版社から単行本として出版されたが、翌七一年初め発売禁止の処分を受けた。本書では、雑誌『中国』一九六九年四月（八月号）に「編集部訳」として訳載されたものをもととし、これに部分的に手を加えた。なお、漢詩の下につけた読み下し分は、今回あらたに竹内照夫氏にお願いしたものである。

『夜明け前の台湾』は、一九四七年六月、台北で日本語によって出版されたもの（学友書局発売）をもとにし、かなづかい、送りかな、字使いなどに手を加えた。なお、この中国語訳は『呉濁流選集』漢詩・隨筆篇に収められている。

全体にわたって本文中に「」印で加えた注記、および地図、略年譜、注は、いずれも飯倉照平が作成したものである。

著者略歴

呉濁流（ごだくりゅう）
1900年 台湾に生まれる
《現在》 作家、台湾文藝雑誌社社長
《現住所》 台北市新生南路一段一三二巷十六号

夜明け前の台湾—植民地からの告発—呉濁流選集 第1巻

©1972

1972年6月15日 初版第1刷発行

定価 900円

著者 呉濁流

発行者 大河原基之

発行所 株式会社社会思想社

(113) 東京都文京区本郷1-25-21
振替東京71812 電話 (813) 8101
印刷 株式会社 双文社印刷所
製本 株式会社 田中製本所



落丁・乱丁本は小社にお送り下さればお取替えいたします

0036-60027-3033